
緋色のオルタナティブ

キョウジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋色のオルタナティブ

【Nコード】

N6090G

【作者名】

キヨウジ

【あらすじ】

猟奇的殺人事件のきっかけは、妄執的恋愛感情が暴発して起こったレイプ未遂事件だった。少年少女が織り成す歪んだ青春と、それを嘲笑う美しき殺人鬼。そして、血塗れの過去を引きずる美少年。

序章 偶然に彩られた至極の情景（前書き）

この作品には超人的で猟奇的な殺人鬼が登場する為、極めて残酷で暴力的な表現が用いられます。女性を冒瀆する表現も用いられるので、解体殺人などの描写に嫌悪を感じる方は読み進めないで下さい。15歳未満の方には推奨できません。

それでも尚、読む、読む覚悟がある、という方は序章へと進んで下さい。

それでは、本編を、どうぞ。

序章 偶然に彩られた至極の情景

四月八日、火曜日。

桜の花びらが舞い散る季節。

春一番はとつくの昔に吹き抜けたはずなのに、今日はやたらと風の強い日だった。

つむじ風によつて長い髪の毛が巻き上げられないように手で押さえつつ、わたしは我が家の門をくぐった。今、丁度、入学式を終えて帰宅したところである。勿論、保護者同伴だ。

わたしは退屈だった行事について母親と意見を交わしながら、ドアの前に立った。

とにかくつまらなくて恥ずかしい数時間だった。

入学式は厳粛な行事だから退屈なのは当たり前であり、新入生は校長先生のありがたいお話を黙然と拝聴する義務があるのだろーけど、母親と行動を共にする恥ずかしさを我慢する義務などない。なので、保護者同伴は恥ずかしいから入学式には参加しないで欲しい、と何日も前からゴネていたのに、おっとりしているくせに押しの強い母親の参加意欲は抑制不可能で、尚かつお小遣いの増減をチラつかせて母親の参加を容認させようとする意地悪な父親によって、様々ながら母親の同伴を認めさせられてしまったのである。その結果が最悪の記憶を生み出していたら、わたしと両親の仲は険悪な方向へと歪んでいくのだけど、基本的に人当たりの良い美人さんの母親が悪い意味での問題を起こすことなく、優しさの中に威厳を示す父親が下手な駄洒落以上の迷惑行為に及ぶこともなく、私たちの親子仲は一般的な家庭と比べても良好だった。

では、何故に恥ずかしいのかと言えば、要は、すんごく目立つからである。

わたしと母親が二人で並んでいるだけで、周囲の人々に注視され

る。視線の集中砲火を浴びてしまう。それは当人の自意識過剰ではなくて、視覚的魅力がもたらす必然的被害であり、子供の頃からの日常であった。

私の容姿がどの程度なのかを自己評価する傲慢さは持ち合わせていないけど、絶世の美女と褒め称えられた母親の若い頃によく似ている、と父親から言われる。

まあ、肉親の鼻肩目による過大評価、としておこう。

そんな風に自分を戒める。

謙虚な振る舞いは周囲から疎外されない為の防衛術なのだ。

そんな愚にもつかない思考を働かせていると、家の鍵を解除していた母親が、ドアのノブに手を掛けたままこつちを振り返り、可愛らしく小首を傾げた。

「どうしたのかな、保奈美ちゃん？ お家に入らないの？ 入らないの？ もしかして、入学早々に帰宅拒否とかかな？」

「何言ってるの、ママは……」

わたしは呆れ声を上げて、腰に手を当てた。

「ついでに駅前の本屋さんに行く、って朝ご飯の時に言っておいたでしょう？ 新しいノートや筆記用具を揃えなくちゃならないんだから」

「そうだったかしら？ うふふつ。最近、物忘れが激しくって……。ママも、もう年ね」

母親がぺろつと舌を出して言った。

「近所の男衆に絶大な人気を誇っている三十代の女が言って良い台詞ではない、と思ったが、わたしは口に出さずに歩道へ出た。

「保奈美ちゃん、車に気を付けて、ちゃんと歩道を歩くんですよーっ！」

背中が投げかけられ、当たって弾けた。

わたしは小学生じゃないのよ、と言い返したくなるほど母は気配り症だ。高校生になったわたしをいまだに小さな子供みたいに扱っ

ている。からかい混じりなので腹が立つのだけど……わたし以上に迷惑を被っている反抗期の妹が小言を零す程度でぐっと我慢したまま明るく元気に中学生生活を満喫している様子を見ると、姉のわたしだけが待遇の改善を求めるわけにはいかなかった。

あと、高校生にもなつて「保奈美ちゃん」と《ちゃん》付けで呼ばれる点も不満である。

それでも、わたしの家族は本当に仲が良く、ほんの小さな不満点は幾つかあるけど、不遇に嘆くことはなかった。

「それじゃ、行ってくるから」

「行つてらっしゃい、保奈美ちゃん」

わたしは母親に手を振り替えずと、今朝下ろしたばかりの学校指定の制服を着たまま、閑静な住宅街を縦断し、山の手に向かって伸びる急勾配の坂を上がっていった。

坂を上がると広がる別世界。

そこはいわゆる支配階級の人に住んでいる高級住宅地だ。絵に描いたような大邸宅が数多く建ち並んでいる。一軒辺りの敷地面積が我が家の四倍以上あり、建物を囲う塀の長さも半端ではない。僅か一区間の差だけど、辺りを包む空気すら別格という感じである。それは、多少の羨ましさを感じさせる差なのだろう。昔から、この道を歩くのは好きじゃなかった。でも、ここは駅前への近道なので仕方がない。

わたしは早歩きで高級住宅街を突っ切ろうと、歩幅を広めてペースを上げた。

すると、突然、背後から車のクラクションが鳴らされた。

びくつと肩を震わせて背後を振り返る。

鮮やかな青色の外国産車が威圧していた。

咄嗟に反応できず、棒立ちになるわたし。

もう一度、クラクションを鳴らされた。

ちよつとムツとした。

でも、わたしが車道側に少しはみ出して歩いていた所為もあるの
で、怒られても仕方がない。

慌てて豪邸の塀に身を寄せる。

青い外国産車はすーっと横を通り過ぎ、五十メートルくらい前方
で停車した。

さすがお金持ちの住まう地だ。乗っている車も格が違うんだなあ、
と感心する。でも、そこで停車するなら、わたしを二度のクラクシ
ョンで追い払ってまで、ちょっとだけ車を前進させる必要なんてな
いんじゃないの、庶民に対する嫌がらせね、と仄かな憤りを覚えた。

ぱたんと音が響いて運転席のドアが開き、女の人が降りてきた。

モスグリーンのスーツをびしっと着こなしたショートボブヘアの
美人さんだ。横顔を見ただけでただ者ではないとわかる。風格とい
うか、威厳というか、何か目に見えないオーラのようなものを纏っ
ている。女優……ではないと思うけど、弁護士か会社役員ぽい理知
的な冷静さを醸し出していた。

その女の人が車のトランクを開けて、中から大ぶりのバッグを三
個取り出した。それを歩道に置く。

旅行帰りなのだろうか、と考えていると、今度は助手席のドアが
開いて男の人が出てきた。

わたしと同年くらいの男の子だ。

その子が、耳にかかるくらい長めの髪を手で押さえながら、車の
前を回って歩道に入る。

女の人が壁になっていて男の子の顔は見えないけど、背が随分と
高い。女の人も百七十センチ以上ありそうな長身だけど、彼はそれ
よりも頭半分くらい高いようだ。

二人はどんな関係なのだろうか。

恋人同士？

姉弟？

親子ではない。

女の人はどう見ても三十歳前後だ。

路上駐車したままで立ち話をしている二人を見ると、邪魔をしてはいけない気がする。

というより、近づきたい空気を漂わせている。

だから、わたしは彼らから数歩離れた位置で様子を窺うことにした。

「色々にご迷惑をおかけしました。引越しの手伝いまでしていただき、感謝の言葉もあります。あとの作業は自分で行うので、どうぞ職務にお戻り下さい」

男の子が凝り固まった敬語を用いて言った。

そして、頭を下げたようだ。

「そんなに畏まらないでいいのよ。私と君の仲だもの。気にしないで頼って欲しいものだわ。それとも、とつとと帰れ、と仄めかしているのかしら？」

言葉こそ皮肉っぱかったが、彼女の口調は柔らかくて優しいげだった。

「いえ、貴女を追い返そうなどと思うわけがありません」

その丁寧な言い回しほど、彼の言葉には感情が込められていない。どこか空々しい口調である。

「薄情者ね」

「貴女の忙しさを考慮した上での台詞です。それに、薄情ではありませんが、無情ではないでしょう？ ボクは貴女に対して敬愛と親愛の念をいただいています。それを察していただければ幸いなのですが」

「キスしてあげるわ」

「いえ、遠慮しておきます。あまり顔を長く合わせていると、変に情が移って別れづらくなってしまうでしょうから」

「あら……意外な言葉。君のような冷血人間でもそういう人がましい想いを感じることがあるのね。安心したわ」

女の人を含み笑いを漏らした。

二人の会話を聞いてみると、どうも恋人な関係ではなさそうだ。知り合い程度の仲だろう。かなり親しげだが、ふざけ調子で馴れ合うまでの友人関係ではない。どこかしら会話の節々に緊張感が漂っているし……。

「さあ、もう行つて下さい。お仕事が山積みなのでしょう？」

「君の助けがあれば、大半の仕事は速やかに解決できると思うけど、もう君に頼ることはできないわね」

「ええ。ボクはこの場所で新しい生活をスタートさせなければならぬのです。心苦しくはありますが、ここでお別れですね」

「鷹峰さんのことは本当にいいのね？」

「はい。彼女もそろそろボクへの想いを思い切り、前向きに生きる努力をしなくてはならない時期でしょうから」

「彼女に君の居場所を訊かれても、喋つてはいけないのね？」

「はい。多少身勝手ではありますが、ボクの居場所は知らせないで下さい。彼女は、過去のマイナス要因を全て払拭し、新しい自分へと生まれ変わるべきなのです」

「そう……。わかったわ」

女の人がずっと男の子に身を寄せた。

もしかしたらキスをしたのかもしれない。

それくらい二人の距離は縮まった。

でも、わたしの位置からは女の人の後ろ姿しか見えなかったので、何が行われているかを確認することはできなかった。

「それでは、またいつか会いましょう」

「そうですね。ボクとしては、この先、二度とお世話にならないよう心掛けたいですね。しかし、この場では貴女との再会を祈っておきましょう。それが女性に対する優しさというものでしょうからね」

「薄情者ね」

「無情なのです」

「……………」

女の方は数秒間、男の子から離れようとしなかった。

名残惜しいのだろう。

それは、まるでドラマのワンシーンのように、美しくも切ない光景だった。

目の前に映し出されている名場面。

二人がどのような表情で向かい合っているのか、少し気になった。

女の人は呪縛から逃れるように、男の子から一步後ずさりした。

そして、無言で運転席に乗り込み、軽く手で合図を送ってから車を発進させた。

低くて重いエンジン音を響かせながら、青色の外国産車は遠ざかっていく。

それを見送るように、男の子はわたしに背を向けている。

しかし、車が完全に視界から消えてしまうと、何の感慨もない素っ気なさで道端に置かれていた三個のバッグを両手に抱えた。

本当に薄情な人間なのかもしれない。

どんな男の子なのだろう。

わたしはすこしだけ彼に興味を引かれ、薄情者の顔を見てやりたい心境に陥った。

今は向こうを向いているので顔立ちを確認することはできないけど、背が高くてスタイルも良い。

もしかして美男子？

高まる期待。

それに、どうやら彼は眼鏡を着用しているようだ。

うーん、こっちを向いてくれないだろうか。

わたしは歩行を再開し、ゆっくりと自然な感じで近づいていった。でも、願いは通じなかった。彼がわたしと同じ進行方向へと歩き始めたからだ。しかも、かなり足が速い。相手の歩幅が広い分、同じ歩調で歩いていても、彼との距離は開いていく一方だ。これでは

顔を見るところか、近づくことすらできない。

どうしよう。

どうしても顔を見たいという欲求に苛まれているわけじゃない。

でも、何だかやけに心を惹きつける男の子なのだ。

物凄く気になる。

運命的なものを感じる……というのは言い過ぎだけど、表現可能な磁力を感じるのは本当だった。

こうなったら駆け足で追い抜いて、すれ違いざまに顔を拝んでやるうか。それとも、恥を忍んで直接声を掛けるか。いやいや、わたしはそんなナンパ紛いの誰何行為ができるような性格の持ち主じゃない。

それではどうする？

わたしは悩んだ末、成り行きに任せようと決めた。

つまり、《もし顔を合わせられなくても、当初の目的地である本屋さんへ行く》という選択肢を選んだのだ。

彼を気にする必要などない。この出会いに意味はない。この先、親しくなる可能性もないだろう。初志を貫徹するべきだ。

さあ、本屋さんへ行こう。

そう決断した矢先、彼が立ち止まった。

釣られて、わたしも立ち止まる。

二人の距離は十メートルもない。

これじゃストーカー行為だ、と内心で苦笑。

彼は荷物をアスファルトの上に置き、ズボンのポケットから何かを取り出した。

どうやら、それはこの辺りの地図が書き記された紙切れのようだ。きつと、この住宅地近辺に引っ越してきたのだろ。その引っ越し

先の住居を探しているのだ。

でも、地図が頼りにならない様子。周囲を見渡しながら、紙切れを見て首を捻っている。

その時。

不意に、強烈な風が吹き抜けた。

ぐあつという風の唸り声。

容赦のない春風の強襲によって、わたしの髪とスカートが巻き上げられる。

慌てて、髪とスカートの裾を押さえた。

彼も顔を背けながら髪を押さえた。

だが、その動作によって、彼の手に使っていた紙切れが春風に奪い取られて宙に舞ってしまった。

紙切れは、風の流れに乗り、必然的に風下にいるわたしの眼前へと飛ばされてきた。

あつ、取らなきゃ！

そう思うよりも先に身体が自動的に反応していた。

手を横に伸ばすと、奇跡的タイミングで紙切れが飛び込んできた。わたしは意識せず、それを驚掴みにしていた。

「ナイスキャッチ」

前方から声が掛けられた。

わたしは前を見る。

声の主がすぐ目の前に立っていた。

「！」

声を失うほどの美少年だった。

美形という褒め言葉を躊躇なく用いても、周囲から反感を買わないレベルの容姿。

長身で引き締まった身体。髪は少し長めで、軽くウェーブがかか

っている。切れ長の目は吊り上がり気味で剣呑な光を放っているが、縁のない眼鏡によって険しさが随分と緩和されていた。優しい表情も効果的である。鋭く切れ上がった柳眉。すっと通った鼻筋。微笑みを湛える唇。

誰もが認めざるを得ない美の結晶が目の前に立っている……。

心臓が急に大声でがなり立て始めた。

体温が沸点まで上昇してしまいそうだ。身体が熱い。きっと、顔がみつともないくらいに赤くなっているだろう。色白だから、紅潮すると酷く目立ってしまうのだ。

恥ずかしい。

なぜここまで羞恥を覚えるのかわからないけど、堪らなく恥ずかしかった。

「取ってくれて助かったよ」

乙女心を大きく揺さぶるテノール。

「その地図をなくしてしまうと、ボクは引越し先がわからなくなってしまうんだ。そうしたら、また不動産屋さんに戻らなくてはならないところだったよ。その手間を省いてくれてありがとう」

地図を差し出すと、彼はわたしの手を包み込むようにして受け取った。

そして、笑みを深めた。

「へえ……綺麗な子だね。それに、良い瞳をしている」

彼は目を細め、真正面からわたしの顔を覗き込み、感嘆するように言った。

綺麗な子……。

わたしのこと？

どきんと心臓が大きく脈打った。

学校の男子がわたしの容姿を評する際、《綺麗》とか《可愛い》とか《美少女》だとかの褒め言葉をよく用いる。自分で言うのもなんだが、褒められ慣れている。だけど、相手が白馬の王子様の容姿を持つ美少年であったことはない。いや、美少年に告白された経験

はあるけど、ここまで心に大きく響いたことはなかった。しかも、褒めてくれたのは、外見だけではないようだ。その点が一番嬉しかった。

今も彼は、真っ直ぐにわたしの瞳を見据えて、淡く微笑んでいる。心を探られている感じ。

内面を見抜こうとするような心眼、鑑定眼でじーっと見つめられて、どうして良いかわからず、どう喋れば良いかわからず、どんな表情をすれば良いのかわからず、混乱して、困惑して、戸惑ってしまっただ。

わたしは男の子との接し方が巧みではないので、上手く対処できるはずがない。

笑えないくらいのお手なのだ。

だから、引きつった笑みしか浮かべられない。

変な女と出会ってしまった、と思われたかも。

そう考えたら、急に悲しくなってきた。

気の利いたお喋りができれば、親しくなるきっかけを掴めたかもしれないのに……。

「キミはこの街の住人なのかな？」

わたしなんか置き去りにして目的地へ行ってしまうのでは……と悲観していたのに、彼の側から話し掛けてきてくれた。

脳味噌が茹だるくらい血圧が急上昇。

眩暈を覚え、思わず道路上に座り込みそうになった。けれど、心地よい緊張感が鋼のように体を支えてくれたので、醜態を晒さずに済んだ。

おっと、いけない。彼の質問に答えなければ、おかしい女だと思われてしまう。

「そうです。えっと……、わたし、この道に戻った先にある坂を下って、少し歩いた所に住んでるんですよ」

「へえ……」

彼は細めていた目を大きくして、わたしの頭越しに坂道の方を見た。

「キミは詩海高校の生徒だね。何年生？」

視線をわたしの胸元に落として訊いてきた。

思わず胸に手を当てて膨らみを隠してしまったが、彼は別に胸のサイズを目測しているわけではない。

単に、リボンの色を見たのだろう。

わたしのしているリボンは青色だ。詩海高校では、一年生が青色、二年生が緑色、三年生が紅色と決められている。彼はその色による学年の違いを判別できなかったようだが、引越してきたばかりなのだから知らなくて当然だ。知っている方が怖い。

「一年生です。たった今、入学してきたところなんですよ」
言葉を噛むことなく、すらりと返答できて嬉しくなった。

もう心臓のドキドキは収まっていた。彼の醸し出す柔らかで穏やかな雰囲気、がちがちに凝り固まった心身を溶解してくれたのだろう。

「一年生か……。面白いね」

彼はそう言っただけで、にっこりと、魂を奪うように。
心が吸い込まれていく感じ。

きっと彼は悪い魔法使いで、わたしにチャームの魔法をかけてどこかへ連れ去ろうとしているんだ……。と馬鹿げたことを考えた。
でも、そんなわけではない。

いや、もしそれが本当でも、わたしは構わずについて行くだろう。
「道を尋ねてもいいかな？」

彼は表情を改め、手にしている紙を広げて訊いてきた。
頷いて紙に記されている地図を見る。

うわっ、すごく適当に描いてあるなあ、と内心で酷評した。

この地図では、この辺りの地理に詳しい人でも容易に読み取れないだろう。今日引越してきた人に解読できるわけがない。でも、わたしにはわかった。

この出会いは運命の思し召しかもしれない。偶然ではなく必然。そうであればいいのに、と心から思った。

「わかるかな？」

「ばっちり！ わたし、案内しますね」

「いいの？ ボクとしてはありがたい申し出だけど、キミの迷惑にならないかな」

「全然迷惑じゃないですから、気にしないで下さい」

わたしは笑顔で言った。

彼も笑顔を作った。

「ありがとう」

「それじゃ、ついて来て下さいね。すぐそこですから」

「ちよつと待って」

歩き出そうとしたわたしを彼が制した。

何だろう。

彼はすつと手を顔の前に翳して、眼鏡のフレーム部分を掴んだ。

少し顔を傾けて眼鏡を外す。そして、再びにつこりと頬笑んだ。

「ボクも近々詩海高校へ通うことになる新入生だよ。つまり同い年だね。だから、敬語を用いて喋るのは止めてくれないかな」

「えっ、嘘っ！ それって、わたしたちが同級生ってこと？」

「そうだよ。もしかするとクラスメイトになるかもしれない」

「……………」

そうだったら、どれだけ学校生活が楽しくなるだろう。物凄く充実した青春を謳歌できるに違いない。でも、今日、クラスメイトの中に彼の姿はなかった。それに、教室内には空席もなかった。つまり、わたしたちがクラスメイトである可能性はゼロに近い。悲しいけどそれが現実。思い通りに物事が展開するほど幸運な人生を歩むものは滅多にいないのだ。

彼は、眼鏡を掛けている時より三十倍以上男らしくて格好良い顔

に、優しくて朗らかな笑みを湛え、真っ直ぐにわたしを見つめた。

「ボクの名前は和泉真悟。キミの名前は？」

「藤森……藤森保奈美です」

「初めまして、藤森さん。今日から宜しく」

「こちらこそ、宜しくね、和泉君」

こんな風にして、わたしと真悟君は出会った。

第一章 一年A組の転校生 【1・藤森保奈美】

四月十五日、火曜日。

このクラスに転校生がやって来る。

そんな噂が早朝の教室内を飛び交っていた。

わたしが朝のホームルームに間に合うくらい十分余裕を持って登校し、一年A組の教室に入った途端、耳に飛び込んできた話である。

聞いた瞬間、胸の内がどきんと高鳴った。

入学式の日に出会った男の子の姿が脳裏に浮かぶ。

まるで昨日の出来事のように思い出せる。

けれど、転校してくる生徒の話など、担任の鈴原健一は一言も漏らしていなかった。噂が真実なら万々歳を叫ぶところだけど、わたしは噂話を真に受けるような軽々しい性格ではない。きっと騒動好きのお調子者が、ありもしないデタラメな噂を広めて、軽挙妄動するクラスメイトの様子を陰ながら観賞しているのだらう。そう思うことにして自分の席に着き、カバンを降ろした。

すると、一人のクラスメイトが教室の奥から駆け寄ってきた。

「ねえ、保奈美、ほなみい！ 聞いたあ？」

脳に直接響いてくるような高音の声と共にわたしの机にへばりついたのは、幼なじみの和久井弘美である。

「なんでも、ぴっかぴかの転校生がうちのクラスにやって来るらしいよ！」

弘美とは幼稚園からの付き合いであり、同じ中学校から進学してきた数少ない受験戦争の戦友だ。そして彼女は、客観的に評価しても、掛け値なしに可愛い女の子だ。まだまだ子供っぽさが残っており、中学一年生としても十分通用する容貌の持ち主。おさげにした栗色の髪は艶やかに輝き、小さくスツキリと纏まった小顔には大きな杏型の目がくりくりと瞬いている。華奢で小柄な体は、思いきり

抱き締められたらばきつと折れてしまいそうなのに、同時に力強い弾性を感じさせる。中学生の時、幾種類かのスポーツに励んでいたからだろう。見るからに健康的で活動的。夏の花火のように騒々しく、他人への迷惑を省みないが、一緒にいると楽しくなる女の子であった。

とにかく彼女はお喋りすることが大好き。

始業式の後、わたしがクラスメイトとどのようにして仲良くなるうか苦慮していると、大親友として紹介してくれて、みんなの話の中に溶け込ませてくれた素晴らしい幼なじみである。

そんな彼女は、始業式の終了直後から、一年A組のムードメーカー的存在を担っていた。

だから、とても人気がある。クラス内外の男子生徒から告白されることが多い。しかし、彼女以上に、わたしの方が告白の対象者に選ばれる頻度が高い。始業式からこつち大変だった。クラスの男子はおるか、上級生からも次から次に交際を申し込まれたものである。特に、三年生で野球部の江尻わたると二年生で美術部の氷室康広、そしてクラスメイトの菅野啓介、の三人には辟易した。しつこく付き纏われ、正直うんざりだった。本気で登校拒否を考えたほどである。だけど、それを見かねた弘美が上手く立ち回ってくれて、そのお陰で話を拗らせずに決然として交際を断ることができたのだ。その点についても、彼女には感謝している。

「おはよう、弘美」

わたしは笑顔で挨拶をした。

親友には無理のない自然な笑みを向けることができる。

「おはよー、保奈美！」

弘美は向日葵のような笑顔で応えてくれた。その無邪気な表情は、わたしに毎朝元気の素を注入してくれる。朝を得意としていないわたしにとっては、一番の気付け薬だった。

「こらっ、保奈美！　ほんわか陽気で挨拶交わしてる場合じゃないってーの！　転校生だよ、てんこーせー！」

弘美が勢い込んで叫んだ。

必要以上に大声なので頭に響く。

「うん。みんなその話をしてるよね。でも、それって本当なのかな？ 信頼できる筋からの情報？ この時期に転校してくる生徒なんて変じゃないかな？ 始業式から一週間しか経ってないんだよ？」

わたしは常識的意見を述べた。

今日みたいな半端な時期に転校してくるくらいなら、きちんと始業式に間に合うように入学してこればいいのだ。わざわざ一週間も待つて転校してくる意味はない。何か特別な理由があるなら仕方がないけど……、その場合、考えられる理由は少々物騒なものばかりだ。真つ当な生徒なら、この時期に転校してくることはない。でも、詩海高校のような伝統的進学校が、危険人物の転入を許すとは思えなかった。

「噂は噂なんじゃないかな。本当の話とは思えないわよ」

「でも、本当のことなんだって、保奈美！」

弘美は、信じようとしないうたしをきゅっと睨んだ。

「弘美こそ、なんでそんな風に断言できちゃうのかな？」

わたしはカバンからノートや筆記用具類を机の中にしまい込みながら、疑わしげに問い返した。

「弘美が直接、鈴原先生に教えてもらったわけじゃないでしょう？」
すると、弘美はにんまりと満面の笑みを浮かべた。

「へへーん！ そう来ると思って、ちゃんと言を取っておいたんだよー。あたしが先生から直に聞いたんじゃないけどねー。でも、朝一で職員室に行った子が、鈴原先生と話してる見慣れない男の子のことをばっち見たんだってさ！ これはもう信じるしかないでしょー！」

「あのね、弘美……。どうして鈴原先生と話してる男の子が、このクラスに転校してくる生徒だと断言できちゃうのかな？ 他のクラスの子生徒かもしれないし、上級生かもしれないじゃないの」
「むっ……」

反論された弘美は、言葉に詰まり、唇の先を尖らせた。

急に自信なさげな表情を浮かべ、助けのわらを求めるように教室内を見渡す。

すると、横から男の子が話に割り込んできた。

「おーおー、転校生の話か？ それなら俺も聞いたぜ。話に混ぜてくれよ」

そう言っただけ弘美に助け船を出したのは、クラスメイトの中嶋剛志である。

彼は背が高く、それなりに目鼻立ちが整っている、女の子にモテそうな感じに見えるが、常に女の子のお尻を追いかけ回している、正直あまりモテない。わたしも最初は良い印象を持っていなかった。でも、クラスメイトとして接する分には抵抗のない男の子である。

とにかく、裏表がなくて開けっぴろげな性格だから、お馬鹿で面白いムードメーカーとして見ていると楽しいのだ。

「和久井の話は嘘じゃない。マジだ。噂の出所つてのは菅野なんだよ。あいつ、今日の日直なんだろ？ だから、今朝、職員室に日誌を取りに行った際に、見たことない奴が生徒手帳とクラスの緊急連絡網のプリントを鈴原から受け取ってるのを見たって言うんだ」

「ほーら見なさい、保奈美！ 本当のことだったでしょ！」

中嶋君の援護を得て、自らの正しさを証明できたと得意になる弘美。

しかし、担任の鈴原先生と一緒にいて、プリントを貰っていたからと言っても、その生徒がこの一年A組に転校してくるとは限らないと思う。

もしかしたら他のクラスの生徒が、たまたま鈴原先生からプリントを受け取っただけなのかもしれないのだ。

でも、全ての謎は朝のホームルームが始まれば自ずと明らかになる、それ以上は何も言わないでおいた。

弘美はわたしを納得させることができたと信じて満足げだ。

「でも、でも、その転校生って、どうしてこんな中途半端な時期に転校してきたのかなあ？」

今度は、転校生の素性についての話題を展開していくつもりらしい。

「入学した学校で、始業式の日に大暴れしちゃったのかな？」

「そんなわけではないでしょう。そんな乱暴者がこの詩海高校に入れるわけないもの。理由があるとすれば、もっと意外なものよ」

わたしが答えると、中嶋君が頷いた。

「そうだよな。うちの学校って市内でも有数の進学校だから、問題児なんかを編入させたりしないだろうぜ」

「じゃあ、どんな理由かなっ？」

弘美が口を尖らせて意見を求めた。

中嶋君は、その精悍な顔に、にやつとした男っぽい笑みを刻んだ。

「転校してきた理由は本人から聞いてみないとわかんねえけど、転校生を見た菅野の話だと、危ないタイプの男じゃなかったみたいだぜ」

「あつ！ 転校生って、やっぱり男の子なんだ？ ラッキー！」

弘美の大きな瞳がきらきらと輝いた。

幼い頃から一緒に遊んでいるわたしには、親友が今どんな心境なのか手に取るようにわかる。心の声が聞こえるようだ。いわゆる以心伝心。彼女の思い描いている転校生像まで鮮明に浮かんでいた。

弘美の想像上、その転校生は丈高い白面の美少年である。

自己紹介の際に目が合って、お互いに一目惚れし、学校史に残されるような甘い恋に溺れる……という妄想をいだいているのだろう。でも、あたし自身、そんな古典少女漫画的なお約束シチュエーションで運命的な出会いをしたい、という仄かな願望を持っていたりする。

だけど、現実世界はとても非常なので、えてして転校生の正体は、イジメを苦にして逃げてきた心の弱い非美少年である場合が大半だ

ろう。

夢と現実をごちゃ混ぜにするのは良くない、と思ったのも束の間、わたしの悲観的予想は粉碎された。

「どんな男の子って言ってた？」

弘美が好奇心を剥き出しにして訊いた。

「とんでもない美少年だったってさ。菅野にどれくらい男を見る目があるか知らねえけど、すっげえム力つくくらいイイ男で、どう控え目に見積もっても、女の人気を一身に集めちまいそんな面をしてたそうだけ」

中嶋君は眉間にシワを寄せ、苦々しく忌々しげに答えた。

その言葉に、わたしの心は大きく奮えた。

まさか本当にあの時の美少年が？

見る見るうちに気分が盛り上がってくる。

弘美はガッツポーズを作っていた。

「超ラッキー！ 凄いじゃん。このクラスの男の子って冴えない奴ばっかだから、美少年系の転校生が来るってのは、正直嬉しいよね、保奈美？」

弘美に同意を求められるが、わたしは心の沈静化を図るのに精一杯であり、つい適当に頷いてしまった。

「どうしたの、保奈美？ 何か変だよ？」

付き合いの長い弘美には、わたしの動揺が伝わってしまったようだ。

でも、それに対しては、曖昧な笑みで応えるしかない。

心を落ち着かせようと深呼吸。

体内の温度を平常値まで下げる努力をする。

落ち着け、わたし。

転校生があの子の男の子と決まったわけじゃない。噂話に踊らされて大喜びした挙げ句、「別人でした」と肩透かしを食らって、ど

んより落ち込むような結果は何としても避けるべきだった。

弘美は怪訝そうに顔を覗き込んできたが、今はとにかく転校生談義に熱中したいらしく、すぐに話を戻した。

「うーん……。中嶋君の話だけじゃ信用できないなあ。やっぱ、こは、転校生君を直接見たっていう菅野君に訊かなきゃね」

「おいおい、何だそりゃ。俺の言うことが信じられないっていうのか？」

不服そうな中嶋君。

弘美は背筋を伸ばして教室内をぐるーつと見渡し、菅野啓介の姿を探した。

どうやら、すぐに発見できたようだ。にかつと笑顔を作って、片手を振り振り大声で叫ぶ。

「菅野くーん、ちよつといいかなあ？　話が聞きたいんだけどお！　こつち来てよ！」

呼ばれた菅野啓介が、嫌な顔一つせずこつちに駆け寄ってきた。彼に対する拒否反応から、わたしは思わず席を立ちたくなり、唇を噛んで衝動を堪えた。

菅野のことは、申し訳ないけど好意的印象を持っていない。ハッキリ言って毛嫌いしている。いや、恐れていると表現した方が正確かもしれない。この感情は、入学式の日からぶっ続けて「付き合って欲しい」と追い回された結果の表れである。

「何かな、和久井さん？　もしかして君も転校生のことを聞きたいの？」

菅野は自然な感じでわたしの机に手を置き、前傾姿勢をとって訊いた。

弘美は当然とばかりに頷き、人差し指の先を突きつけた。

「菅野君、職員室で転校生と会ってきたんだよね？　どんな男の子だったの？」

「なかなかの美少年だよ。有名なアイドル事務所に所属しているって言っても、誰も疑いを持たないくらい際立った容姿の持ち主だっ

たね。背がかなり高かったから、少年っていう表現は適切じゃないかな。でも、神懸かり的な外見であることは間違いないよ。それは保証する。総合的には、文武両道の真面目少年って感じたな。一見すれば誰だって格好良いって思える人だったよ」

菅野が思い出しながら語る転校生像を、わたしは頭の中で組み立ててみた。

彼の言う転校生が、わたしの知っている男の子である可能性はぐんと高くなっただろう。適合率は六十パーセントくらいか。眼鏡の有無を確認したい衝動に駆られたけど、限界ギリギリの線で押さえ込んだ。

話を聞いた弘美は大喜びで手を叩いた。

「よさげな感じじゃん。早くホームルーム、始まらないかなあ。なんだかワクワクするよね、保奈美？」

「う、うん……そうだね」

わたしは控え目に同意した。

すると、菅野は机の上に身を乗り出し、マツタを掛けるように、弘美に手の平を見せた。

「藤森さんに同意を強要するのは止めなよ。いくら君たちが親友同士だからって、決めつけるのは良くない」

突然、菅野が血相を変え、強い調子で咎めてきたので、弘美は吃驚して真ん丸く目を見開いた。

「えっ、どーゆーこと？」

「藤森さんは控え目で大人しやかで清楚で身持ちの堅い完璧な大和撫子なんだ。ちょっと見栄えの良い男なんかに興味を持つことなんてあり得ない。そうだよ、藤森さん？」

同意を求められ、わたしは困惑色の強い曖昧な笑みを浮かべてみせた。

菅野の評価に同意するのは嫌だけど、否定するのも怖い。

そのあまりに真剣な表情が恐怖を誘うのだ、と気付いて欲しかった。

「菅野君こそ決めつけてるじゃん。保奈美は君の言った通りの女の子だけど、君の意見に賛同するほど悪趣味じゃないんだよね」

「どつという意味だよ……」

菅野は批判された途端に表情を硬くして声を低めた。

「君よりも転校生君の方がずーっと好感が持てるに違いない、ってことだよ。菅野君で、保奈美のことになると何か感じ悪いもん。すんごくしつこいし、やたらとムキになるしさあ。ストーリーカーは嫌われちゃうぞお」

「！」

ストーリーカー呼ばわりされ、菅野は顔を引きつらせた。

言い知れない屈辱を覚えたのだろう。

きつと彼の認識では、弘美と同じくらいの親友的ポジションだったのだろう。

彼はすつと身を引いて、椅子に座っているわたしを見据えた。

真っ黒い瞳で直視され、わたしは内心でたじろいだ。そんな強い意思の込められた視線を突き刺さないで欲しい。そして、できれば自分の席に戻って下さい、と声に出さずにお願した。

その願いが通じたのか、菅野は少し悲しそうに微笑んで机から離れた。

「僕のこと、嫌いにならないで欲しいな」

去り際に小さな声で言われた。

わたしは小声で応える。

「嫌いにはならないけど……」

好きにもならないと思う……。

菅野が自分の席に戻ってから、弘美が中心となって交わされる転校生談義をぼんやりと聞きながら、時が満ちるのを待った。

【2・藤森保奈美】

しばらくすると、校内にチャイムの音が響き渡った。

ホームルームの開始を告げる合図だ。

それと同時に、遅刻を回避しようと教室に駆け込んでくる朝寝坊組の生徒たち。

それらも含めてざわつく教室内。

クラス全員がそわそわしている感じた。誰もが、美形転校生の噂に過剰な期待をいだいている。

わたしも胸を高鳴らせていた。

がらつと教室前方の引き戸が開いた。

そして、担任の鈴原健一が入ってきた。

水を打ったように静まり返る教室。

転校生効果だ。噂の人物が登場するのをクラスの全員が心待ちにしている。特に女生徒が、廊下で待たされているであろう美形転校生を早く招き入れろ、と無言のプレッシャーを込めて担任教師を睨み付けている。

「よし、みんな席に着いてるな？ ちょっと静かにしろよー！」

鈴原先生がパンパンと手を打ち合わせて大声を上げるが、既に教室はしんと静まり返っていた。私語を交わす不埒者など存在しない。一通り教室内を見回すと、先生はどこにでもいるような冴えないサラリーマン面を緩めて大きく頷いた。

「よしよし。今日も遅刻欠席ゼロのオール出席完全満席だな。感心感心」

のんびりとした口調ながらに、室内の隅々までよく通る声。

「さーてさて、今から大切な話をするから、全員耳の穴をよくかつぽじって聞いとけよ。どうやら、みんな既に知っているみたいだが、本日から我が一年A組に新しい仲間が一人加わることとなった。

つまり転校生が来たってことだ。入学式から日が浅いのになんて転校なんてして来やがるんだ、と疑問を持つのも不思議じゃないが、そこら辺の理由はあまり詮索しないように。どうやら複雑な事情があるみたいだからな」

そこまで鈴原先生が話すと、徐に弘美が手を上げた。

「先生、お喋りはもう十分ですからー、早く転校生を紹介して下さいーい」

「こらこら、和久井、フライングだぞ。先生の話遮るな。大人しく椅子に座って口を閉じていなさい。いいな？」

「ぶうーっ！」

軽く叱られてブーイングする弘美。

鈴原先生はちよつと気を持たせるように間を置き、生徒たちの顔を眺めて、にっと口の端を歪めた。

「おまえらの転校生に対する並々ならぬ好奇心は、この冗談みたいに静まり返った空気から容易に察することができるが……。あんまり入れ込んで転校生を困らせないように、なるべく大袈裟な反応は控えるようにしろよ」

鈴原先生のその台詞が、廊下で待っている転校生のただ者でなさを表していると言えた。

想像以上の美少年である可能性大だ。

本当に、あの時の男の子が？

心臓の音が徐々に高鳴り始め、ドンドンと脈打つスピードを速めていく。

胸が破れてしまうのではないかと心配するくらい動揺している。わたしは思わず胸の上で手を重ね合わせて、高ぶりを静めようと努めた。

「よーし、入ってこい！」

閉じられているドア越しに、鈴原先生が声を掛けた。

音なくドアが横へとスライドし、教室内の空気を動かした。
クラス全員の視線が一点集中する。

転校生が入ってきた。

学校指定の制服に身を包んだ丈高い美少年だ。

音なくドアが閉められた。

転校生は、鈴原先生の横に並んで立った。

「今日からみんなと一緒に勉強することになった神川だ。仲良くしてやってくれ」

先生に紹介され、神川君は一礼した。

「神川真治です。みんな宜しく」

神川君は爽やかな笑みを振り撒いて名乗った。

残念ながら転校生の正体は和泉真悟ではなかったが、確かに噂に違わない相当な美少年だった。

乱雑なのに妙に纏まって見える癖の強い黒髪。揺るぎのない自信を湛えた目。少し斜めに傾いた皮肉げな唇。日本人らしさのない長い手足。和泉君とは似ても似つかない完全な別人だけど……。

だけど、わたしは胸の前で両手を擦り合わせ、ぼーっと転校生を見つめていた。

他の女の子も同様に、自分勝手な想いをいだいて彼を見つめているのだろう。

一部の男子も魅了されたかもしれない。

それくらいの吸引力が彼の容姿には備わっているのだ。

本来なら真っ先に奇声を発して彼にマシンガンのごとく連続した質問の雨を浴びせかけていたであろう弘美も、相当に度肝を抜かれた様子で、茫然と美少年に見惚れていた。

教室内が無言のどよめきに包まれていた。

「よし、みんな落ち着け」

鈴原先生がパンパンと手を打ち合わせて、全員を白昼夢から覚ま

した。

「神川は今日からおまえらと同じクラスメイトなんだから、そんなに派手なりアクションをするな。自然に行こう、自然に。いいな？ それじゃ……そうだな……」

「鈴原先生、僕の席はどこになるのでしょうか？ 教室内に空席が見当たりませんが……。どこかに机と椅子が用意されているのでしょうか？」

神川君が唇を斜めにしたまま訊いた。

その点について鈴原先生は今初めて気付いたようで、困り顔を作って頭を掻いた。

「そうか、そうだったな……。新しい机と椅子のことをすっぱりと忘れてた。悪い悪い。一時限目の授業までには用意させるから、少し待っててくれ」

「はい」

薄く微笑んだまま神川君は頷く。

「それで、僕の席はどの辺りになるのでしょうか？」

「うーん、そうだな。神川は背が高いから、後ろの席がいいだろうな。うーん……うん。そうだな、よしよし」

鈴原先生は腕を組み、考えるような仕種で教室の後方を眺め、三十秒ほど悩んで答えを出した。腕組みを解き、ぽんと手を打つ。そして、わたしを指差した。

「？」

わたしがどうしたのだろう。

何か問題でもあるのだろうか。

まさか……。わたしの席を神川君に譲れ、とか言い出すのでは？ そう思った瞬間、わたしは清楚でお淑やかと評されている仮面を脱ぎ捨て、隠されている気の強さを晒してしまいそうになった。慌てて愛想笑いを浮かべる。

神川君の視線が、先生の指差した先を辿るようにして、わたしへと向けられた。

鷹のように鋭い目が僅かに見開かれる。

驚きの表情。

そして、口許が綻んだ。

絡み合う視線。

神川君の笑みが深まった。

わたしも自然と微笑み返した。

「藤森の席の隣がいいかな。後ろの生徒はみんな廊下側に一列ずつずれてくれ。悪いが、神川を藤森と並ばせたいんだ」

先生が指示すると、席が廊下側の一番後ろに位置する中嶋君が不平不満の声を上げた。

「センサー、なんで転校生と藤森さんを並ばせんだよ。えこひいきか？」

そう言われて、先生は他愛なく笑った。

「神川はまだ教科書とか持ってないから、隣の席の生徒に見せてもらわないと駄目なんだ。それに、始業式から今日までにやった授業に関してのノートを誰かに写させてもらう必要もある。そういう役目をそつなくこなせるのは、藤森なんじゃないかと思うんだよな。

各教科の授業のノートだって、しっかりとっているだろうし。クラスの中じゃ、うってつけの人物だ。それについて異論でもあるのか、中嶋？」

「……………」

中嶋君は返す言葉がなかったようだ。不愉快面で天井を見上げた。

「あと、藤森。ついでに学校内のこととかクラブ活動について色々教えてやってくれ。いちいち先生が一から教えるのは面倒臭いし、神川だって可愛い女生徒に教わった方が覚えがいいだろうからな。頼んだぞ、藤森」

「はい、先生」

わたしは喜びが顔に溢れ出ないように気を付けながら返事をした。「お気遣い感謝します」

小憎らしい台詞を、すらっと口にする神川君。

「ただ、感謝したいのはわたしの方だった。」

今までそれほど好意を持ってみていなかった担任教師に対して、敬意と親しみを覚え始めている。大感謝だ。そして、中学三年の一年間を猛勉強で費やし、超難関進学校と言われる詩海高校に入学した自分自身を、今日ほど褒めてあげたくなかった日はなかった。

「よしよし。それじゃ、神川、今は机と椅子がないけど、一応席に着け。それで、一番後ろの席の奴は、藤森以外、全員廊下側にズレてくれ。ほら、早くしろ」

「はい」

もう一度、神川君はクラスメイト全員に対して独特な斜めの微笑を向け、滑るような足捌きで教壇から降りた。そのまま、四方八方から好奇に満ちた視線を浴びせかけられても全く意に介さず、一片の緊張感も表さずに、机の間を抜けて教室の後方へと歩いてくる。そして、わたしの隣に差し掛かったところで、彼は腰を屈めて視線を同じ高さにし、につこりと頬笑んだ。わたしの為だけに笑顔を浮かべた。

「宜しく、藤森さん」

「こつちこそ宜しく、神川君」

初対面の挨拶を交わした。

「素晴らしいお隣さんだ。先生に感謝しなければならぬな」
そう囁かれ。

わたしはこれ以上ないくらいに顔を紅潮させた。

「わたしも……」

「ふふつ、楽しい高校生活を営めそうだね」

神川君はそう言って、器用にウインクした。

わたしの乙女心はあっさり射抜かれた。

【3・藤森保奈美】

朝のホームルームが終わり、一時限目までの短い休憩時間に入ると、クラスみんなは待つてましたとばかりに、こぞって神川君の席の周囲に群がり寄つてきた。まるで砂糖に群がる蟻だ。点数稼ぎを目論む女生徒が、気を利かせた風に彼の為に机と椅子を運んできて気を引こうとしている。女子だけではなく、男子生徒まで何くれと質問を浴びせかけている。不届き千万だ。そんな中でも神川君に一際接近して強引に仲良くなるうと試みているのが、我が親友たる和久井弘美であつた。十五分という短時間でいかに美形転校生と多く言葉を交わせるかを競っているみたいに見える。そんなにがつつなくなっても、クラスメイトになつたのだから、今後幾らでもお喋りする機会を設けることができると思う。だから、わたしは、人間の檻のごとく彼を取り囲むクラスメイトの輪に入らず、大人しく一時間目の準備をした。

あつという間に休憩時間は終わった。

チャイムが鳴り、数学の授業が始まつた。

わたしは数学が嫌いじゃないから、教科書を開く手も軽やかだ。担当教師が黒板上でリズムカルにチョークを踊らせて数式を書き表していくのを見ながら、要点を纏めてノートに書き写していく。

最初の十分間は前回の復習だったので教科書が必要としなかつた。しかし、それが終わり、新しい章へと移る段階になると、先生が教科書の十五ページを開くように指示した。

すると、神川君が机ごと体を寄せてきて、教科書を見せて欲しい、と小声で言つた。

「迷惑だとは思つけど、僕の手元に教科書や参考書の類が届くまでの間、君の物を見せてもらえないかな。無理強いはできないから、嫌であれば拒否してくれて構わないけど、僕としては君に見せて欲

しい」

神川君は囁き声で言い、反対隣の席へと視線を向けた。

なるほど。男の子に見せてもらうより、わたしの方がいいというわけだ。それは、ごく普通の男の子っぽい心理だろう。気分を害する理由にはならない。いや、それどころか、わかっていたこととはいえ、願ったり叶ったりの展開である。

「ううん、別にいいよ。教科書を見せるくらい、幾らでもどうぞ」
わたしは何でもない風を装って、二人の机をくつつけた間に教科書を置いた。

でも、心の中は大嵐。パニックで心臓が爆発しそうだ。脳が沸騰するくらい茹だっている。教科書のページを捲る際に、彼の手とわたしの手が偶然触れ合った瞬間、くらつと眩暈を覚え、思わず手を引つ込めてしまったほどである。

異性に免疫のないわたし。

そんな変な態度でしか接することできないわたしに対して、神川君は白い目を向けたりせず、嘲笑いもせず、困惑もせず、しかしちよつとだけ皮肉っぽい笑みを保ったまま接してくれた。

二時限目を終える頃には、神川真治という類い希な美少年の魅力に対する免疫が多少なりともできたようで、緊張で凝り固まっていたわたしの身体も気付かないうちに随分とリラックスできていた。

よく考えてみれば……否、よく考えずとも、わたしと神川君はお付き合いをしようという恋人関係ではなく、単なるお隣さんなのだ。数多いクラスメイトの一人。ただ、会話する機会が、他の子よりも少し多いだけ。だから、過剰に意識するのはおかしい。ごくごく自然に接すればいいのだ。

彼も、わたしに対して特別な感情を持っているわけではなさそうだし……。

それに、もしお互い好き合っていたとしても、親友である弘美が交際を無意識的に邪魔して下さるに違いない。彼と二人きりで過ご

す時間を設けることなど到底できないだろう。

授業終了のチャイムを聞きながら、そんな切ない思いに胸を塞がれた。

そして、誰もが待ちに待った昼休み。

この一時間半という休み時間は、弘美を筆頭とする好奇心旺盛な女の子たちにとって、かつここの質問タイムとなった。まるで甘い蜜に誘われる蜂のように、神川君の席を取り囲む。

そんな中、真っ先に飛び寄ってきたのが、言わずもがなの和久井弘美である。

彼女は大きな杏型の目をくりくりさせながら、机に嚙りついて人懐っこい笑顔を見せた。

そういう風に自分の思うがまま積極的行動に出られる彼女の性格が心底羨ましい。

わたし自身は、本質的には、好奇心が強くて行動的で社交的な性格である。そう自己評価しているし、家族も同様の評価を下している。でも、一步家から外に出ると、自分らしさをさらけ出すことができない。どうしても一步下がり、物静かで笑みを絶やさない女の子を演じてしまう。周りにいる人間が、わたしのことを清楚だとか控え目だとか慎ましかとか、およそ正反対の人物像を押しつけ、呪縛してくるので、そう演じざるを得ないのだ。

けれど、それが苦痛なわけじゃない……。

「ねえ、神川君でどこの学校から転校してきたの？ 都内？ それともずーっと遠い所から引越してきたの？」

弘美がここに集まっている全員を代表して質問した。

神川君は、周りを城壁のごとく包囲されて熱視線を集中されても、全く不快感を示さず、不愉快な顔も見せずに、彼特有の斜めな笑みを口許に湛えて軽く首を傾げた。

「都内だよ」

「それじゃ、引越してきたんじゃないのかなあ？」

「いや、引越してきたよ。都内と言っても広いからね。起床時間の問題もあつて電車通学はしなくなつたから、学校の近くに部屋を借りたんだ」

「そつかあ、電車通学つて時間かかつちゃうから大変だもんね。朝とか起きるの大変で、大忙しで大慌てしちゃう、つて言うからね。ちよつとでも長く寝たいなら、近くに引越してきちゃつた方が便利だし、何より登下校が楽ちんだよね！」

きやいきやいとはしゃぎ声を発する弘美。

「それで、神川君が通つてた学校つてどこ？ あたしたちがよく知つてる所かなあ？」

「その辺りについては、あまり触れて欲しくないな。できれば訊かないで欲しい。事実を話して良いかどうか、僕一人の判断では決めかねる。多少入り組んだ事情があつてね。前の学校や中学時代については詮索しないでもらいたい」

神川君はやんわりと返答を拒否した。優しい口調だけど、目に見えない鉄壁のシールドを設けて、それらに關しての質問を拒絶する意思を明確に示した。

その防壁を強引に突破しようと試みる者はいないだろう。

弘美も無理に聞き出そうとはしないに違いない。

そう思つたのに、横合いから口を挟む勇者（お馬鹿さん）がいた。「なんだそりゃ。別に隠し立てする意味なんてねえだろ」

声の主は中嶋君だった。

「……………」

神川君は若干皮肉混じりの微笑を深めて一瞥しただけで、何も答えなかった。

返事を得られなかつた中嶋君は口の中で何か文句を呟いたようだが、誰にも聞き取れない音量だった。

でも、誰も聞き返さなかつた。もし聞こえたとしても、誰も相手にしなかつただろう。

「神川君で、付き合つてる女の子とかいるのかな？ 教えて！」

弘美が次の質問を投げ掛けた。しかも、かなりの剛速球。

もつと無難な質問を幾つかクツシヨンとして挟み、その上で遠回しの変化球を投げるべきだ、と思った。

でも、それは、集まった女の子全員が聞きたかった第一位の質問なので、誰も無粋な質問を咎め立てようとはしなかった。

勿論、わたしも、である。

みんなの耳がダンボ並みの大きさになる。

彼の返答は？

「僕は転校してきたばかりなんだよ。だから、今現在付き合っている女生徒なんて存在するわけがない。そう思わないかな？」

神川君は僅かに目を細めて答えた。

確かに仰る通りである。

すると弘美は、ずいっと身を乗り出して、机越しに神川君の顔を覗き込むようなポーズを作った。そして、意味ありげに笑った。

「それじゃあ、転校してくる前の学校とか、中学生の時に付き合ってた女の子はいたのかな？ どう？」

いたんでしょ、いたに決まってるよね、という表情で弘美が問い詰める。

しーんと静まり返るギャラリィ。

女の子たちの、否定して欲しい、という願望が込められた熱い視線。

「即答しかねる質問だな」

神川君の表情が一瞬曇ったような気がした。
わたしの気の所為かもしれないが……。

今はもう穏やかな笑みを湛えている。

「どうして答えらんねえんだよ！」

半ば喧嘩腰で中嶋君が訊いた。

「亡くなった人間の話題はなるべく避けたいんだ。それに、その女

生徒と僕が恋人関係だったかというところ……、そう断言するには支障が多すぎるようだ」

亡くなった、と聞かされ、中嶋君は一瞬怯んだ。しかし、すぐに態勢を立て直して言葉を繋ぐ。

「でも、仲良しの女がいたんだろ？」

「そうだね。しかし、それについては、お互いに恋人と認識していたかどうかが重要だと思う。僕自身は確かに、その女生徒に対して特別な感情をいだいていた。だから、恋人関係ではなかった、と言えなくもない。でも、その女生徒には、僕よりも親密な交際をしている男子生徒が存在したからね……」

刹那、神川君の顔が無表情になった。

「なんだそりゃ」

中嶋君は眉間にシワを寄せて唸る。

「そんなもん、付き合ってるって言えねえよ。おまえよりも親密な交際してる奴がいたっていうなら、その女はただの友達だ。そうだろ？」

「そうかもしれないな」

刺々しい口調の中嶋君を相手にしても、神川君は柔らかな態度を崩さなかった。

でも、その女の子について話し続けることに苦痛を感じているのだろう。彼はさり気なく話題を変えた。

「ところで、君たちは昼ご飯を食べないつもりなのかい？ 僕は食べるつもりなんだよ。だから、悪いとは思っけど、この包囲網を解いて欲しい。そして、パンを買いに行かせてくれないかな」

「そつだよね！」

弘美が我先にと同調した。

「お腹空いちやったよね！ お昼食べたいよね！ でも、神川君、お弁当持ってきてないんだ？」

「持ってきていない。この学校でパンを購入できると聞かされたからね。学食はないそうだけど、昼休みになるとパン屋がトラックで

売りに来るのではないかな？」

「うん、その通りだよ。正しい情報だね」

弘美は頷いた。そして、ぱんぱんと手を打ち鳴らし、神川君をがっちりとり囲んでいるクラスメイトたちを追い払った。

「ほら、みんな自分の席に戻ってお昼食べなよ。神川君の邪魔しちゃう駄目。お話ししたかったら、彼がご飯食べ終わってからにしようよ。ね？」

弘美に追い立てられ、みんなはぶつぶつと文句を零したが、強引に居座ろうとする不屈き者はいなかった。

迷惑をかけて嫌われるのを恐れたのだろう。

「ありがとう、和久井さん。助かったよ」

神川君は礼を述べて立ち上がった。

そして、こつちを見た。

わたしはバッグの中からお弁当箱を取り出そうとしていた手を反射的に止めた。

「藤森さん、悪いけど、パン屋の所まで案内してくれないかな？」

小さな声でお願いされた。

間近での微笑。見つめ合っていると魂を抜かれそうな黒い瞳。心をとろけさす声。

拒否する言葉など紡げない。

いや、拒否した瞬間に自害必至だろう。

むしろ率先して案内してあげたい心境だ。

「いいよ」

わたしは簡単に応じて席を立った。

「あつ、あたしも一緒に行つてあげるよー」

弘美が真上にぴーんと手を伸ばして、声を上げた。

こらこら、そんなに大きな声を響かせたらクラスの女の子たちに聞こえちゃうじゃないの、と鋭い眼光を刺して無言の忠告。

わたしの心の声はちゃんと弘美に伝わったようだ。

さすがは竹馬の友。

彼女は慌てた風に大袈裟な動作で口を押さえ、可愛らしく肩を竦めた。

そんな一つ一つのポーズも、神川君に対するアピールなのだろう。わたしには決して真似できないナチュラルな媚態である。

わたしたち三人はクラスメイトの視線を避けるようにして教室を出た。

首尾良く残り物のパンを購入。

そして、弘美の強い希望により、屋上に設置されている談話スペースに移動して、お昼ご飯を食べることにした。

【4・藤森保奈美】

屋上はあまり人氣がなく、がらりとしていた。

いつもはもつと沢山の生徒が学年に関係なく我先にと憩いの場所を求めてこつた返しているのだけど、今日は例外らしい。

なんだか寂しさを感じる。空々しい寒さ。

だけど、それを気にしたのは最初の五分くらいであり、すぐに神川君との会話に夢中になった。

「君たちは仲が良かったね」

わたしと弘美のやり取りを見ていた神川君が、斜めな微笑に少し面白そうな表情を混ぜ込んで訊いてきた。

パン屋さんでの出来事も彼の興味を引いたのだろう。

わたしと弘美の関係。

「うん。大親友だからね！」

明快に答える親友。

わたしは、本当にそうなのかなあ、と内心でぼやいた。

なにしろ、今日からしばらく教科書を見せてもらう代償、という理由でわたしが神川君にパンを奢ってもらっているのを見て、弘美は自分にも奢れと大声で訴え、小さな子供のように駄々を捏ねたのだ。

神川君はそんな駄々っ子にも不愉快な素振りを見せずに快く奢ってあげただけど、わたしは物凄く恥ずかしい思いをした。彼の代わりに奢ってしまおうか、と思ったくらいだ。

まあ、自分一人だけ……というのも悪い気がしたが、弘美のやり方はどの角度から見ても常識を大きく逸脱している。

その後、こっそりと親友の厚顔を謝ると、彼は全く気にした様子もなく許してくれた。

「君たちは面白いコンビだね。性格が全くの正反対のようできて、

実は同じベクトルという間柄だ。珍しい関係だよ」

「何言ってるの、神川君！ あたしと保奈美の性格は全然違つよ。真逆だよ」

「そうかな？ いや、そうなのかもね」

神川君は反論せず、買ってきたパンを袋から取り出した。

一つ五百円もするスモークサーモンのサンドイッチだった。

わたしは弘美と向かい合う形で神川君の隣に座っている。

彼女の口から、それについての抗議は出なかった。

隣に座るよりも正面の位置の方が話しやすいと考えたのだろう。

体の距離よりも、心の距離を縮めようという魂胆だ。

その点は、わたしも賛成である。

「ねえねえ、神川君が好きだったっていう女の子って、どんな人だったの？」

「またもや剛速球を放つ弘美。」

しかも今度はデッドボール気味だ。

神川君の心情に配慮せず、さっきの話を蒸し返すつもりらしい。彼女はそういう点で鈍感なところがあるのだ。彼の好みを聞き出して、それに等しい女の子を演じようと考えているのだろうか……。彼女の性格上、擬態は無理である。そもそも人並みの恋愛ができる性格とは思えない。

しかし、それは、わたし自身にも当てはまる部分だ。青春真っ只中なのに、男の子とお付き合いするどころか、プライベートで手すら握った経験がない。何とも哀しい事実である。

「ちよつと待つて。君ばかりが質問するのは不公平だ。今度は、僕の側から君たちに質問させて欲しい」

神川君は前のめりの弘美に手の平を見せ、勢いを制するように言った。

弘美は不満そうに唇を尖らせたが、美少年の微笑に負け、でれーっと相手を崩して可愛らしく頷いた。

「いいよー。何でも訊いて下さいな。なーんでも答えてあげるよお！」

「ありがとう。それでは遠慮なく質問させてもらおう」
神川君は正面からわたしを見た。

「君は今、誰か特定の男子と交際しているのかな？」

「えっ？」

わたしの心が一旦停止した。

すぐに再起動。

そして、大混乱。

動揺を隠せない。ぐらぐら不安定な心。

その質問の意図は何？

わたしについて知りたいの？

もしかして……。

わたしが自意識過剰な思考を働かせている隙に、弘美がさくつと答えてしまった。

「あははー！ 保奈美に恋人なんていないよ」

「へえ……それは意外だ。こんな可愛い女の子を放っておいて、周りの男子生徒は何をしていたのだろう。クラス会の議題にしたいくなる謎だな」

「今だけじゃないんだよ。保奈美は生まれてから今日まで一度も男の子とお付き合いしたことがないんだよ。幼なじみのあたしが言うんだから間違いないよ。綺麗な身体のまま高校生になっちゃったってわけ。ぴっかぴかのヴァージンなんだよねー。ねっ、保奈美？」
「……………」

弘美が何の迷いもなく恥ずかしい事実を公表してくれた。

こっちの気持ちも考えずに……。

あまりの無神経さに、親友を辞めたくなった。

それに対して、大した反応を示さない神川君。そんなこともあるだろうね、という表情だった。

「あれれ、リアクションなし？」

不満げな弘美。

神川君は微笑んだまま首を傾げた。

その情報に対して返事のしようがなかったようだ。

「もう、弘美！」

ようやく声を出せるまでに心を回復させたわたしは、恥ずかしさと悔しさと戸惑いと情けなさで泣きそうになりながら、親友を睨み付けた。

「どうしてそんなこと言うのよ！」

穴があつたら入りたい心境だった。

いや、猛ダッシュでこの場から逃げ出したい。

お馬鹿な親友の胸にナイフを突き立ててから、自殺防止用の金網を乗り越えて、紐なしバンジージャンプをしたい。

そんな負の衝動に駆られた。

「ごめんね、保奈美。でも、本当のことですよ。ヴァージンだつてことも恥ずかしくないと思うよ。むしろ誇らしいことかも。だから、怒らないで。ね？」

さすがの鈍感者も口を滑らせてしまったと反省しているのか、お茶かけ調子のグレードを僅かに落として謝ってきた。顔の前で手を合わせて、「ごめんね」と首を傾げる。ぺろつと舌を出して小首を捻っている辺りが何とも怪しい。

本気で謝っているのか？

全く、この子は、こんな場合においても神川君に可愛さをアピールしているのだから……どうしようもない。

困ったものである。

わたしは天井知らずに上昇していく体温を調節する為に、清涼飲料水のペットボトルの蓋を外して一口飲んだ。そして、仕方がないなあ、許してあげるよ、と微笑んでみせた。

この程度で腹を立てていたら心身が持たない。

和久井弘美と良好な親友関係を維持していくには、広くて深い寛容さが必要不可欠なのだ。

何よりも、神川君の前で口喧嘩なんかできなかった。

弘美もわたしの気持ちを察してくれたらしく、すぐに持ち前の笑顔を取り戻した。

「でも、神川君、保奈美にそんなこと訊いてどうしようっていうのかなあ？　もしかして、転校初日にいきなりプロポーズ？　ちよつと安易すぎなんじゃない？　それって超フライングだよ。そりゃ、保奈美ってすんごく可愛いし、性格も良いし、男の子にモテモテだし、どこにも欠点が見当たらない完璧な女の子だから、神川君が興味を持つのも理解できるよ。でも、もつと色んな女の子のことを観察して、よく吟味してからお付き合いする相手を選ばなきゃ。保奈美よりも良い子が見つかるかもしれないよ。例えば、あたしとか！」

弘美は自分を指差して、笑みの花を咲かせた。

冗談めかしているが、本気なのだろう。

自己アピールというわけだ。

ちゃっかりしている。

神川君は苦笑した。

「話題を変えてもいいかな？」

「えーっ！　あたしのことは訊いてくれないのかな？　それって超デンジャーな差別だと思うよお！」

弘美は、ぶすつとして不平を漏らした。

「君については、今までの会話からある程度理解できたよ。それよりも、この学校の情報を教えてくれないかな」

「んもう、仕方ないなあ。……それで、神川君は何について聞きたいの？」

「クラブ活動や部活動についてだよ」

「あー、そーだね。クラブは入っても入らなくてもどっちでもいいんだけど、部活は必須だもんね。それで、神川君はどんな部活に入

りたいのかな？」

希望の部を訊かれた神川君は、視線を下に落とし、痛みを堪えるように唇を噛み締め、上目遣いにわたしと弘美を交互に見た。

「和泉真悟という名前の男子生徒が所属する部に入りたいんだ」

え？

一瞬、我が耳を疑った。

転校生の口から、始業式の日に出会った美少年の名前が飛び出すなんて……。

なぜ？

「え？ それ、誰？」

和泉真悟という名前に心当たりのない弘美は、当然ながら、きょとんとして聞き返した。

「知らないのかい？ おかしいな……。僕など比較にならない美少年だから、同じ学校に通っていれば知らないはずはないのだが……。和泉真悟という名前に心当たりはないの？」

「ぜーんぜん」

お軽く答える弘美。

転校生の目がこつちに向く。

わたしは曖昧な笑みで誤魔化した。

弘美のいる前で和泉君と出会ったことを正直に話してしまうと、その出来事について色々詮索され、痛くない腹を探られると思ったからである。それに、転校生は和泉君に対して良くない感情をいだいているような気がして、打ち明けづらかったということもある。

神川君は小さく溜め息を吐いて何かを思い切ると、俯き気味だった顔を上げ、また口許に斜めな笑みを宿した。

「そうか……。まだ転入してきていないんだな。それなら仕方がな

い……。彼が望みそうなところ……。そう、面白い部がいいな」

「面白い？ それって運動部でも文化部でもいいってこと？」

「そうだね」

そんな適当でいいのだろうか。

活動内容を十分に吟味して、慎重に選択するべきではないのか、と心配になったが、あえて二人の会話には割り込まずにおいた。

わたしは、黙々とパンを千切っては口へ運ぶ。

「良くも悪くも、変わった人間のいる部に入りたい」

「変わった人か……。うーん……」

弘美は牛乳パックのストローを口にくわえ、ぶらぶらさせながら、思案するように眉をひそめた。

はしたないぞつ、我が親友。

「藤森さんのお薦めは？」

神川君に意見を求められた。

突然のことだったので、粟を食って手にしていたパンを落としそうになった。

「え、えつと……。わたしはあまり他の部のことを知らないから……」

……。あ、でも、美術部についてなら教えてあげられるよ。わたしたち二人が所属している部だから」

わたしが言うと、弘美は飛び上がって会心の笑みを浮かべた。

「それ最高！ 美術部に決定っ！」

「弘美、ちょっと静かにしてて。今、わたしが美術部のことを説明するから」

「はい。どうぞ、保奈美」

弘美は聞き分けよく口を噤み、新しいパンの袋を破った。
クリームアンパンだ。

「わたしたちが所属する美術部は、顧問の剣崎先生を含めても八名しかないの。しかも、殆ど部として活動していなくて、帰宅部同然。活動初日に一回だけ全員集合したけど、部員同士の争いが激しくて、一時間も経たずに解散してしまったのよ。神川君の望んでい

るような面白い部かどうかはわからないけど、弘美が言った通りちよつと癖の強い生徒が集まっているのは確かね」

「面白そうだね」

神川君が興味を示してくれた。

「どんな人間が所属しているんだい？」

「わたしがよく知っている人は、部長の浅宮雪乃さんと副部長の宮地優さんの二人。浅宮部長は三年A組のクラス委員長と生徒会役員も兼任している、才色兼備な人。ただ、自分だけじゃなくて他人にも厳しい性格だから、みんなからあまり快く思われていないみたい。宮地副部長は……」

「自爆霊みたいな人だよ」

弘美が簡潔に言い表した。

酷い言い種だ。

でも、当人を的確に表現しているな、と思った。

「宮地副部長も真面目な人だけど、浅宮部長とは違う意味で付き合いくらいにくい人ね」

「性格が陰湿すぎて怖いんだよ」

またもや弘美が的確すぎる人物評を述べた。

それはもう暴言なのでは……、と思った。

神川君は何が可笑しいのか、俯き気味になってくすくすと笑う。

「美術部か……悪くないね。あの最悪の鬼畜男が好みそうな部だ」
独り言のような呟き声。

それを耳にした瞬間、全身に鳥肌が立った。

隣にいるわたしにしか聞こえなかっただろうが、彼らしくない臓腑を抉るような毒々しい声音だった。

しかし、斜めの微笑みは健在だ。

「あつ、もしかして美術部に入部したくなつたのかな？」

神川君の表情から脈ありと見た弘美が、ずいっと迫る。

無理強いしてはいけない、と思ったが、わたしも神川君と同じ部員になりたかったので、期待を込めた眼差しを向けた。

現在の美術部は酷く荒んでいて、真つ当な活動なんてできない状態にある。

神川君の入部がきっかけになって不協和音が改善されればいいのだけど……。

そうそう上手くはいかないだろう。

「そうだね。それなら明日の放課後にでも美術室を訪問してみよう」
「やったねっ！ その時は、あたしが案内するよ。いいよね、保奈美？」

「ええ」

わたしは即座に頷いた。
確認されるまでもない。

もし同行を拒否されても、一緒について行くつもりだ。

だから、つい顔を綻ばせてしまった。

弘美などは全身を用いて喜びを表現している。

そんなわたしたちの様子を見て、神川君が再びくすくすと笑った。

「明日、美術部の活動があるの？」

「……………」

そんな予定はなかった。

【5・藤森保奈美】

転校生効果によって多少ごたごたした感のある放課後だったけど、わたしは何とか騒ぎの中から神川君を連れ出して帰路についた。

鈴原先生が彼の面倒見をわたしに一任してくれたから、クラスメイトの女の子たちも表立って文句を言えない。

弘美も意外にあっさりと帰っていった。

まあ、あの子が急いで帰った理由は、複雑な家庭の事情にあるのだけ……。

偶然にも学校の帰り道が同じだったので、わたしと神川君は自然な流れで一緒に帰ることになった。

神川君は何も言わずに歩調を合わせてくれている。そんな些細な気遣いが嬉しい。うきうきの恋人気分。ここで会話が弾めば、更に気分は盛り上がるのだろうけど、どんな話題を振ればお互いの心の距離を縮められるのかわからなかったので、黙ったまま通学路を歩いている状態だ。

ちよつとだけ気まずい。

それでも二人で肩を並べて歩いていると、十分に甘やかな満足感を得られた。

「ねえ、神川君」

学校と我が家のちょうど中間地点に位置する公園までの道程では殆ど会話がなかったので、適当な話題を見繕い、勇気を振り絞って話し掛けてみた。

「何かな？」

神川君が斜めの微笑をこっちに向けた。

「訊いてもいい？」

「内容にもよるけど、質問する分には構わないよ。それに答えるこ

とができるかどうかは、質問を聞いてから判断するから」

「昼間の件だよ。本当にいいの？」

「ああ、部活動についてだね？ 美術部に入部しようと思っているよ。基本的に、僕には部活動を真剣に取り組む意志などない。ある理由から、《近々騒動が起きる可能性のある部》に入部したいんだけど、各部の内情を探っている暇はない。あの最悪の鬼畜男が転入してくるのを待って、部を選択するわけにもいかないだろうし……」

またもや神川君は視線を足下に落とし、口調に負の感情を混入させて呟いた。

お昼休みの時も同様に思ったけど、《最悪の鬼畜男》とは、わたしが始業式の日に出会った和泉真悟のことなのではないか、と思うのだ。もし彼をそんな風に酷い蔑称で呼んでいるのなら、わたしは神川君を軽蔑してしまうかもしれない。

だから、それを確かめたいのだけど……。

「その鬼畜男って何のこと？」

控え目に訊いてみた。

「いや、気にしないで。君には関係ないことだし、もし関係してしまつと君は……」

俯いたまま唇を噛む神川君。

他人には話せない、何か深刻な理由があるようだ。

そんな反応を見せられたら、さすがに突っ込んで訊く勇氣はない。わたしは部活動の話題に戻す。

「美術に興味はないの？」

「皆無というわけではないよ。しかし、美術以上に、部に在籍する人間の方に興味がある。昼休みの時に君が話してくれた人間は、実に興味深かつたよ。君を含めてね」

「えっ？」

神川君の言葉に吃驚して、わたしは目を見開いた。

心臓がどくと跳ねる。急に顔が熱く火照る。それを自覚した。

神川君が立ち止まった。

わたしも足を止めた。

「実際のところ、今の僕は美術部など興味の外だ。昼休みの時は和久井さんの存在が障害となっていたから直接的表現を控えたけど、こうして君と二人きりになったからには、素直に話を切り出そうと思う」

「えっ、ええっ？」

神川君に真正面から熱い眼差しを向けられ、わたしは軽くない立ち眩みを覚えた。

まさか、今この場で、わたしに告白しようとしてる？

そうでなくても、このただならぬ重い空気、先の読めない展開は精神的に辛い。

甘美な苦痛。

これって青春？

それとも……。

神川君はしばらくの間、完熟トマトのように赤く色付いているであろうわたしの顔を見つめていたが、急に何も言わず歩行を再開した。

慌てて後を追いかける。

何よ、もう！

思わせぶりな態度は止めて欲しいな！

わたしのこと、からかって面白がつてるんじゃないでしょうね！
内心に隠されている本性が叫ぶ。

「怒ったかい？」

神川君が斜めの笑みを深めて訊いてきた。

「えっ、怒るなんて、わたし……」

「君は素直に感情を表現することができないようだね。その原因は和久井さんにある。そうではないかな？」

「それは……」

「君は、実際には感情的な人間なのに、周囲の反応を憚って自分自身を押し殺している。そうではないかな？」

わたしは口ごもった。

心の中を見透かされたような感じ。

背筋を不思議な感覚が駆け抜ける。内面を知られても不愉快ではない。むしろ嬉しい。誰も気付いてくれなかったことなのに、出会って間もない神川君がわたしという人間を理解してくれている。

何だか感動している自分が可笑しい。

でも、自分が勝ち気でお転婆な女の子であることを肯定するのは抵抗があった。

「答えられないかい？」

「……………」

「ふふっ」

神川君はそれ以上、わたしの性格について意見を述べなかった。

しかし、それ以上に危険な提案をしてきた。

「今から、君の家を訪問しようと思うけど、構わないかな？」

「へ？」

いきなりの申し出に、上手く返事ができなかった。

心身が状況と一致してくれない。

表情と動作がバラバラだ。

「な、なな……な、何を言ってるの？ ふ、ふざけてるの？ それとも、か、からかっているの？」

「僕は真面目に申し出ているよ。君の家を訪問しなくては、僕にとつて大変なマイナス要因となるだろう。もし拒絶された場合は、無理強いできないけどね」

「で、でも……。そ、そういうことは、もっとお互いのことをよく知って、信頼を深め合ってからじゃないと……。わ、わたしは身持ちの堅い女だから……。だから……」

しどろもどろ。

パニックに陥っている。

それを自覚しながらも、思考が崩壊している為に、混乱状態から回復することはできなかった。

神川君は一瞬大きく目を見開き、こつちを可笑しそうに見たが、それを苦笑に切り替えて、一度視線を外した。

そして、また歩くのを止めてこつちを見た。

わたしも立ち止まった。

ずっと、手が伸びてきて、わたしの肩に掛かる。

びくつと体が震えてしまった。

「何もしないよ。僕は《あいつ》とは違う。強引な愛情表現はしないし、君の嫌がることは絶対に何もしないと誓う。だから、怯えな
いで欲しい」

神川君は、わたしを抱き締めるように身を寄せて囁いた。

目の前には、転校生の端正な顔。斜めに歪んでいる薄い唇。闇を溶かして染め上げたような瞳。

十五センチ近づけば、お互いの唇が接触する距離だ。

「……………」

「……………」

二人の距離はそれ以上縮まらなかった。

わたしが拒んだからでなく、神川君にキスする意思がなかったからだ。

「ふうつ……。からかうのはこれくらいにしておこう。度が過ぎると、君に嫌われてしまいかねないからね」

手が離れていく。

「えっ？　ちょ……ええっ？」

わけがわからずに立ち尽くすわたし。

「ははは！　本当に君は可愛いな。改めてそう気付かされたよ。だからこそ、もし《あいつ》が君を狙っても、もう絶対に、今度こそ、僕は負けない。それを誓おう」

「えっ…………えつと…………？」

「僕が君を守る」

神川君は恐ろしいほどに真剣な表情を浮かべ、硬い口調で言い放った。

意味不明である。

でも、何だか嬉しかった。

「あの……えーっと……話がよく見えないんだけど……それって？」
台詞の解説を求めたかったが、神川君は表情を戻して話題も戻してしまった。

「君の家で、今日までの授業のノートを写させて欲しいんだよ。ただそれだけだ。君の想像しているような狼藉を働いたりはしない。それをここで約束しておこう」

「あ！ 授業のノート！」

言われて神川君の目的に気付き、わたしは手を打ち合わせた。それと同時に、脳天へと突き上がる恥ずかしさ。

自分の愚かさ、察しの悪さに、情けなさが込み上げてきた。

「ごめんなさい、神川君。わたし、物凄い勘違いをして……。そうだね。ノート、写さなきゃならないよね。うん、いいよ。わたしの家に寄って行って」

「ありがとう」

神川君はにっこりと微笑んだ。

初めて斜めの笑みではなく顔全体を用いた笑顔を、わたしだけに見せてくれた。

特別待遇？

言い知れぬ喜びがせり上がってくる。

わたしも極上の笑顔で応えた。

【6・藤森保奈美】

わたしは生まれて初めて、男の子を連れて帰宅した。

「たっだいまー！」

玄関で靴を脱ぎながら、キッチンに向けて元気よく叫ぶ。

「ママー！ いるんでしょ？ クラスのお友達、連れてきたから挨拶してー！」

「やはり君は面白い女の子だね」

同じく靴を脱ぎながら、神川君が感想を述べた。

きつと、家に入ってからわたしのテンションが、学校にいる時に比べて別人のように高いことを指して言っただろう。

でも、これがわたしのスタンダードな性格である。

「ママーっ？」

「はいはい、保奈美ちゃん。今行きますから、大きな声を出したりしないでね。はしたないですよ。女の子はお淑やかでなくっちゃ、格好良い男の子にモテませんよ」

キッチンのドアを開き、母親が姿を現した。そして、わたしたち二人を見るなり、手を振り合わせて、「きゃーっ」と奇声を発して飛び跳ね、小走りに近寄ってきた。

それが三十路を過ぎた主婦の素のリアクションか？

まあ、神川君は僅かに目尻を緩めただけで、呆れ返ったりしなかったから、わたしも母親を咎め立てたりしないでおくが……。

母親は、端正な顔立ちの少年にあからさまな好奇の視線を向け、にこにこ顔で来客用のスリッパを用意した。

「いらっしやい」

「お邪魔します。僕は本日から藤森さんの……いえ、保奈美さんのクラスメイトになった神川真治です」

神川君は礼儀正しく一礼した。

名前で呼ばれて、心臓がどきつと跳ねた。

苗字で呼ぶとわたしたち親子を区別できないから、そう呼んだのだろう。それは不自然じゃない。でも、男の子に名前の方を呼ばれた経験が乏しいわたしにとって、それは衝撃的なハプニングだった。「こんにちは、神川君。さあ、遠慮せずに上がって頂戴な」

「ママ、そこに立っていられたら、わたしたちが上がれないでしょう」

わたしが注意すると、母親は拳を側頭部にこつんと当てて、可愛らしく首を傾げて見せ、「てへへ」と変な声を発して舌先をちろつと覗かせた。同性から顰蹙を浴びること間違いなしの可愛い子ぶった仕種だが、小憎らしいほどによく似合っていたりする。

母親は壁に身を預けて道を空けてくれた。

その空間を通り抜けて、わたしたちは廊下を奥へと進んだ。

なぜか母親もついて来た。来ないで欲しいのに、自分が邪魔者であることを理解しているくせに、好奇心に突き動かされるまま、二階にあるわたしの部屋の前までついて来たようだ。

「お菓子とお飲物、欲しいでしょう？」

しかし、さすがの母親も、部屋の中までは踏み込んでこず、ドアの縁に寄りかかって訊いてきた。

きつと、要らない、と言っても持つてくるに違いない。

そっという人なのだ。

「うん、持つてきて」

「はい、了解しました！」

婦警さんよろしく、戯けて敬礼する母親。

恥ずかしい……。

ぱたんとドアが閉められ、軽快な足音が遠ざかっていく。

それを聞きながら、わたしは小さく溜め息を吐いた。

「面白いお母さんだね」

神川君は斜めな微笑みを崩さず、母親に対する感想を述べた。

面白い、という表現が良いのか悪いのか……。でも、悪い印象を与えたわけじゃないようだ。男の子はああいう弾け調子の年上女性

に惹かれるのだろうか。いや、惹かれたわけじゃないか……。

「ママは面白いんじゃないかって、ちよつと変な人なの。いっつもあんな調子だから困っちゃう。わたしにはお淑やかにしなさいって言うてるのに……。あつ、適当な所に座って。すぐにママがジュースとケーキを持ってきてくれると思うから」

「気を使ってくれなくてもいいんだよ」

神川君は音もなく窓際へと移動し、部屋の中央に置かれている一口テーブルに向かって胡座を掻いた。

女の子の部屋に来慣れている感じだ。居心地が悪そうな様子はない。

「あんな賑やかなお母さんがいたら、毎日が楽しいだろうね。羨ましいよ」

好評価してくれた。

わたしはいつもの癖で、制服を無意識に脱いで部屋着に着替えようとしたが、リボンを解きかけたところではつと気付き、リボンを結び直すふりをして誤魔化しつつ、神川君と向かい合う位置に腰を降ろした。そして、ベッドの上にほっぴり出してある大ぶりのクッションを膝の上に置き、抱え込むようにして座った。

「ママは天然なの。あれが普通だから、周りにいるわたしたち家族は凄く迷惑してるのよ。確かに、賑やかで楽しいし、退屈しない家庭環境だけど……度が過ぎるのが玉にキズね」

わたしは母親批判をしながら、各教科のノートを用意して、テーブルの上に並べた。

神川君は自分のノートを用意すると、物凄い速さで写し始めた。

「ノートが綺麗に纏められているから、とても写しやすいよ」

褒められて、わたしは顔を熱くした。

二人きりの空間で、お互いの体がメートルと離れておらず、しかも好意的に見ている異性が相手となれば、誰だって顔を紅潮させるだろう。

「これなら結構早く写し終えることができそうだな。それでも、二、三時間はかかってしまっただろうね」

「あつ、いいの。そんなに急がないで。わたし、今日は別に用事とかなないから、夜中までだつて神川君にお付き合ひするよ。実際問題、それを全部写すの、二、三時間じゃ無理でしょう？」

「……まあね。でも僕は、自慢ではないけど、ペンが速いんだ。ほら、もうすぐ英語のノートを写し終えてしまうよ。まだ授業が始まつて間もないから、写す範囲も少なくて済むのだろうね。これが年末とかだつたら……地獄だと思うよ」

神川君は、ちらつとこつちを向いて冗談を言った。

その際も、ノートを写す手のスピードが落ちないのだから凄い。

しかも、ただ速いだけではなく、内容を要約して綺麗に纏め上げていく。

その手際の良さには、もう感心するしかなかった。

たぶん彼は頭抜けて勉強ができるのだろう、と察せられた。

ふと気付くと、既に時計の針は六時を指していた。

あれれ、母親は何をやっているのだろう。

飲み物とお菓子を持つてくるのではなかったのか。

まさか忘れてるんじゃないでしょうね。

一度キッチンの様子を見てきた方がいいかもしれない。倒れてたら困るし……。

「神川君、わたし、ちょっとキッチンに行つてママの様子を見てくるから、そのままノートを写しててね」

「ああ、そうだね。あれから一時間近く経っているのに、一切姿を見せないのは不自然だ。心配して当然だよ。僕も一緒に行こうか？」
「ううん、いいの。神川君はノートを写してて。じゃあ、行つてくるね」

わたしはクッションを横に置いて立ち上がり、スカートの裾が捲れ上がってないかさり気なく確認してから部屋を出た。

一階まで階段を駆け下りてキッチンに入る。

母親は健在だった。

「ちよつと、ママ！ どうしたの？ お菓子と飲み物、持ってきてくれるんじゃないの？ わたしたち、ずっと待ってたんだよ。言った手前、ちゃんと来てくれないと心配するじゃないの！」

お玉片手に鼻歌混じりでお鍋の中を掻き回している母親の姿を見て、わたしは珍しく声を荒げた。

母親はそんな娘を見るなり、酷くがっかりした表情を浮かべて肩を落とし、ゆつくりと歩み寄ってきて小さく溜め息まで吐いた。

「駄目じゃないの、保奈美ちゃん。恋人さんを放ったらかしにして来ちゃ」

「恋人？」

わたしは首を傾げた。

神川君との関係を誤解されているようだ。

「ママ、神川君は恋人なんかじゃ……」

経緯を説明しようとするが、母親は聞く耳を持たず、わたしの肩に手を乗せて顔を覗き込んできた。

稀に見る真剣な顔だ。そして、心配げな表情でもあった。

「保奈美ちゃん、隠さなくてもいいのよ。誰だって恋人さんができたら、お家に連れて来たくなるものなんですからね。恥ずかしがらないで、お部屋でイチヤイチヤしていなさい。ママは邪魔しませんからね」

母親が年頃の娘に言う台詞じゃない。

それに、完全な誤解である。

「だから、ママ、神川君は本当に恋人じゃないの。お友達。ただのクラスメイト。それ以上の関係じゃないのよ。変な誤解しないで」
重ねて否定しておく。

母親は疑わしげに目を細めた。

「……それなら、保奈美ちゃんはどうして男の子をお家に連れ込んだのかな？　こんなこと初めてでしょう？」

「神川君は転校生なの。今日初めて会ったのよ。玄関で挨拶した時、彼がそう言ったでしょう？　覚えてない？　それで、彼とは学校の席が隣同士になったから、教科書を見せてあげてるんだけど、今日までの授業のノートを写さなきゃならないから、家に寄ってもらったのよ」

「なーんだ。ママ、がっかり……」

母親は心底落ち込んだ感じで頭を垂れた。

「ようやく保奈美ちゃんにも恋人さんができたんだ、って喜んでたのに……。ママ、残念だなあ」

「ごめんね」

変な罪悪感に苛まれ、つい謝ってしまった。

「もうっ！　保奈美ちゃんはお堅すぎる女の子なのよ！　もうちょっとだけ男の子と仲良くして欲しいと思うのよね、ママは。神川君なんて最高の美少年じゃない。この際だから、今すぐに告白しちゃうなさいよ」

「ちょ……ママ！　何言ってるのよ！」

母親の無茶な提案に、わたしは両手を左右に振って叫んだ。

「神川君とはまだ会ったばかりなんだよ。相手のこともよく知らずに告白なんて……。だいたい、この際ってどの際よ……。無茶苦茶言わないでよ、ママ」

「保奈美ちゃん、暢気に構えてちゃ駄目！　神川君みたいな美少年は、すぐに女の子たちによる所有権の争いが勃発しちゃうんだから、早いうちに唾付けとかないと」

「所有権で……。ママ、彼は物じゃないんだから……」

「んもう！　そうじゃなくって！　保奈美ちゃんは真面目さんなんだからっ！」

「真面目とかじゃなくて！」

「はいはい、保奈美ちゃん。お菓子と冷たい紅茶、持って戻りなさ

い。ここで口論していても、神川君をゲットできないわよ。さあ、早くお部屋に戻ってイチヤイチヤしてきなさい。あ、そうそう。えっちなことするなら、ちゃんとドアを閉めてね。ママは早く孫の顔が見たいなあ」

「何馬鹿なこと言ってるの、ママは！ もう……。神川君に聞かれてたらどうするのよ。恥ずかしくて顔を合わせられないじゃない」
わたしは差し出されたお盆を引いたくするように受け取った。

お盆の上には、二個のグラスとお茶菓子が乗っていた。

「カステラでいいわよね？」

「うん、いいと思うよ」

わたしはお盆を持って二階上がった。

しかし、両手でお盆を持っていたので、ドアが開けられずに自室の前で立ち往生してしまった。

ドアを開けてくれるように神川君に声を掛ければいいのだけど、なぜかその程度のことができない。でも、廊下でもたもたしていたら、部屋の内側からドアが開かれた。

「どうだった？ お母さんは大丈夫だったのかな？」

「うん、何ともなかったよ。変な心配をかけさせてごめんなさい。

あ、そうそう、神川君でカステラ好き？」

「嫌いではないよ。特別な好物とは言えないけどね」

「紅茶も大丈夫だね？」

「紅茶は好きだよ。お酒と同じくらい、日々消費している」

「お酒？」

わたしは首を傾げてみせながら、テーブル上にお盆を置いて、それぞれのグラスに紅茶を注いだ。

「神川君、お酒飲むんだ？」

「僕は……お酒なしには生きていけない人間になってしまったんだよ。その理由は話せないけどね……。今では、軽いアルコール依存症に陥っているかもしれない」

神川君はくつろいだ風に胡座を崩し、紅茶を一口含んで穏やかに

微笑んだ。

アルコール依存症という発言は冗談と受け取っておくことにした。
そして、紅茶が嫌いではなくて良かった、と思った。

第二章 無常なる世界 【1・藤森保奈美】

四月十六日、水曜日。

朝のホームルームが始まるや否や、「転校生を紹介するぞー」と鈴原先生が言った。

ざわつく教室内。

昨日のデジャヴ？

また神川君が登場したりする？

先生の冗談？

いや、そうではないようだ。

神川君はわたしの隣の席に座っている。

弘美と中嶋君が同時に何かを問い質したが、先生は手を振って黙らせ、昨日と同じ調子で戸惑う教え子たちを制した。その口振りからして、本当に転校生が廊下で待たされているらしい。

「なんで昨日の今日なのに、と不思議に思う奴もいるかもしれないが、そこはそれ、大人の事情つてもんがあつて二人目の転校生が同じクラスに入ることになった。理由は訊くなよ。天の声が先生の耳に届いちまったんだからしょうがない、と言うしかないからな。でも、不満は出ないと思うぞ。特に女子からはな。なにせ、新しいクラスメイトは、昨日の神川に優るとも劣らないアイドル以上の美少年だからな。まあ、男どもからは不満だけしか出てこないかもしれんが……ははは」

女子が一斉にどよめいた。

神川君に匹敵する美形の転校生。

まさか……今度こそ彼が？

始業式の日に出会った男の子が？

わたしの胸の内が期待で膨張する。

「殺人鬼が来たか……」

そんな呟きが隣の席から聞こえてきたけど、この時はその口調の

重苦しさ、深刻さ、苛立たしさ、憎々しさが全く気にならなかった。
「よし、入ってこい！」

鈴原先生が廊下に待たされている転校生を呼び入れた。

しんと静まり返る教室内。

わたしの喉が勝手にごくくと鳴る。

緊張の瞬間だ。

音もなく教室前方のドアがスライドした。

春風が吹き抜けるかのように、無音の美旋律が室内を彩り飾り立てていく。

まず、手が見えた。

無意識のうちに前のめりになり、胸の前で手を擦り合わせていたが、落ち着いて椅子に座っていることなどできようはずもない。

次に、学校指定の制服が見え、転校生の左足が教室内の床を踏む。それと同時に、癖のある長めの茶髪と縁のない眼鏡が見えた。

もう彼の登場を期待をする必要はなかった。

わたしにはわかったのだ。

あの髪の毛、あの眼鏡……。見紛うわけがない。

彼が入ってくる、という確信のみが心を満たし、心地よく奮わせた。

神様、ありがとう。

内心で無限回数の感謝をする。

きつと他の女子たちも、神川君の熱烈なファンを除いて、同様に感謝しているだろう。

ついに、転校生の全身が露わになった。

見間違っことのない容姿。完璧な美少年。

音もなくドアが閉められる。

彼は優雅な足取りで教壇に上がり、鈴原先生の横に並んで立った。
「よし、紹介するぞ。今日からみんなと一緒に勉強することとなっ

た和泉だ」

「和泉真悟です。宜しく」

和泉君は穏やかな微笑みを浮かべて、歯切れの良い口調で名乗った。

クラスメイトのリアクションは一切なかった。

その強烈なまでの存在感が、一言も発させなかったのだ。

神川君には申し訳ないけど、印象の強さだけではなく、あらゆる面において和泉君の方が上だった。少なくとも、わたしにはそう見えた。

「先生、ボクの席が見当たりませんが、どこになるのでしょうか？」

自己紹介の後、和泉君が昨日の神川君と同じ質問をした。

転校生は自分の席がどこなのかを気にするらしい。

ちよつと可笑しかった。

「おう、そうだったな。昨日の失敗もあって、机と椅子は用意してあったんだけど、持ってこさせるのを忘れてたぞ。あとで第二倉庫まで取りに行ってくれ。いいな、和泉」

この人、また転校生の席を用意しなかったようだ……。

鈴原先生って学習能力の低い人間なんだな、と思った。

「はい」

和泉君は、気の利かない担任教師にも朗らかな態度を崩さずに返事をした。

「和泉の席は……うーん、そうだな……。昨日の神川と同じで、しばらくの間は教科書を誰かに見せてもらう必要があるだろうから、身長の高さを考慮すると一番後ろの席が良いだろうな。だが、後ろの列はもう満員だから……。さてどうするか……」

「お気遣いありがとうございますですが、ボクの手元には既に教科書類が届いています」

「おう、そうか。それなら和泉は、藤森の後ろに席を置け。お隣さんがいなくて寂しいだろうが、前が藤森だから目の保養には事欠かないだろう。それでチャラにしてくれ。おっと、これってセクハラ

発言か？ すまん藤森。 神川と一緒に、和泉の面倒も見てやってくれ。 いいか？」

「はい、先生」

わたしは快く引き受けた。

その要請を拒否する女の子など日本に存在するわけがない。

昨日に引き続いて、願ったり叶ったりの展開だ。

どうやら、わたしは幸運の女神様に祝福されているらしい。

どこにも固定されていなかった和泉君の視線が、ゆつくりと教室の後方に向けられ、まず神川君の位置で止まった。

僅かな表情の変化。

どう変化したのかは、よくわからない。

喜んだのか、悲しんだのか、驚いたのか、嘆いたのか、不思議がったのか、彼の存在に我が目を疑ったのか……。 何にしろ、和泉君は神川真治という美少年を知っているようだった。

しかし、彼の上で視線が停滞していたのは、ほんの数秒間だけだった。

隣の席に座っているわたしの存在を認識した瞬間、和泉君は彼から視線を外し、こっちを見て微笑みを深めた。

「ちっ」

舌打ちする音を右耳が聞き取った。 たぶん神川君が発したものだろ。 でも、全く気にならなかった。 もう彼のことはどうでも良くなった。 昨日、色々なイベントが発生したけど、わたしが会いたかった男の子は、神川真治ではなくて、和泉真悟なのだ。 もし昨日、神川君と成り行きでキスしてしまっていたら、わたしは今日、物凄い後悔の念に苛まれ、自己嫌悪に陥っていただろう。

「よし、ホームルームを始めろ。 和泉、とりあえず藤森の後ろに移動しろ」

「はい」

和泉君は周囲から投げ掛けられる正と負の波動に動じた様子もな

く、また一切無視するわけでもなく、穏やかな笑みを分け隔てなく振り撒きながら、ゆつくりと後ろの席まで歩いてきた。

そして一度、わたしに頷いておいて、神川君を見下ろした。

「久しぶりだね、神川君」

「貴様と話す口など持っていない！」

噛み締めた歯の間から絞り出したかのような神川君の怒声。

思った通り、二人は知り合いだった。

しかも相当に仲が悪そうである。

「では、なぜボクを追いかけて転校してきたのかな？」

「僕は、貴様を逃がしはしない」

「逃げる？　ボクは誰からも逃げたつもりはないよ。その辺は認識の相違だね」

「ふん、何とでも言っていればいい」

「では、神川君、今後とも宜しく」

二人のやり取りを聞いていると、どうも神川君が一方的に和泉君を嫌悪している感じた。

和泉君は友好的に接しようとするが、神川君が取りつく島もなく接触を拒絶している、という構図。

ちよつと神川君にがっかりしている自分に気付いた。

和泉君は優しい微笑を浮かべたまま数秒間、旧友（旧敵？）の端正な顔を見つめていた。

見る角度をズラすと、美少年同士がお互いの美貌を認め合っている、と映らなくもない。

でも、そう受け取るには、片方の表情があまりにも陰悪すぎた。彼は何かを諦めるように瞼を閉ざし、顔をわたしの方へ向けた。そして、につこりと頬笑んだ。

「ボクの予想通り、クラスメイトになった」

「あの時、もう知ってたの？」

「いや、偶然だよ。でも、ボクの女神様は時折、特大の幸運を運ん

できてくれるんだ。たぶん一生分の運を今日この瞬間に使い切ってしまったんじゃないかな。それくらい嬉しい再会だよ」

和泉君はそう言ってわたしを歓喜の海で溺れさせ、眼鏡を外して瞳を直視することで心停止寸前まで追いやり、更に至極の笑顔で再会を祝ってくれた。

「わたしも、すっごく嬉しい……」

溢れ出る想いを言葉にできない。

「宜しくね、藤森さん」

「こちらこそ宜しく、和泉君」

まるで初対面のように挨拶を交わす。
でも、実際には二度目の挨拶だった。

【2・藤森保奈美】

お昼休み。

わたしたちは前日と同様に、屋上へと移動し、お昼ご飯を食べていた。

しかし、メンバーは一人増えて四人。

そのメンバーとは、言わずもがなの和泉君である。

最初のうちは、神川君の執拗な抵抗もあって、和泉君を仲間に入れない方向へ話が進んでいたのだけど、弘美の巧みな説得工作（全開の笑顔でお願い攻撃）によって和泉君を仲間に加えることに決定し、神川君も渋々とはあるが同行を認めたのだ。

「今日の放課後、四人で美術室に行ってみようよ。部活、やってるかもしれないよ」

弘美がジャムパンを囓りながら提案した。

そのパンは、和泉君に奢ってもらったものである。彼女は毎日お弁当を持参してきているはずなのに……。図々しいにも程があるわよ、と陰で叱りつけたけど、親友は悪びれた様子もなく神川君にジュースを奢ってもらっていた。

和泉君はわたしにもパンを勧めてくれたのだけど、今日はお弁当を持ってきていることを正直に明かしてお断りした。彼に嘘は吐きたくなかったのだ。まあ、その代わりとしてウーロン茶を奢ってもらっちゃったけど。

「美術室に何をしに行くのかな？」

昨日のやり取りを知るわけない和泉君が、穏やかな口調に僅かながらの好奇心を塗して訊いた。

弘美は新しい仲間の興味を引くことに成功して、嬉しさのあまりお尻でぴょんと跳ね、頭上で手を打ち合わせた。

「美術部の見学だよ。クラブの参加は各自の自由だけど、部活動は絶対にやらなきゃなんないからねー。美術部のホープって呼ばれて

るあたしと保奈美で、転校生の神川君と和泉君を勧誘しようってわけなんだよ」

「ほう、キミたちは二人とも美術部に所属しているのか……。なかに賑やかで楽しそうな部だね」

「それが残念ながらの正反対なのですよー。我が美術部は、哀しいかな奇人変人の集まりなんだよね。ギスギス空気全開で口喧嘩の絶えない部なんだよ。第一回目の部活で大喧嘩しちゃって、それ以降の活動は休止状態なんだよね。だから、現在、転校生的救世主の登場を期待しちゃってまーす」

向日葵のような明るい笑顔全開で美術部の悲惨な内情を元氣一杯に暴露して新しい部員を勧誘（逆効果のような気がするけど……）する弘美を、神川君は止めたそうに睨んでいた。きつと、和泉君が美術部に入るきつかけになりそうな芽を全て摘み取りたいのだろう。でも、唇をぎゅつと噛んだだけで何も言わず、何の行動も起こさなかった。余計な口を挟むことで、より彼の興味を引いてしまつかもしれないと考えたのかもしれない。しかし、その配慮は意味をなさなかった。

「奇人変人の集まりか……。面白そうな部だね。ボクが救世主になれるかどうかは疑問だけど、是非ともお供させてもらおう」

和泉君が一秒と逡巡せずに快諾すると、神川君は冷たい視線で彼を睨み、話を振った弘美を睨み、わたしへと視線を移して無理矢理に激情を抑えたような作り笑顔を浮かべた。

「僕も構わない。放課後に予定は入ってないから、どこにでも付き合うよ」

「おや、神川君、キミは美術に興味があったのかな？」

小さな驚きを笑みの端に刻んで、和泉君は真っ直ぐに神川君の目を見ながら訊いた。

それへ挑むように睨み返す神川君。

「美術部に入部する貴様に興味があるのだ」

齒軋りする奥歯の隙間から捻り出すような憎々しい声。眼光で殺

人が犯せるなら、和泉君は瞬殺されていたろう。それくらい殺意を宿した剣呑な目をしていた。

二人の過去に何があったかは知らないが、そこまで喧嘩腰にならないでもいいのに、と思った。

せめて、わたしの視界内で喧嘩するのは止めて欲しい。

「ああ、なるほど」

和泉君は至つて穏やかであり、爽やかだった。過剰な敵意を向けられても平然と受け止めている。大人な対応だ。

「ラッキー！」

拳を突き上げて喜びを表現する弘美。

「……ん？ どこにでも？ 和泉君、今、どこにでもって言った？」

「そう言ったね」

「そんなじゃ、放課後は駅前のカラオケと一緒に騒ごうよ、って誘ったら来てくれるの？」

弘美がぐーっと顔を寄せて訊いた。

大きな目が爛々と輝いている。獲物を狙う猛禽のようだ。ハンターだ。

いや、ハンターは和泉君の方で、彼女は獲物になりたいに違いない。

実際に襲われたりしたら、小ウサギみたいに慌てて逃げ出しちゃうくせに……。

でも、それは良い問題提起だ、と思った。

質問を受けた和泉君は、困惑を表情にして手の平を弘美へと向けた。

「カラオケは、ちょっと……受けかねる誘いだね」

「あうっ！ 違うの。そんな無理に行こうって誘ってるんじゃないから！」

和泉君が困っていると見るや、弘美は即座に提案を引つ込めた。いつもなら多少無理をしても強引に誘っただろうに、相手が類い希な美少年だから柔軟な対応を心掛けるつもりなのだろう。

できれば親友に対しても、その配慮を心掛けて欲しいものである。
「カラオケ以外ならおっけー？」

弘美はここが攻め時と判断したのか、顔をくつつける勢いで体を寄せ、心の距離を縮めるイベントを持ちかけようとした。

和泉君は若干微笑みから温かみを削ぎ、切れ長の目を細めて、真正面から見つめ返した。

睨まれたわけではないにしても、警告混じりの視線を向けられて弘美は怯んだ。

「ご、ごめん……。ちょーっと調子に乗っちゃったかなつ。えへへ。和泉君、そんな風に睨まないでにつこり笑つてよ」

「いいや、睨んではいけないよ。キミが調子に乗っているとも思っていない。それがキミの通常なのだろう。卑屈になって顔色を窺うよりは数段好感が持てるよ」

「そうだよねっ！」

一瞬の反省はどこへやら、弘美はすぐに持ち前の笑顔を取り戻して、和泉君に再度急接近を試みた。

「それで、どう？」

「うん、そうだね……。ボクは構わないけど、美術部の見学はしておきたいから、今日の放課後は諦めて欲しい。日を改めて誘ってくれると嬉しいな」

「そんじゃ、明日なら放課後のデート、おっけーなんだ？」

弘美は興奮のあまり顔を真っ赤かに染めながらも、しっかりと確認した。

和泉君は簡単に頷いた。

「デートという表現には若干の抵抗を感じざるを得ないけど、キミがそう望むのであればボクは構わないよ。ああ、でも、二人きりは駄目だね」

「えっ、どーして？」

不満げな声を上げる弘美。

そして、わたしの顔に人差し指を突きつけた。

「もしかして、保奈美も一緒じゃなきゃ駄目ってこと？」

「こらこら大親友よ、それは酷い言い種じゃないかな？」

抜け駆けするにも準備段階が要と思うし、本人を前にして邪魔者扱いには酷すぎるぞつ、と目で訴える。

でも、弘美はこつちを見ていなかった。

和泉君が眼鏡のフレームに指を当て、唇の両端に不思議な笑みを足した。

「藤森さんと一緒でなければキミの誘いを断る、とは言わない。別に誰が一緒であろうと構わないよ。ただ、二人きりのデートはとなると大きな問題が発生するんだ」

「問題？　どんな？」

首を傾げる弘美へ、和泉君が透明感の強い微笑みを向けた。

「ボクは、可愛い女の子と二人きりの状況に至った場合、性急な求愛行動に及ぶ性質なんだよ」

「せーきゅーなきゅーあい行動……？」

きょとんとする弘美。

意味が伝わっていないようだ。

わたしはその意味を理解した。

つまり和泉君は、女の子と二人きりになると突然餓えた狼の本性を露わにしてベッドに押し倒す、と言っているのだ。

「鬼畜が……」

忌々しげな神川君の呟き。

あれ？　そう言えば、始業式の日には彼の引越先へ案内した時は、同じ屋根の下で二人きりになったんじゃないかな？　わたし、押し倒されてませんけど……。どうしてですか？　彼の言葉が嘘ってこと？　それとも、あの日は性欲が減退していたとか？　わたしに女性としての魅力を感じなかったから、だったら嫌だなあ……。

「簡単に言えば、セックスを求めるということだね」

「……あたしとえっちしたいってこと？」

弘美は顔から湯気が立ち上りそうなくらい真っ赤になって訊いた。
答えたのは神川君だった。

「この男は、好きでもない女性と平気で肉体関係を結ぶことができる最悪の色魔なんだ。誰もが憧れるアイドル的女の子を物のように使い捨てる最低な鬼畜なのさ。違うか？ 反論したいならしてみろよ、和泉！」

「……………」

それが事実だからか、それとも根も葉もない暴言だからか、和泉君は感情のない微笑みを向けただけで何も言い返さなかった。

神川君はふんと鼻を鳴らす。

「僕の忠告に価値があると思うなら、絶対にこの鬼畜男と二人きりになろうとしてはいけないよ。絶対に、だ。しかし、もし君が肉体のみの関係を和泉真悟という美少年に望んでいるのなら止めはしない」

「そ、それは……嫌なんだよ……」

弘美は頂垂れるように下を向いた。

セックス云々は敵意から生じた出任せだとしても、和泉君が彼女に女性としての魅力を感じていないという発言は事実なのだろうか、落ち込むのも当然だろう。

言葉を失った弘美に替わって、今度はわたしが質問役を買って出た。

どうしても聞きたいことがあったのだ。

「それじゃ逆説的に言っと、和泉君は好きな女の子に対しては奥手になってしまふの？」

「それは良い質問だね、藤森さん」

和泉君は、何かを言おうと口を開きかけた神川君に果汁百パーセントのグレープフルーツジュースを手渡して黙らせておき、優しい微笑みと共に答えてくれた。

「ボクは物心ついてからこの学校に転校してくるまで、自分の側から誰かに恋愛関係を迫ったことはない。だから、好きという言葉の

解釈にもよるけど、その状況に追い込まれてみなければ、どう行動するかわからないね。ただ、性急な性行為に及んで相手との関係を壊すようなまねはしないだろう。たとえ意中の女の子を自宅に招き入れることに成功したとしてもね」

「えっ、それって……」

あの時のことを仄めかしているの？ そう訊きそうになり、慌てて言葉を飲む。

和泉君はそんなわたしを見て、くすつと小さく笑った。

どうやらからかわれたらしい。

ほんの少しむっとして、僅かに頬を膨らせてみせる。

でも、冗談だとしても嬉しかった。

すると、ジュースを飲み干した神川君が突然、縮まりつつあるわたしと和泉君の空間的距離を切り裂くように声を発した。

「僕は好きな女子の自宅に招待されても、勘違いをして性行為に及ぶ馬鹿ではない」

誰に対しての言葉か定かではなかったので、和泉君も弘美も応えなかった。

ただ昨日のこともあり、わたしは神川君の言葉の真意を計るべくじつと見据えた。

神川君が何かを訴えるような目で見つめ返してきた。

昨日はどれだけ見つめ合っても、彼に対して嫌な緊張感を覚えなかったのに、今は微細な不快感を覚えている。彼の視線を重圧と捉えている。

「あれっ、お二人さん、何だかいい感じに見つめ合っちゃってるね。なんか怪しいぞお。そう言えば、保奈美と神川君で昨日一緒に帰ったんだよね？ もしかして何か遭ったんじゃないの？ まさか自宅に連れ込んで、えっちなことしちゃったとか？ 保奈美さん、初体験な感じ？」

ダメージの回復を終えた弘美が、人差し指でわたしの二の腕を突っつきながら、いやらしい顔で訊いてきた。

完全なる誤解。

それなのに、和泉君の顔に失望に近い表情が一瞬浮かんだ。
狼狽で貧血寸前のわたし。

でも、ダウンしている場合ではない。

超速攻で弁解する。

「ち、違うのよ、弘美！ 神川君は単にノートを写しに来ただけで、えっちなことなんて何もしようとしなかったよ。それに、家にはママもいるんだし……」

「あー、そうだねー。保奈美のママがいちゃあ、えっちはできないよね。残念、保奈美」

「そうじゃなくて！」

「にやははは！ わかってるって。保奈美の顔を見れば、嘘を吐いててもたちどころに見破れちゃうんだから。何もなかったって信じてあげる」

大笑いする大親友。

神川君は苦笑している。

「……………」

わたしは無言で二人を睨むだけだ。

「でも、神川君、保奈美と何もなかったってことは、さっきの話と矛盾するじゃん。手当たり次第に可愛い女の子を食べちゃうって話、嘘なのかなっ？」

「それは和泉のことだ。僕じゃない。混同するのは止めて欲しいな」
吐き捨てるような口調で神川君は言った。

弘美はぺろつと舌を出して謝る。

「あ、そっか！ にやはは。同じ美少年だから、ごっちゃにしちゃったかな。ごめんね」

「……僕をこの鬼畜と同一視するのは、絶対に止めてくれ。絶対に、だ」

「怒っちゃった？」

「……………」

神川君は答えなかった。

弘美は気にした様子もなく和泉君を見る。

「和泉君、どう？ 神川君に酷いこと言われてたけど、あれ、本当の話？」

「さて、どうだろう。ボクの口からは何とも答えられないね。しかし、その答えはボクと肉体関係を持った女の子に聞くべきであつて、間接的にしか結果を知らされていない神川君が断言していいことではないと思うよ」

「神川君？」

純粋な目で見つめられた神川君は、血が滲み出るくらい強く唇を噛み、和泉君を強烈な眼光で突き刺した。

しかし、弘美に対しては普段の穏やかな視線と斜めな笑みを向ける。

「そうだな。確かに、僕が評価して良いことではないのかもしれない。しかし……その女の子がもしも……」

神川君は何かを言おうとして口を噤んだ。

弘美は「にははは」と高らかに笑って、神川君の肩を数回ばしと叩く。

「ああいう性質の悪いクラスメイトの評価はもうしちゃ駄目だよ。

和泉君の印象が悪くなっちゃうし、さすがのあたしもへこんじゃうもん。わかったかなっ？」

「そうだな……。肝に銘じておこう」

神川君は複雑な表情で頷いた。

それからしばらくの間、四人ともお昼ご飯を食べる行為に没頭した。

その間隙を突くようにして、こちらの様子を窺っていたクラスメイトたちが一斉に雪崩れ込んできて、美形転校生二人に何だかんだと話し掛けたけど、和泉君は殆ど発言をせずに黙々とパンを食べ続けて時折気の利いた合いの手を入れる程度であり、神川君は女の子

に質問されても完全に無視を決め込んでいた。

弘美は迷惑な思いをあからさまにして、群がり寄ってくる女生徒を追い払おうとし、横から茶々を入れたり、ふざけ調子で割り込んで話の主導権を握り、気に入らない会話を成立させないように邪魔立てしていた。

わたしは大人しく母親の用意してくれたお弁当を食べた。

そして、お昼休みが終わる数分前、わたしたち四人が教室に戻ろうとしていたところ、突如として屋上のドアが内側から乱暴に開けられ、男子生徒が姿を現した。

美術部に所属する二年生の氷室康広だった。

わたしたちはドアの真ん前にいたので、その視界から逃れる術はなかった。

「おうっ、二人とも久しぶり！ 俺のこと、覚えてるか？」

氷室はわざとらしく手を振りながら、にやにやと嫌な笑いを顔面に貼り付け、馴れ馴れしく声を掛けてきた。一瞬、和泉君と神川君の転校生二人に目を向けるが、すぐに背ける。

「忘れたいけど、下水道のヘドロみたく記憶にこべりついてて忘れられないんだよ。ね、保奈美？」

弘美が小声で囁いた。

わたしも同感である。

もう二度と関わり合いたくない男の子の一人だ。同じ美術部員でなければ、耳を塞いで逃げ出していただろう。交際をしつくこく迫られたので、苦手意識も大きい。灰汁の強い性格も嫌だ。何と云っても、弘美が毛嫌いするほどの人間である。わたしが好感を持てるわけがなかった。

「なんだ？ こそこそ話しやがって、失礼な奴だな。俺たちは同じ部に所属する仲間だろ？ 内緒話はなしにしようぜ」

「仲間なんかじゃないですよお！」

堪らずという感じで弘美が叫んだ。

「おいおい、照れるなよ、和久井」

「照れてません！ 真剣に嫌がっているんですっ！」

「へっ、ギャーギャーうるせえ女だ」

氷室は唇をひん曲げて吐き捨てた。

自分の発言が、ことごとく相手を嫌悪させる効果しか発揮していない現実によく気付いていない。特異なキャラを改めようという意思がゼロだ。へたをすると、自分が格好良い男だと勘違いしている可能性もある。どうしようもないくらい回避不能な馬鹿者だ。

「彼は誰かな？ 可愛い女の子たちに向かって随分と失礼な暴言を吐いてくれているけど、キミたちの友達なのかな？」

和泉君がすつと立ち上がって、わたしたちと氷室の間に立ちはだかった。

表情は穏やかに微笑んだまま一切変化させなかったが、周辺の空気を凝固させるオーラが放たれた。

「何だ、てめーは！」

威嚇する氷室。

「ボクは一年A組の和泉真悟です」

「ああ？ 一年だと？ 一年の分際で俺にふざけた口を叩いてんのか？」

「質問しているのはボクの方です。しかも、貴方にはありません。和久井さんと藤森さんに対してです。返答を得るまで、その汚らしい口を閉じていて下さい」

「はあ？ 何だ、てめえ！ 俺に喧嘩売ってんのか？」

「いえ。ボクは喧嘩など望んでいません。単に貴方が喧しいので、口を閉じていろ、と言っているのです。しかし、貴方は爪の先ほどの寛容さも持ち合わせていない乱暴者のようで、ボクの声は心に響かなかったようですね。残念ですよ」

和泉君は小さく溜め息を吐き、わたしたちに向けて肩を竦めた。

完全に氷室を小馬鹿にしていた。

どう見ても喧嘩を買っている。

いや、売り返している。

屋上にいる全員がそう思っただろう。

無論、氷室の認識も同様だろう。

まさに一触即発の状況だ。

これほど和泉君が攻撃的な性格の持ち主だったなんて、外見からは想像できなかった。

「てめーっ！ この野郎！」

血の気が多くて喧嘩っ早い氷室は、言い返されてから一秒と我慢せず、校内での暴力行為に対する代償について考慮せず、激情の赴くままに拳を振り上げて、和泉君に殴りかかった。

身長は和泉君の方が数センチ高く、手足も長い。だから、喧嘩をして負けるとは思えないけれど……。せっかく和泉君と一緒にクラスになって薔薇色の高校生活がスタートすると思ったのに、いきなりトラブルですか？

このままでは、勝っても負けても彼は転校初日から校内暴力によって職員室に呼び出され、悪くすれば停学になりかねない。

そんなの嫌だ。

とにかく喧嘩を止めなきゃ、と思い、わたしは二人の間に割って入ろうとした。

けれど、肩を掴まれて止められた。

止めたのは神川君だった。

「和泉は大丈夫だ」

そんなことを言う。

「あの鬼畜は化け物並みの戦闘能力を持っているから、たかが喧嘩自慢の高校生を相手に殴り合いなどしない。いや、掴み合いにすらならない。もし奴が害意をいいたら、氷室という人は既に意識を失っている」

神川君は皮肉っぽい笑みを浮かべて和泉君を貶しながらも、大騒動に発展しないことを保証した。

それが本当のことだとしても、やっぱり止めなければならぬ。わたしの性格上、突っ立って傍観しているなんて無理だ。

そう思ったのだけど、止める間はなかった。

氷室の大きな拳が、ぶんと勢い良く振り下ろされた。鼻面に狙いを定めた攻撃は、彼が喧嘩慣れしていることを感じさせた。鼻を潰して一撃必殺。格好良く和泉君にKO勝ちして、自分の存在感を誇示しようとしているのかもしれない。

ああ、和泉君が殴られちゃう！

神川君を除く、誰もがそう思った。

和泉君は殆ど動かなかった。

見ている者には、あえて攻撃を食らおうとしているようにさえ映った。

だけど、実際には彼は動いていた。

いや、反撃もしていた。

氷室が右足を踏み出したのと同時に、その上に左足を踏み出し、足の甲を踏んで下半身の動きを殺し、拳を回避しつつ間合いをゼロにして、喉を鷲掴みにしたのである。

瞬く間の出来事だったので、全ての動きを目視できたわけではなかったが、結果として彼が勝ったのはわかった。それだけわかれば十分だった。

「ぐうっ……て、てめええ……」

喉を掴まれた氷室は、苦しそうに呻きながらも体を捻って拘束から逃れようと藻掻いたが、相当な握力で首を握り締められているらしく、逃れ出ることはできなかった。

「……っ。静かにして下さい。あと、暴力も控えて下さい。ボクは基本的に平和主義者なのですが、振り下ろされる拳を甘んじて受けるような無抵抗主義者ではありません。それに、貴方に反撃をしない約束も交わしていません。攻撃された場合は、数倍にして反撃をする。攻撃を察知した場合は、事前に敵の息の根を止める。それが、ボクの主義です。理解できましたか？」

「……ぐっ！」

「理解し、もう暴力を振るわず、可愛い女の子に対して不用意な暴

言を吐かないと約束するのであれば、即座に解放しましょう」

「わか……った……」

がくがくと首を縦に振って、氷室は了解を示した。

「ご理解いただきありがとうございます」

和泉君は手を離し、一步身を退けた。

自由を取り戻した氷室は、背中を丸めて苦しそうに咳き込んだ。

そして、涙目で眼鏡の美少年を睨み付けたが、その眼光には鋭さよりも戸惑いが込められていた。

まさか反撃を受け、尚かつ敗北するとは思ってもみなかったのだろつ。

「てめえ、何か格闘技をやってやがるな？」

「ボクがですか？ いいえ、何も。しかし、今まで戦闘行為において敗北を喫したことは一度としてありません」

「てめえ、おかしな奴だな……」

「それは血の気の多い男子生徒によく言われる台詞です」

「けっ！ わかったよ。今日のところは潔く退散してやらあ！」

氷室は荒っぽい動作でコンクリートの床を蹴りつけ、忌々しそうに吐き捨てた。

しかし、和泉君は首を左右に振った。

「退散する必要はありませんよ。ボクは別に貴方を追いつ返したいわけではありません。ただ、貴方が何者なのかを知りたいだけなのです。現在、その答えを待っています」

「……………」

「え、えっと……和泉君、その人は美術部の先輩の氷室さんだよ」

それまで呆然としていた弘美が、息を吹き返して教えた。

「二年の氷室康広だ」

氷室は、むすつとしたまま自己紹介した。

「ああ、なるほど。彼女たちとの関係を理解しました。同じ美術部員ですか。奇遇ですね。ボクは美術部に入部を希望する者です。本日放課後、部の活動様子を見学させていただこうかと思っています

す。その際は何とぞ宜しくお願いします」

礼儀正しく頭を下げる和泉君。

氷室は鋭く舌打ちした。

「入部希望者だと？ マジか、藤森？」

「はい。和泉君とこっちにいる神川君は昨日今日に転校してきたばかりですから、まだどの部にも所属してないんです」

わたしが手で指し示すと、神川君は特有の笑みを見せて軽く会釈した。

「神川真治です。僕も美術部への入部を希望する者です」

「けっ！ 見てくれのいい転校生が二人も入部希望かよ！ 気分悪いぜ！」

「美術部って存続の危機にあるでしょ？ だから、あたしたちが美術部を力一杯斡旋したんですよ。偉いでしょ？」

得意げに言う弘美。

「けっ！ こんな乱暴者を入部させるのは、俺としちゃ反対だぞ。そっちのムカツク薄ら笑いを浮かべてる奴もだ。面を見てるだけで気分が悪くなる。だが、あの部長様は二人の入部を大歓迎するだろうぜ。美男美女同士、さぞ仲良くなれるってもんさ」

氷室は片方の唇を歪め、皮肉っぽく吐き捨て、くるりと踵を返した。

「どうせ俺は部活なんかには参加しねえからよ。誰が入部しようが知ったこっちゃねえんだよ。あの糞真面目な部長様と陰険大王の副部長様の相手なんかしてたら、五秒で気が狂っちゃうぜ。そこそこをよーく気い付けろよ、転校生ども！」

そう言い残して氷室は去っていった。

屋上のドアがボタンと閉まり、緊張を孕んでいた空気が一気に和らいだ。

その直後、授業開始のチャイムが鳴り始めた。

「やばっ！ 次の授業、始まっちゃったよ！ 急いで教室に戻らな

きや！」

弘美が小鳥みたいに両手をバタバタさせて、大声を上げた。

わたしたちは駆け足で屋上を飛び出し、一目散に教室を目指した。

「和泉君で、もしかして喧嘩っ早い？」

走りながら訊いてみた。

「いや、ボクは自他共に認める平和主義者だよ。いや、《完全平和主義者》と言うべきかな。争いを生み出さず、争いを傍観せず、争いを長引かせない。できるだけ早く争いの芽を摘み、争いが起きたとしても最小限の犠牲で強制鎮圧する。積極的防衛行為だね。ボクは、ボクの守りたい世界の平和を全力で維持する。その為には無慈悲に暴力を振るうことも厭わない」

「それって、平和主義って言えるの？」

「言えないね」

にっこりと頬笑む和泉君。

わたしは可笑しくなり、走りながらくすつと笑ってしまった。

積極的防衛行為などという怪しい単語も新鮮で面白かった。

氷室との喧嘩沙汰には驚いたけど、過剰な暴力を振るったわけではないので、和泉君を責める気持ちはない。非は全面的に氷室にあるのだ。

教室に着いた時にはもう既に授業が始まっていて、担当教師に渋い顔で迎えられた。

でも、「和泉君が校舎内で迷ったので捜して遅れました」という見え見えの嘘（弘美が咄嗟に口走った）でなんとか誤魔化した。いや、誤魔化せなかったのだけど、さして咎められなかった。

きっと、わたしたちの日頃の行いの良さと、つい微笑み返してしまっ弘美の愛嬌たっぷりの笑顔によって許されたのだろう。

神川君は無言で一礼して謝意を示し、自分の席に腰掛けた。

和泉君は何も言い訳をしなかった。

「申し訳ありません」

そう言っ て頭を下げただけである。

そういう素直さが好印象を増させる要因なのだろうな、と思った

【3・藤森保奈美】

放課後、わたしと弘美は、和泉君と神川君の二人を伴って、美術室へと向かった。

美術室は六階建ての校舎の最上階に位置しているので、一年A組の教室から移動するには六階分の階段を丸々上がっていかなければならない。

弘美は「一年生に対する不当な差別だ」と嘆いているが、教室が一階に位置しているのだから仕方がない。

だいたい、お昼休みの際には嬉々として屋上まで駆け上がっているのだから、教室移動で文句を零すのはおかしいと思う。

そこまで疲れてはいなくせにヒーヒーと大袈裟な悲鳴を発する弘美の背中を押してやりながら、なんとか最上階まで移動した。

六階には、美術室の他にも音楽室や視聴覚室があり、それぞれの準備室も合わせると、大小六つの部屋が並んでいる。美術室は、廊下の一番奥に位置する音楽室の手前なので、階段から遠く、トイレからも離れているので少し不便だ。特に、視聴覚室を使用している軽音楽部の生徒は、素行の悪さで有名であり、あまり廊下を行き来して変なちょっかいを出されたくないから、トイレの利用に二の足を踏む場合がある。それは、美術部とブラスバンド部の部員全員が共有する悩みだった。

しかし、今日はどの教室からも人の気配がしなかった。いつも隣町まで聞こえるくらい大騒ぎしている軽音楽部や、窓を全開にして不協和音を奏でているブラスバンド部は活動していないようだ。廃部になったという話は耳にしていけないので、今日は両部ともお休みなのだろう。

好都合である。

わたしたちはトイレと視聴覚室を横切り、美術室へ向かった。

美術室の前に二人の生徒が立っていた。

「あの二人は美術部の部員かい？」

神川君が尋ねてきた。

「女の人は美術部部長の浅宮雪乃さんで、男の人は副部長の宮地優さんよ」

わたしは小声で教えた。

大きな声を出すのが憚られる雰囲気だったのだ。

普段は物静かな二人が激しい調子で口論している……。

「どうしちゃったのかな？ あの子、相性は悪かったけど、喧嘩なんかする感じじゃなかったのになあ。宮地副部長は確か、浅宮部長のこと好きだったんだよね？」

弘美が心配そうに……ではなく、先輩二人の激しいやり取りを面白がるような口調で言った。

「もしかして、副部長、告白したけどあっさり振られちゃったから、逆ギレして婦女暴行犯に転身？」

「忍耐の限度を超えると、過剰な愛情は計り知れない憎しみに転換されてしまうものだからね。その思い入れが強ければ、それだけ反転する勢いも強くなり、相手にぶつけられる劣情も増す。しかし、女性に対しての暴力行為は、どのような理由があるにしろ最悪だ」

もっともらしい台詞を神川君が冷静な口調で述べたが、そんな平然とした顔で見守っている場合じゃないと思う。

「キミの言う最悪の光景が始まるうとしているね」

和泉君が言うや否や、宮地は低い唸り声を発して浅宮部長に飛びかかるうと身構えた。

「彼は凶器を所持しているようだね」

一転して、和泉君が声に緊張感を孕ませた。表情は穏やかであり、微笑みすら浮かべていたけど、目つきは尋常でなく険しい。

わたしは目を細めて先輩二人の様子を確認した。確かに、宮地優はその手に刃物のような物を持っていた。

あれは……肉切り包丁だ。
なぜ学校に肉切り包丁を？

何の目的で？

それは、浅宮部長を威嚇する為か、刺殺する為だろう。それ以外に理由が思い浮かばなかった。

「止めに入る前に一応確認しておくけど、あれは美術部特有の挨拶ではないよね？」

和泉君は刃物の存在を確認していて、その上で洒落にならない冗談を口走った。

瞬間、カツと頭に血が上り、「そんなわけないでしょ！」と怒鳴りつけてしまいそうになった。

しかし、和泉君を睨むと、異常なまでに真剣な表情をしていたので、驚かされた。彼は冗談など言っているつもりはないのだ、とわかった。本気で、その可能性を気にしたらしい。わたしの常識では理解できないけど、彼の中では非常識な発想ではなかったようだ。
「ど、どうしよう……」

和久井弘美は、いざという時には全然頼りにならない子である。

おたおたしながら、和泉君と神川君の顔を見比べるだけだ。

「和久井さんは職員室へ行って誰でもいいから先生を呼んできてくれ！」

神川君が指示を出した。

「え。でも……部長が……」

「君は、僕や藤森さんよりも足が速いだろう？ さあ、急いで！」

おろおろもたもたする弘美に、神川君は強い口調で促した。

弘美は一瞬びくつと肩を震わせてから、誰かに突き飛ばされたような加速をつけて駆け出した。彼女は持久力ゼロだけど、とても足が速いのだ。

なぜ神川君は弘美の足の速さを知っていたのだろう、という疑問をいだが、それは一瞬の煌めきであり、すぐ跡形もなく消えてしまった。

今は、目の前の修羅場を何とか穏便に済ませなくてはならない。

「和泉、何をしている！ 傍観は貴様の生き方に反する愚考ではないのか？ さつさと彼女を助けるんだ！」

神川君が鋭い囁き声を発した。

和泉君は朗らかな笑みを湛えたまま小さく頷き、わたしたちに向けて人差し指を立てて静かにするように促し、滑るような足取りで二人に近づいていった。

彼は気配を消して歩く術を身につけているようだ。

でも、わたしにそんな技術はない。

だから、勝手に彼の後を追いつ、無意味に自己主張した挙げ句、神川君に注意を促された途端見つかってしまった。

「な、何だおまえらあ！ こっちに来るなあつ！ いい今、大切な話の真つ最中なんだぞおおおおお！」

喚き散らす副部長。

顔面は汗でべとべとで、目は不気味に血走り、体全体をぶるぶると震わせている。

「うをらあ！ あつち行けえ！ どっか行つちまってくれえ！ 殺すぞらあ！ りゃあ！ ぶち殺すぞおつ！ ぼ、僕は浅宮部長としよ、しよ、将来についての大切な話をし、し、しなくちゃなんないんだああ！ じゃ、邪魔をす、すすするなあつ！」

包丁を振り回して喚き散らす副部長。

以前から陰気で気持ちの悪い男だったけど、前から陰湿で気色の悪い男だと思っていたけど、ここまで不気味で頭のおかしい人物ではなかったと思う。

何が副部長をこうも暴走させてしまったのだろうか。

部長への恋心が原因？

歪んだ愛情表現？

どう考えても逆効果でしかないのに……なぜ包丁を突きつけるのだろう。

わたしには彼の行動が理解できなかった。

完全に正気を失っている宮地に、和泉君はゆっくりとした足取りで平然と、悠然と歩み寄っていく。

「な、何なんだあ、君はああ？　ぼぼ、ぼ、僕を誰だと思ってるんだああ？　ぼ、ぼ、ぼぼ僕はび、び、びっ美術ぶっ部ふ、ふっ副部長のおお……　おおわあああっこつちに来るんじゃないっ！」

宮地優は肉切り包丁を浅宮部長の眼前で振り回して威嚇し、和泉君の接近を躊躇させようと試みた。

しかし、和泉君は意に介さず、浅宮さんが傷つけられるかもしれないのに警告を一切無視し、二人に一步一步近づいていく。

「ほ、ほんとに、本当に殺しちゃうぞ！　刺しちゃうぞおっ！　いいのかあっ？」

「貴方にできるのならば、構いませんよ」
涼やかな声音で告げる和泉君。

宮地は何も聞こえていないようだ。きっともう誰の言葉も耳に入らないのだろう。必死の形相で包丁を振りかぶる。

「邪魔すんなあああああ！」

聞くに耐えない金切り声と共に、和泉君に向けて包丁が振り下ろされた。

ドン、という鈍い打撃音。

宮地優が吹っ飛んだ。

彼はボウリングの玉のように廊下を滑っていき、音楽室のドアに激突した。

バキッ、バリッ。

破砕音と共にドアが壊れて外れた。

全てが瞬く間に起こったので、和泉君が何をしたのかはわからなかった。

殴ったわけではなく、蹴ったのではなく、突き飛ばしてもいない。ただ単に、首の辺りを手刀で叩き、胸の中央を軽く押しただけに見えた。

宮地優は音楽室の入り口で倒れ伏したまま、ぴくりとも動かない。

でも、死んではないと思う。
きつと気絶しているのだろう。

「浅宮さん、大丈夫ですか？」

和泉君は穏やかに気遣いの声を掛けた。

危険人物と格闘した後なのに、息一つ乱さず、汗一滴流さず、優しげな微笑みを保っている。倒した相手のことなど全くの無関心。宮地が起き上がって反撃してくる可能性を考慮していない。それだけ自分の格闘能力に自信を持っているのだろうし、確実に気絶させたという手応えを得たのだらう。

「え、ええ……貴方は？」

浅宮部長はまだ恐怖によって体をガタガタと震わせていたけど、和泉君に手を差し出されると、その腕に取りすがって立ち上がった。足に力が入らないのか、かくんと膝を折って座り込みそうになるが、彼に腰を抱えられてなんとか直立姿勢を維持する。

和泉君に抱き締められている……ズルイ！とは思わないけど、ちよつとだけ妬ましさを感じた。

「ボクは一年A組の和泉真悟です」

「和泉……君？」

和泉君の腕にしっかりと両手を絡めてぎゅっと抱きつき、浅宮部長は救い主を見つめた。

「はい」

和泉君は淡い微笑みを向ける。

「大丈夫ですか？ どこも怪我をしていませんか？」

「ええ、どこも……平気よ」

「一人で立てますか？」

「……いえ、ごめんなさい。脚が……腰にも力が入らなくて……」
浅宮部長は手を離して自力で立とうと試みたが、ふらつとよろめいてしゃがみ込みそうになった。

和泉君が抱き寄せるように立たせると、今度は腕ではなく、彼の

腰に手を回してしっかりと抱きつき、頭を胸に擦り付けた。

「無理はしないで下さい」

「ええ……」

なんか、浅宮部長……、うつとりしてませんか？

まさか、和泉君の類い希な格好良さに気付いて、わざと立てないふりをしてるんじゃない……。

いやいや、そんなわけない。

暴漢に襲われてショックを受けているだけだ。

災い転じて福となせ、とばかりに恋人よろしく抱きついて、幸せ気分浸っているわけじゃない……と思う。

そんな浅ましい想像を働かせていると、和泉君が「こっちに来て欲しい」と目で無言の合図を送ってきた。

なぜ声に出さないのだろう。

ちよっとした奇立ち。

しかし、わたしと神川君は求められるままに音楽室の前へと駆け寄った。

カツツと何かが足に当たった。

何だろうと思ひ足下を見ると、少し錆の付いた肉切り包丁が転がっているではないか。

宮地優の持っていた凶器だ、と気付き、思わず拾い上げようと手を伸ばした。

「触らないで、藤森さん！」

神川君に鋭く注意された。

触れる寸前で慌てて手を引っ込める。

「なぜ触っちゃ駄目なの？ 廊下に置きっぱなしじゃ危ないでしょう？」

そう自分の意見を述べてみると、神川君は斜めな唇の角度を強めた。

「その凶器は、脅迫と傷害未遂の証拠になるんだよ。だから、宮地以外の指紋をいたずらに付着させるのは良くない。凶器はそのまま

残して、君は浅宮さんを保健室に連れて行って欲しい。本来は僕が和泉が抱き上げて連れていくべきなのだろうが、僕たちはこの場に残って、宮地の監視をしながら、先生の到着を待つ必要があるからね」

「頼めるかな？」

抱き合う二人から目を離せずにいたわたしは、波打つ感情のままに拒否したい衝動に駆られたけど、神川君と和泉君の二人にお願いされては頷かざるを得ず、嫌だったけどその思いを押し殺して応じた。

「うん」

わたしは和泉君と交替して、浅宮部長に肩を貸した。脇の下に体を差し込んで腰に手を回し、担ぎ上げる要領で彼女の不安定な体を支える。言葉にはできないけど、ちよつと重い……。これって、かなりの重労働だ。三分で弱音を吐いてしまいそうである。それでも、しっかりと踏ん張って、のろのろと階段側へ歩き始めた。

「藤森さん、ごめんなさいね……。私、重いでしょう？ きつと貴女より五キロ以上太っていると思うわ」

浅宮部長はわたしに寄りかかって歩きながら、自虐的な台詞を述べた。

酷く苦々しい顔をしている。

「あの……。宮地副部長って、どうしちゃったんですか？ 少し変な人だとは思ってたけど、包丁を振り回して怒鳴り散らすような乱暴者じゃなかったと思います」

「さあ……。わからないわ。今日いきなり、好きだから付き合ってくれ、って言われて……。私がお断りしたら、突然包丁を突きつけられて……」

「宮地副部長と仲良かったんですか？」

そんな噂など露ほども聞いたことないが、人目を憚りながらこっそりと仲良くしていた可能性もあり得る。

「そんなわけないでしょう？ あんな根暗男なんかと親しくするこ

とで、私にどんな利があるというの？ 同じ部員として接する分には我慢できる男だけど、それ以上の関係……友達や恋人にするのは精神的にも肉体的にも無理よ。変な勘違いをされては甚だ迷惑だわ。貴女だって、あの男との関係を邪推させたら腹を立ててしまうでしょう？」

「はい……すみません」

そんな恐ろしいこと、想像するだけで鳥肌ものだった。

階段の手前まで一緒に移動したところで、浅宮部長は手を離れた。「ありがとう、藤森さん。もう一人で歩けそうだから、支えてくれなくてもいいわよ」

「階段で転んだりしたら危ないですよ」

そう言ったけど、解放されて正直ホッとした。わたしは力自慢ではないのだ。

わたしたちは一階に位置する保健室へと向かって階段を下り始めた。

部長は階段の手摺りに掴まりながらの移動だったので、転倒しなしか見ていてハラハラしたが、無事に一階まで辿り着くことができた。

保健室は階段のすぐ隣だ。

放課後ということもあり、保健室には誰もいなかったけど、勝手に入って部長をベッドに座らせた。

「はあ……、大変なことになってしまったわね……。この件が明るみに出ること、美術部が廃部にならなければいいのだけど……」

浅宮部長は深い溜め息と共に呟いた。

その可能性は考えないわけにはいかない。でも、わたしもそう思います、と同意して雰囲気が悪くしてしまうのがないので、元気づける為にも否定することにした。

「心配ありませんよ。副部長は停学処分かもしれないけど、美術部

はなくならないと思います。わたしたちに責任なんてありませんから。今回の件は、宮地副部長が突然おかしくなった所為です」

「しかし、これは否定しようのない暴力事件よ。まして、校内に刃物を持ち込んで、部活の時間内に振り回したんだもの。言い訳のしようがないわ。単なる部員同士の喧嘩として処理されるとは思えない……」

「そんな悲観的に考えないで下さい。きっと剣崎先生が上手く取り計らってくれますよ。私の言葉なんかじゃ頼りないし、説得力ないかもしれませんが、剣崎先生なら頼りになると思いますから、心配しないで下さい」

「そう……そうね。剣崎先生なら何とかしてくれるかもしれないわね」

浅宮部長は微かな笑みを口許に宿した。

剣崎先生とは、浅宮部長のクラスである三年A組の担任教師であり、同時に美術部の顧問でもある。名前は、剣崎貴明。優男的な外見を持ち、その上で授業が面白いと評判なので、校内でも女生徒に人気が高い教師の一人だ。でも、ちょっと浮ついた性格であり、わたしが入部した際に冗談ぽく「大人の交際をしよう」と言ってきたので、わたしの中では好印象、高評価ではない。

突然、がらりとドアが開き、保健室に誰かが駆け込んできた。

ノックや入室許可の声がなかったので、驚きのあまり体をびくつかせてしまった。

ドアを開けて入ってきたのは、わたしのクラス担任の鈴原先生だった。

職員室から大急ぎで走ってきたのか、息を乱して大きく肩を上下させている。

「浅宮君が包丁で刺されて死にそうだって聞いたんだが……。あれ？ おかしいな……」

傷一つ負っていない浅宮部長の姿を見て、鈴原先生は首を傾げた。

どうやら騒動屋の弘美が事態を大袈裟に伝えてしまったようだ。

「先生、浅宮部長は刺されてません。包丁で脅されて、ちよっとシヨックを受けているだけだと思います」

わたしは掻い摘んで、宮地副部長の凶行を説明した。

「そうです。私はもう平気ですから、ご心配には及びません。それよりも、音楽室へ行って下さい」

部長はうつすらと微笑み、落ち着いた声でハッキリと言った。

「ああ、それなら安心だな。それに、音楽室には剣崎先生が向かったから、そっちの方も安心だぞ」

「弘美は？」

「和泉と神川を助けるんだ、とか大声で叫びながら剣崎先生と一緒に走っていったぞ。まあ、おまえたちの様子からして、あの二人も無事なんだろうな」

「あの……。この騒ぎで美術部が廃部になるってことはないですよね？」

部長が確認したくて堪らないであろうことを、わたしが尋ねてみた。

鈴原先生は眉を寄せて曖昧な表情を作った。

「確かなことは言えないな。廃部にはならない、と言ってやりたいが……。事件の経緯によつては廃部もあり得るかもしれない。剣崎先生が何とかするだろうが、万が一にも警察沙汰になりでもしたら、部を庇いきれるかどうか……。まあ、難しいだろうな」

鈴原苦背は厳しい表情で浅宮部長を見据え、悲観的予想を立てた。それはつまり、美術部の存続を願うなら警察に被害届を出すな、と部長に仄めかしているも同然だった。今回の件が外部に漏れた場合、学校の名前に傷が付くから、部長の口を封じようとしているのかもしれない。実際、部長さえ納得すれば、全てが丸く収まるのだ。浅宮部長は思案するように目を閉ざし、顎を引いて小さく吐息した。

「私が口を噤んだ場合、宮地君の処分はどうなるのでしょうか？」

部長が尋ねた。

そう、そこが一番重要な点である。

「転校することになるだろうな。間違ってもお咎めなしにはならない。その点は保証する。退学処分になると君を逆恨みする危険性もあるから、転校という形で遠くに消えてもらおうのさ」

「……そうですか。それならば問題はありません」

「まあ、この件に関しては、あとで校長や教頭を交えて対処、対策を話し合うことになると思うから、それまでは安静にしているといい。まだ浅宮君も混乱しているだろうし」

「はい」

鈴原先生は、浅宮部長にベッドで横になっているように勧めておいて、わたしを見た。

「藤森はもう帰ってもいいぞ。あとは先生に任せとけ」

「あ、はい。それじゃ、わたし、音楽室に行きます。和泉君たちが心配ですから」

「そうか」

鈴原先生は簡単に頷いた。

受け持っている生徒ではあるけど、放課後の行動については基本的に関知しない方針なのだろう。

「藤森さん、ありがとう」

保健室を出ていこうとしたわたしに、浅宮さんが改めて礼を述べた。

「部長を気遣うのも部員の役目ですから」

わたしは微笑んで返した。

浅宮部長はくすつと笑った。

わたしは保健室を後にして、音楽室へと向かうべく階段を駆け上がった。

【4・浅宮雪乃】

酷い目に遭いました。

心臓のドキンドキンという鼓動が耳のすぐ傍で鳴っている気がします。

同じ美術部の部員に、しかも副部長に刃物を突きつけられて、こともあるうに肉体関係を迫られたのです。パニック状態が簡単に収まらないのも無理はないでしょう。

ベッドの上で横になり、瞼を閉ざしてリラックスをし、心身を正常に戻そうとするのですが、上手く心を制御できず、身体も意思に従ってくれません。首筋に包丁を押し当てられた時のヒンヤリとした感触がまだ残っているようです。

きつと今日の出来事は、心の奥底に深く刻み込まれ、死ぬまで拭い去ることはできないでしょう。

酷い記憶ではありますが、これも運命と思って諦め、思い出の一部として受け容れるしかありません。

最早どうしたところで、起こってしまった事件をなかったことはできないのですから。

「ご両親を呼んだ方がいいかな？」

一年A組の担任をしている鈴原健一先生が気を利かせて私の親を呼ぼうとしてくれましたが、言語道断のありがた迷惑なので、即座に断りました。

「いいえ、結構です。その必要は全くありません。もう少し身体を休めさえすれば、私は一人で帰宅できます。お気遣いなさらないで下さい」

「そうか？　だが、万が一のこともある。先生が車で送っていいのか？」

親切な申し出でしたが、正直言ってこの教師も性欲を持つ男性で

あり、変な場所に連れ込んで私に乱暴しないと切り切れない以上、お断りするしかありません。

それほどに今の私は精神的に男性を受け付けられない状態なのです。「いいえ。私の家は歩いて帰れる距離なので、送っていただかなくても平気です」

「そうか……。それなら和泉に送ってもらうか？　確か、和泉も徒歩通学だったろ？」

壁際で腕組みをして私に微笑みかけてくれていた男の子に、鈴原先生が確認するように訊きました。

その男の子こそが、私を暴漢から救ってくれた恩人の和泉真悟君です。

外見は、私と同じ三年生と見紛うくらい大人びていて、心惑わされるほどの美男子です。性格も素晴らしく、私を気遣って今まで保健室に残ってくれていました。お友達の藤森さんたち三人は、時間が遅くなってしまうかもしれないので、先に帰るように言われて、既に帰宅しています。それなのに、彼は全くの初対面にもかかわらず、私を待っていてくれるのです。

ハッキリ言って感動しました。

ハートの中心を射抜かれました。

恋心が芽生えてしまったようです。

私は自身の性格に難点を抱えているので、この年になるまで二度しか男性とお付き合いした経験がありません。しかもその内の一回は、お付き合いして三日目で破局してしまいました。私が交際相手に厳しく注文を付けすぎてしまったことが原因ですが、誰もが恋人に品行方正、才色兼備であって欲しいと望むと思います。しかし、相手に私の思いが上手く伝わらなかったのか、常に鬱陶しがられてしまいます。でも、和泉君は私の理想像に合致する男の子でしょう。いいえ、絶対に完璧な男の子です。私にはわかります。ビシビシと伝わってきます。感じ取っています。私たちは理想の恋人関係を築くことができるでしょう。

しかし、残念な事実として、和泉君は藤森さんの恋人である確率が非常に高く、私の入る余地は見当たりません。彼が藤森さんの特別視しているのは、誰も目にも明らかなのです。悔しいですが、唇を噛んで諦めざるを得ないでしょう。

「浅宮さんがそれを望むのであれば、ボクは構いません。女性が夜一人歩きをするのは好ましくありませんからね」

和泉君は優しく微笑み、一瞬も逡巡せずに快諾してくれました。それを聞いた私は、天にも昇る気持ちになり、万歳三唱して跳ね回りたい衝動に駆られました。

勿論、そんなはしたない行為に及ぶような私ではありません。

慎ましやかに微笑んで、「ありがとう」と答えました。

いつの間にか嫌な気分から回復していました。逆に心楽しい気持ちになっっています。浮かれ調子です。人間とは現金なものです。

「それでは先生、私、帰ります」

私はベッドから身を起こし、うきうきする気持ちを抑えつつ、落ち着きのある声を意識して発しました。

「そうか、気を付けろよ」

先生に玄関まで送り出され、私と和泉君は一緒に帰路につきました。

偶然の一致というか、これも必然的一致というべきか、私と和泉君の家はとても近い場所に位置していました。ほんの目と鼻の先です。きつと神様の特別な計らいでしょう。私たちは出会って出会うべくして出会い、恋人に成るべくして出会ったのです。

お互いの自宅に通じる長い坂道を上がりながら、私たちは恋人同士のように肩を並べて、微笑みを自然と交わし合います。夢のような時間ですが、これは紛れもない現実です。

「和泉君はこんなに帰りが遅くなっても、ご両親にお説教されないの？」

「お説教ですか？　された記憶はありませんね。現在、ボクは両親と離れて暮らしているので、行動を妨げる要素は皆無です。言葉通りの一人暮らしですよ」

「一人？　それではお掃除やお洗濯などの家事が大変でしょう？　お食事も自分で作らなくてはならないでしょうし……」

「勝手気儘なライフスタイルを維持する為の苦労なので、さして大変とは思いません」

和泉君は朗らかな笑みを浮かべて言いました。

しかし、その微笑みは、藤森さんに向けられていたものの数分の程度の輝きしかありません。どうすれば、彼の作為的でない満面の笑みを引き出せるのでしょうか？　どうやって藤森さんは彼を頼笑ませたのでしょうか？

「貴女のご両親はどうなのですか？」

和泉君に質問されました。

私の家庭に興味を持ってくれたのです。

いえ、わたし自身に興味をいだいてくれたのかもしれませんが。

その気持ちが冷めないように、即座に返答をしなければなりません。

「私の家には誰もいないの。私の帰りを待っているのは無人の冷たい部屋だけ」

「ご両親はお仕事ですか？」

「いいえ」

私の両親は二人とも不倫をしています。

それをお互いに認知しているようです。

しかも、二人共に相手の不貞な行為を黙認しています。

そんな両親の心理が理解できません。

離婚しない原因が私の存在にあることは察しているのですが……。

「貴女はご両親を必要としていますか？」

和泉君が少し失礼な質問をしてきました。

もし、必要としていない、と答えたら彼はどう反応するでしょう

か。

試してみたい気持ちが僅かに芽吹きましたが、人格を疑われてしまいそうなので自重します。

「必要よ。私の生活費を稼いでくれているんですもの。当然でしょう？　和泉君こそ、どうなの？」

「貴女の理由を踏まえて答えると、ボクに両親は必要ありませんね」
和泉君は何の躊躇もなく答えました。

「和泉君の家はお金持ちなのね。ご両親は何をなさっているの？」

「父は警察関係者。母は会社の経営者。貴女の想像した通り、ボクの家はお金持ちです」

警察はそれほど儲かる職業ではないと思います。

しかし、母親が会社経営者なので、お金の心配をしなくて済むのでしょうか。

「なぜご両親と一緒に暮らさないの？」

「なぜですか？　そうですね……。父がボクの趣味を一切合切否定し、欠片ほども理解を示さなかったことが大きな理由です。今は二人とも遠い所にいますよ」

「外国暮らし？」

「……それに近いですね」

和泉君は仄かに口許を斜めに歪めて答えました。

どこか陰のある、皮肉の宿った笑みでした。

話をしている間に、私の家に到着してしまいました。

名残惜しいですが、お別れしなければなりません。

無論、今日に限ったことであり、明日また学校で会えるでしょう。

「ここが私の家なの」

一戸建て住宅の前に立ち、玄関を指差して言いました。

この高級住宅街では自慢になりませんが、そこそこに大きな家だと思っています。

「本当に誰もいないようですね」

真つ暗な家を見て、和泉君は呟きました。

「敷地内に暴漢が潜んでいるとは思いますが、くれぐれも気を付けて下さい」

「あ、和泉君、明日また会えるかしら？」

思いきつて訊いてみました。

「藤森さんたちの意見を聞いてみないと、その質問には答えられません。それに、事件の翌日ですからね。今の段階では、今後、美術部の活動が許可されるかどうかわかりません。先生に事件の経緯を説明する必要もあります。その場にはボクも同席を求められると思います。その後、部活動に参加するかどうかは未定です」

「そうではなくて、明日も和泉君とこうして二人きりでお話ができないかってこと」

「ああ、二人きりですか……」

和泉君は微妙に唇の両端を緩めました。

「それは、ボクに時間の余裕があり、貴女が会いたいと望めば、幾らでも」

「幾らでも？」

私が際限なく望んでも構わない、と言ってくれているのでしょうか。

「はい、幾らでも」

不用意なほど簡単に承諾してくれました。

極めて明快な返答です。

私に、自重の解禁を促しているも同然です。

「それでは、また明日お会いしましょう」

和泉君はすつと一歩下がり、礼儀作法の教科書に載せなくなるような、完璧な会釈をしてから踵を返しました。

その時、私は。

嗚呼、もう少し一緒にお話をしたい……、と望んでしまいました。

切ないまでの熱い想いが胸を突き上げてきます。

今日この日、この瞬間まで感じたことのない心情です。

そして、その直後、普段の私であれば絶対にしないであろう行動を、衝動的に起こしてしまいました。

「待って、和泉君！」

私は叫びざまに取り縋りました。

「どうしたのですか、浅宮さん？」

和泉君はゆっくりと振り返り、微笑みを浮かべて訊いてきました。唐突に抱きつかれたのに驚いた様子はありません。

「あ、あの……。もう少し一緒にいてくれないかしら。お話がしたいっていうか……。家の中で一人きりになるのが怖いっていうか……。少しだけでいいから。お願い……」

ぎゅっと抱きついたまま、私は哀願するように言いました。

怖いというのは和泉君を納得させる為の方便です。心弱さをアピールして、彼の優しさにつけ込む卑怯な手段を用いたのです。唾棄すべき反則技ですが、彼と親密になる為なら私はどんな禁じ手でも厭わずに用いる覚悟があります。

「おや。それは要するに、ボクを家の中へと招き入れようとしているのですね？」

和泉君は笑みを消し、眼鏡の奥の目を僅かに細めて、私の真意を測るように訊きました。

「ええ。少しでも寄っていつてくれないかしら」

「構いませんよ。しかし、女の子一人だけの空間に初対面の男を誘い入れる軽率さは感心できませんね。今日の事件を鑑みるべきです。貴女はボクという人間を十分に理解した上で提案しているのですか？」

「……和泉君は、宮地君みたいな狼藉を働いたりはしないでしょ？」

「はい。綺麗な女の子に乱暴するような下司なまねはしません。し

かし、性急な求愛行動に及んでしまう可能性が非常に高いと思います。ある人物はボクのことを《色魔》と蔑んでいますよ」

「え、え………それは？」

私は動揺のあまりどもってしまいました。

和泉君を部屋に招き入れた場合、強引ではなくともベッドに押し倒されて性行為を求められる、と仄めかしているのです。

いいえ、彼は明確に断言しています。

「その危険を冒してでも一緒にいたいと望むのであれば、ボクは貴女の申し出を受けましょう」

和泉君は冗談を欠片も交えず、真面目な顔で言いました。

「和泉君がそれを望むのなら幾らでも」

私は口調を真似るようにして、「冗談ばく答えました。」

私は鉄柵を開き、石段を登ってドアの前まで移動し、鍵を差し込みました。

当然ながら両親は不在です。どちらも愛人の家に泊まっているでしょう。いつもなら憤りを覚えるところですが、今日は穏やかな気持ちで不在確認ができました。むしろ邪魔者がいなくて好都合です。

先に玄関へと上がり、ドアを大きく開け放って、後方に控えている和泉君を招き入れました。

男の子を自宅に迎え入れるのは初めてです。

彼が仄めかしたような展開になるのでしょうか？

そうだったらそうなってで、私は構わないのですが……。

あらぬ期待に身を焦がして呼吸を荒げている自分に愛しさを感じました。

「さあ、遠慮せずに入って」

「お邪魔します」

和泉君は一切の躊躇をせず家に入ってきました。女の子の家を訪問し慣れているようです。彼ほどの美少年であれば、過去に多くの

女の子と関係を持ってもおかしくないでしょう。

和泉君を部屋に案内しておき、私はキッチンに入って飲み物を用意しました。

「お気遣い感謝します」

和泉君は膝丈のテーブルに向かって正座をし、差し出されたコーヒーカップを手に取りました。

姿勢が良いので、一つ一つの動作がとても綺麗です。

掛け値なく格好良いです。

コーヒーカップを口につけている様子を見るだけで胸が高鳴ります。

私は和泉君と向かい合う位置に座り、自分のコーヒーカップに両手を添えて、温かさを確かめるように包み込みました。

「美味しいコーヒーですね。インスタントではないでしょうか？」

「ええ。コーヒーだけは自分の手で淹れるようにしているの。他の飲み物はお店で買ってきちゃうけど」

「こだわりですか？」

「ええ、まあ……こだわりというほど入れ込んでいるわけではないけど……。これだけは譲れないことが和泉君にもあるでしょう？」

和泉君のことをもっと知りたかったので、私は思いきって質問してみました。

「譲れないこと、ですか。そうですね。ボクは基本的に、あらゆる事柄において、相手の希望を優先させるように心掛けています。自分自身では、こだわりは持っていないつもりですよ」

「女の子の好みにこだわりはある？」

私は最重要事項を尋ねました。

「基本的に、ボクは来る者を拒みません。しかし、ボクに交際を求めてくる女の子は、なぜか自分の容姿に自信を持っている子ばかりでしたね。それゆえに、選り好みをする必要がなかったとも言えます」

「それなら……私が……」

口走ろうとしている言葉を、私は一度飲み込みました。情念を吐き出してしまえば、確実に結果がでてしまいます。

和泉君は曖昧な台詞で誤魔化したりはしないでしょう。

「何でしょうか、浅宮さん？」

和泉君は優しい微笑みと共に、私の言葉を促しました。

きつと何を言おうとしているのかを察しているのでしょうか。

その表情に勇気づけられ、私は自分の思いを告白する覚悟を決めました。

「それなら……それなら、私が交際を望めば、和泉君は応じてくれるのかしら？」

言ってしまいました。

訊いてしまいました。

あとはもう答えを待つしかありません。

和泉君は動揺した様子もなく、静かに交際の要求を聞いていました。でも、思案する素振りを見せません。始めから返答が決まっているかのような感じです。

彼の口許が不思議な微笑みに彩られました。そして、ずっと手を差し伸べて、私の手の平に重ねました。

「和泉君……」

「キミは、ボクの所有物になることを希望しているのかな？」

和泉君が確認するように訊いてきました。

所有物……。

酷い表現です。

しかし、ニュアンスとしては私の望む関係に近いような気がするので否定はできません。

それでも、肯定するには若干の抵抗がありました。

私が口ごもっていると、和泉君は徐に立ち上がり、テーブルを迂回して近寄ってきました。

口許には優しい微笑み。
心をとろけさせる眼差し。

そのまま腕の中に私を抱き寄せました。
抱き締められても私は抵抗しません。
いいえ、抵抗する意味がありません。

和泉君の求める行為と私の望んでいた行為が一致したに過ぎないのです。

彼の唇が私の頬に触れ、鼻の頭を掠め、唇の上に到達しても、私は顔を背けたりしませんでした。反対に、こちらから唇を重ね合わせにいきました。

熱い口づけ。
情熱的抱擁。

「ボクの所有物になりたいの？」

しばらくして唇を離れた和泉君が、再び訊いてきました。

私は迷わず首肯しました。

「和泉君の物にして」

自分が紡ぎ出すことのできる最高の声音で誘いました。

和泉君を拒絶して得られる物はありません。

求められる物を与え、与えられる物全てを求めてもらおう。

それこそが、現在考え得る私と彼の理想的関係なのです。

焦らしたり空かしたりして幻滅されるよりも、彼の欲求を何もかも満たしてあげる方が私の幸せに繋がるでしょう。

私はベッドに横たわり、和泉君に身を任せています。

最初から私が積極的に奉仕するよりも、彼に任せる方が良い印象を与えたいと思います。うぶな女の子を演じてみるのも一興でしょう。しかし、和泉君の手際の良さは、今まで私がお付き合いしてきた二人の男の子と比較にならないほど巧みです。知らぬ間に制服を脱がされ、下着姿を晒していました。きつと幾度となく女の子の制服を脱がしてきたのでしょうか。もしかしたら、藤森さんの制服も脱がしたのかもしれませんが。

そう考えたら、私の心が小さな嫉妬と大きな優越感に満たされました。男子生徒全員が憧れている藤森さんに勝利したのです。和泉君は彼女ではなく、私を選んでくれたのです。それを誇らずにはいられません。

和泉君の手によって下着を脱がされて全裸を晒した時は、制御不能の恥ずかしさに打ちのめされ、思わず恥部を隠してしまいました。予想した通り、和泉君は女の子の裸を見慣れているらしく、全裸の私を見ても興奮した様子もなく、まるで絵画でも鑑賞するように見つめ、恥ずかしがる私をからかうように愛撫し始めました。

私はまな板の上の鯉です。

与えられる快楽に反応してのたうち悶え、嬌声を上げ、悦び泣きはしたないまでに乱れてしまいました。

「和泉君、その十字架……アクセサリー？」

和泉君の胸元に輝く大きな十字架型の首飾り。それは、アクセサリーにしては大きすぎるサイズです。

和泉君は優しい笑みで口許を飾りました。だけど、返答を得られませんでした。それでも構いません。

もう和泉君から離れません。

もう和泉君を放しません。

彼女には絶対に渡しません。

これだけ深く繋がり、強い愛情を注がれている私が捨てられる可能性などないでしょう。

私は和泉君の物であり、和泉君は私の所有者なのです。

明日から彼と並んで歩く権利を持っているのは、確実に私だけです。

この想いが誤りであっても、この想いが過ちであっても、私は後悔しないでしょう。

私は和泉真悟君が好きなのです。

では、和泉君が好きなのは……？

第三章 噛み合う犯意 【1・藤森保奈美】

四月十七日、木曜日。

「え？」

登校して席に着くなり、和泉君についての面白くない情報を聞かされて、わたしの心は一瞬活動を停止した。

「昨日、浅宮部長と和泉君、一緒に帰ったらいいんだけど、今日の朝も一緒に登校したんだって！ 浅宮部長ん家の近くに住んでる生徒が見たって話だから、信頼できる情報だよ。もしかしたらあの二人、熱い夜を過ごしたのかも、って噂だよ」

熱い夜って……恋人的な？

「その話って本当なの、弘美？」

わたしは嘘であって欲しいと強く願いながら確認した。

不機嫌な自分自身に苛立ち、不愉快な表情を浮かべていると自覚していても、改善する努力を怠ってしまう。

「浅宮部長の家から二人が一緒に出てきたらしいよ。しかも人目を憚らずにラブラブな感じで登校したっていうし……。これはもう恋愛関係決定って言っても過言じゃないかな！ んー？ あれね、保奈美、どうしたの？ 物凄く怖い顔してるよ」

弘美が顔を覗き込んで、不思議そうな声を出した。

怒っている理由がわからないようだ。そういう鈍感さはあるがたくもあり、苛立たしくもあった。

「藤森さん……」

神川君が心配そうに声を掛けてきた。

「和泉の行動で気分を害するのは良くない。奴が誰と何をしようと一切無視するべきだ。奴と恋愛関係を築くことなど不可能であり、女性側が一方的に思い描く激甘な幻想でしかない。あの色魔は、綺麗な女生徒に好かれる要因を故意に作り出す天才なんだよ。甘い甘い夢を都合の良いタイミングで見させてくれるんだ。たぶん君や和

久井さんに対しても何かしらのアプローチをしたのではないかな。でも、気を付けなければいけない。奴は鬼畜だ。奴が特定の女性に執着することなど絶対にあり得ない。誰彼構わず心を惹きつけ、あらゆる状況を利用して……否、悪用して、清濁合わせて喰らい尽くそうとする。その結果、女性の側は全てを失い、あの鬼畜は名声を得る……」

「それ、どーゆーこと？ 後に転校してきた和泉君の方がモテモテだから、悪口を吹き込んで彼の名誉を傷物にしちゃえ、っていう作戦？ それとも、保奈美が浅宮部長に嫉妬してる感じだから、カチンと来ちゃった？」

「そうじゃなくて……。僕が言いたいのは、和泉が女性に対して酷く手が早い男だ、ということだよ。奴は相手の気持ちなど一切考えずに関係を結び、都合が悪くなると躊躇なく切り捨てる冷血漢なんだ」

「神川君は可愛い女の子を見て、えっちしたいなあ、って思わないの？」

「……僕は性行為だけを目的に女性と接することなどできない」

わたしは二人のやり取りを聞きながら、意識して表情を改めた。引きつっていた顔に無理をして笑みを浮かべ、高速で循環する血液に急ブレーキをかけ、暴れる心臓に冷静さを求める。

怒ってなどいない。

神川君の言う通り、怒る意味がない。

もし怒っていたとしても、それは明確な好意をいだいていながら何のアクションも起こせずに和泉君を奪われてしまった自分自身に對してであって、わたしの気持ちを無視して他の女の子と恋愛関係を結んだ彼に對してではなく、突然現れて反則気味の逆転技で彼を奪っていった浅宮部長に對してでもなかった。

いや、和泉君が転校してきて以来、彼の悪口ばかり言っている神川君に對しては明確な怒りを覚えている。感情剥き出しにして口論したくないので、何も言い返さないが……。

「わたしは怒ってないわよ。なぜ怒らなきゃならないの、弘美？

神川君も変な心配してくれなくて結構よ」

「だって……保奈美って、和泉君のこと好きだったんでしょ？ ただ会ってから一週間も経ってないけど、和泉君と一緒にの時の保奈美って、他の男の子と接する時と全然態度が違うもん。もう、一秒も目を離しません、って感じで、彼の方ばっか見てたから一目瞭然だよ」

「そ、そんなに？」

わたしは狼狽した。

自分では結構冷静な対応を心掛けていたはずなのに、周囲にはバレバレだったなんて、恥ずかしすぎる。

顔が熱い。

神川君が瞼を閉ざして天井に顔を向け、深い溜め息を吐いた。

羞恥に拍車。穴があつたら潜り込みたい心境だった。

「にやははは！ うっそだよーん！ ちょっとカマをかけてみただけなのです、保奈美さん。うふふっ、そっかー。やっぱ、保奈美って、和泉君のこと好きだったんだね。そんな感じがしたんだよー」

笑いながら肩を叩かれた。

周囲から漏れ聞こえる忍び笑い。

致命的恥辱で失神寸前。

激烈な眩暈でお先真っ暗。

大親友の無神経ぶりに殺意をいだくわたし。

「ち、違うの！ わたしは和泉君のこと好きなんじゃなくて……、好意を持っただけなの！ 恋愛感情はなかったのよ……まだ」

「ちょーっと言いつつ誤りがましく聞こえちゃうなあ。フラれたのがショックなの？」

「まだ告白もしてないんだから、フラれてないもの……。わたしと和泉君はお付き合いしてたわけじゃないから……。クラスの席が隣同士っていうだけだし……。たまたまみんなより先に親しくなっただけで……。特別な関係ではなかったもの……」

「そりゃそうだねー。そんなじゃあ、保奈美、和泉君が浅宮さんとラブラブって聞いても、そんなにシヨックじゃないんだ？」

「……………」
シヨックだった。

血液が脳天から噴出して深紅の霧雨を降らせるくらいの激情を覚えた。

だけど、誰も責められない。奥手なわたしが悪いだけ。
そんなわたしを見て、弘美は大笑いである。

「保奈美はもつと自分に素直にならなきゃ駄目っ！　好きなら好きって言っちゃえばいいんだよ。じゃないと、いつまでも彼氏作れずに、ずーっとヴァージンのままだよ」

「……………」
性体験の有無は問題にしていない。

それに、わたし同様、弘美も未経験者だろう。

「まあ、お互い、和泉君との縁はなかったことで、新しい出会いに向けて明るく元気に頑張ろうよ！　こんな間近にフリーな美少年がいるんだしさ。ね、保奈美？」

そう言つて、神川君の腕を抱え込んで笑顔を見せる弘美。

そんな姿を見ていると、不思議と内部に燦っていた怒りが霧散していく気がした。

この天然系お茶づけ娘と接していると、落ち込んでいる自分が馬鹿に思えてくる。

わたしは思わず、くすつと笑ってしまった。

「もう怒ってないね、保奈美？」

「うん」

和泉君の顔を見たら、また怒りがぶり返して来そうな気がするけど、その時はその時である。

ぐつと堪えるしかないだろう。

「さーて、早く和泉君、来ないかな！　保奈美をフツて浅宮部長と一晩中えっちしてた理由を聞いて、徹底的にとっちめてやらなきゃ

ね！」

両方の拳を握り締めてファイティングポーズを作り、勇ましく宣言する弘美。

ちよつとそられる提案ではあるが、誰と何をしようとも和泉君の自由なので、わたしは同調しないでおこうと密かに思った。

ホームルームが始まるまでの時間を、弘美と神川君の他愛のない会話を聞きながら無意に消費していると、そこに中嶋君が加わり、オフレコであつたはずの《美術部部长強姦未遂事件？》の話題で盛り上がった。

そして程なくして和泉君が教室に姿を現した。

「あつ、和泉くん！ おはよー」

とつちめてやる、とか言つてた割には、すんごく友好的に挨拶してるし……。

まあ、それが弘美らしさだ、と言えばそれまでである。

「おはよう、和久井さん」

和泉君は相も変わらずの微笑み顔で応じた。

そして、わたしたちにも微笑みかけてきた。

「藤森さんもおはよう」

「おはよう、和泉君……」

辛うじて笑みを返せた。

「神川君と中嶋君もおはよう」

「ああ……おはよう」

苦々しげに朝の挨拶を返す神川君。

中嶋君は、自分も挨拶されるとは予想していなかったようで、吃驚眼で応じた。

「あ？ お、おう、おはよーさん」

和泉君は肩に下げていた革製のバッグを机の上に降ろし、椅子に腰掛け、苦笑じみた笑みを見せた。

「昨日は大変だったね」

全くの他人事みたいな口調だった。

「今後、美術部の活動はできそうかな？」

「それは浅宮部長に訊いた方が早いんだよ、和泉君」
すかさず弘美が切り込んだ。

「ああ、そうだね。それでは、それについては帰りの道すがらに訊いてみようかな。このまま美術部が活動できなくなるのは寂しいし、面白くないからね」

浅宮部長と一緒に帰ることを隠しめせず、和泉君は平然と言った。
わたしたちの……わたしの気持ちを全く考慮してくれなかった。
胸の奥で熱いものがうねった。

「和泉君、昨日あの後、浅宮部長と一緒に帰ったんでしょ？」
予定通りに弘美が質問をぶつけた。

「ああ。浅宮さんが酷く怯えている様子だったし、鈴原先生に付き添いを頼まれてしまったからね。それに、陽が落ちてからの女の子の一人歩きは危険だ。自宅が近くにあるのなら、一緒に帰るのが必然だと思うよ」

和泉君は、弘美の問いを聞くと、わたしたちが何を聞き出したいのか察したようだ。

可笑しそうに微笑み、目を細めてこつちを見た。
からかわれている感じ。

わたしはすぐにも、浅宮さんとの噂話が真実かどうか問い質したかったけど、上手い訊き方が思い浮かばず、何も切り出せなかった。

下手に口を開けば、「浮気者！」と筋違いの罵声を浴びせてしまいそうな気さえする。

「もし何かしらの疑惑をいだいたなら、きちんと相手に質問して、ことの真偽を確かめるべきだ。コミュニケーション不足は人間関係を悪化させる第一歩であり、疑惑に思考を拘束される時間が長ければ長いほど関係は悪化していく。それを未然に防ぎたければ、勇気を振り絞るしかない」

まるでわたしにアドバイスをするように、和泉君が語った。
それでも、わたしは疑惑を言葉に変換して問い質せなかった。
忠告通りに質問したのは、中嶋君である。

「おまえが三年の浅宮雪乃と付き合ってるって噂、本当なのか？」

中嶋君は窓枠に寄りかかり、開口一番、核心を突いた。

答えを間近で聞くべく、弘美がぐつと身を寄せる。

和泉君はくすつと笑った。

「ボクと浅宮雪乃の関係について、噂の真偽を確かめたいのかな？
別に構わないけど、今日は登校するなり全く同じ質問を二十三回
もされたよ。その都度に事情を説明させられて正直うんざりしてい
るんだ。朝から疲労を感じているよ。しかし、キミたちには正確な
情報を伝える義務があるから、話さないわけにはいかないね」

「おう！　それで、噂の真相は？」

「さつきも言った通り、浅宮さんと昨夜一緒に帰宅し、今朝も一緒
に登校したのは、成り行き上の必然的行動であって、ボクが望んだ
わけではない。事件の加害者である宮地優が転校するまでの数日間
だけ登下校を共にして欲しい、という学校側からの要請があったか
らなんだ」

「ああ、なるほどな。そういう理由で今日も美人部長さんと一緒に
登校したってわけか」

噂話がガセだったとわかり、中嶋君は急につまらなそうな顔にな
った。

「どうしてだろう？」

浅宮さんと和泉君が親密な交際をしていた方が良かったのだろう
か……？

いや、彼の心情などどうでもいい。それよりもっと重要な質問が
あるだろう。

「ん？　でも待てよ。おまえ、浅宮さんの家から一緒に出てきたっ
ていう話だぞ。実は泊まり込んでたんじゃないのか？　それについ
てはどう弁解するつもりだ？」

わたしの心の叫びが通じたのか、中嶋君が最重要疑問点を突いてくれた。

和泉君は他愛なく微笑んだ。

「良い質問だ。でも、弁解するという表現は適切ではない、と言いたい。疑惑の対象者であるボクが何を述べても言い訳がましく聞こえてしまうだろうが、それでもキミの要望に応じて簡潔に説明させてもらおう」

和泉君は横目でわたしを見た。

「昨夜、ボクはきちんと帰宅したよ。そして、今朝、約束通りに浅宮さんを迎えに行った。これは事実だ。浅宮さんの自宅に電話して、彼女の母親に確認してもらえば証明できる。何故に今朝、彼女の自宅から一緒に出てきたのかと言えば、彼女の母親に昨日の事件の説明を求められて、家にかかることを余儀なくされたからだよ」

「あー、なるほどね。浅宮さんの家から一緒に出てきたのは、彼女の親に事件の説明をさせられたからか……。そりゃ確かに証明できるだろうな」

またもや中嶋君はつまらなそうに言った。

「そんじゃあ、本当に、和泉君と浅宮部長はラブラブな関係じゃないんだ？」

駄目を押すように弘美が訊いた。

「ラブラブ？ 認識に誤りがあるようだ。ボクは浅宮雪乃に対して何の感情もいだいてはいない。単に、ボクが彼女を助けたことで、アフターケアの義務が生じてしまっただけだよ」

和泉君は僅かに眉を寄せて、若干の不快さを表情にしながら言った。

本心では、浅宮さんの送迎などしたくないのかもしれない。

それなら、浅宮部長のアフターケアを生徒指導の先生や保健の先生に任せればいいのだ。和泉君が責任を感じて必要以上の気配りをする必要などない。そう思ったけど、それを口にするとう人格を疑われそうなので、黙っていた。

そんなわたしの顔を見た弘美が、トンと机を叩いて明快な声を發した。

「そんな面倒つちこと、先生に押しつけちゃえばいいじゃん」
さすが親友。

わたしの思いを躊躇なく代弁してくれた。

「あ、そりゃ、和久井の言う通りだな。和泉がやらされる理由なんてどこにもない」

大きく頷いて中嶋君が同意した。

わたしもじつと和泉君を見つめて意思表示をする。

部長を送り迎える義務なんてないよ、と目で告げる。

一人、神川君だけが深刻な表情で一日遅れの転校生を睨んでいた。和泉君は端正な顔に感情のない笑みを刻む。

「浅宮さんからの強い要望があつたから拒否はできない。犯罪被害者には救済を要求する権利があり、その犯罪に立ち会った人間には無条件で応じる義務がある。それに、ボクは傷心の女性を無碍に突き放したりしない。まして、先生たちにも、彼女の支えになって欲しい、と言い含められていたからね。断れば、多くの人が気分を害することになっていただろう。何よりも、登下校をするだけ、という条件であれば引き受けても構わないと思ったことが承諾の決め手だよ。綺麗な女の子と手を繋いで通学路を歩くことを厭う男性はいない」

その台詞を聞いた瞬間、わたしの頭の中でカチンと音が鳴った。

理由は……深く考えたくない。

自己嫌悪しそうだから。

「よくもそんな白々しい戯言を……」

神川君の苦々しい呟きは、わたしの耳に届いたところで弾けて消えた。中嶋君が持ち前の声の大きさと和泉君の言葉に答えたからだ。
「そりゃ、俺も浅宮さんみてえな美人と登下校してえから、おまえを責められねえけどな……。嫌ならハッキリと言った方がいいぞ」

「そつだよ、和泉君！」

弘美が勢い込む。

「嫌って言っちゃえばいいんだよっ！」

「実際には、少々予定外の行動を強いられて、ボクも困惑しているよ。しかし、事件の加害者である宮地優が転校するまでの短い期間だけなら、浅宮さんの頼みを受けてもいいと思っっているんだ。ボクが拒否する理由は、今は何も無いからね」

「そっか」

弘美は説得を諦めたようだ。

無理に和泉君を浅宮部長から引き離そうとすると、犯罪被害者を蔑ろにする非情な女の子のレッテルを貼られてしまっ、と危惧したのかもしれない。

中嶋君は、和泉君と浅宮さんがラブラブな関係ではないと判明した瞬間から、好きなようにすればいい、という感じた。

神川君はわたしの顔をじっと見つめている。彼特有の斜めな笑みを消し、怖いくらいに真剣な目で、何かを訴えかけるように。

「和泉、おまえ、今日も浅宮さんを家まで送っていく予定なのか？」何か思いついたのか、中嶋君が訊いた。

その質問を耳にするなり、神川君がハッとした顔で和泉君を見て、すぐにわたしに視線を戻した。

「そっだね」

和泉君は簡単に頷いた。

「藤森さんたちも一緒に？」

「それは……」

珍しくも、和泉君が口ごもった。そして、ちょっと考えるような仕種を見せてから、わたしに視線を固定した。

わたしは一瞬だけ目を合わせ、すぐに逸らした。

なぜなのか自分でもわからない。

和泉君と浅宮部長が楽しげに会話する様子を間近で見たくなかったのかもしれないし、彼女とギスギスした会話を交わしたくなかったのかもしれない。

「あたしも一緒に帰ってもいい？」

弘美が同行の許可を求めた。

「構わないけど、キミの帰り道は方向が真逆だから、一緒に帰ることは難しいと思うよ」

「そうだけど、保奈美が可哀想だから」

弘美が呟くように言った。

わたしの心を気遣ったの申し出だ。親友として心配してくれている。同時に、自分も和泉君と一緒に帰りたいのだろう。その辺はちやっかりしている。

「なるほど」

和泉君は理解した風に頷いた。

「しかし、それは藤森さんの心の問題だから、和久井さんが一緒に行動しても根本的な解決にはならないよ」

そう、和泉君は正しい。

わたしの想いは、単なる嫉妬だ。

この感情を払拭するのも、育てるのも、殺すのも、全て自分次第である。

必要なのは、好きです、と告げる勇気だけだった。

でも、今のわたしにできることは……。

「わたしは一人で帰るから……」

弱々しく首を左右に振って言い、無理矢理に微笑んでみせた。

【2・浅宮雪乃】

お昼休みの時間です。

それまで静まり返っていた教室が急に賑やかになりました。周囲の迷惑を省みない話し声。下品な笑い声。ドアを乱暴に開け閉めする雑音。授業中では考えられないほどに、教室内は無法地帯と化しています。それぞれが束の間の休息を独自の方法で楽しもうとしているのでしようが、私には迷惑な騒々しさとしか感じません。

いつもなら気心の知れたクラスメイトと一緒にお昼ご飯を食べるのですが、今日は自分で用意してきたお弁当を持って、三年A組の教室をそっと出ました。

勿論、どこか静かな場所で和泉君と一緒にご飯を食べる為に、一年A組の教室へと誘いに行くのです。お昼休みを一緒に過ごす約束を交わしたわけではありませんが、お付き合いをしている恋人同士、一秒でも長く相手の存在を身近に感じていたい、と望んで当然でしょう。

私は浮つく心を巧みに制御しながら、スキップしたい衝動を押し殺し、零れそうになる鼻歌を飲み込んで、早歩きで一階を目指しました。

すると、階段の手前に差し掛かった所で、背後から呼び止められました。

「浅宮さん、ちょっといいかな？」

耳慣れない声だったので、咄嗟に相手の顔を思い浮かべられませんでした。

少なくともクラスメイトではないでしょう。

一刻も早く和泉君の下へ行きたくて気が急いていたので、呼び止められて不快感を覚えましたが、無視を決め込むのは性格的に無理なので、仕方なしに私は振り返りました。

私を呼び止めたのは、髪の毛の色をオレンジ色っぽく染めている

生意気そうな女生徒でした。スカートの丈が極端に短く、リボンはちゃんと結ばれていません。自分のだらしなさを身嗜みでアピールしているようです。

「貴女は誰？」

リボンが紅色なので三年生には違いありませんが、万が一クラスメイトであつた場合を考慮して名前を訊きました。

「私は、三年B組の静川玲。軽音楽部の部員だよ。初めまして、かな？」

三年B組に親しい友人など存在しません。

まして軽音楽部の部員など……害悪以外の何者でもないでしょう。「なぜ私を呼び止めたのかしら？」

多少、口調に苛立ちの要素が混入してしまいました。

静川玲は、ククツと喉で笑いました。

嘲笑う感じだったので、非常に不愉快です。

「用件は何？」

「ふふつ。急いでるのはわかるけど、一年A組の教室に行っても和泉真悟はいないよ。今は、恋人最有力候補の藤森保奈美と屋上でラUNCHしてるからさ」

「……………」

藤森さんが恋人の最有力候補？

和泉君の恋人には一足早く私が選定されましたので貴女の認識は誤っています、と内心で訂正を求めました。

「和泉君は屋上にいるのね？」

「いるけど、行かない方が身の為だよ」

「どうしてかしら？」

「和泉真悟と藤森保奈美の親密ぶりを目の当たりにするはめになると思うから」

いやらしい笑みを浮かべる静川玲。

極めて不愉快な女です。苛立ちを堪える忍耐力にも限界があります。

「……何が言いたいのかしら？」

「あんだ、自分が和泉真悟の恋人と勘違いして、浮かれ調子の有頂天気分なのかもしれないけどさあ、実際のところは彼の眼中にいないと思うよ。可哀想だけどね」

「……………」

この女は何を根拠にして戯言をほざいているのでしょうか。

私が和泉君の恋人ではない？

独り善がり？

無様な勘違い？

昨夜、あれほど熱く深く激しく愛してくれた和泉君が、私を特別視していない？

ただ玩弄されただけ？

そんなの到底納得し得ない話です。

「まあ、信じたくない気持ちもわかるけどさ。今朝、和泉真悟本人の口から、あんだに対して一切恋愛感情を持ってない、って聞いたんだよ。だから、こうして親切に報告しに来てあげてるってわけ」

静川玲は嘲笑を口の端に貼り付けて、小馬鹿にする口調で言い放ちました。

ひっぱたいてやりたい顔です。

「そんな話、嘘だわ！」

不覚にも、私は感情的になって叫んでしまいました。

和泉君が私の気持ちを踏み躪った可能性を考えると、感情を抑える機能が制御不能に陥るのです。

「嘘じゃないって。揺るぎようのない確かな事実だよ」

「嘘よ！ 信じないわ！」

「……それなら、確かめてみる？」

静川玲が気に障るニヤニヤ顔を一転させ、真剣味を湛えて言いました。

「確かめる？ 何を言っているのかしら？」

「和泉真悟があんだをどう思い、藤森保奈美をどう思っているのか、

罨にかけて確かめてやろうって言うてんの」

「罨？ 和泉君の気持ちを試すというの？」

「そう、試すの。そうすりゃ、あんたも自分の立場を明確に知るところができてスツキりするでしょ？ 同時に、あのお嬢様面した藤森保奈美をギャフンと言わせられるんだから、一石二鳥だと思うよ」

そう言うって、静川玲はヒツヒツとしわがれ声で笑いました。

「浅宮雪乃さん、私たちと手を組まない？」

和泉君を罨にかけるなど到底承諾できぬ提案です。まして、一緒に陰謀を巡らせるなど以ての外でしょう。

この女は魔女です。

学校生活に不必要な危険分子です。

でも……和泉君の気持ちを知る為の計略ならば、多少の無茶も許されるのではないでしょうか。私と特別な関係を結んでおきながら、藤森さんと限度を超えて仲良くするのは誤りです。一般的にも不貞な行動だと言えます。彼に対する警告を込めた計略なら、ことが明るみに出た場合も一方的に咎められる心配はありません。それに、あの藤森さんを閉口させられると思うと……。

「それで、どんな罨を仕掛けるのかしら？」

「あれれ、予想以上に乗り気じゃん」

静川玲は驚き顔を作って声を上げました。

私は僅かに微笑んでみせます。

「色々な意味で魅力的な提案です」

「はーん、なーるほど。あんたも、あの清純派気取りの似非お嬢様にムカついてたわけだ。いいね、いいねえ！ あんたみたいな真面目さんがねー。ヒヒッ。怖いけど、頼もしい仲間だよ。一緒に藤森保奈美をグチャグチャのガバガバにしてやろうぜ」

「……………」

この女の仲間になる意思など、毛先のほつれほどありません。

冗談は髪の色だけにして欲しいものです。

「それで、和泉君にどんな罨を仕掛ける計画なのかしら？」

「その話をする為に、あんたを誘いに来たんじゃないか。こんな廊下で立ち話できる内容じゃないんだよ。わかってる？ 計画終了後に私たちの責任が問われちゃマズイってことで、計画は綿密かつ内密に行わないとね。あんただって、万が一、和泉真悟にバレたら洒落にないでしょ？」

「それはそうね。それで、どこで打ち合わせをするつもりなのかしら？」

「音楽室だよ。あんたがイカレ宮地に無理矢理突っ込まれそうになったっていう音楽室。そこに他の協力者が集まってるよ」

「協力者？ 私と貴女以外に？」

「当たり前でしょ、浅宮さん」

静川玲は呆れ顔で肩を竦めた。

「この計画の主役はあんただけど、あんたと私の二人だけじゃ無理だよ。大掛かりなイベントなんだからね。和泉真悟を誘導する役やアリバイを作る役、全ての責任を被るスケープゴート役とか、まあ色々だね。本意不本意に関わらず、だけどさ。ヒヒヒッ」

「……………」

大掛かりなイベントって……何をするつもりなのでしょう、と少しだけ不安になりました。

私は、犯罪行為に手を染めることだけは、断固拒否です。

結果として和泉君を傷つける行為もご免被ります。

その辺りを確認しておく必要があるでしょう。

「一点だけ確認させて下さい」

「確認？ って何を？」

「そのイベントの中で、私は何をする役目なのかしら？」

「……聞きたいの？ 音楽室に着くまで待てないのかな？」

静川玲は足を止めて振り向き、鋭い目で私を見据えました。

私も歩みを止めて、負けじと睨み返します。

「役割によつては、このまま教室に帰らせていただきます」

「ああ……なるほど。真面目さんは何をやらされるか不安で仕方が

ないってわけね。うーん、そりゃ不安だよねえ。でも、この場で計画の内容を話すのは……」

多くの生徒が行き来する階段の踊り場を見渡して、静川玲は大袈裟に口を窄めました。

「私が何をするか、だけでも聞かせてもらえないかしら」

「……………」

静川玲は片方の唇を歪曲させて、悪者っぽい笑みを浮かべました。

「あんたには死んで欲しいんだ」

「は？」

「和泉真悟に、浅宮雪乃が自殺した、と思わせたんだよ」

「……なるほど」

私は瞬時に、彼女の言う大掛かりなイベントとやらの内容を推察しました。

実に古典的で幼稚な策です。

しかし、恋人の気持ちを確かめる術として古来、使用され続けているので、効果のほどは保証済みです。

「どうかな？ 自殺する気ある？」

「私は自殺をする性格ではありませんよ」

「性格なんか問題にしてないんだよ。要は、和泉真悟の所為で自殺した、と思わせたいだけなんだからさ」

「……………」

若干の不安要素がないわけではありませんが、私が自殺した時の和泉君の反応を見てみたい、という思いに背中を押されました。

「どうする、浅宮さん？」

「わかりました。協力させていただきます」

私は、和泉君の本心を確かめるイベントの打ち合わせをする為に、静川玲の誘いに乗って音楽室へと向かいました。

【3・静川玲】

放課後の部活はサボリ。

それを聞きつけた仁科（中学からの悪友）がカラオケに誘ってきたけど、体調の悪さを理由にして拒否した。そして、帰宅……ではなく、うきうき気分丸出しで下駄箱へ向かう浅宮雪乃の後をこっそりと追った。

私自身がオレンジ色の髪に改造制服という目立つ格好をしているので、テレビの探偵みたく柱の陰とか壁に張り付いて追跡するような無意味で無様なまねはしない。たまたま帰る時間が同じになっただけ、という風を装って遠目から美術部部長の後ろ姿を観察する。

恋人との待ち合わせ場所に急ぐ乙女以外の何者でもない、見たままズバリ浮かれ調子の馬鹿女だ。

浮かれすぎて背中から翼が生え、成層圏まで飛んでいきそうなテンションである。

幸せオーラ全開。

完全無防備。

背後から一発ぶん殴っても気付かないかもしれない。

思いきり延髄を蹴飛ばして、正気に戻してやりたい。

元のいけ好かない陰険な優等生に戻したい。

じゃないと、観察者が不愉快のあまりブチ切れちまう。

しかし、この女、イカレ野郎に命狙われてるっていう自覚があるのかね。キャラにそぐわないスキップなんかして尻をぷりぷり振りがあって、危機感なさすぎだろ。横合いから宮地が包丁を構えて突っ込んできたら、さくつと一刺し、そのまんまお陀仏だ。奴は今、檻ん中に入って四六時中、警察に監視されてるわけじゃないんだから、その気になりや、いつでも包丁を片手に登校できるんだぞ。そこんどこ、わかってんのか？ それに、つい一週間前までは優等生面して校則通りの野暮ったい制服を着てたくせに、男ができた途端

にスカートを短くして、薄く化粧までしてきやがって……。色氣づいてんじゃないよ、気持ち悪い。

私は下駄箱で靴に履き替え、浅宮の姿を遠巻きに捉えつつ玄関へと急いだ。

和泉真悟は校門の鉄柵に寄りかかっていた。

その周囲には、ランニングシャツを着た陸上部の女どもで垣根ができている。

藤森が一緒じゃないから、気を引くチャンスと見てアタックしてやがるのだ。

ちっ、汗臭い尻軽女どもが！ 身の程を知りやがれてんだ。その中にや和泉と釣り合う奴なんて一人としていないだろ。藤森や浅宮と自分たちの面を比較してみる。恥ずかしくて自分の顔を切り裂いちまうぞ。せめて風呂に入ってから出直してきやがれ。

しかし、浅宮がつかつかと歩み寄って何かを告げると、陸上部の女どもは蜘蛛の子を散らしたようにグラウンドへと走り去った。

「おまたせ、和泉君」

ちょこつと腰を屈めて小首を傾げ、あの和久井とかいう名前の脳天気小娘みたく可愛い子ぶる浅宮。

全然似合ってない。

吐き気を催させる姿と言っている。

その尻に爪先をぶっ込んでやりたい。

でも、男の目には、見栄えはハイレベルなんだけど糞真面目で融通の利かなかった優等生が、一皮剥けて可愛らしい美少女へと変身したように映るのだろう。

「さあ、帰りましょう」

無防備な笑顔を振り撒く似非優等生とは対照的に、和泉は素っ気ない応対しかない。毛嫌いしたり、迷惑がったり、邪険に扱ったりはしてないが、あのレベルの美少女を前にしてもニコツとも笑わない。見せても、微笑み程度だ。どの角度から検証しても、義務感

から生じた表情だと言えるだろう。だけど、浅宮は妄想上の恋人関係にどっぷりと浸りきっていて、相手の反応が全く見えていないようだ。好き好き光線を両目から放射しつつ、和泉の腕に手を回し、媚びを売るように顔を見上げ、胸を押しつけるように身体を密着させている。

遮眼帯を付けた発情期の牝馬だ。

思い込みの恋愛で脳味噌がとろけきっている。

マジで後ろから尻を蹴り上げてやりたい。

音楽室を出る際に、「マジで自宅謹慎中の宮地が怖いわけじゃなくて、和泉と一緒に登下校したいから怖がってるふりをしてるだけだろ？」と訊いてやったら、「殺されかけたのだから、怖がって当然でしょう？」と返答しやがった。

そんなに怖けりや学校を休んで家に閉じこもってろ、と言ってやりたいが、どうせ浅宮は自分の優等生ぶりをアピールして下らん言い訳をし、和泉を迎えに来てさせて無理にでも学校に通おうとするだろう。

実際問題、和泉がわざわざ送り迎えをする必要なんてないのだ。

二人が仲睦まじい恋人同士みたいに肩を並べて歩き始めた。

少し距離を保って、私も校門を出る。

まるでストーカーだな、と自己批判。

二人は尾行に気付いた様子もなく、背後を振り返る素振りも見せずに、会話を交わしながら真っ直ぐ駅を目指して歩いていく。

途中、何度か信号に引っかけたり、その度に同じ信号待ち集団の中で青になるのを待つことになったが、発見される心配は皆無だった。

駅ビルが視界に入った。

電車通学の私は、普段ならこのまま直進して駅の改札口をくぐるのだけど、今日は二人の素行調査をトコトン行う為、電車に乗る時刻を大幅に遅らせるつもりだ。

さーてさて、お二人さんはどこへ向かおうとしてるんだい？
ヒヒヒ。

駅ビルか駅前商店街でデートか？

最寄りのホテルで爽やかじゃない青春の汗を掻くか？

まさか図書館に行ってお勉強つてわけじゃないよな？

ありや、商店街を素通りしちゃったよ。なんか、住宅街に向かつてるし……。

おいおい、脇目も振らずに帰宅するなんてことはないよな？

この道を行くと、えろいホテルがあるに決まってるよな？

何もせずに帰るなんて普通じゃ考えられない愚行だ。否、暴挙だ。好きな男と一緒にいて何のアクションも起こさない女など車に轢かれて死んでしまえ。これじゃ、私が部活をサボってまで、わざわざ尾行した意味がないじゃないか……。

繁華街を突っ切ってしまい、浅宮の自宅があるらしい住宅地へと入っていった。

ここまで来ると、さすがに尾行は難しい。周囲に歩行者が殆どいないので集団に紛れ込んだりできないし、手頃な物陰もないので身を隠す場所がないのだ。仕方がないから、二人との距離を多少広げて後を追う。

小汚い公園の前に差し掛かった。

不意に、浅宮が公園の中を指差して何かを言った。

彼女の表情から推測するに、公園デートを提案したのだろう。

腕を抱えて中へと誘っている。

おう、浅宮のやつ、積極的じゃないか。公園デートってのはオーソドックス過ぎて笑えるけど、お堅い優等生には清水の舞台からスカイダイビングするくらい必死の誘惑なのかもしれない。いや、もしかしたら、奥の植木の陰か公衆便所の中に連れ込んで、淫行開始つてことになるかもしれないな。日頃真面目な奴ほど、羽目を外した時に突拍子もない奇行に及んで、周囲の人間を笑かしてくれるの

だ。

しかし、二人は公園の入り口前で二、三言葉を交わし、そのまま素通りした。

和泉が公園デートを拒否したようだ。

私は軽く舌打ちしたが、内心ではにやにや笑いを浮かべていた。本人が公言していた通り、和泉はこれっぽっちも浅宮に対して恋愛感情をいだいてない。反対に迷惑がっている可能性が高いようだ。本心では、浅宮なんか放っておいて、今すぐ藤森の下へ駆け出した心境なんじゃないだろうか。それはそれで頭に来るが、浅宮に入れ込んでいるよりはマシであり、例の計画を実行する上での支障にもならない。まあ、浅宮は不満たらたらだろうけどな。ヒヒヒ。あいつの前に回り込んで、どんな顔をしているか確認してやりたかった。

周囲の景観が一変した。

ここは有名な高級住宅街である。

一軒一軒の家がやたらとデカイ。

それぞれが私ん家の七倍はあるだろう。

こんな所に住んでるってことは、二人とも金持ちのご子息ご令嬢ってわけだ。

和泉はさもあらんという感じだけど、浅宮が良家のお嬢様なのは許容範囲の外だった。

浅宮雪乃の自宅に到着。

なんだよ、おい。真っ直ぐ帰宅しちやっただじゃないか……。

マジで送り迎えするだけの関係なんだな。

これじゃ、浅宮が藤森を押しつけて和泉の恋人になる可能性はゼロだ。

ヒヒヒ。

ご愁傷様。

そう心の中で笑った刹那。

浅宮がドアを大きく開け放って、満面の笑みで和泉を自宅に迎え入れた。

おい！

心の中で盛大な突っ込みを入れた。

冗談は家柄だけにしてくれ。あんましふざけると、家に火いつけるぞ。和泉、三分で出てこい。さあ、出る。今すぐ出てきやがれ。おい、こら！ 優等生、何してんだ？ 大人の体操か？ 汗水垂らして悦楽のダンスか？ ちいっ！ 全然不真面目じゃんかよ！

結局、玄関先まで浅宮に見送られて和泉が帰路に着いたのは、午後七時過ぎだった。

素行調査なんかしなきゃ良かった。

和泉の後をつけながら、そう思った。

【4・和久井弘美】

いえーい！

待ちに待った放課後だねっ。

厳しいお勉強の後は、全身全霊で有意義な自由時間を満喫しちゃいましょー、ってことで、あたし、今、久しぶりに保奈美のお家に遊びに来てるんだよ。中学の卒業旅行帰り以来だから、まるまる一ヶ月ぶりになるのかな。

あたしが「お邪魔しまーす」って叫んで、下駄箱で靴を脱いでたら、保奈美ママが駆け出してきた、ぎゅーって抱き締められちゃったんだよ。相変わらず感情表現豊かな人ですねー。積もる話が山盛りで船盛りでてんこ盛りだから、って理由でリビングに引きずり込まれちゃいそうになったけど、保奈美が叱りつけてくれたから長話に付き合わされずに済んだんだよ。でも、ケーキとジューズを持って部屋まで追いかけてくる根性は凄いよね。あたしも、そのずーずーしさを見習わなきゃ、とか言って、保奈美から和泉君を強奪したりしなかったり……。にやははは、冗談っす。妄想っす。

あたしたちとお喋りしたそうな保奈美ママを強制退室させて、保奈美は制服から部屋着に衣装チェンジ。幼なじみで大親友でクラスメイトな関係なのに、隅っこで着替える恥ずかしがり屋さん。別にスッポンポンになるわけじゃないんだから、隠さなくてもいいのになー。まあ、そういうところが保奈美らしいんだけどさー。そんな堅物さんじゃあ一生かかっても和泉君とえっちできないぞっ、と冗談混じりに忠告してあげると、真っ白な肌を真っ赤かに染め上げて手を上下にバタバタ。現代っ子らしからぬリアクション。そんな様子を見ると、ちゃんと男女交際できるのか、親友としてはちよつと不安になったりならなかったり。保奈美と和泉君がくつつかなきゃ、それはそれで万々歳ってことかな。それで、あたしが彼をゲツトしちゃうっていう寸法なですよー。うわあ、酷い幼なじみっす

ね。心の中がダークな思念の巢窟と化してる感じ。劣情に屈して裏切り者に転身かな？ でも、それは駄目だよっ！ 即刻即座に猛反省！

「今日も一日ご苦労様ってことで、ジュースでかんぱーい！」

「乾杯」

ローテーブルを挟んで向かい合いに座って、オレンジジュース入りのコップを軽く触れ合わせて乾杯。一気に半分飲んで、ビールを飲んだ大人みたく、ふーっと息を吐く。駆けつけ一杯目のオレンジジュースは胃に染み渡るねー。お勉強疲れのゾンビな身体が潤される感じだよ。これはもう命の水だねっ。残りを飲み干して、お代わり宣言しちやおうかな。

保奈美は普段からあんまり水分を摂らないから、ジュースをごくごく飲んだりしないんだよ。お昼ご飯の時以外は、ちびつと唇を湿らせる程度。自動販売機でジュースを買ってる姿なんて見たことナッシング。だから、トイレが近くないのかな？ あたしは三時間に一回のスピードキングなんだよね。膀胱が小さいっていう理由もあるかも。

さーて、お喋り開始のゴングを鳴らすよーっ！

でも、保奈美ママじゃないけど、切り出さなきゃなんない話題が山積みで、何から話そうか迷っちゃうなあ。もうすぐお兄ちゃんのお墓参りに行く日だから、その計画について話さなきゃなんないんだけど……。それよりも、何よりも、まずは転校生の話題で盛り上がりましょう！

「ねえ、保奈美」

「なに？」

「和泉君、あれでいいの？」

「あれ、って？」

「浅宮部長に盗られっぱなしで大丈夫？」

「大丈夫って……何が？」

とぼけちゃってるけど、スカートの裾を両手でぎゅっと掴んで唇を真一文字にしているから、保奈美がかなり落ち込んでるのは一目瞭然なんだよね。可愛いなあ。

「このまま放っておくと部長とラブなデートとかムフフな合体とかしちゃって、益々親密な関係になっちゃうと思うんだよねー。そこんとこ理解してる？ 早めに対処しとかないと、後で泣きを見ちゃうぞっ」

「……対処っていつても、何をしたいのかわからないもの……」

「和泉君は私のものです、って部長に宣言しちゃうえば全てまーるく収まると思うんだよ。和泉君が聞いている前で叫んじやえば、より効果的かな。どう？」

「どう、って言われても……困るだけだよ。わたしと和泉君はクラスメイトっていう関係なだけで、恋人同士じゃないんだから、浅宮部長に文句を言う資格なんかないもの」

「じゃあ、和泉君に告白しなきゃ。優柔不断は大後悔の源だよ。浅宮部長にはもう五、六歩先に行かれちゃってんだからさ、同じくらい積極的にならなきゃ完全敗北必至だよ。今から家に押しかけて、好きって言っちゃえばどうかなー？」

「わたしには無理だよ」

「じゃあ、代わりにあたしが積極的になってもいい？」

「……………」

恨めしそうな顔で睨まれちゃったよー。でも、表情だけじゃ伝わらない場合もあるんだよね。嫌なら嫌って言わなきゃ駄目。特に、浅宮部長みたいな勝ち気な優等生には、がーっと怒鳴りつけてやらなきゃ。

うーん、無理ぽいかな。

ほんと、保奈美は内気ってゆーか、健気ってゆーか、平和主義ってゆーか、頑張らない女の子だよ。いくらお淑やかな良い子ちゃんでも闘うべき時には闘わなきゃ、色々な面で損しちゃうぞっ。普段、保奈美ママとか保奈美妹とかと接する時みたく、学校でもパワフル

でエネルギーシユな態度を見せて欲しいかな。あ、でも、そうなる
と学校での保奈美人氣が天井知らずに急上昇しちゃうから、明るさ
だけが売りの弘美さん的にはちょーっとマズイかな？ んーっ、悩
みどころですねえ……。まあ、煮え切らない親友の為に、あたしが
一肌脱いで裸を晒して和泉君とえっちなことを……。じゃなくて、彼
の本心を聞き出して不安を払拭させてあげようかな。それが、一番
の問題解決方法だよな。

「そんじゃ、あたしが明日の朝一番に、保奈美と浅宮部長のどっち
を選ぶのか、和泉君に訊いてあげるよ」

「お願いだから、訊かないで」

両手を合わせて拝む保奈美。

「なんで？ 和泉君は絶対に保奈美を選んでくれると思うよ」

「それでも……。訊いちや駄目。わたしの側からアピールするのは氣
が引けるもの。どっちが選ばれてもしこりが残るだろうし……。も
うすぐ宮地さんが引つ越すから、それまで待てば、浅宮部長を送り
迎える和泉君の役目も終わるわけで……。そうなれば、和泉君は
必然的に浅宮部長と仲良くしなくなると思うから……」

すんごく歯切れの悪い口調。

自分にとって都合の良い展開を期待しちゃってることを自覚して
るんだね。

でも、言った後に自己嫌悪しちゃうところは保奈美らしいなあ。

あたしは意地悪い笑顔で追撃。

「成り行き任せ？」

「そうじゃないけど……。男の子のことで張り合ったりするのは苦
手だから……」

「もしかして、もし和泉君が部長を選んじやっても、私には神川君
がいますよー、とか思っちゃってる？」

「そんなわけないでしょう！」

「でもさあ、神川君って、絶対に保奈美に氣があるよ。もうぞっこ
んって感じ？ っていうか、和泉君には絶対に保奈美を渡さないぞ、

っていうオーラがひしひしと伝わってくるよね。保奈美の横で、さり気ない風を装って、和泉君の悪口言ってるしさ」

「うん、わかってる。わたしだって神川君のこと好きだよ……。でも……」

「和泉君のことの方がもっと好き？」

「……………」

「うーっ！ 保奈美さんたら、意気地なしなんだからっ！ どーして大親友のあたしにもだんまりを決め込んだんじゃうかな？ ちよっと憤りな感じだぞっ！ 内気にも限度つてもんがあるんだよっ！ あたしは、明日の朝にでも浅宮部長に果たし状を叩きつけて、和泉君にどっちかを選んでもらうべきなんじゃないかなー、って思っただよっ！ 絶対につっ！」

「……………」

情けなさそうに眉をハの字にする保奈美。

まあ、自分の利益の為にがむしやらになれないところも、保奈美の保奈美たる由縁なんだけどね。

「今日のところは、和泉君の話題、棚上げしとく？ それとも、徹底討論？」

ずいっと顔を近づけて二択を提示。

保奈美はたじたじの及び腰で引きつり笑い。

「た、棚上げして欲しいかも……」

「しょーがないなあ、もう！ んじゃあ、和泉君についての話題は一旦切り上げだね」

あたしは笑顔でケーキをぱくり。

んーん、美味しいですねー！

やっぱ、《裏飯屋》の期間限定ブルーベリーケーキは最高ですなしかも、ただで食べれちゃうんだから、味も十五倍増しなのですよ。

えいつ、もう一口ぱくつと食べちゃえ！
むぐむぐ。

んはーっ、至福のひとつきだよ。

保奈美はケーキをちょこつとずつフォークで削り取ってしずしずと食べてるよ。見るからにお淑やかだけど、そんな小さな欠片を口に入れてて味がわかるのかな？ ケーキだけじゃなくて、シュークリームもミルフィーユもちびつとずつ食べる子なんだよね。もっと豪快に大口開いてムシャムシャ食べなきゃ、パティシエの人に申し訳ないんじゃないかな。

中略。

喉が渴いたから水分補給。

「保奈美、オレンジジュースのお代わり頂戴っ！ あ、紅茶とかでもおっけーだよ」

「はいはい、オレンジジュースね」

幼なじみの頼みは大抵嫌な顔をしないで聞いてくれる優しい保奈美。

もしも今後、親友同士で意見が真っ向から対立しちゃうような時が来ても、あたしたちは親友でいられるのかな？ 仲違いしてバラバラになっちゃうのは嫌だな。保奈美とはずっと一緒に遊びたいもん。疎遠になるなんて悲しいよ……。

なーんてね。

自虐モードでダークサイドな自我を発現っすか？

暗いよねー。

にやはは。

保奈美が五分くらい戻って来ないもんだから、あたしはベッドでごろごろして待機。クッションを抱き込んで仮眠態勢ばっちし。で

も、自分のベッドじゃないと眠れない体質なのです。こんなにふかふかで気持ち良い肌触りなのに、お布団に染みついた匂いとかクッションの弾力が気になって睡眠に集中できないんだよ。神経質ってやつ？

あ、保奈美が戻ってきたよー。

「あ、こら、弘美ったら！ またはしたない格好して！ スカート、気にしなさいっていつも注意してるでしょう？」

また叱られちゃったよ。

制服で寝転がってたら、自然とスカートが捲れ上がったちゃったんだね。

でも、二人だけの時くらい見逃して欲しいもんだよ。

「いいじゃん、ぱんつくらい見えても。それよりジューズ頂戴っ！」

「もう、弘美ったら……」

「ほらほら、保奈美さん、お小言はまた明日にでも拝聴させていた
だくから、オレンジジューズをお盆の上から取って欲しいんだよ」

「はいはい」

保奈美は仕方なさそうに溜め息。

あたしはオレンジジューズを受け取って、ごくごく喉を鳴らして
干涸らび警報を解除。

んーん、喉越し爽やか、後味スッキリ、気分は最高だねっ！

これでケーキのお代わりができれば文句なしの薔薇色人生なんだ
けど、自分の体重と相談した結果、追加注文を自重することに決定
っす。うーっ、現実は厳しいなあ。体重計の針が一センチ左にズレ
てくれれば、迷わずにケーキ五個をばくばく食べちゃうんだけど、
実際そんなことしたら理想体型の崩壊を招いて破滅の階段を転げ落
ちちゃうこと必至だよー。おデブの称号（蔑称？）を頂戴しない為
にも、ここは我慢の子だねっ。

「弘美、もう六時過ぎたけど、帰らなくて大丈夫なの？ 大丈夫な
ら、久しぶりに夜ご飯と一緒に食べていってよ」

ちらっと置き時計を見て言う保奈美。

それは、吃驚仰天な報告なのですよーっ！

夕食のお誘いは嬉しいけど、家庭の事情つてやつで足枷きゅーきゅーだから、本日の座談会はこれにてお開きだね。

「のおっ！ やばいっすー。早く帰らないとお父さんに怒られちゃうよー」

頭を抱えて本域の嘆き。

お尻ぺんぺんの恥ずかし折檻は嫌だから、自宅まで全力疾走しかないっすよ。

もう赤信号すら容認つてことで、ゴーホーム、ナウ！

「あたし、帰るねー」

「うん、気を付けてね」

保奈美の見送りを背に受けながら、あたしは閑静な住宅街を猛ダツシユで脱出。スカートひらひらでばんつ丸出しかもしれないけど、お父さんの変態なお仕置きは絶対に嫌だから、パトカーに注意されたって全力疾走は止めないんだよーっ。商店街も繁華街もなんのその。すれ違う男の子たちの視線もお構いなしっす。

そこで、ふと気付く。

あ、しまった！

お兄ちゃんのお墓参りの話、するの忘れちゃってたよお！

うーっ、参ったなあ。戻って知らせてくる？ んー、無理かな。

そんな時間ないもん。

まあ、お墓参りの連絡は明日でいいかな。

そんじゃあ、また次の機会に、ってことで。

【5・神川真治】

闇の帳が全世界を覆い尽くし、地獄の業火が足下から噴き出し、悲鳴と懺悔の大合唱が延々と響き渡っている……。手を掲げれば嘆きの雨が降り注ぎ、口を開けば血の絶唱を吐き散らし、踏み出した道すら崩壊していく……。天地、左右、前後のいずれも絶望が手招きしているようにしか見えない……。これが世界と言えるなら、これが与えられた世界なら、生きている意味などない。自らの手で壊してしまいたい。眼球を抉り出し、鼓膜を貫き通し、舌を引き抜いて、永遠の眠りにつけたい。

僕の世界は漆黒の闇。

光なき理想郷の残骸。

残酷な記憶の汚泥。

死。

全ては、あの鬼畜男の仕業だ。

僕から何もかもを奪っていった。

家族も。

恋人も。

友人も。

残されたのは、この身体と復讐心だけ。僕には、奴を法的に裁かせる以外、何の目的もなく、夢も希望もない。そう思っていた。

奴と刺し違えてでも報酬を支払う。そう墓前に誓って来た。

しかし、僕は出会ってしまった。

彼女と出会ってしまった。

藤森保奈美。

僕が好きになった二人目の女性。

あの色魔は、必ず彼女を誑かして自分の所有物にしようとする。心身共に自分の物にしようとする。そして……。頃合いを見計らって必ず殺人を犯す。彼女の体が無慈悲に切り刻み、残酷に腑分けし、

容赦なく世間の晒し者にする。あの鬼畜男はそういう種類の犯罪者なのだ。

常軌を逸した獣。

殺人鬼。

いや、もつと酷い蔑称を与えなければ奴を正確に表現しているとは言えない。

でも、奴は……犯罪者ではない。
なぜか奴は……正義の味方だ。

常に警察と共にあり、奴が起こしたはずの猟奇殺人事件を解決へと導く。

完全におかしい。

この世界はおかしい。

いわば、悪鬼羅刹の楽園。

そこに巣くう美しき魔物。

正義の側に立つ悪魔。

そいつが、またもや僕の好きな女性に目を付けた。

だから、僕は闘う。全力で、ねじ曲げられた正義を糾す。

もし奴の仲間が勢揃いしたら、この街は完全な地獄と化すだろう。僕と奴らが暮らしていた街のように、解体殺人の発生が日常の世界に貶められてしまう。

だから、僕は闘う。全力で、奴の世界を崩壊させる。

そして、この手で、彼女を幸せにするのだ。

それが僕の償いだ。

亡くなった家族に対しての……。

失った友人たちに対しての……。

犯され、刻まれ、殺され、晒され、貶められた恋人に対しての……。

僕なりの償いだ。

「なあ、神川、なに黄昏てんだ？」

隣を歩いていた中嶋剛志が背中をどやしつけてきた。

乱暴なスキンシップだ。でも、痛みほどに不快感を覚えない。この男は、僕よりもコミュニケーションの取り方が巧みなのだろう。影のない荒削りの笑みが眩しい。裏表のない性格は、ある種の癒し効果を発揮するようだ。一緒にいると、失ったものを取り戻せそうな気がしてくる。それは絶対にあり得ないのだが……。

不思議な男だ。

一緒に帰ろう、と声を掛けられた時は、迷惑にすら感じていたのに、今では心楽しさを感じている。

僕は小さく首を左右させた。

「黄昏てなどいないよ。ただ少し考え事をしていただけだ」

「何考えてたんだ？」

中嶋は突っ込んで訊いてきた。

それを不愉快に感じさせず、自然な会話と認識させる能力は特筆ものだろう。不器用な僕には到底無理な芸当である。きっと将来、女性にモテるに違いない。

「和泉真悟について」

「和泉？ あいつが浅宮先輩とセックスしたかどうか、か？」

「……全くの的外れとは言えないが、正解でもないよ」

「じゃあ、何だよ。隠してねえで話せよ」

馴れ馴れしい調子で促してくる。

僕は意識せず苦笑した。

「君は、和泉真悟という男をどう思う？」

「どう、って？」

「あの見栄えの良い外見ではなく、奴の人間性をどう評価している？」

「人間性？ 俺と奴は昨日今日に会ったばかりだぜ。見てくれならともかく、そんなもん評価できるわけねえよ」

「そうか……。確かに君の言う通りだ」

「なんで和泉の評価なんか訊くんだ？」

そう質問されたけど、僕は答えずに視線を足下へと向けた。

「……奴は、藤森さんをどう思っているのだろう？ 和久井さんはどう思っているのだろう？ 浅宮さんを同じ人間として見ていないのは、奴の言動から察せられるが……」

「おいおい、神川、急に下向いて独り言かよ。陰気にぶつぶつ呟いてねえで会話しようぜ」

唐突に肩を組まれた。

少し驚いた。

「……ああ、すまない。奴が、僕の予想に反して、藤森さんではなく浅宮さんと仲良くしているから……少々意外だね」

浅宮雪乃と親密な関係を築けば、それだけ藤森保奈美とは疎遠にならざるを得ない。クラスメイトとしての付き合いは友好的な関係を維持したまま変化しないだろうが、藤森保奈美から見た奴の恋愛対象としての評価は下がっていくだろう。現に、彼女は今日、奴との行動を避けていたようだ。

「浅宮先輩も結構な美人さんだろ。和泉が好きになっても別におかしかねえぞ」

中嶋は勘違いも甚だしい意見を述べた。

奴が人間を好きになることなどない。奴は自分以外を人間として認識していない。奴と対等に会話できるのは、あの化け物四人衆だけだ。そして、奴らは人間を殺して遊ぶ鬼畜集団なのだ。もし奴らが友好的関係を築こうとしている人間がいたら、解体して遊ぶ標的を捉えようとしている、と見るべきなのだ。

そう、まさに浅宮雪乃がその状況にあると言えるだろう。

彼女を救うことはもう無理だ。

近々バラバラに解体されて発見されるに違いない……。

しかし、その過程で当初の獲物であった藤森保奈美に愛想を尽かされては、本末転倒なのではないのか。

それとも、奴が彼女を狙っていると思っていたのは、僕の勘違いなのか？

「それに、和泉は浅宮さんと付き合ってるわけじゃなくて、安心感を与える為に通学路を送り迎えしてるだけだろ」

「奴が浅宮さんを送り迎えしている理由などどうでもいい。重要なのは、藤森さんが奴の行動をどう捉えているか、だ」

「そりゃ、快く思っちゃいねえわな」

「……彼女は、奴に好意以上の感情をいだいているかな？」

「和泉に対する態度からして、九十九パーセント好きになっちゃまってるだろうぜ。奴が転校してきた瞬間から、俺やおまえの存在なんて視界に入ってねえだろ」

「そうだね」

僕は込み上げてくる苦笑を噛み殺す。

「君には好きな女性がいるかい？」

「俺か？ 俺は美少女とか美人さんの類は大好きだぜ。選り好みはしねえ。清楚な藤森さんも、天真爛漫な和久井も、真面目過ぎる浅宮さんも、えろっちい笹倉先生も、全員な。来る者拒まず去る者追わず、が俺のポリシーさ。まあ、去られっぱなしっていう噂がなきにしもあらずだけだよ」

中嶋があっけらかんとした口調で自嘲した。

「そう言うおまえはどうなんだ？」

「僕は藤森さんのことが好きだ」

正直に答えた。

「おっと、そうか……。だから、和泉につっかかしてるわけか」

「……っつかかっているわけじゃないよ。ただ僕は、藤森さんの幸せの為に、彼女を和泉にだけは渡したくない」

「おまえがあいつを幸せにするってか？」

「……奴以外なら誰と付き合おうと僕は関知しない」

「藤森さんが俺と付き合っても、か？」

「ああ、構わない。むしろ祝福するよ」

「なんで和泉をそもも嫌うんだ？ 同族嫌悪ってやつか？」

「違う！」

ついムキになって否定してしまった。

中嶋の表情からして、僕の顔は醜く歪んでいるだろう。たぶん憎悪剥き出しの悪鬼面になっているに違いない。しかし、奴と同一視されることだけは我慢できなかった。

「おいおい、怖い顔すんなよ」

「すまない……」

「おまえ、あいつにすんげえ恨みでもあるのか？ じゃなきゃ、そんな顔できねえぞ」

「……………」

僕は無言を貫いた。

自分を取り巻く全てのものが奪われ、壊され、貶められ、辱められ、捨て去られた者にしか、奴に対する思いを共有することはできない。

良い意味で無為の平和に浸っている中嶋に、僕の憎悪を共感できるわけがない。

辛い過去は戻らない過去だから和泉に対する悪感情を全て水に流してこれからは自分自身の為に前向きに生きよう、という無能力ウンセラーが吐きそうな勘違い極まりない助言するのが落ちだ。

「そんじゃ、また明日な！」

「おやすみ」

中嶋とは繁華街で一番繁盛しているというカラオケ屋の前で別れた。

他校の女性と合コンをするそうだ。

青春を謳歌しているクラスメイトに対して多少の羨ましさを感じたが、僕の青春は梶浦京香が殺害された瞬間に終わったのだ。

そつ心の中で呟く。

誓いは果たす。
絶対に。

第四章 墓穴の連鎖 【1・藤森保奈美】

四月二十一日、月曜日。

浅宮部長の貞操が無事であつたかどうか、という実に品のない議論を巻き起こした《美術部部長強姦未遂事件》から既に五日が経過していた。

週も改まつたので和泉君の送迎を断つても良い時期であるはずなのに、今朝も浅宮部長は彼を独り占めに一緒に登校してきていた。しかも、傍目を一切気にせず、ラブラブ光線全開で和泉君とイチャついている始末。明らかに、彼に恋している。わかりやすいくらいに恋愛感情剥き出しだ。それが気に障ってしょうがないのだけど、わたしは面と向かつて不満をぶち撒けられない性格なので、登校途中で二人を発見しても指をくわえたまま黙つて後をつけて行くだけで、彼に声を掛けたい思いをぐつと堪えるしかなかった。

この気持ちを表現するには、酷く下品な単語を羅列する必要があるので、自宅の私室内でしか声に出すことは不可能である。自宅においても、隣が妹の部屋なので、大きな声で罵声を発するのは厳禁だ。わたしのストレスは、この数日の間、溜まっていく一方だった。まあ、登校時と下校時だけ我慢すれば、大抵の場合、わたしが和泉君と行動を共にしているので、限界を突破するほどには不満を覚えないうし、お淑やかとは到底言えない本性も眠りについていてくれるのだが……。浅宮部長の顔を見ると、どうしても瞬間的にカッとしてしまう。

彼女は、降りかかる身の危険から守ってくれる最良の男の子として和泉君を頼りにしているだけだろうし、自分の置かれている立場を利用して関係を深めようとするのは自然な流れなのかもしれない。ただ単に自分の気持ちに正直なのだろう。わたしの勇気のなさと比較すると、段違いに積極的だ。見習うべき点である。それに、準恋人状態の彼女の方が、和泉君とより多くの時間を共有しているわた

しに對して、多くの不満を持っているのかもしれない。

そう、實際の状況は、浅宮部長にとって好ましいとは言い難い。

和泉君自身が部長との恋愛関係を完全否定しているし、登下校時以外の接触はないと断言しているのだ。部長を氣遣つて口には出さないけど、本気で迷惑がつている様子である。つまり、恋愛感情は一切なく、帰宅後や休日にデートしたりしていない。純粹に送り迎えしているだけの関係。親密度から言えば、わたしの方が遥かに濃度が高いだろう。

しかし、それでも不愉快になる。

わたしは心が狭い女なのだ。

けれども、そんな悩みも今日限りだった。

喜ばしいことに、宮地優が本日をもって詩海高校から東京都外の学校へと転校し、家族ごと遠くの街に引っ越していくのだ。

行き先は、北海道のどこか。

つまり、本日の下校を待たずして、和泉君の任務も終了というわけである。

この情報は鈴原先生から直接聞いたもので、信頼性は抜群だ。それを聞いた時、わたしは小躍りしそうになった。それほど嬉しかった。

和泉君は何も言わなかったけど、表情を僅かに綻ばせたような気がする。

弘美は大はしゃぎで跳ね回り、私の気持ちを代わりに目一杯表現してくれた。

神川君については……正直あまり語りたくない。何かというと和泉君の悪口を言つて、わたしに共感を求めてくるし、浅宮部長に対しても友好的とは程遠い接し方をするのだ。本来の性格は悪くないと思うのだけど、和泉君への敵対心が何もかもを歪めてしまっているようである。ちよつと言動が菅野に似てきている感じで怖かった。

放課後。

「保奈美、ほなみー！」

わたしが帰宅の準備をしていると、カバンを背負って帰る準備万端の弘美が、大声を上げて駆け寄ってきた。

「大きな声を出して、どうしたの弘美？」

「ニュース、にゅーす！」

弘美は、雛鳥のように両手をぱたと羽ばたかせ、「ニュース」を連呼した。満面から面白事件遭遇のオーラが放出されている。耳寄りな情報を仕入れてきたのだろう。

「どんなニュースなのかな？」

わたしが訊くと、弘美は後ろの席でカバンに荷物をしまっていた和泉君に目をやり、大きな身振りで手招きした。

「和泉君も聞いてよっ」

和泉君は手を止めて視線を上げ、優しい感じに微笑んだ。

「何かな、和久井さん？」

「重大ニュースだよ。じゅーだいにゅーす」

「美術部の活動が再開されるんだね？」

「……………」

弘美は声なく、ぱくぱくと口を開閉させた。

凶星だったようだ。

彼女は自分の口から発表したかったらしく、先に明かしてしまつた和泉君を、頬を膨らませて恨めしそうに睨み付けた。

「和泉君、知ってたの？」

ダメージ修復の為に三十秒間を費やしたけど、弘美は持ち前の立ち直りの速さで笑顔を回復し、わだかまりのない口調で訊いた。

「いいや、ボクは何も知らないよ」

和泉君は薄く微笑んで否定した。

弘美は口先を尖らせる。

「そんじゃ、どうしてわかつたのかなっ！」

ちよっと怒り調子で叫んだが、言った後で何かに気付いたようだ。
「あっ、そっか！ 今日朝、浅宮部長と一緒に学校に来る時に、

部長の口から聞いたんだね？」

「それは違うよ、和久井さん」

和泉君は心持ち目を細めた。

「浅宮さんからは何も聞いていない。部活動の再開については、キミの嬉しそうな表情と、本日をもって宮地優が転校してこの街からも引越しをする、という二つの情報から導き出したんだよ。問題を起こした張本人がいなくなれば、美術部の活動を停止させている意味はなくなる。部活動の再開許可が下りて当然だよ。何の不思議もない」

「ふーん。なるほど、そうだよなー」

感心したように弘美は頷いているけど、その程度なら誰でも推察できると思った。

和泉君が特別凄い推理をしたわけではない。ちょっと頭の回転が速い人なら、ぴんと来たはずだ。まあ、わたしは部活動が再開されるなんて予想だにしていなかったけど……。

「和泉君、部活してくんではしょ？」

弘美は机に手をついて、ぴょんぴょん飛び跳ねながら訊いた。

小振りなお尻がぷりぷりと上下する。

後ろから見ると、丈の短いスカートの裾がひらひらと捲れて、薄いピンク色の下着がチラチラ……。

今のところクラスの男子たちは、帰り支度やお喋りに気を取られ、美少女のパンチラには気付いていないようだ。でも、じきに気付くだろう。

本人は男子の視線に全くの無頓着だが、見ているこっちが恥ずかしいので、彼女のお尻をぺちんと叩いて注意を促した。

「むーっ！ なあに、保奈美？ いきなりお尻叩くなんて。痛いじゃないかっ！」

「スカート、気にして」

「あ……うん」

弘美はぺろっと舌を出した。

彼女の男子に対する無意識のサービス行為は、奔放な性格の裏返しだから、あまり厳しく叱れない。昔から注意を喚起する程度だ。彼女は露出狂ではないので、学校では素直に注意を聞き入れ、すぐさまはしたない行動を改めてくれる。

「見えてた？」

弘美はお尻を押さえて訊いてきた。

「ちょこつとだけ」

「ふーん」

率先して下着を披露しているわけではないし、下着を見られる程度では大して羞恥を感じない女の子なので、弘美に反省の色はない。中学二年生の夏、体育の授業前に着替えを覗かれた際、「水着も下着も同じでしょ。直に裸を見られたわけじゃないから恥ずかしくないよ」と言つて、けろつとしていたのだ。

その時、わたしは親友として羞恥に身を焦がした記憶がある。

まあいいか。

隣を見ると、神川君と目が合った。

見つめ合ったまま硬直。

若干の狼狽を示す美少年。視線が泳いでいる。

どうやら弘美のパンチラをこっそり観賞していたらしい。

端正な顔を紅潮させている。

美少年の意外な反応がちょっとおかしかった。

和泉君の反応を見てみると、下着露出注意報が聞こえなかったのか、女子高生の下着に興味がないのか、黙然とカバンに荷物を詰めていた。

「和泉君、今日からは部長と帰らなくていいんでしょう？」

何事もなかったかのように弘美が訊いた。

和泉君は席を立ち、カバンを小脇に抱える。

「宮地優が浅宮さんに危害を加える恐れがなくなれば、ボクの役目も終わりだから、彼女を送り迎えする任務も終了だろうね」

「じゃあ、部活終了後は一緒に帰れるね？」

「そうだね」

「わあい！　よかったね、保奈美」

「うん……」

わたしは曖昧に頷いた。でも、心の中では万歳三唱。

和泉君を見ると、普段と何ら変わらない穏やかな微笑みを浮かべていた。

「神川君も来るよね？」

「ああ、勿論だよ」

神川君は斜めな笑みを作って頷いた。

「じゃあ、三人は美術室にゴー！」

拳を突き上げて号令する弘美。

「あれ？　弘美は部活サボリ？」

「うん、ちよつと家族のことで用事があるから……。でも、保奈美、あたしがいない所で美少年二人とイチヤイチャしちゃう駄目だよ。勿論、えっちも駄目。抜け駆け禁止令を発令しますからねー。いい？」

「そ、そんなことしません！」

「どうかなー」

「親友を疑らないで」

「信じてあげるよ、保奈美。そんじゃあ、みんな、また明日ねーっ！」

弘美は大袈裟に手を振って、スカートを翻しながら教室を駆け出していった。

【2・藤森保奈美】

わたしは、神川君と和泉君を伴って、美術室へと向かった。他愛ない会話を交わしながら階段を上がる。

すると、五階に差し掛かった所で、唐突に背後から声を掛けられた。

「よう、藤森！ それと転校生二人も久しぶりだな。おまえらもこれから部活か？」

薄っぺらな声音。

顔を確認する前に、声の主を判別できた。

美術部の二年生部員、氷室康広である。

「氷室先輩も部活動に参加ですか？」

無視するわけにもいかないし、和泉君と神川君が礼儀を守って先輩に一礼していたので、わたしも仕方なく、ぺこつと頭を下げて訊いた。

「んー？ ああ、まあな」

面倒臭げな返事。

意外にも部活に参加するらしい。先日は、部活には絶対顔を出さない、と断言していたのに、どのような心境の変化があったのだろう。浅宮部長を含めた部員全員とのソリが合わない外れ者だから、美術室に行ったところで、すぐに口喧嘩を吹っ掛けて場の雰囲気が悪くするだけだろうに……。

個人的には参加を控えてもらいたい人物だった。

「どうして急に、部活に出る気になったんですか？」

疑問を言葉にしてみた。

氷室は鼻で笑い、階段を上がり始めた。

わたしたちもそれに続く。

「あの辛気くせえ宮地先輩がいなくなっただけでも格段に居心地が良くなっただろ。部活動にも身が入るってもんだ。それに、美術部

の新副部長を誰にするか、早急に決める必要もあるからな」

もう自分が次期副部長に選任されたも同然の口振りで言う氷室。その自信はどこから生まれるのだろう。

周囲に迷惑を散乱させるプラス思考の持ち主だ。

「新しい新副部長は、三年生の中から選ばれるんでしょう？」

「そりゃわかんねえぞ。軟弱な三年生の部員が俺の説得に耳を貸さなけりゃ、多数決になるかもしれねえな。まあ、気の強い部長様以外は、誰も俺に楯突かねえと思うぜ」

氷室はそう言っただけで笑った。

三年生を恫喝して言いなりにし、副部長に選ばせるつもりらしい。でも、そんな蛮行を浅宮部長が許すはずがなかった。彼女は正義感が非常に強い人なのだ。自分の非が証明されない限り、絶対に意見を曲げたりしない。だから、彼が副部長に選出されるわけではない、と思っていたかった。

「もし副部長選びが多数決になったら、新入部員二名は俺に票を入れろよ。楽しい部活動を演出してやるからよ」

氷室は先日の乱闘騒ぎを忘却してしまったかのように、へらへらと軽薄な笑みを浮かべて和泉君の肩に手を置き、馴れ馴れしい口調で言った。

きつと即座に手を払い除けられる、と思ったのだけど、和泉君は無礼者に対して何のリアクションも起こさなかった。というより、外の様子を気を取られていて話を聞いていなかった。

窓の外に、何か気になるものでも？

「何だよ、新入部員。だんまりか？」

舌打ちする氷室。

和泉君は更に窓際に近づいた。

「いいえ、少々ボクの気を引く人物が校舎前を歩いているので……。氷室先輩も下を見てもらえませんか？ 神川君と藤森さんも」

和泉君に促され、わたしと氷室は階段の窓にへばりついて校舎の下を見下ろした。

「あれ……？ あの人……」

わたしは思わず呟いた。

そこには見知った男子生徒の姿があった。

しかも、現在、学校の敷地内に存在してはいけな人物である。

「ありや……宮地副部長様じゃねえか？」

氷室も怪訝そうに呟いた。

神川君は無言。

「ボクの見間違いではありませんね？」

ぱっと見てわかることを和泉君はいちいち確認した。

わたしと氷室は同時に頷いた。

まさに見紛うことなき宮地優。その姿が校舎の下にあった。ふらふらと頼りない足取りで玄関の方へ向かって歩いている。

「なんで奴が？」

氷室がわたしを見た。

わたしが、宮地優が校内にいる理由を知るわけがない。

「浅宮部長、大丈夫かな？」

「今は大丈夫だろうね」

穏やかに応じる神川君。

こんな時でも冷静だ。

「美術室に急いだ方がいいんじゃないかねえか？」

氷室は和泉君を見て言った。

「どう考えてもマトモな動機で登校したんじゃないだろう。下手をすると、ム力つく部長様を今度こそぶっ殺しに来たのかもしれない」

「単に転校の手続きをする為に登校したのかもしれない」

冗談ばさを欠片も交えず、和泉君は真面目な口調で言った。

そんなわけないでしょう！

思わず叫んでしまうところだった。

問題を起こした生徒が、自ら転校の手続きをしに登校するわけが

ない。警察と学校が登校を許さないだろう。常識的に考えて、それは親の役割だ。

「和泉、戯言をほざいてないで美術室へ急げ。浅宮さんの安全を確保するんだ。宮地優は僕が何とかする！」

神川君は現実的な指示を出してから、階段を二段飛ばしで駆け下りていった。

「どんな僅かな可能性も見逃さずに熟考してから判断する。それが後悔しない選択肢を得る最良の術だよ、神川君。キミはそれを学んでいるはずだ」

和泉君は独り言のように呟いて、窓から離れた。

「さあ、美術室へ行こう。浅宮さんの無事を確認し、身の安全を図ってもらうことが最優先事項だ」

彼は階段を早いテンポで上がっていく。

まずは先生を呼んでくるべきなんじゃないか、と思ったけど、たぶん神川君が職員室へ行って先生に事態の急を告げてくれるだろうし、浅宮部長の身柄を確保することを第一に考えるという和泉君の意見は正しいので、余計な意見は言わないでおいた。

わたしと氷室も急いで階段を駆け上がった。

六階は騒々しかった。今日は軽音楽部の活動日らしい。視聴覚室から彼らの奏でる耳障りな重低音が漏れ響き、廊下の窓ガラスを振動させている。不協和音の具合からして、プラスバンド部は活動していないようだ。

「ん？　ありや、部長様じゃねえのか？」

トイレの手前で氷室が立ち止まり、廊下の突き当たりを指差して言った。

確かに廊下の奥に立っている女生徒は、美術部部長の浅宮雪乃だ。しかし、なんだか様子がおかしい。

美術室ではなく音楽室の前に立ち、じっと見据えるようにわたしたちを睨んでいる。

いや、和泉君を怖い顔で睨み付けている。

「おう、部長様、そんな所で何してんだ？」

皮肉混じりのお茶かけ口調で氷室が呼び掛けた。

それに対する返答はなかった。

浅宮部長は真っ直ぐに和泉君を睨み、徐に口を開いた。

「和泉君、私との交際を否定しているっていう噂は本当なの？ 私との関係は今日でお終いな？ 私よりも藤森さんを選ぶの？」

浅宮部長の口から今まで聞いたことのないヒステリックな悲鳴が迸った。

廊下の端から端まで瞬時に声が伝播する。

「和泉君……」

わたしは対象者の顔を見上げた。

和泉君は不思議そうに浅宮部長を見ていた。彼女が意味不明の外国語を口走ったかのように、不可解そうな顔をしている。

「！」

遠目でも視認できるくらい顔を強張らせた浅宮部長は、目尻が裂けるんじゃないかと思うほど目を見開いた。

「私、死ぬから！」

そう叫ぶや否や、彼女は音楽室へと駆け込んだ。

音高くドアが閉ざされ、廊下が静寂によって支配される。

いつの間にか、視聴覚室から漏れ聞こえていた騒音は止んでいた。

「……………」

わたしは呆然と立ち尽くす。

死ぬ……って、どういうこと？ わけがわからない。急激な展開に脳がついていっていない。なぜ浅宮部長は音楽室に入っただけなの？ 部活は美術室でやらなきゃ……。

「おい、やべえんじゃないのか……？」

氷室が掠れた声で言った。

「あいつ、死ぬとか叫んでたぜ？」

死ぬ？

自殺するってこと？

浅宮部長が？ どうして？

和泉君がわたしを選んだから？

「えっと……和泉君、どうしよう？」

即座に音楽室へと駆け込み、浅宮部長の自殺を止めるべきなのだろうけど、わたしと氷室は和泉君に判断を委ねた。それが一番正しいことだと思ったから。

しかし、和泉君は酷く冷めた目を音楽室に向け、呆れたような眩しき声を発した。

「彼女が死を選ぶ意味が理解できない。戯れの関係が切れただけで自殺するなど、彼女の性格からしてあり得ない。第一、自殺の場所に音楽室を選択する合理性がない。つまり、これは……」

和泉君は小さく溜め息を吐き、わたしと氷室を交互に見た。

浅宮部長の身を全く案じていない顔だった。むしろ、とんだ茶番に巻き込まれて迷惑している、という感じだ。人が一人死ぬかもしれない状況で、しかもその相手が数日間登下校を共にした女の子なのに、生死を憂う素振りを見せない。人間が持っているべき情が皆無だ。そんな男の子に少しでもだけ恐怖を覚えた。

「とにかく音楽室へ行こう」

わたしたちは《廊下を走ってはいけない》という校則を破って音楽室の前まで走った。

当然のことながら鍵は掛かっていなかった。

ドアを開けて室内へ踏み込む。

「あ……」

誰かが声を発した。

わたしだった。

「浅宮部長……」

呼び掛けてみた。

返事はなかった。

あるわけなかった。

音楽室に浅宮雪乃はいた。

いたけど、もういないも同然だった。

「おい、冗談じゃねえぞ……」

部屋の内にあるピアノの向こう側で、窓のカーテンレールに紐を掛けて吊り下がっているもの。それを見て、氷室が呟いた。愕然として言葉を失っている。

そこには、紐で首を括った浅宮雪乃の姿があった。

首吊り自殺？

ほ、本当に自殺しちゃった……？

網膜に映し出された光景を心が処理しきれず、わたしはぽかーんと口を開けて見続けるしかなかった。

【3・藤森保奈美】

部長の首吊りを確認した氷室が怒鳴った。

「おい、おまえら、職員室に行つて、誰でもいいから先生を呼んでこい！」

耳元で大声を出されたから酷く驚いたが、呆然と突っ立っている場合ではないことくらい理解しているので、わたしは踵を返して駆け出そうとした。

「和泉も行け！」

また氷室が怒鳴った。

わたしは和泉君を見る。

彼は物凄く怖い顔をしていた。浅宮さんに対して怒りを覚えているようだ。眼鏡をもぎ取るようにして外し、鋭すぎる目を更に険しく吊り上げる。強い眼光などという生易しい視線ではない。殺意に近い眼力をもつて、首を吊った美少女を睨んでいる。しかし、もう一度、氷室に職員室へ先生を呼びに行くよう命令されると、微かに頷いてわたしの手を掴み、廊下へ駆け出した。

「和泉君、ちょ……待って！　こんな……転んじゃうよ！」

わたしは足を纏れさせながら叫んだ。

すると、いきなり和泉君は無言でわたしを抱きかかえ、更にスピードアップして走り出した。

廊下を突っ切り、階段を駆け下り、保健室の前を通り過ぎ、職員室に駆け込む。

これほど急いでいるにもかかわらず、和泉君は職員室に入る際、礼儀正しく「失礼します」と一礼した。

勿論、入室する前に抱っこは終了。

もっと違うシチュエーションで抱き締めて欲しいなあ、と一瞬思った。

職員室内には、鈴原健一の姿しかなかった。

「んー？ 和泉に藤森じゃないか。どうした、放課後に二人揃って？ 結婚が決まったから、俺に仲人をしろって要請しに来たのか？」
駆け込んだわたしたちを見て、鈴原先生が暢気な声を出した。
「先生、冗談を言ってる場合じゃないんです！ 急いで音楽室に行つて下さい！」

わたしは甲高い声で叫んだ。非常事態を察せずに戯言を吐く担任教師に向けた怒りによって、ではなく、結婚というフレーズがもたらした恥ずかしさと興奮から、つい叫んでしまったのである。

和泉君と結婚？

わたしが？

想像するだけで顔から火が出そうだ。

だけど、今はそんな甘美な妄想に浸って、桃源郷へとトリップしている場合ではない。

「自殺です！ 自殺しちゃったんです！」

「は？ 何言ってる、藤森？」

鈴原先生は眉をひそめて聞き返してきた。

「だから、死んじゃったんです！ 浅宮部長が！ 首を吊って！」

「美術部部長の浅宮雪乃が、音楽室にて首吊り自殺を図ったのです」
動転してしどろもどろのわたしに代わって、和泉君が冷静な口調で事態を説明した。

「首吊り自殺？ あの浅宮が？ マジか？」

「一緒に来て下さい」

「お、おう！」

わたしたちは鈴原先生を伴って、再度六階まで駆け上がった。
その際も、わたしは和泉君に抱きかかえられて移動した。
こんな時だけど、天にも昇る幸せ気分……。

六階の廊下は無人だった。

視聴覚室からは、鼓膜を破壊する不協和音が漏れ出ている。軽音楽部の部員が、演奏を再開したようだ。

わたしたちは音楽室の前まで走った。

なぜか音楽室のドアが閉ざされていた。

「美術室じゃなくて、音楽室なんだな？」

確認するように先生が訊いてきた。

「はい」

「そうか」

鈴原先生はドアに手を掛け、横にスライドさせようとした。ガタンというドアの突っかかる音。

開かない？

なんで？

「おい、開かないぞ？」

不審げな声を出し、鈴原先生がもう一度ドアを引いた。

ガタツという音。

開かない。

「このドア、鍵が掛かってるみたいだぞ？」

担任教師が疑惑の眼差しを向けてきた。

教え子の性質の悪い狂言なのでは、と疑っているようだ。

「明らかにおかしいですね。先程、このドアは施錠されていませんでした。氷室先輩が何かを意図してドアに鍵を掛けたのでしょうか？ それとも……」

「おいおい、和泉、職員室まで鍵を取りに行ってる暇なんてないんじゃないのか？」

「先生、心配はご無用です。音楽室の中で待っている氷室先輩に声を掛ければ、内側からドアを開けてもらえると思います」

和泉君が冷静そのものの口調で言った。

頷いた鈴原先生は、乱暴にドアを叩きながら、大声で氷室の名前を叫ぶ。

「おい、氷室！ ドアの鍵を開けてくれ！ 浅宮が大変なことに

なってるんだろ？ 氷室、聞こえてないのか？ おい！ こらっ！
返事をしろ！」

先生は、ドアを叩き壊す勢いで拳を打ちつけながら、呼び掛け続ける。

すると、音楽室の隣に位置する《音楽美術準備室》のドアが開き、軽音楽部顧問で音楽教師の笹倉さくらが顔を出した。

茶髪でミニのタイトスカートという教師にあるまじき格好をした不良教師である。

「どうしたの？ 騒がしいわよ！」

煩げに声を荒らげたところで、笹倉先生は同僚教師の存在に気付いた。

「鈴原先生、どうしたんですか？ 大きな声を張り上げて……。また何か不祥事でも？」

「あ、笹倉先生、準備室にいらっしやったんですか。それならそうと早く言って……。いえ、そんなことを言ってる場合じゃないんです。うちのクラスの生徒が、この音楽室の中で浅宮雪乃が自殺した、と言うもので……」

「浅宮さんが自殺？」

笹倉先生が若作りした顔にきつくシワを刻んだ。

「それは何の冗談ですか？」

「冗談なんかじゃありません！」

わたしは喚くようなトーンで叫んだ。

一刻も早く音楽室に入って浅宮部長を助けなければならない。もしかししたら命が助かるかもしれないのだ。

「ドアを破壊しても宜しいでしょうか？」

和泉君がドアに手を当てて訊いた。

真剣な目をしている。

「あ、駄目よ！ そんな必要はないわ。準備室に鍵があるのよ。えっと……ちょっと待ってなさい！」

和泉君が本気でドアをぶち破るつもりなのだと察した笹倉先生は、

慌ててストップをかけ、準備室に飛び込んだ。そして、十秒ほど出てきた。その顔には困惑が宿っていた。

「鍵がないわ。なくしちゃったみたい」

「え？ ちよっ……せ、先生！」

この非常時に、このズボラ教師は……。

「怒鳴らないで、藤森さん。大丈夫よ。美術室と音楽室の鍵は兼用なの。だから、美術の剣崎先生も鍵を持ってるわ。ひとつ走り行つて、鍵を借りてきなさい」

「はい」

わたしは一人で美術室へと走り、室内でオレンジ色の髪の女生徒と談笑しながら絵を描いていた剣崎先生に、緊急事態なので鍵を貸して欲しいとお願いした。

「藤森がそんなに慌ててるなんて珍しいな。どうした？ 美術室の鍵なんか借りてつてどうするんだ？」

「いいから、貸して下さい！」

「あ、ああ……。わかった。貸してやるから、そう急かすな」

剣崎先生はズボンのポケットから玩具みたいな小さい鍵を取り出した。

「これで準備室の俺の机の引き出しを開けてくれ。その中に美術室の鍵が入ってる」

「ありがとうございます！」

わたしは鍵を引つたくるようにして美術室を飛び出し、音楽室の前まで駆け戻った。

「先生、これで剣崎先生の机の引き出しを開けて下さい。その中に美術室と音楽室の兼用の鍵が入ってるそうです！」

「はいはい」

軽いノリの笹岡先生。まだ性質の悪い悪戯だと思っているのか、事態の深刻さを全く認識していない。彼女は身軽に準備室へと姿を

消し、三十秒くらいで出てきた。その手には、見慣れた銀色の大きな鍵が握られている。

「今すぐに開けますからねー」

笹岡先生は、お茶かけ調子でドアの鍵穴に鍵を差し込んだ。

ガチャ。

ドアロックが解除される小さな音。

「さあ、これで開いたわよ」

鈴原先生は、その言葉を聞くより速くドアを引き開けて、音楽室内に踏み込んだ。

そして。

「ぐうつ……こりゃ酷い……」

担任教師の獣じみた呻き声。

「きゃあああああああ！」

音楽教師がソプラノ声を駆使して絶叫。

「き、きゃ……あ……」

もはや悲鳴にすらならないわたしの声。

そんな中でただ一人、和泉君だけが静かに室内を見回していた。

わたしはシヨックのあまりに目を背けられず、視界に広がる惨状を直視していた。

血塗れの音楽室。

嫌な臭い。

理解不可能な光景。

何より目を引いたのは、さっきまで存在しなかったものだった。

「氷室……浅宮……。どうして？」

鈴原先生の力ない呟き。

そう、氷室康広も死んでいた。

首吊り状態の浅宮部長の足下で、胸に包丁のような刃物を突き立てたまま倒れている。

そんな死に様。

「どうして……氷室先輩まで？」

理解できない。

浅宮部長が首を吊って死んでいる……そのことは一応理解できる。さつき見て知っているから、もう彼女が死んでいることに不思議はない。でも、その下に倒れている氷室は……死んでいていいわけがなかった。死んでいる意味が理解できなかった。

「警察に連絡をして下さい」

和泉君が心持ち強い口調で指示を出した。

茫然自失状態の教師二名を正気づかせるくらい厳しい声だった。

【4・藤森保奈美】

警察が大挙してやって来た。

事件に無関係な生徒は強制的に帰宅させられ、事件に僅かなりとも関係していた生徒は視聴覚室に押し込められた。当然、わたしと和泉君、そして途中で別行動を取った神川君も視聴覚室行きだ。さつきまで視聴覚室を使用していた軽音楽部の部員数名も帰宅を許されず、わたしたちと一緒に室内で待機を命じられている。つまり彼らの中に犯人がいる可能性もあるわけだ。勿論、部活動を再開する予定だった美術部の部員もいる。まあ、一人だけだったけど……。わたしと殆ど面識のない人だ。他の部員は……幽霊と化して帰宅していたらしい。色々な意味で美術部の前途は真つ暗闇だね、と思った。

生徒以外では、鈴原先生の他に、音楽教師であり軽音楽部顧問の笹倉先生と、美術教師にして美術部顧問の剣崎先生の姿があった。

わたしは部屋の隅にある机の横にしゃがみ込み、和泉君と神川君に両側から支えられるような状態で、警察の事情聴取が始まるのを待った。

「どうしてこんなことになったの？」

事件と直接的関わりのない二人に質問してもしょうがないのだからうけど、何か話してないと物思いに耽つてしまい、嫌な光景を思い出してしまいそうだったので、すぐ間近にある美少年二人の顔を交互に見ながら訊いた。

和泉君は薄い唇に淡い笑みを刻んだ。

「さて、どうしてだろう。少なくともキミの所為ではないね。ボクの所為でもない、と言いたいが、浅宮さんが自殺した経緯を踏まえると、ボクに何らかの責任があると判断せざるを得ない。彼女の死因を自殺と仮定した上での話だけだね」

「自殺と仮定？ おかしなことを言う。直接事件に関わっていない僕が断定的な意見を述べるのは間違っている」と承知して言わせてもらうが、浅宮雪乃が死を選ぶきっかけを作ったのは貴様だ」

和泉君を鋭い眼光で睨み付けながら、神川君は決めつけるように言った。

「和泉君は悪くないわよ！」

思わず、わたしは叫んでしまった。

周囲の視線が一斉に集まる。

恥ずかしい……。

「ありがとう」

穏やかに和泉君が感謝してくれたことで、多少救われた気分がした。

「氷室先輩はどうして死んじゃったんだろう……。包丁で自分の胸を刺すなんて……」

独り言のようにわたしが呟くと、それを聞き咎めた和泉君が認識を訂正してきた。

「自分で刺した？ そうではないよ、藤森さん。彼は刺されたんだ。浅宮雪乃はともかくとして、氷室康広は殺害されたんだよ。その点だけは確実だ。断定してもいい」

「え？」

それはどういうこと？

殺人事件を仄めかす根拠を聞こうと思ったのだけど、部屋の入り口付近で警察の現場検証を眺めていた教師二名がこっちに来て話し掛けてきたので口を噤んだ。

「大変なことになったな……」

鈴原先生が大きな溜め息と共に言った。

「まさか美術部員が二人同時に自殺するとはな……」

疲れたような口調。

自分が担当している教え子でないにしても、都内有数の進学校として名高い詩海高校で自殺による死者が出たことに相当なショック

を受けているようだ。

笹倉先生はいつものお茶づけ調子を封印して、神妙な顔でドアの方を見据えている。

剣崎先生は無言で部屋の中央に立ち、警察の行動を観察している。その近くで、角刈りの刑事さんがオレンジ色の髪の女生徒と向かい合い、険しい顔で何かを話していた。

「せっかく宮地君の事件を隠蔽したというのに、その途端この騒ぎですか……。これで先日の件も完全に警察沙汰ですね」

笹倉先生が皮肉っぽく言った。

「隠蔽じゃありませんよ、笹倉先生。生徒同士のいざこざを穩便に済ませたんです」

鈴原先生が発言内容の訂正を求めた。

「恋愛感情の纏れ？」

笹倉先生が和泉君に視線を移して訊いた。

「恋愛などしていませんよ」

「あら、そうなの……」

和泉君の素っ気ない言葉に、なぜか笹倉先生は唇をへの字にして不快感を示した。目が怖かった。

ガラツとドアが開き、刑事と思しき数名の男が入ってきた。

そして、少し間を置いて、女性が一人入ってきた。

この学校の女教師ではない。

女刑事だろうか？

「どうやら事情聴取が始まるみたいですね」

「みんな纏めて話を訊かれるのかしら？」

「個別だと思えますよ、笹倉先生」

そんな教師二人の無意味な会話を耳にしながら、刑事さんたちの行動を見る。

五人の刑事さんが教壇に立った。その内訳は、年輩の刑事さんが三人に、新米っぽい青年刑事が一人、そして三十歳前後に見える綺

麗な顔立ちの女刑事が一人、である。女の刑事さんが真ん中に立っているのを見るに、彼女が一番偉い人らしい。

あれ？

あの女の人……。

「あのー、今から個別に事情聴取を行うのでー、我々の指示に従って下さーい」

青年刑事が声を張り上げた。

声が一般的な成人男性より二オクターブくらい高い。それに声が大きい。頭上から突き抜けていく感じだ。ちよつと耳がキーンとした。

「それではー、後方の生徒さんから順にこちらへ来て下さーい。あー、先生方は後ほど事情をお聞きますのでー、それまでは生徒さんの統率をお願いしまーす。まずー、その君たちだー」

わたしたちが指差された。

どうやら事情聴取の先陣に選ばれたようだ。

やましいことなど一切ないのに、急に胸の内がドキドキしてきた。

「藤森さん、さあ、行こう」

和泉君が手を差し伸べて、わたしを立たせてくれた。

神川君も無言で立ち上がる。

これから警察の取り調べを受けるというのに、彼らには動揺が全くない。緊張している感じもない。普段の穏やかさを保ち、口許には微笑みを浮かべている。まるで警察の取り調べを受け慣れているかのようだ。おどおどしてしまっているわたしとは正反対である。

でも、和泉君の手を握っていれば大丈夫だ、という根拠のない信頼感が動揺を拭い去ってくれた。

和泉君に手を引かれて、教壇の前へ行く。

「君たちの事情聴取はー、下の階の教室で僕が順にー……」

「待ちなさい」

女刑事が、正面の空間を切り裂くような手振りで、青年刑事の言葉を遮った。

「この三人は、直接事件に関わった生徒なのでしょう?」

「はい、警部。死体の第一発見者であります!」

「それでは新人の君には任せられないわね。彼らの事情聴取は私が直々に行います」

「了解であります、警部!」

敬礼する青年刑事。

「美術室を使用するわよ」

「はい、警部!」

返事をする声がやたらと大きい。

女刑事はうつすらと微笑み、私たちに目を向けた。事件に遭遇した未成年者に対する優しさや労りは感じられないが、テレビ番組の刑事モノで見るとような高圧的な厳しさもなかった。

「ついていらつしやい」

そう言つて女刑事が歩き出す。

わたしたちは大人しく従い、視聴覚室から出た。

廊下には五人、十人では利かない数の警察関係者が忙しそうに行き来していた。

特に音楽室前は移動するのも困難なくらいギュウギュウに混雑していて、青い作業服の男たちの間をすり抜けて美術室に行くのが大変だった。

こんな大勢で何を調べているのだろうか? そんな疑問が湧く。調べるのは音楽室の中だけで十分だろうに……。

無事、音楽室に到着。

わたしの背後でドアが音高く閉まった。他の刑事さんは入っていない。本当に女刑事が一人で尋問するようだ。プライバシーを重んじる為か、窓にはカーテンがかけられていた。

わたしたちは、教卓前の椅子に腰掛けるように勧められた。

「久しぶりね、真悟君」

開口一番、女刑事は和泉君に挨拶した。

親しみを込めた台詞。さっきまでとは別人のように表情豊かだ。
「まだ半月しか経ってないので、その言葉は適切ではないと思います。しかし、貴女との再会を祝して、お久しぶりです、と挨拶を返しておきましょう」

和泉君も、慇懃無礼だけど親しげな口振り。

ああ、やっぱり……。思い出した。ぱつと見で、記憶にある女性だなあ、と思つたのだ。

わたしの脳裏に半月前の出来事がリプレイされる。

入学式の日。和泉君と出会った日。高級外国車に乗って現れた二人。あの時、彼と抱き合っていた女性に間違いない。

刑事さんだつたんだ……。

「神川君も、久しぶりですね」

「お久しぶりです、渦海さん」

女刑事は神川君にも挨拶をした。彼とも知り合いのようだ。しかし、お互いに硬い表情で挨拶を交わしているので、和泉君ほど友好的な関係ではなさそうである。

「私は警視庁捜査一課に所属する渦海恭子。階級は警部です」

女刑事が堂々と名乗った。

わたしも名乗る。

「藤森保奈美です」

「宜しくね、藤森さん」

表面上は友好的な微笑みを向けられ、咄嗟に愛想笑いを返してしまった。

恋のライバルになる女性かもしれないのに……。

「なぜ恭子さんが来たのでしょうか？ 貴女はこの程度の事件に駆り出される人材ではないでしょう？」

「そうね。本来なら私が出向くほどの事件ではないのかもしれないけど、君が転校先に選んだ高校で事件が発生したと知り、自ら捜査班を動員したのよ。まあ、ざっと事件の経緯を聞いた限りでは、こ

の事件は浅宮雪乃の首吊り自殺と氷室康広の後追い自殺という結論に落ち着くでしょうね」

どこか挑戦的に渦海さんが言った。

さあ反論してみなさい、という感じた。

「後追い自殺ですか……」

和泉君は納得いかない様子。

それを敏感に察して、渦海さんは唇の両端をきゅっと吊り上げた。

「あら、和泉君、異論でもあるのかしら？」

「異論ではありませんが、最初に現場を目撃しているボクの意見を言わせていただくと、この事件はれっきとした殺人事件です。断じて自殺ではありません」

「氷室康広は殺害された、と言いたいのか？」

「彼も殺害された、と言っているのです」

「……………」

渦海さんは急に真剣な表情になり、腕組みをして目線の高さを和泉君に合わせるように、椅子に座っている彼の前にしゃがみ込んだ。

「その根拠は？」

「氷室康広は、鋭利な刃物で胸部を刺されて息絶えていたのですよね？」

「正確な情報は司法解剖の結果を待たなければならいけど、心臓に達するほどの傷だったみたいね」

「他に外傷はなかったのですか？」

「ないみたいよ」

「即死ですか？」

「さて、どうかしら。胸を刺してから二、三分は意識があったかもしれないわ。でも、刺した時点で既に救命不可能な状態だったと思うわよ。いわゆる致命傷ね」

渦海さんは自分の胸に手を当てて、氷室の体に刺さっていた凶器の位置を示した。

和泉君は小さく頷いた。

「彼の行動に不自然な点があると思いませんか、恭子さん？」

「不自然な点？」

「氷室康広は三点ほど不可解な行動をとっています」

和泉君は眼鏡を取り出して装着し、神川君が普段浮かべているような皮肉っぽい笑みを見せた。

渦海さんはちよつと慌てた風に、桜色のスーツのポケットから小さな赤い手帳と小指大の鉛筆を取り出して、メモを取る準備をした。なんだか事情聴取と言うよりは、和泉君の意見を捜査の参考にしようとしているみたいだ。女刑事の態度から、そんな気がした。

「まず、第一の不可解な点は、ボクたちを職員室に走らせた後、すぐに首吊り状態の浅宮さんを降ろし、蘇生処置を施さなかったことです。まだ首を吊ってからそれほど時間が経過していなかったので、適切な処置を施せば彼女は死ななかったかもしれません」

「でも、それは……気が動転していて、そこまで気が回らなかっただけでは？」

「気が動転？」

和泉君はフツと鼻を鳴らした。

「第二の不可解な点は、胸部を自分で刺して自殺する前に、音楽室のドアに鍵を掛けたことです。動転して自殺を図ろうとしていた人間がいちいち施錠するでしょうか？ それに、ボクたちに職員室へ行って先生を呼んでくるように指示を出したのは彼自身なのですよ」

「それは……」

渦海さんは唇を噛んだ。

「確かに変だけど……」

「第三の不可解な点は、そもそも自殺の凶器に用いた刃物をどこから調達したか、ということです。ボクたちは死ぬ直前の氷室康広と一緒に行動していましたが、物騒な凶器を隠し持っている様子はありませんでした。彼は手荷物を所持していなかったのです」

「！」

渦海さんの目がぎらりと輝いた。

「それは確実なのね？」

「確定的な事実です。藤森さんと神川君も、氷室先輩が凶器を所持していなかったことを証言してくれると思います」

「うん、思う！」

わたしは力強く頷いた。

あの時、氷室はバッグなどの手荷物を持っていなかった。制服の内側に隠し持てる大きさの包丁ではなかったので、必然的に凶器など持ってなかったという結論に達するだろう。

渦海さんは小さく舌打ちした。

「そう……。と言っても、音楽室に凶器が用意されていたとも思えないわ。つまり第三者が凶器を持ち込んだ、というわけね。でも、そうになると、この事件は密室殺人になってしまうわ」

「密室？」

和泉君は、フツツと可笑しそうに鼻を鳴らした。

ムツとする女警部。

「私の無能さを嘲笑っているのね？」

「いえ、貴女は断じて無能ではありませんよ。警察の人間にしては優秀です。それに、女性としても魅力的だ」

和泉君は平静な顔で、すらっと褒めた。

「お世辞でも嬉しいわ。ありがとう」

「ボクは視覚で確認した造形を偽らず正直に評価しているだけです」
「君の眼鏡は性能が良いのね」

「稚拙な犯罪も奥ゆかしい女心も等しく見通せる魔法の眼鏡ですから、結構重宝しています」

下らない冗談だけど、わたしは思わず笑ってしまった。
神川君は憮然として睨んでいる。

「その魔法の眼鏡とやらで、藤森さんの女心も見通したのかしら？」
わたしを横目で見ながら、渦海さんが完全なからかい口調で言った。

瞬間、顔を紅潮させてしまった。

神川君は咄嗟に何かを言おうとしたようだが、和泉君が穏やかに微笑んでいるだけで肯定も否定もしなかったので、冷たい視線を刺すに留めた。

「話を戻しましょう」

渦海さんが表情を改める。

「密室ではない、と言いたいのか？」

「密室ではありませんよ。部屋にはドアが二つあり、窓も沢山あります。事件後に施錠されていたからと言って、事件前も施錠されていたとは限りません。犯人が故意に密室を作り上げたのかもしれませんが」

「それは理解しているわ。でも、窓の鍵に関しては無視していいと思うわよ。なにせここは六階だから」

「音楽美術準備室の方のドアが開いていた可能性があります」

「ええ、それも理解しているわ。でも、事件発生時、準備室には音楽教師の笹倉さくら先生がいたのでしょう？」

「彼女が犯人かもしれません」

「……………」

笹倉先生が氷室を刺し殺した犯人？

「和泉君、笹倉先生が犯人なの？」

まだ捜査が始まったばかりなのだから、笹倉先生を犯人と特定できるわけがない。馬鹿な質問なのは重々承知している。でも、和泉君なりの根拠があるのかもしれないと思い、わたしは黙っていられずに口を挟んだ。

和泉君は皮肉っぱい笑みではなく、穏やかな微笑みを返してくれた。

「犯人である可能性が僅かばかりあるというだけで、彼女を犯人と断定しているわけではないよ。事件に関わったと思われる人間全員の事情聴取をした後、その結果を基に容疑者をリストアップし、更に細かな情報を収集して容疑者を絞り込んでいかなければならない。今はまだ捜査の初動段階だから、キミもボクも容疑者に名を連ねて

いる。死体の第一発見者を疑うのは捜査の基本だからね」

「そんな……」

ちよつとシヨックを受けた。

「わたし、人殺しなんてしてないのに……」

「そうね。だからこそ、君たちの潔白を証明する為にも、事件発生時の状況を聞かせて欲しいわ」

渦海さんはぐつと顔を近づけてきた。

「手始めに、氷室康広と浅宮雪乃の二人と君たちの関係を教えて頂戴」

「ようやく本題に入りましたね」

和泉君はくすつと笑って、自分と犠牲者二人の関係を簡単に説明した。

それを渦海さんは手帳に書き記していく。

「なるほど。暴漢に襲われた浅宮雪乃を真悟君が助けたわけね……。そして、氷室康広とは一度、暴力沙汰になった間柄なのね。よくわかったわ」

次に、渦海さんは神川君に二人との関係を訊いたが、事件発生時に現場を離れていたと聞かされ、芳しい答えが得られないとわかると、メモを取るのを止めてしまった。

最後に、渦海さんはわたしを見た。

わたしも和泉君に倣って、二人との関係を簡単に説明する。

「なるほど。君たちは死んだ二人とは、美術部の部員同士という関係なのね？」

「はい」

それ以上でもそれ以下でもない。

「真悟君は、浅宮雪乃と今朝まで毎日一緒に登下校していたと言ったけど、それだけの関係だったのかしら？」

渦海さんが突っ込んで訊いた。

それは、わたしも聞きたかったことだ。

恋愛感情は一切持っていないと言っていたけど……。

和泉君はすぐには答えず、一度視線をわたしに向けてきた。
数秒間見つめられた。

わたしの前だと答えにくい？

渦海さんも察したようだ。

「……藤森さんの前では答えにくい質問だったかしら？」

「いえ」

和泉君は間を開けずに否定した。そして、何の躊躇もなく打ち明けた。

「ボクと浅宮さんは数回の肉体交渉を持ちました。登下校を共にするようになってから、ほぼ毎日です」

「交際していたの？」

「いいえ。ボクに恋愛感情は皆無でした」

淡々とした答え。

和泉君は好きでもない女の子とえっちできる男の子なんだ……。

眩暈を起こしそうになった。

なぜそんな平気な顔をして答えられるの？ わたしの気持ちを考えずに……。

胸の内が急激に熱く苦しくなってきた。怒り。悲しみ。妬み。なんだか泣きそうだ。それでも、わたしは和泉真悟という男の子を嫌いになれなかった。

「無様に弁解しないところは、貴様らしいと言っべきだな」

皮肉たつぷりの口調で神川君が言った。

「本当に、相変わらずね、真悟君」

渦海さんも苦笑して言う。

「言い寄ってくる女の子は、全員モノにしてしまうのよね」

「自分の理想に合う女の子と出会い、無事に交際するまでは、肉体関係を求めて迫ってくる女の子を拒むつもりはありません」

その台詞を聞いて、わたしは思い出した。

以前、弘美に言った台詞と同じだ。あれは冗談じゃなかったんだ……。

「最後に一つ質問してもいいかしら？」

「ボクに、ですか？」

「真悟君と藤森さんの二人に」

「ボクは構いませんよ」

「わたしも……」

渦海さんはわたしたちを交互に見た。

「君たちの関係は？」

その質問の答えは単純明快。しかし、和泉君は、わたしに微笑み顔を向けたままで何も答えなかった。だから、わたしが答えた。

「同じクラスで、席が前と後ろで、同じ美術部員、っていう関係です」

「え？ それだけ？」

吃驚顔で渦海さんが反問してきた。

それへ頷いてみせる。

「それだけです。変ですか？」

「ええ、変よ。物凄く変……。でも、その理由は黙っておくわ。藤森さんが自分で推察しなさい」

渦海さんは皮肉な感じに微笑んだ。

何が変なのだろう……。その理由って何？ 何を推察すればいいの？

わけがわからず、わたしは助けを求めて神川君を見た。

そこに普段の皮肉っぽい微笑みはなかった。何かの激烈な痛みを堪えているような、辛そうな表情で顔を覆っていた。彼と目が合い、何かを訴えかけられるが、見つめ合っているのが怖くなって、視線を和泉君に向ける。

和泉君の顔にも微笑みはなかった。一切の感情が宿らない、能面のような無表情を作っていた。

「藤森さん、ボクを軽蔑した？」

無感情な声で訊かれた。

「……………」

わたしは無言で首を左右に振った。

【5・藤森保奈美】

初めて和泉君と一緒に帰ることになったのに、わたしたちの間で会話が弾むことはなかった。わたしがぼつぼつと話題を振るのだけど、彼は何か考え事をしている様子で、一応返事をしてはくれるが、気の利いた台詞ではなく、日頃の返答と比べると適当に応えているのは明白だったので、そのうち無言で歩く時間が長くなり、住宅地に差し掛かる頃には会話が全くない状態になってしまっていた。

気まずい雰囲気だ……。

和泉君は殺人事件に巻き込まれた所為でショックを受けているわけではない。彼は死体を見ても平然としていたし、警察相手にも物怖じせずに応対していた。むしろ警察沙汰に慣れている様子だったのだ。

一方のわたしは、最初に浅宮部長の首吊り死体を見た時点では、「ああ……死んでる……」と思っただけで、それほどショックを受けたことを自覚しなかった。でも、時間が経つにつれて事件に巻き込まれた衝撃が心の中で大きく膨らんでいき、今では負の存在感を主張している。わたしにとって最もショックだったのは、氷室が自分の胸を包丁で刺して自殺したことではなく、浅宮部長が首吊り自殺をしたことでもなく、和泉君が部長と肉体関係を持っていたことである。

いや、違う。

そうじゃない……。

浅宮部長が死んでしまったのに、完全な他人事みたいに振る舞っていることが許せないのだ。一度でも肌を合わせた女の子が突然いなくなってしまったのに、全く悲しむ素振りを見せず、死を悼む様子もない。冷淡なのではなく、薄情でもなく、無情なのだ……。考へたくないけど、和泉君は女の子を性欲の捌け口としての道具としてしか認識していないのかもしれない。

それでは、わたしは彼にどう見られているのだろうか？ やはり浅宮部長と同様に、生活する上で便利な物としか見られていないのだろうか。単に、彼を取り巻く女の子の中の一人でしかないのか。それとも、一人の女友達として見られているのか。彼が恋人としてわたしを見ていないのはわかる……。でも、せめて恋人候補でありたい。いや、彼にとつて特別な存在になりたい。そう痛切に思った。

わたしは、住宅街の中央を突っ切る大通りの歩道を、気まずい雰囲気撒き散らしながら、和泉君と肩を並べて歩いていく。

真っ直ぐ行つた所の角を右に曲がれば、そこが我が家だ。

事件のことや彼の恋愛観、わたしに対する気持ちを聞きたかったのだけど、会話を弾ませられる空気じゃなかったし、わたし自身が口数の多い人間ではなかったたので、結局何も聞けなかった。

今日はもう時間切れのようだ。

我が家に到着。

「和泉君……また明日、学校でね」

わたしはぎこちない微笑みを送って、自宅の門をくぐろうとした。

「……………」

和泉君は一瞬、踵を返しかけたが、何を思ったのか、思い直したように家の門をくぐって近づいてきた。

「少しだけ……キミの家にお邪魔してもいいかな？」

変に神妙な面持ちで訊かれ、わたしは躊躇した。和泉君を家に上げたくないのではなく、彼の様子がことなく普段と違っているから不安になったのだ。身の危険を感じたわけじゃない。

「事件についての話をしたいんだ」

そう言われると拒否しにくい。

わたしは心を決めた。

「妹がいると思うけど……入って」

わたしが許可を出すと、和泉君は一度背後を振り返ってから入ってきた。

「ただいまー」

わたしはリビングにいるであろう母親に聞こえるくらいの大きな声で叫び、靴を脱いで玄関を上がった。

和泉君も後に続いて入ってくる。

「お邪魔します」

妹が階段の上から様子を窺うように一瞬顔を覗かせたが、わたしが目で部屋に籠もっているように告げると、そこは察しの良い妹、さつと身を翻して自室に入った。

「今のは、妹さんかな？」

和泉君がちらつと階段の上を見て、さして気になった風でもなく訊いてきた。

「うん。でも、気にしなくていいよ。和泉君は先にわたしの部屋に行つて。階段を上がってすぐの所だから。わたし、お茶の用意をしてくるね」

「気遣つてくれてありがとう」

和泉君は優しげに微笑んでから階段を上がっていった。

わたしはキッチンに赴き、冷蔵庫の中から紅茶の入ったポリ容器を取り出し、大きめのコップに適量を注いでお盆に乗せた。

すると、リビングのドアが開き、母親が青い顔で駆け寄ってきた。「保奈美ちゃん、お帰りなさい。さつき警察の偉い人から連絡があつて、保奈美ちゃんが事件に巻き込まれたって聞かされたのよ。ママ、吃驚して……心配してたんだから」

「ごめん、ママ。でも、一方的に巻き込まれた感じで、別にわたしがおかしいことをしたんじゃないんだよ」

「学校で起こった事件なんでしょう？」

「うん。知り合いの生徒が死んじゃったんだよ……。それも二人……」

「え？ うそっ！ それって……弘美ちゃんじゃないでしょうね？」

「違うよ、ママ。何馬鹿言ってるの！ 縁起でもないこと言わない」

でよ！」

わたしは、酷い想像をした母親を咎めた。

勝手な想像で親友を殺さないで欲しい。だいたい弘美が自殺して死ぬようなタマに見えるのだろうか。

「弘美じゃないよ。同じ美術部の部員だけど、二人とも先輩だよ」

「保奈美ちゃんと仲良しの子？」

「うっん、そうでもない。でも、いくら親しくなくても、死んじやったら悲しいよ……」

「そうね……」

母親は少し表情を曇らせたが、すぐに笑顔を取り戻し、「元気を出しなさい」と言ってわたしの肩をぱーんと叩いた。

「亡くなった生徒さんは可哀想だけど、それで保奈美ちゃんが落ち込む姿を見るのは、ママ辛いなあ。保奈美ちゃんは明るくなきゃ」

「うん、わたしは平気。死体を見たの、初めてだったから……ちょっとね……」

そう答えておいて、わたしはお菓子がいないか棚の中を探った。

カステラとかケーキがあればいいのだけど……。どうやら買い置きはしてないようだ。

「ママ、お茶菓子ない？」

「え？ うーと……それはねー……」

母親は答え辛そうに難しい顔を作った。

話によると、妹が学校から帰りざまにチーズケーキを二人分食べたらしい。

二人分？

あの馬鹿妹……。あとでとっちめてやるっ！

「誰か、お客様なの？ あ、今日も弘美ちゃんが遊びに来てるのかな？」

「えっと……クラスメイトの男の子が来てるんだよ」

絶対に騒がれるから、和泉君が来てることは黙っておきたかったけど、どうせ帰り際にバレるのなら、先に明かしてしまった方が怪

我が小さくて済む。

「え？ クラスメイトの男の子って、あの神川君って子？」

「うっん、違う男の子」

「えっ、保奈美ちゃん、神川君のこと、フツちゃったの？」

「そうじゃないけど……」

「きーっ！ 保奈美ちゃん、積極的っ！」

母親は年甲斐もなく奇声を発した。

「保奈美ちゃんたら、神川君を足蹴にして新しいボーイフレンドをお持ち帰り？ お部屋でえっちなことするの？ 来年の頭には初孫の顔が見られそうかなあ？」

「何言ってるの、ママは！」

わたしは顔を熱くして叫んだ。

知り合いが死んだ事件の当日だというのに、不謹慎極まりない発言だ。良識ある大人の台詞じゃない。

「最初は痛いと思うけど、その男の子が戸惑わないように我慢するのよ。それとも、その男の子は場慣れしてるから大丈夫なの？ 初心者の保奈美ちゃんを上手くエスコートしてくれるのかな？」

「ママ！」

「早くお部屋に戻りなさい。王子様を待たせるお姫様は嫌われちゃうわよ」

「もう、ママは！」

わたしは紅茶を載せたお盆を持って、そそくさとキッチンを出た。妹も含めて、あとで反省会だ。

ムカムカと仄かな苛立ちを覚える胸の内を深呼吸で懸命に鎮めつつ自室に入る。

和泉君はベッドの端に腰掛けて何かの本を読んでいた。

「お茶菓子、妹が食べちゃって切らしてたから……紅茶だけだけど、いい？」

「構わないよ。そんなに気遣わないで、藤森さん。お茶よりも、話

をしよう」

「事件の？」

わたしは紅茶入りのコップをテーブルに置き、お盆を壁に立てかけた。

どこに座ろうか、と一瞬迷う。

「……………」

和泉君が立ち尽くすわたしの手を握った。

じーっと見つめられた。心が侵されそうな情熱的視線。

あれ……和泉君、何か変だよ。

「言葉を用いない話をしてもいいかな？」

「え？ えっと……………」

どくんと心臓が大きく脈打った。血流が一気に加速する。頭に全身の血液が非常召集。和泉君の意図を性格に理解したからこそその反応である。

和泉君は返答を待たず、わたしをベッドの側へ誘い込むように引いた。

ふわっと優しい感じに抱き寄せられた。

「あ、ちょ……和泉く……………」

腰に両手が回されて、きゅっと抱き締められれば、当然のことながら胸の内側が熱くなる。

抵抗などできない。

いや、しない。

「あ、あの……………」

和泉君が眼鏡を外した。

なぜ？

キスする時、わたしの顔を傷つけるかもしれないから？

「あ……………」

熱い抱擁。背中を優しく愛撫された。

愛撫？ それって？

和泉君の唇がわたしの首に……………。

首筋を柔らかな唇が這いずっていき、首から顎を経て頬に達した。ぺろっと鼻の頭を舐められ、肌が粟だった。不快だからじゃない。むしろ快感。身体の芯がきゅーんと窄まる感じ。内蔵がかーっと熱くなる。

ああ、わたし、もしかして今日……。

期待と不安で心が乱れる。

あんな事件に巻き込まれて不安定な心理状態なので、好きな男の子にこうして抱き締められているだけで安心できる。このまま身を任せて何もかも彼に預けてしまってもいいのかもしれない、と思わせてくれる。

「あつ……」

ベッドに押し倒された。

恥ずかしいけど、真っ直ぐに見つめ返す。

和泉君は恥ずかしさなど感じていない様子。

「ボクを軽蔑した？」

いつもと変わらない穏やかな声。

お茶らけず、冗談ぽくもない、真剣な面持ち。

「軽蔑なんてできないよ」

「よかった」

和泉君はにつこりと頬笑んだ。

手がスカートの中に侵入してきた。

太股をさーっと撫でられる。

「っ！」

びくんと下半身が引きつった。歯を食いしばって声を押し殺す。変な声が出そうになっちゃった……。

「こんなことをしても軽蔑しない？」

足の付け根と下着の間ギリギリを指がなぞっていく。

わたしの反応を見極めるように、ゆっくりと、静かに、優しく。観察されている感じ。

「輕蔑うで、できるわけ……ないよ……」

はしたない声を噛み殺すのが精一杯。
リボンを引き解かれた。

このままでは母親の思惑通りになってしまふ。でも、それをわたし自身が望んでいるのも事実だ。

初めては痛い……そんな情報が一瞬よぎる。

和泉君は女の子の扱いに慣れてるだろうから、身を委ねていれば大丈夫？

あ、そう言えば……今日は大丈夫な日だったっけ？
うーん……。ちょっと危険な乙女日和。

和泉君ならわたしを気遣って、きちんと避妊を心掛けてくれると思うけど……。そう思いたいけど……。それとも、避妊具を常備してるのかな？ まあ、彼が避妊に失敗して、妊娠してしまっても、母親は怒らないだろう。でも、学校は退学かな……？

色々な思いが心の内を駆け巡る。

制服が脱がされた。

シンプルな白い下着だけの半裸姿を晒す。

なんだか、和泉君て手早いなあ。明らかに制服を脱がし慣れている。同じように浅宮部長の制服も脱がしたんだ……。と思うと嫉妬心が胸の内を焦がす。小さな敗北感。どちらが先に抱かれたとかは無意味であり、それを重々承知しているのだけど、なぜか不愉快になっってしまう。彼女はもういないのに、である。わたしは、なんて浅ましい女なんだろう。

「……………」

半裸姿をじっくりと観賞されるのは物凄く恥ずかしい。

思わず隠そうとしたら、手を退かされた。

和泉君は下着姿に執着しているのか、生身よりも下着を眺めたいのか、何かしらの特殊な嗜好を持っているのか、すぐに脱がそうとしない。余裕ある態度を崩さない。

無言の数分間。

ようやく和泉君が体を重ね合わせてきた。
少し体重がかかる。その重みが心地いい。
わたしに対する心の重み？

わたしは和泉君のことが好きだから。

和泉君はわたしのことが好きだから？

唇が近づいてきた。

わたしにとって初めてのキス。

「キミをボクだけの物にしてもいいかな？」

唇同士が触れ合う寸前に訊かれた。

その刹那、心の襞に何かが引つ掛かった。

じんわりと広がっていく不快感。

今、彼は「ボクだけの物に」と言った。

ボクだけの《物》に？

物？

わたしは……物？

瞬間、神川君の言葉を思い出した。

和泉真悟は、好きでもない女性と平気で肉体関係を結ぶことができる最悪の色魔であり、誰もが憧れるアイドル的女の子を物のように使い捨てる最低な鬼畜である。

わたしも使い捨てられる物ではない？ 浅宮部長が死んだから、その代用品に選ばれた？ 代用物？ 代替物？ 性欲処理の為だけの便利な道具？

そう思った瞬間、頭の中で何かが弾けた。カッとなった。意識が飛んでしまったかのように、一瞬我を忘れた。

わたしは和泉君の体を思いきり押し返した。

「藤森さん？」

わたしが急に暴れ出したので、和泉君は肩を押さえて落ち着かせようとした…… ようだ。

そう思ったのは後のことであり、今のわたしは、その行為が酷く乱暴なものに感じた。

無理矢理に犯される、と思った。

「！」

わたしの右手が和泉君の左頬を張っていた。

ぱーん！

小気味良い音。

無意識の防衛行動。自己防衛の為の条件反射。純粹な乙女心を踏み躪られた、と感じたからこそそのビンタだ。わたしは間違っていない。

「藤森さん……」

和泉君が小さく溜め息を吐いた。そして、何の未練もない感じでベッドから離れた。

好きな男の子の体が遠ざかっていく。

心も遠ざかっていく。

冷たい目で見据えられた。いや、何の感情も込められていない目だ。まるで見ず知らずの他人を見るような視線。

嫌われた、と悟った。どうしよう……、と今更に後悔。でも、和泉君も悪いんだよ……、と内心で言い訳。それを言葉にできない自分が情けない。

「残念だよ、藤森さん」

感情のない台詞。

「キミなら迷わずボクの物になってくれると信じていたのに……。期待外れだよ。ボクを拒んだ理由は訊かないし、聞きたくもない」
和泉君は背を向けた。そして、テーブルの上に置いてあった眼鏡を取って装着した。

「理想の女の子に出会えたと思っていたが……とんだ勘違いだったようだ」

淡々とした猛毒混じりの口調。

「また明日、教室で会おう」

あ……。

和泉君が帰っちゃう。

どうしよう。

こんなはずじゃなかったのに……。

セックスが嫌なんじゃなくて。

「さようなら、藤森さん」

精神的な決別を告げる言葉。

このまま別れたら、もう今までのように親しく話せない。

クラスで一番仲良しじゃなくなっちゃう。

ただのクラスメイト？ そんなの嫌だ！

「和泉君、待って！」

「……………」

和泉君はドアのノブに手を掛けて捻った。

無視されたのだ。

「和泉君、聞いてよ！」

「……………」

和泉君はドアを開いた。

完全に無視されている。

「和泉君が悪いんだよ！」

わたしは叫んだ。隣の部屋で息を殺して聞き耳を立てているであろう妹にハッキリと聞こえるくらい大きな声で。下のリビングでテレビを見ているであろう母親が不審に思うくらい悲鳴じみた声で。

「和泉君が悪いんだよ！」

繰り返す。

「ボクの所為……だと言うの？」

和泉君はゆっくりと振り返り、目つきを陰しくして反問した。

「何が、ボクの所為なのかな？」

敵意に満ちた目だ、と思った。冷酷なまでに無表情。座り込みそうになるくらい怖い。でも、もう後に退けない状態だった。

「わたし、和泉君を拒んでないよ！ キスされてもいい！ 服を脱がされてもいい！ 乱暴に押さえつけられてえっちされてもいい！

だけど、物として扱われるのだけは我慢できないんだよ！」

叩きつけるように叫ぶ。

「物？」

和泉君がきょとんとした。わたしが何を言っているのか理解できていない、という顔だ。呆然と立ち尽くしている。

「物？ 《物》？ ボクがキミを物のように扱った？ いつ？ 今？ そんな覚えは……。もしそうだったのなら、それは取り返しのつかない過ちだが……。ボクは、キミを、理想の女の子として丁寧に扱っていたつもりだよ」

和泉君の口調が急激に弱々しくなった。

「ボクが……。このボクが、キミを……。物のように？」

「さつき、和泉君が自分の口で言ったじゃないの！ キミをボクの物にしてもいいかな、って言ったじゃない！」

「ああ……」

和泉君は少し微笑んだように見えた。

「そうか……。そうだね……」

苦笑気味の自嘲を含んだ笑み。

「確かにボクは、キミを《物》と言った。そういう表現を用いてしまった。キミの言う通りだ……」

和泉君は少し赤くなっている自分の頬に手を当てて微笑した。

哀しそうに微笑んだ。

「ボクの過ちだ……。キミに殴られて当然だよ。ボクが非難されるべき状況に間違いない。苛立っているボクの方が誤っている」

「和泉君……」

「謝罪しても許されないだろうね？」

「そんなこと……」

許さないわけがない。わたしの気持ちが正確に伝われば、何の問題もないのだ。ちゃんと一人の人間として、お互いを尊重し合い、対等の立場で良い関係を築くことができれば文句などないのだ。わたしは和泉君に好意以上の感情をいだいているのだから。

「……………」

和泉君が無言で踵を返した。

このまま帰っちゃう？ 心の距離が離れたままの状態？
その不安を口にする。

「和泉君、帰っちゃうの？」

わたしは引き留めるように声を掛けた。

「……ボクは、愚かな自分が許せない。キミに対する謝罪の言葉も、何も浮かんでこない。こんな状態では、キミを益々不愉快にしてみただけだ」

和泉君は背を向けたまま呟いた。

「お話……しないの？」

落ち込んでいる様子の背中に、わたしは優しく呼び掛けた。

「……………」

「言葉を使わないお話でもいいよ」

冗談ぽく言う。

和泉君が振り返った。

驚いた表情をしていた。

「お話が中途半端なままじゃ嫌でしょう？」

「……………」

和泉君はにつこりと頬笑んだ。そして、くすくすと笑い始め、次第に大きな声で笑い出した。心底可笑しそうに大笑いした。

「キミは……優しい子だね」

しばらく笑った後、彼はぽつりと呟いた。

「しかし、今日のところは帰るよ。今のボクでは駄目だ。気持ちを切り替えて出直すよ」

「あ……、和泉君！」

止めようと手を伸ばす。

その手を掴まれた。

引き寄せられ、抱き締められる。

「ボクを軽蔑していないの？」

「少し、軽蔑したかも」

「次からは、キミを怒らせないように、表現方法を十分に吟味してから発言するよ。それとも、次は無言で手込めにしてしまうべきかな？」

「そんなことしたら、神川君が言ってた通りの鬼畜男になっちゃうよ。そしたら、わたし、断然軽蔑しちゃうかも」

「それは困るね」

和泉君はくすくすと笑い、わたしの頬に唇を押し当てた。

ちゅつと音が鳴った。

「キミは本当に魅力的な女の子だ。それを今、痛感しているよ。このままベッドに押し倒してもいいかな？」

「それは困っちゃうかな。妹とママが聞き耳を立ててると思うから」「恥ずかしい？」

「恥ずかしいよ。こんな格好で抱き合うのも本当は恥ずかしいんだよ。ドア、開いちゃってるし。もし見られてたら、即刻、家出しくちやならないくらいだよ」

「家出か……。その際は是非ともボクのマンションに来て欲しいな」他愛のない冗談。

一時は和泉君と仲違いしてしまいそうな状況だったけど、どうやら嫌なしこりを残さずに済みそうだ。凝固していた空気が嘘のようである。

和泉君は抱擁を解いて廊下に出た。

「明日の朝、迎えに来てもいいかな？」

去り際に、和泉君が訊いてきた。

「いいよ」

簡単に応じた。

「それでは一度出直してくるよ。また明日の朝に会おう」

「うん。また明日ね」

わたしは下着姿で手を振った。

【6・藤森保奈美】

四月二十二日、火曜日、午前七時二十分。

「保奈美ちゃん、いつてらっしゃーい」

「いつてきまーす！」

学校に向かう定刻に至ったので、わたしは母親に見送られつつ家の門を出た。

すると。

「藤森さん、おはよう」

突然、朝の挨拶をされた。

声の主を見やると、隣の家の子に寄りかかって腕組みをする美少年の姿があった。

和泉君が約束通り迎えに来てくれたのだ。

わたしは小走りに駆け寄り、笑顔で挨拶を返した。

「和泉君、おはよう！」

なんだか嬉しい。

うきうきしている。

わたしたちは並んで歩き始めた。

「もしかして、待った？」

いつ頃から待っていたのか気になったので、何気ない感じで訊いてみた。

和泉君は朗らかに首を振った。

「いや、さして待たなかったよ。それに、先に出てきた妹さんと話をして時間を潰していたから、待ち時間は苦痛ではなかったよ」

「うそ！ あの子とお話したの？ あの子、何か失礼なこと訊かなかった？」

昨日、和泉君が帰った後、母親と妹が徒党を組んで彼との関係を追求してきた。何の関係もない、と言っても聞き入れてもらえず、出会った日の話から、ビンタするに至るまでの経緯を根掘り葉掘り

聞き出され、笑われて……。今朝は、父親も加わって大笑いされる始末。若いなあ、とか言われて。家族みんなにからかわれ、逃げる場所もなく、針のむしろで正座な感じ。みんなが一樣に、和泉君に非はない、と弁護するものだから本当に居たたまれなかった。お馬鹿な妹は、「朝一番に謝って、近くのホテルに誘い込んだじゃえば？」などと両親の前で言うし……。その発言に応じて、「ママは初孫希望！」とはしゃぐ母親も母親だ。それに対して、「こらこら、高校生のうちには、きっちり避妊しなきゃ駄目だぞ」と窘める良識的(?)な父親。うちの家族は開けっ広げ。隠し事はしないので、食事の席でも性関係の話題を平気で振る。でも、自分が話題の当事者になると堪らない。生きた心地がしない。今朝は恥ずかしさのあまり家出しちやいそうだった。まあ、みんなが心配してくれているのはわかるし、それなりに気遣ってくれているのもわかるので、不愉快にはならないが……。からかうのは程々にして欲しいものである。

「ああ、いや、色々と言われたけど、不快ではなかったよ。妹さんは元気で好奇心旺盛な子だね。それに、キミに似て可愛い」

「あの子、和泉君のタイプ？」

ちよつとカチンと来て、口調が硬くなってしまった。

和泉君は可笑しそうに鼻を鳴らす。

「キミが存在するからこそ、ボクは妹さんに好意を持てるんだよ」
すぐにフォローしてくれた。

「あの子、お馬鹿だから、昨日のことを色々と言ってきたでしょう？」

「ああ。昨日、ボクが犯した過ちを色々と言……。まあ、別に隠すことでもないから、正直に答えておいたよ」

「ごめんね、和泉君」

「キミが謝る必要はない。それに、妹さんは何も失礼な質問をしなかった。だから、気にしなくていいよ」

「うっん、あとでとつちめてやるわ！」

わたしが拳を握って決意を表明すると、和泉君は「とつちめる？」

と含み笑いを漏らした。《とつちめる》というフレーズが可笑しかったらしい。言葉として変だっただろうか……？

「妹さんは最後に、お姉ちゃんを宜しく願います、とボクに頭を下げてから学校へ向かったよ。お姉さん思いの良い妹さんだね。素晴らしく好感が持てたよ」

「へえ……、あの子が……？」

意外だった。

思春期で、反抗期で、脱家族宣言を連呼しているお馬鹿な妹なのに、わたしの知らない所では良い妹を演じているようだ。普段から素直な良い子なら、姉であるわたしも付き合やすいのだけど……。気の強い姉妹同士だと、意地の張り合いになって、容易には良好な関係を築くことができないのかもしれない。

大通りに出た。

同じ制服を着た生徒たちが同一方向へ大行進している。

ちよつと不気味な光景だ。まして、同じメイクで同じ髪型をした女生徒たちの集団は異様である。友達同士で個性を殺し合い、外見を均一に統制し、出る杭を極力少なくして外見の優劣をなくそう、という特殊なキャンペーンを展開しているようにも見える。でも、そういう怪しげな思想には共感できなかった。わたしはメイクをしないので、お化粧をしているクラスメイトを見ると、気持ち悪くないのだろうか、と思ってしまうのだ。まあ、他人は他人、自分自分である。

交差点で信号待ち。

「いつ頃から家の前で待ってたの？」

再質問した。

「それほど長くは待っていないよ」

「うちに上がってくれば良かったのに」

和泉君は穏やかに微笑んだ。

「昨日の今日だからね。キミに嫌われてしまったかもしれないと思

うと、チャイムを鳴らして呼び出す勇氣を持てずに二の足を踏んでしまったんだ。意気地なしと笑ってくれて構わないよ」

「そんなこと……。わたしの方こそ、昨日のことで嫌われちゃったかな、って思ってた睡眠不足気味で……。本当に迎えに来てくれるなんて思わなかったから……。今日、学校で会った時に、どんな顔をして、何を話せばいいのか悩んだんだよ」

「お互いに不安だったわけだね」

お互い？

和泉君も不安を？

嫌われたかも、と心配して？

もしかして、和泉君は……。

「わたし、和泉君が迎えに来てくれてホッとしたっていうか、嬉しかったっていうか、気まづくならなくて本当に良かった」

「ボクにとつての最重要事項は、誠意をもってキミに謝罪し、昨日の失態を帳消しにしてもらうことなんだよ」

「失態？」

鸚鵡返し。

「大失態だよ。キミを怒らせてしまったのだからね。それ以外の言葉では表現のしようがない」

「気にしてるの？」

「とても気にしているね」

表面上は全く気にしている風には見えないが……。和泉君なりに反省しているようだ。

「それに、後悔しているよ」

「後悔？」

再度、鸚鵡返し。

「あの状況で、キスすらできなかったことに後悔しているんだ」

「……………」

「冗談だよ、藤森さん」

「……………」

「キミを《物》呼ばわりしてしまったことを後悔しているんだ。昨日のあの時から今まで、ずっと後悔し続けている」

「気にしないで、和泉君。わたし、もう何とも思っていないから。でも、また《物》呼ばわりされたら、今度は許さないかも」

「誓って、二度とキミに不快な思いはさせないよ」

「なら、和泉君も忘れちゃってよ。それから、わたしがビンタしたことも、ついでに忘れてくれると嬉しいな。あれは咄嗟に手が出ちゃっただけなの……。だから、乱暴な女だと思わないでね」

「ああ、それは気にしていない。昨日はボクも混乱していて、ついキミに負の感情を向けてしまったけど、非は完全にボクの側にあったわけだからね。ビンタされて当然だよ。まあ、女の子に拒絶されたのは随分と久しぶりだったから、多少の苛立ちを覚えたことは否定できない。しかし、帰宅してから自らの行動を冷静に省みた時、自分の愚かさに打ちひしがれたね。あまりの情けなさで転校したくなったよ。どの面下げてキミに会えばいいのかわからなくなったんだ」

「和泉君が転校したら、わたし、悲しいよ」

「ありがとう。でも、大丈夫。キミが今後どこにも行かない限り、ボクに転校する理由は一切ない」

何気なく殺し文句を言って、和泉君はにっこりと頬笑んだ。

【7・藤森保奈美】

詩海高校へ続く大通りを和泉君と並んで歩きながら他愛のない会話をしていると、向かいの歩道から弘美が手を振り振り駆け寄ってきた。彼女が進む先には横断歩道なんてないし、歩道橋もない。法定速度で行き交う車に急ブレーキをかけさせながらの、危険極まりない暴挙。言語道断の道路横断。轢かれるのではないかとハラハラした。

「おはよう、保奈美い！」

元氣一杯のお転婆娘。

「危ないじゃないの、弘美！ 車に轢かれたらどうするのよ！」
わたしは腰に手を当てて睨み付け、危険行為に及んでおきながらお気楽顔で挨拶をする大親友を強い口調で叱りつけた。

「にやはははは！ あたしは死なないよ！。運動神経抜群の野良アスリートなんだよ。ノロノロ運転の車なんかには轢かれるわけないって！ 気にしない気にしない！」

弘美はどこ吹く風である。

「たくさんの車に迷惑をかけていたじゃないの！ 弘美の無茶が原因で事故が起これたらどうするの？」

「にやはは！ 何も起こんなかったんだからいいじゃん！ 保奈美は心配性すぎだよー」

「もう、弘美は……」

「おはよう、和泉君！」

弘美は満面の笑みを浮かべ、甲子園で高校球児が宣誓する時のように片手を真つ直ぐ上げて、これ以上ないハイテンションで和泉君に朝の挨拶をした。

「おはよう、和久井さん」

持ち前の穏やかな調子で挨拶を返す和泉君。

弘美はきやいきやいと一通りはしゃいだ後、並んでいるわたしと

和泉君の間に強引に割り込み、意味ありげな表情を作った。

「昨日は大変だったみたいだねー」

弘美は心持ちテンションを落として、神妙な感じに口調を改めた。
「浅宮部長が自殺しちゃったんでしょ？」

「弘美、知ってるの？」

「そりゃー知ってるよ。同じ部の部員だもん。警察の人が電話を掛けてきて、部長のこととか、副部長のこととか、氷室先輩のこととか、保奈美のこととか、和泉君のこととか、神川君のこととか、色々と訊いてきたもん」

美術部の部員全員が事情聴取の対象になっているわけだ。

「警察も無駄な捜査をするものだね」

和泉君が若干の皮肉を言葉に宿した。

「無駄って？ 警察って、自殺の動機とか調べなきゃなんないんでしょ？」

「和久井さん、二人は自殺したのではないよ。殺害されたんだ」

和泉君は昨日も、二人は自殺ではなくて殺害された、と言っていた。殺人事件だと断言していた。何らかの確信をいだいているのだろう。彼は、不確かな意見を軽々しく述べる軽薄者ではない。

「和泉君、事件のことを詳しく説明してよ。なぜ自殺ではなくて殺人事件と考えているのか、聞かせて欲しいな。昨日は、ゴタゴタがあつて聞きそびれちゃったから……」

わたしが上目遣いでお願いとすると、和泉君は簡単に了解してくれた。

「歩きながらだから、あまり説明的になりすぎると理解しにくいかもしれない。さらっと解説するけど、いいかな？」

「いいよー」

弘美は、事件の話を聞けるとあつて嬉しそうだ。しかも、何気なく和泉君の腕に手を絡めている。

なんて手の早い……。

「まずは、何故に浅宮さんが音楽室で首吊り自殺を図ったのか、だ

ね」

「そんなこともわかるの？」

ちよつと驚いた。

「わかるよ。ボクは昨日まで浅宮雪乃と親密な関係にあったからね。彼女の心理状態を把握するのは容易だ」

「親密な関係って？」

弘美が首を捻って、不思議そうな顔をした。

和泉君と浅宮部長の間には不純な関係などなかったと信じているからだろう。

そんな弘美を無視するように、和泉君は話を続ける。

「浅宮さんはボクに対して好意をいだいていた。それは、彼女の口から何度も聞いた台詞だから確かだ。しかし、ボクは彼女に好意などいだいていなかった。決められた期間、登下校の送迎をするだけの関係だと認識していたんだ。たとえ肉体関係にあつてもね」

「肉体関係……」

弘美は円らな目を見開いて呟いた。

相当なショックを受けたようだ。

「彼女は恋人関係だと思ひ込んでいたようだけどね。しかし、宮地優がこの地を去ることで、ボクの役目も終わる。それが昨日だ。それゆえ、彼女は不安を覚えたのだろう。宮地優が去った後もボクとの関係を維持できるか、とね」

「そりゃ、不安になると思うよー。だって、この前、和泉君てば浅宮部長との関係を完全否定してたもん。その話、学校中で噂になつてたでしょ。部長の耳に入らないわけがないから、それを聞いて自分の耳を疑ったんじゃないかな」

「それが自殺を図った動機だよ」

和泉君はきつぱりと断言した。

「それってどれ？」

聞き返す弘美。

理解力ないぞ、我が親友。

「和泉君の気持ちを確かめる為に自殺してみせた、っていうことよね？」

「その通りだよ、藤森さん」

「でも、死んじゃったら意味ないじゃん！」

弘美が声を荒げた。《自殺》というキーワードは、実の兄を自殺で失っている彼女にとって不愉快極まりないものなのだ。

そんな弘美の頭に手を乗せ、和泉君は優しく微笑んだ。

その効果は覲面だった。

彼女の顔に無邪気な笑顔が戻る。

まるで、彼女のお兄さんのことを知っているような心配りだ。

「浅宮さんは自殺する意思など毛頭なかったとボクは考えている。自殺行為を用いて、彼女に対するボクの恋愛感情の度合いを測ろうとしたのだろう。もしかすると、犯人に偽装自殺を唆されたのかもしれない」

「わたしも和泉君の意見に賛成だよ。浅宮部長は自殺をしてみせてまで男の子の気持ちを繋ぎ止めようと考える浅はかな人じゃないもの。もっと正々堂々と正面切って気持ちを問い質す人だよ」

「そうだね。キミの人物評は正確だ」

和泉君に褒められてちよつと照れた。

「じゃあ、ほんとに部長は殺されちゃったんだ……。でも、誰に？」

「氷室先輩を殺害した犯人と同一人物だよ」

こともなげに和泉君は答えた。

「氷室先輩はどうして殺されちゃったの？」

「さて……。それは不明だね。そもそも浅宮さんが殺害された理由すらわからない」

「わかんないの？」

弘美が和泉君の顔を見上げて訊いた。

「わからないよ。それに、それを知る必要などない。もしキミが犯行動機を知りたいのならば、犯人に直接尋ねるしかないね」

「そんじゃ、別に知らなくていいや」

あつけらかんと言う弘美。

「和泉君、どうして自殺する意思のなかった浅宮部長が死んでしまったの？」

わたしが訊くと、和泉君は片方の目を細くして唇を僅かに歪めた。「ボクたちが最初、音楽室に入った時、浅宮さんは首吊り自殺を装う為に、カーテンレールにロープを掛けてぶら下がっていた。入り口のドアからは、そう見えた。藤森さんの目にも、そう映っただろう？」

「うん。浅宮部長は本当に首を吊って死んだんだ、って思ったよ」

「しかし、実際には死んでいなかったんだ。足元に台を置いてロープが首に食い込まないように仕掛けを施していたのか、あるいは背後に体を固定するフックを仕掛けていたのか。自殺を装う方法は幾らでもある。きっと、ボクたちがパニックを起こして右往左往している様子を盗み見て悦に入り、大事に至る前に偽装自殺であることを明かす予定だったのだろうね」

「和泉君が悲しんでくれるのを期待したのかな……？」

「そうかもしれないね」

和泉君はシニカルな笑みを口の端に刻んだ。

「どうして浅宮部長はすぐに死んでないことを明かさなかったのかな？」

「明かせない理由があったのだろうね」

「どんな？」

「偽装自殺の協力者が予定にない行動を始めたからだよ。氷室康広が音楽室内に入らず、ボクとキミを職員室へと走らせてしまったから、偽りの死を明かすタイミングを逸してしまったんだ」

「氷室先輩が浅宮部長の協力者？」

あの二人、仲が悪かったと思うけど……。

「事件当日、美術部の活動が再開されることとなり、美術室には顧問の剣崎先生がいた。それを知っていながら、氷室康広はボクたちを職員室へと走らせたんだよ。おかしいと思わないかい？」

「あ、そうか……。そうだね。普通なら、真つ先に美術室か準備室へ行つて、剣崎先生を呼ぶよね。わたしは混乱してて全然気付かなかったけど……」

「ボクもその時は、同じ階に先生がいる点には思い至らなかったよ。氷室先輩もすっかりしていたのかもしれないが、ボクと藤森さんを一緒に走らせた点も含めて鑑みると、明らかに不自然だ。先生を呼びに行く人間は、ボク一人で十分なのだからね」

「うん。わたし、単なるお荷物だった」

和泉君はうつすらと微笑んだ。

「つまり、氷室康広は故意にボクたちを職員室まで走らせた可能性が高い」

「どういう目的で？」

「さて、何が目的だったのだろうか」

韜晦するように微笑む和泉君。

「何にしても、浅宮雪乃と氷室康広を含めて最低でも三名以上の人間が、ボクたちを騙す偽装自殺計画に関わっていたはずだ」

事件の全容を把握しているような口調だった。

犯人の目星もついている感じである。

「もしかして……和泉君、犯人が誰だかわかっているの？」

訊いてみた。

和泉君は肩を竦める。

「いいや、残念ながら犯人全員を特定するには至っていないよ。ボクが把握している事件の情報では、犠牲者二名の殺害方法程度しか理解できない」

「え？ 殺害方法程度って……。和泉君、浅宮部長と氷室先輩を殺したトリックがわかったの？ 渦海さんは密室殺人だって言っていたのに……」

「密室？ 密室って何？ ということ？」

弘美が好奇心を剥き出しにして訊き、和泉君の肩に掴まってピョンピョン飛び跳ねた。

「教えてよっ！ あたし、昨日のこと、ニュースでしか知らないんだから！ 二人の話を聞いててもチンプンカンプンなんだよ！ なんか仲間外れな感じで嫌なんだよっ！」

「……………」

和泉君は応えずに微笑むだけだ。

「いちいち事件の過程を説明するのが面倒臭かったのだろうか？」

仕方がないので、わたしが昨日の出来事を簡単に物語ってあげた。弘美は目をキラキラさせながら聞いていた。

知り合いが二人も死んだ話なのに……。そんなに面白いのかな、と親友に対して皮肉な思い。

「へー、なるほどね……………」

話を聞き終えた弘美は、難しい顔でこくこくと数回頷いた。

「最初に美術室に入った時は、浅宮部長だけが首を吊ってて、部屋には鍵が掛かってなかったんだね？ そんなで、二度目に入った時は、部長だけじゃなくて氷室先輩も死んでて、しかも部屋に鍵が掛かってたんだ？」

「準備室の鍵は開いてたかもしれないけど、中には笹倉先生がいたから、もし犯人が準備室に逃げようとしても無理だったのよ」

わたしは情報を補足した。

「ふーん」

弘美は気のない返事をした。そんな細かい情報など必要ない、という顔だ。ただ単に、事件の粗筋を知りたかっただけなのだろう。

弘美らしいなあ、と思った。

わたしは、密室状態だった音楽室の中でどのようなトリックを用いて二人の美術部員を殺害したのかを聞く為に、話を戻す。

「和泉君、密室の中で犯人が二人をどうやって殺して、どうやって逃げたのか教えてよ」

「それは……………」

和泉君が口を開こうとした時、それを阻むように声が掛けられた。
「おはよう、和泉真悟君」

わたしたちは一斉に振り返った。

真後ろに女生徒が立っていた。

確か、軽音楽部の部員だ。リボンの色からして三年生だろうけど……、面識のない人間である。浅宮部長ほどではないにしても、なかなかの美少女と言える容姿の持ち主。でも、髪の毛をオレンジ色に染めて制服も改造しているところから判断するに、大人しい優等生ではないだろう。ちよつと危険な臭いのする怖い感じの人だった。「キミは？」

和泉君は一瞬目を細め、会話に割り込んできた女の子を冷たい視線で刺したが、表情は普段通りの穏やかさを保ったまま相手に問い掛けた。

「私は三年B組の静川玲。宜しく、和泉真悟君。あと、他のどうでもいいお二人さんにも、一応、挨拶しとこうかな。宜しく、藤森保奈美さん、和久井弘美さん」

「はあ、宜しくお願いします……」

なんか敵意を感じさせる口調だ。明らかに、わたしと弘美を邪魔者扱いしている。それに、何を宜しくするのか理解できない。でも、挨拶してくる相手を無視することなどできないので、つい返事をしてしまった。

「宜しくお願いしまーす！」

弘美は誰が相手であつても元氣一杯だ。

「ボクに何か用ですか？」

和泉君が朗らかに尋ねた。

「少し私に付き合つて欲しいんだよね。昨日の事件も含めて、浅宮さん関係の話をしたいんだ。勿論、内緒話だよ」

静川玲はわたしを押し退け、馴れ馴れしく和泉君の腕に手を回し、顔を接近させた。

和泉君が微かに眉根を寄せる。迷惑がっているのだ。

「貴女は浅宮さんの知り合いですか？」

「ちょっとした友達だね」

静川玲はそう言ってから、ヒツヒツと掠れ声で笑った。

何が可笑しいのだろう……。

「昨日の事件に関わっていましたか？」

「私がかい？ いいや、いいや。私は無関係だよ。事件が起こった時は確かに六階にいたけど、美術室で剣崎先生とお喋りしてたからね。そう、アンタんとこの顧問だよ。鍵を借りに来た藤森さんとはちらっと会ったよね。覚えてないかい？ ヒヒヒツ。だから、ちゃん和阿リバイもあるってわけ。私が浅宮さんと氷室君を殺したわけじゃないよ。イヒヒヒツ」

それを聞いて、和泉君はフツと鼻を鳴らした。

眼鏡のフレームに指を当てて、ズレを直すようにくいつと持ち上げる。

「それで、何の話でしょうか？」

「二人だけの内緒話。だから、ちょっとだけ時間を割いて一緒に来てくれない？ ホームルームまでいいからさ。勿論、連れのガールフレンド二人は来ちゃ駄目だよ」

静川玲はわたしを睨んで言った。

完全に敵意を孕んでいる目だった。

もしかして、わたしと和泉君を引き離そうとしている？

浅宮部長という先例があるので、どうしても邪推してしまうわたし。

和泉君は思案するように首を捻った。

「ボクは構いませんが、その前に藤森さんと和久井さんの同行を拒む理由を聞かせていただきたいですね。彼女たちはボクにとって大切なクラスメイトなのです。二人をぞんざいに扱って欲しくありません」

「……………」

静川玲は唇を強く噛み締めた。

そして、上目遣いで和泉君を見据えた。

「藤森さんたちのいる前で、好きだ、と言わせるつもり？」

挑むような口調だった。

「なるほど。意図を完全に理解しました」

和泉君は納得顔で頷いた。

「ご一緒しましょう」

「ありがとう、和泉真悟君」

ヒツヒツヒと嬉しそうに笑う静川玲。

「藤森さん、和久井さん、申し訳ないけど先に教室へ行っていて欲しい」

和泉君はわたしと弘美を交互に見ながら言った。

拒絶したかったけど、それを口に出せる性格ではない。

和泉君が目に見えて申し訳なさそうな表情を浮かべてくれれば、わたしの胸の内に湧き起こった嫉妬心も多少軽減できるだろうに……。

「えーっ、和泉君、行っちゃうのー？」

弘美がわたしの気持ちを代弁するような不満声を上げた。

自分の気持ちに正直な部分は見習うべきである。ちょっとはしたない気もするが……。

「悪いね、和久井さん」

「嫌なら行く必要なんてないんだよー」

「ボクは静川さんの話が聞きたいんだ。事件について面白い情報を得られそうだからね」

「むーっ……そんなら仕方ないかなっ！」

不満を隠しもしない。静川玲が和泉君に恋の告白をすることが気に入らないのだろう。

わたしも気に入らないけど、思いを表現できない。弘美って羨ましい性格だな、と思った。

「藤森さんも、ごめんね」

「うつん、わたしは平気」

全然平気じゃなかったけど、わたしは健気に微笑む……。

「さあ、行きましょ、和泉真悟君」

せつかく和泉君と心の距離を縮めることができたと思ったのに、
またもや無粋な邪魔が入ってしまった。

酷いよ、和泉君……。言葉にならない抗議の声。

しかし、わたしは弘美と一緒に、不本意極まりなかったけど、
川玲と並んで歩いていく美少年の後ろ姿を見送るしかなかった。静

第五章 ヒーローの代替 【1・藤森保奈美】

四月二十五日、金曜日。

詩海高校では、事件の翌々日に全校生徒が体育館に集められて校長先生から事件の説明を受けた以外、表面的には何事もなく普段の授業が行われていた。

二名の美術部員が自殺した事実を知らされても、生徒たちは大して混乱しなかった。話題にするとしても、密かに自殺の動機を詮索する程度だった。

学校内の事件という性格上、警察も目に見える形での捜査を控えているのか、事件当日以降は警察関係者が事件現場を行き来する姿を見ることもなく、学校を早退させられて再度事情聴取を受けさせられることもなかった。

「お昼は屋上で食べようよっ！」

お昼休みを告げるチャイムが鳴るなり、弘美が「起立、礼、着席」もそこそこに駆け寄ってきて提案した。

「いいわよ」

わたしは即答した。

今日は天気の良い日なので、悪くない案である。

和泉君と神川君がパンを購入するのを待って、わたしたちは屋上へと向かった。

最近は弘美も持参したお弁当を食べているので、和泉君と神川君にパンを奢れとおねだりしなくなった。でも、いまだにジュースは買ってもらっている。わたしも奢ってもらっている……。だから、彼女を叱れない。朱に染まって真っ赤っかだ。

屋上のドアを開けて外に出た。

「あ……」

知った人物の姿があった。しかも、二名。

そのうちの一人は、渦海恭子警部だった。

咄嗟に、和泉君を連れて教室へと引き返したくなった。

彼女は金網にもたれかかる姿勢で立っている。

「待っていました」

渦海さんはそう言っ、冷然と微笑んだ。でも、和泉君にはにっこりと微笑む。

これって男女差別なんじゃ……。

そして、もう一人、静川玲がいた。彼女は事件の日以降、亡くなった浅宮部長と代わるようにして和泉君に付き纏っている。その理由は単純明快。彼に好意を持っているからだ。わたしにとっては大迷惑な好意だ。なるべく和泉君を彼女に近づけたくない。

「天気の良い日は、お昼、決まって屋上で食べるんだね。悪くないけど、笑えないくらいワンパターンな行動だよ。校庭とか中庭のベンは嫌なわけ？」

開口一番の皮肉。

「屋上が好きなんですっ！ あたしたちがどこでお昼を食べようと静川先輩には関係ないでしょっ！」

弘美が生意気な感じに口答えした。

「そうだねえ。関係ないかもね」

静川玲は可笑しそうに、ヒツヒツと笑う。

「それなら、私が屋上でパンを食べるのも私自身の勝手だよ、和久井弘美さん？」

「それは……そうだけど……」

言いくるめられ、口ごもってしまう弘美。

「和泉君もいいかな、私が一緒でも？」

「恭子さんが認めているのであれば、ボクは全く構いませんよ、静川さん」

「事件の関係者なら、誰が一緒であろうと問題ありません。むしろ好都合と言えます」

渦海さんが許可を出した。

「あ、あたし、関係者じゃないです」

弘美が手を挙げて申告した。

「美術部の部員であれば、立派な関係者です。いえ、立派な容疑者と言すべきね」

渦海さんは冗談にならない真剣な口調で弘美を閉口させた。

わたしたちは屋上中央に位置する円テーブルを、並んで囲むような形で座った。わたしと弘美で神川君を挟む位置関係。その対面席に渦海さんと静川さんが和泉君を挟んで座る。

和泉君は着席するや、気まずさで強張った空気を気にする様子もなく、紙袋からパンを取り出して封を切った。焼きそばパンだ。

わたしもお弁当を出して蓋を開けた。小さなフォークでウインナーを突き刺し、口へ運ぶ。もぐもぐ。ごくん。うん、美味しい。いつもと変わらぬ料理上手な母親のお弁当だ。ウインナーが《タコさん》な点も好評価の対象である。神川君が物珍しそうに感心してくれたから。

事件の話を聞きに来たと思われる渦海さんが、手帳を出してぺらぺらとページを捲りつつも、なかなか話を切り出さないの、しばらくの間は黙然とお昼ご飯を食べる行為に専念した。

すると、突然。

「今、藤森さんに決まった恋人はいるの？」

何の前触れもなく、静川玲が訊いてきた。

「はい？ 何ですか？ 恋人……ですか？」

嫌な感じの質問だ。和泉君との関係を知っているくせに、わたしの口から恋人関係ではないことを言わせたいのだろう。

渦海さんが視線を手帳からわたしに移し、面白そうに目を輝かせた。

どんな答えをするか興味があるようだ。

弘美と神川君も同様である。

「あんたくらい可愛ければ、学校にいる男子を選び取り見取りでし

よ？」

毒を宿した台詞を吐く蛇女。

この先輩は性格悪すぎ、とわたしは心の中で叫んだ。

でも、答えとしては……。

「いませんよ、恋人なんて」

そう言うしかなかった。

静川玲はヒッヒッヒと嘲笑う。そして、和泉君に視線を移した。

「和泉君はどう？」

同じように恋人の有無を確認する静川玲。

否定を見越しての質問だ。

「いるとは言えない状態ですね」

和泉君は明快に答えた。

「あら、そうなの？」

意外そうな声を上げたのは、渦海警部である。

和泉君に特定の恋人がいないことに驚いている様子だ。

静川玲はヒッヒッヒと掠れ声を発した。

嫌な空気だ。

気安い会話が拒否されている感じだった。

「質問しても宜しいでしょうか？」

和泉君が新しいパンを手に取りつつ、渦海さんに声を掛けた。

「あら、真悟君が私に質問を？ 面白いわね。私にも恋人がいるか

どうかを訊きたいのかしら？」

「違います。貴女の恋人はご主人でしょうか？ それはわかっています」

どうやら渦海さんは結婚しているらしい。まあ、彼女ほどの美女であれば、既婚者であつてもおかしくはない。それこそ、世にいる優秀な男性を選び取り見取りだっただろう。

「うふふ、そうね。それなら何を聞きたいのかしら？」

女警部は硬質の笑みを浮かべた。

和泉君は静川さんを見る。

「貴女は、なぜ静川さんと一緒にいたのですか？ お二人が揃って、屋上でボクたちを待っている必然性はないように思います」

「ただの偶然よ。私は君に会いに来たの。静川さんは事件の容疑者だけど、話を聞くほど有益な情報を持っているとは思えないわ」

容疑者と言われ、静川玲はこめかみに青筋を浮かべた。不本意だったのだろう。彼女は軽音楽部の部員であり、尚かつ事件当日は美術室で剣崎先生とお喋りしていたのだから。

「事件の容疑者……ですか。警察は、自殺ではなく、殺人と断定したのですね？」

和泉君はくすつと控え目に笑い、からかうような口調で言った。
渦海さんは肩を竦めた。

「殺人事件と考えているのは、私だけよ。過去の実績を踏まえて、君の意見を最重要視しているの。でも、私以外の捜査員は自殺と見ているようね」

「ボクを信頼してくれているのですね」

「当然でしょう？」

「ありがとうございます」

和泉君は礼儀正しく一礼した。でも、ちょっと他人行儀な感じ。

「もう一つ質問しても宜しいでしょうか？」

「構わないわよ。ふふっ……私と君の仲でしょう？ 水臭いわよ、真悟君」

「事件についての質問ですが」

「事件の情報が欲しいのね？ いいわよ。何でも訊いて。情報は惜しみなく教えるわ。その代わり、君の意見を聞かせて欲しいわね。今日は、その為に来ているのだから」

和泉君は淡い微笑を口元に浮かべて頷いた。

「三つの点を確認したいのです」

「何かしら？」

「まず、一つ目の質問ですが、音楽美術室準備室から音楽室及び美

術室へと通じる二ヶ所のドアは開いていたのですか？」

準備室から音楽室と美術室のドア？

音楽室はともかく、美術室へのドアは開いていたに決まっている。なぜなら、あの日は美術部の活動を再開した日であり、美術部顧問の剣崎先生が準備室から美術室に移動したと思われるからだ。内鍵は掛かっていなかったはずである。

「美術室へのドアは開いていたそうよ」

手帳を見て確認することもなく、渦海さんは簡単に答えた。

「そうですか」

「だけど、音楽美術準備室には笹倉先生が存在していたから、準備室のドアを使用しての逃走は不可能よ」

「不可能ではありませんよ」

和泉君は眼鏡に手を当てズレを直すような仕種をした。口許には薄い笑みが刻まれている。ちよつと嘲笑っぱかった。

渦海さんは一瞬、不愉快そうに顔をしかめた。

「私の無能を笑っているのね？」

「いいえ。恭子さんを不愉快にさせてしまいましたか……。申し訳なく思います」

白々しい謝罪。

渦海さんは苦笑している。

「二つ目の質問ですが、氷室先輩を刺殺した凶器には誰の指紋が付いていましたか？」

和泉君の質問に、渦海警部はショックを受けたようだ。目つきを鋭くして彼を睨む。

「宮地優の指紋が検出されたわ」

え？

宮地優の指紋？

それって……。

「そんじゃー、宮地副部長が氷室先輩を殺しちゃったの？」
弘美がわたしの疑問を代弁してくれた。

渦海さんは曖昧に微笑む。

「それは、まだ断定できないわ。一度自殺を図ったので、安全の為に宮地優の身柄を拘束して定期的に事情聴取を行ってはいるけれど、事件に関しては黙秘を貫いているわ。彼が口にした意味のある言葉は、浅宮雪乃の葬式に出席させる、だけね」

「宮地副部長つて、その日に引越す予定だったし、学校も転校しちゃうんだから、事件とは無関係なんじゃないかなあ。自宅謹慎を言い渡されてたんでしょ？」

弘美が意見を述べた。

わたしは思わず、「あつ」と声を上げた。

「宮地さんは、あの日、学校に来てました！ 来てたよね？ 神川君？」

自分のあやふやな記憶だけでは怪しいので、神川君に確認を取った。

神川君は首肯した。

「藤森さんの言う通り、宮地優は事件当日の放課後、確かに校舎下の通路を歩いていました。僕が藤森さんたちと美術室へ移動していた時、和泉が彼の姿を発見し、そして僕だけが美術室へ行くのを止めて校舎一階へ下り、偶然近くにいた中嶋君と共に宮地優の身柄を拘束したのです。このことは警察も把握しているでしょう、渦海さん？」

「ええ、把握しているわ。事件当日、教育指導の教師から警察に通報があつて、所轄の刑事が宮地優の身柄を署に移送したのよ。そして、所持品検査の際、なぜか彼は音楽室の鍵を所持していたそうよ」
事件関係者の情報を警視庁捜査一課の渦海さんが知っているのは当然か。

声を上げた自分が恥ずかしい。

「音楽室の鍵を持っていたんなら、宮地副部長が犯人で決まりじゃん！」

弘美が妙に明るい声で断言した。

即座に否定する渦海さん。

「それはまずあり得ません。宮地優が事件当日に登校した理由は不明ですが、凶器に指紋が残っていたとしても、音楽室美術室兼用の鍵を所持していたとしても、殺人犯である可能性は低いでしょう」

「その根拠は何でしょうか？」

和泉君が訊いた。

「宮地優は、貴様が奴を発見してから殆ど時間を要せず、僕と中嶋君で身柄を拘束したんだ。一階から六階までの距離をゼロにできない限り犯行は不可能だろう」

神川君が嘲笑混じりに答えた。

和泉君は穏やかに微笑む。

「キミは一階から六階まで駆け下りた？」

「当然だ」

「一階に下りてから宮地優を拘束するまでに要した時間は、五分以下だった？」

「それは……わからない。中嶋君と手分けをして、校舎一階を捜し回ったから、十分程度かかってしまったかもしれない」

「その間に宮地優が六階まで駆け上がって殺人を犯した可能性は考えられないのかな？」

「……宮地優は、そんな運動能力のある奴には見えなかった」

「そうだね」

和泉君はちよつと冷たい微笑みを浮かべ、渦海さんに視線を移した。

神川君ではなく、女警部の説明を聞きたかったようだ。

「凶器以外からは、宮地優の指紋が音楽室のどこからも検出されていないのよ。つまり、彼が手袋をして犯行に及んでいない限りにおいて、彼の指紋が付着している凶器が犯行に使用された、と見るべきだわ」

「なるほど」

和泉君は納得してみせた。

何を納得したのだろうか。宮地優が氷室康広を殺害した犯人ではないと確信したのだろうか。それとも反対に、彼の犯行だと確信したのだろうか。

「確認しますが、凶器から検出された指紋は、宮地優のものだけですか？」

「宮地優以外にも、何人かの指紋が検出されているわ。自殺と目されている氷室康広の指紋は勿論のこと、宮地優の母親や君たちの担任教師である鈴原健一、美術部顧問の剣崎貴明の指紋がハッキリと残っていたそうよ」

先生たちの指紋が凶器に？

「なるほど。その情報を踏まえると、氷室先輩の刺殺に使用された凶器は、以前に宮地優が浅宮さんを襲った際に用いられた凶器と同一の物と考えられますね」

和泉君が明快に断言した。

わたしは、ああそうか、と理解した。

あの日、わたしには神川君が注意してくれたけど、先生たちは落ちている包丁を素手で拾ってしまったのだろうか。

「最後の質問ですが、事件発生時、美術室にいた人間は誰でしょうか？」

和泉君が変な質問をした。

美術室にいた人間？

渦海さんも質問の意図が読めなかったようだ。形良く整えられた眉を寄せ、和泉君を睨む。それでも質問に答えるべく、手帳に目を落とした。

「美術室には……えー……」

ぺらぺらとページを捲る。

手が止まった。

「その日、美術室には……美術部顧問の剣崎先生と軽音楽部の静川玲がいたよね。事件前までは、美術部の部員が一名、部屋で文化祭に出展する絵を描いていたそうだけど、事件が発生する少し前に

部屋から追い出されたそうよ」

手帳を見ながら渦海さんが答えた。

すると、静川玲が手を挙げた。

「あのひよろっちい変態男だろ？ あいつを追い出したのは私だよ。いやらしい目で私をじろじろ見るから、怒鳴りつけて追い払ったんだ。あいつ、叱られた子犬みたく逃げていったね。ヒヒヒ。あ、言っとくけど、私、剣崎先生と二人きりになりたくて追い出したんじゃないよ。ま、先生とはちょっとだけ仲良しだけどさ」

その台詞を聞いて渦海さんは小さく頷いたが、静川玲を大して重要視していないようで、突っ込んだ質問はしなかった。

「なるほど」

和泉君は手に持っていたパンを置き、何かを思案するように腕組みをした。そして、視線をテーブル上のパンに固定する。鋭い目つき。眼圧でパンの包装に穴が開きそうだ。

何を考えているの、和泉君？

事件を推理しているの？

そう心の中で問い掛ける。

勿論、返答はない。

和泉君は十五秒ほどで視線を渦海さんに戻した。そして、頭を下げた。

「恭子さん、ありがとうございます。事件について、ある程度理解できました」

「犯人の目星がついたの？」

渦海さんはぐっと身を乗り出して訊いた。

「数多く存在する容疑者を何人かに絞り込むことができました。ボクの中では、大まかに分けて二通りの仮説が立っています。しかし、いくら真相に近くとも、若干の不確定な部分があるので、二、三の点で情報の裏付けを取る必要がありますね」

「どんな情報の裏付けかしら？ 知りたいことがあるなら遠慮せず、に何でも質問してくれて構わないわよ、真悟君」

口調は受動的で柔らかいが、表情は能動的であり、眼光は命令的でさえあった。渦海さんは事件の推理を和泉君に期待しているのではなく、事件の真相を暴きなさい、と強要しているみたいだ。

和泉君は朗らかに微笑む。

「質問は後日にさせていただきます」

「後日では困るわ。宮地優を拘束できる時間には限りがあるのよ。

もし彼が犯人であるならば、即刻逮捕しないと、解放された彼が更なる犯行に及ぶ危険性もあるでしょう？」

渦海さんの言う通りだと思った。

もし犯人でなくとも、理性を失った宮地優を野放しにするのは危険だ。彼の主観に基づいて、浅宮雪乃の敵討ちをする可能性がある。そして、その騒動に巻き込まれるのはごめんだった。

「ボクの仮説を裏付ける明確な物的証拠がありません。恭子さんではなく、捜査本部を納得させるだけの材料がなくては、どれほど理に適った推理をしても無意味でしょう。ゆえに、後日改めてボクの推理を披露します」

和泉君は頑なだった。

「証拠は警察が責任を持って探し出すわ。だから、君の推理を聞かせて頂戴」

渦海さんも引かない。

「和泉君、二人を殺した方法、わかってるんでしょ？ それだけでも聞かせてよ」

弘美が渦海さんへの援護射撃をするように口を挟んだ。

そう言えば、先日、そんな会話を和泉君と交わっていた記憶がある。

渦海さんの双眼がぎんと鋭さを増した。

「浅宮雪乃と氷室康広を殺害したトリックがわかったの？」

「有力な仮説を持っているだけです」

「その仮説を聞かせてくれないかしら？」

「お話しできません」

和泉君はきつぱりと拒否した。

「その理由を聞かせて欲しいわね」

渦海さんは慚然とした顔を作った。

わたしもトリックがどんなものなのか興味があったので、仮説を聞きたい。

他のみんなも知りたいに違いない。

「今の時点でトリックを解説すると、二人を殺害した犯人が特定されてしまいます。そうなれば、貴女はその人物を逮捕し、事件の解決を図るでしょう？」

「当然よ。犯人が判明したのなら、逮捕するのが当たり前だわ」

「しかし、ボクの仮説が誤っていた場合、無実の人間を犯人に仕立て上げてしまうだけでなく、真犯人に行動の自由を許してしまうでしょう。誤認逮捕など許されませんよ。それゆえ、今後この事件がどう動くか、もう少しの間だけ見定めたいのです」

「事件の第二幕があると考えているの？」

渦海さんは怪訝な顔で訊いた。

「宮地優を殺人犯に仕立て上げることが殺人を犯した者の目的であるならば、この事件は続きません。しかし、そうでないならば、事件は新たな展開を見せるでしょう」

「真悟君は、新しい被害者が出ると予想しているのね？」

「被害者の有無は予想不可能ですが、犯人が何らかの行動を起こすことは間違いありません。およそ、宮地優の拘束が解かれる時期を待っているでしょうね」

そう言った後、和泉君は硬く口を噤んだ。

弘美と渦海さんが連携して和泉君の推理を聞き出そうとしたけど、彼はパンを食べる為だけに口を使用し、事件についての意見を紡ぎ出そうとはしなかった。

静川玲はいつの間にか屋上から姿を消していた。きっと、次の授業が移動教室か体育だったからだろう。

お昼休みの終わりを告げる予鈴が鳴った。

そろそろ教室に戻らなければならない。

「仕方がないわね……」

渦海さんは本当に仕方なさそうに溜め息を吐き、手帳をポケットにしまった。

「真悟君の名推理を期待してきたのだけど……。一度出直してくるわ」

「ご期待に添えず申し訳なく思います」

「……以前に比べて非協力的ね。何か気に障ることをしてしまったかしら？」

「いいえ、何も。ボクは貴女を大切な恩人と認識しています」
「……………」

渦海さんは恨めしそうに和泉君を睨み、屋上を後にした。

【2・和久井弘美】

わあーい、待ちに待った放課後だよつ。

五時限目の授業が数学ってのは脳味噌にすごーく負担がかかったやうねー。ダメージ計算が不可能なくらい全身を侵食するストレス値が急上昇だよ。あたし、数学って得意だけど、大っ嫌いっ！でも、まあ、今日も一日良く頑張っちゃったよー。自分を褒めてあげたくなるかなつ。

帰りしなに保奈美を誘って、駅前に新しくオープンしたスイーツバイキングのお店に行こうと思ったのに、彼女は家庭の事情でパスだって。保奈美ママとお買い物に行く約束をしちゃったみたい。うーん、仲良し家族だね。ちょっと羨ましいかなつ。うちはギスギス家族だから……。

神川君は、なんだか暗あーい顔して保奈美の後を追いかけて行っただけど、何か重要な話でもあったのかな？ もしかして、愛の告白で恋人に立候補な感じ？ 彼、和泉君に対抗意識メラメラだよね。そーゆーところは、ちよこつとマイナスポイントかなあ。

でもでも、そのお陰で、今日は和泉君と二人きりのデートだよー。学校から駅前の交差点に至るまでの短い距離だけど、あたしにとっではラブラブウエディングロードって感じかな。保奈美の居ぬ間に心の洗濯……って、保奈美は鬼じゃないか。

「和泉くーん！ 早く早くうー！」

「ああ、和久井さん、帰る前に少し寄り道をしてもいいかな？」

「いいに決まってるよー。っていうか、望むところなのです。」

「寄り道するの、大賛成！」

「どこに行きたいのー？」

「音楽室だよ」

「おっけー」

あたしはにっこり笑って快く承諾。

全然問題ないんだよつ。和泉君の行きたい所にレッツらゴー。

んー、でも、六階まで上がっていくのは大変だね。あたし、体力ないから六階に辿り着く頃には、たらーり汗掻いて、はーはー息を弾ませて、フラフラ状態。まあ、実際は、単に階段を上るのが面倒なだけなんだけどね。でも、ひーひー悲鳴を上げてたら、和泉君が手を引いてくれる展開に！ 感謝感激だよー。

「今日は静かだね」

視聴覚室から軽音楽部の騒音が聞こえてこないことが、和泉君は気になるみたい。

「うちの美術部と同じで、軽音楽部もしばらく活動を休止するみたいだよ。殺人でも自殺でも、事件が解決するまでは帰宅部に変更ってことだねっ」

「殺人でも自殺でも……？ 面白い表現だね、和久井さん」
くすくす笑われちゃった。

どこが面白いのかわかんないけど、和泉君が笑ってくれたから問題ナッシング。あたしも笑いをシンクロさせて一体感上昇。

「吹奏楽部も活動休止みたいだ」

うんうん、音楽室のドアが開けっ放しになってて、ブーブーギー、ヘタツピな演奏してる生徒の姿は見えないね。でも、吹奏楽部じゃないよ。

「和泉君、ブラスバンド部だよ」

そつと訂正。

それで不機嫌になる和泉君じゃないよね。

「吹奏楽とブラスバンドか……似て非なるものだね。記憶しておこう」

和泉君、またまたくすくす笑っていい感じ。保奈美と同じくらい仲良くできてる気がする……。つてのは言い過ぎだけど、お互いの距離が縮まったのは勘違いじゃないよ。この調子で押して押して土俵際まで押しまくっちゃおっかな。んー、でも、そういう馴れ合いの

関係を彼は望んでないかな。彼って、スマートな交際ってのがお似合いだしね。

音楽室に入ると、和泉君がドアを閉めちゃって、二人きりの密室状態を作ってくれちゃったつす。

何をするのかな、ってドッキドキなシチュエーション。

えっちなこととか求められたらどうしよっか？

勿論、即時おっけー。

なーんて、そんなわけねーっす。さすがに校内はマズイよね。

「ここで何するのかなー？」

「調べ物だよ」

「調べ物？」

「和久井さん、こっちに来て」

和泉君は、教室の片隅でドーンと異彩を放っているグランドピアノの向こう側に歩いていきながら、おいでおいでと手招き。

「何かなー？」

駆け寄って全開スマイル。

和泉君はポケットに手を入れて何かを取り出した……って、ロープですか？

こら、和泉君！ それで何すんのかなあ？ 痛気持ち良い変態ちつくなプレイで淫行な感じ？

「あたしにSMプレイとかする計画？」

「え？」

吃驚眼の和泉君。

ちよっと珍しい表情だよ。すぐにシュツとした顔に戻って、苦笑しちゃったけどね。

「このロープでキミを縛って、どこかに隠し持っている鞭で折檻すると思った？」

「せっかん？」

せっかん……って何？ 戦艦じゃないよね。

キョトン顔のあたしを見て、和泉君は呆れ顔。これも珍しい表情
つすね。

「いや、いいんだ。それよりも、窓に背中を預けるように立ってく
れないかな」

あーっ、もしかして和泉君、今、あたしのこと、日本語も理解で
きないお馬鹿さんで思ってたでしょ？ んー、でも、仕方ないかな。

あたしは言われた通り、窓にへばりついてバンザイ。

「……手は上げなくてもいいよ」

「手を縛って吊すんじゃないの？」

「吊す？ ふふっ。キミは被虐願望の持ち主なのかな？」

「ヒギヤク願望……って何？」

「……キミは面白い子だね、和久井さん」

失笑されたっすー。国語の勉強がいかに大切かを痛感。あたしっ
て語彙力がなさ過ぎだね。明日から猛勉強開始（予定）だよっ。

「冗談はさて置き、キミの首にロープをかけるけど大丈夫かな？
ロープに対するトラウマは持っていないよね？」

トラウマ……って何だろう、と思ったけど、自分の無知を晒して
も和泉君の気は引けない感じだから、口にチャック。それで適当に
頷いとこつと。

「少し苦しいかもしれないけど、ちょっとだけ我慢してね」

そんなお願いされちゃったら文句言えないよーっ。でも、首に手
際良くロープをかけられて、カーテンのレール部分に通して、きゅ
ーっと引き絞られちゃー苦しくないわけないよ。

和泉君、あたしに首吊り自殺を強要してるのかな？ お兄ちゃん
みたく？

爪先立ちなあたし……。

あと五センチロープを絞られたら、即座にご臨終だよ。

「この状態だと、多少苦しいけど、死にはしないようだね」

「んーと……和泉君、ギブ。ギブアップだよ。あと三秒で呼吸困難
で心停止かも」

ロープで擬似首吊り体験もおつけー。

でも、勢い余って殺すのは勘弁してちょ。

「三秒は困るな。一分ほど我慢して欲しい」

そう言って和泉君は部屋の入り口に移動しちやいましたとき、お終い…… ってこらっ！

このまま見殺しっすか？ あたしに自殺っぽく死ねと仰ってますか？ お馬鹿な人間は、即刻即座に抹殺なのですか？

あたしの首吊り具合を、和泉君は部屋の入り口から眺めて一言。

「彼女は台に乗っていたのかな？」

彼女…… って誰？

台…… って首吊り台？

全然意味わかんないよ。

和泉君は室内を物色し始めちゃって、首吊り状態のあたしを放置。もうとつくに一分過ぎてるよ、と助けを求めたかったけど、彼がすんごく真剣な面持ちなのでぐっと我慢。あたしはバレリーナ、と自己暗示にかけて爪先立ちを継続……。でも、そろそろ限界だよー。ヘルプミー、和泉君！

和泉君がどこからか小さな箱を持ってきて、あたしの足元に設置。それに乗れってことかな？

まさに首吊り台だねー。

「乗るの？」

恐る恐る訊いたら、あっさりと首肯されちゃったよ。

どうする、あたし？

「これに乗れば、多少苦しさが軽減されると思うよ」

確かに言われてみれば、台に乗れば首にロープが食い込むことはないね。でも、ロープを絞るのは勘弁してちょ！ という心の声は届かないんだよなあ。もし台を外したら致命的危機が到来だよー。しかも、あたしが首吊り台に乗るのを待って、和泉君はロープを限界まで短く絞っちゃったよ。おいおい、マジっすか？

「これなら苦しくないね？」

「うん、苦しくはないけど……足下が頼りない感じだよ。地震が来たら絶命宣言必至な危険度だと思うなあ」

「そのままじっとしていて。間違っても台を蹴らないように」

和泉君はそう言って、再び入り口に移動。

そこから首吊り台の美少女（自称）を眺めて、そんでうつすら微笑んで納得。

「うん、記憶と等しい光景だ。ちゃんと首を吊っているように見える。それに、この位置からだとピアノが障害物の役割をして、台の部分だけが丁度隠される」

あれれ、もしかして浅宮部長の自殺を再現してるのか？

うつん、違う。

彼女が嘘自殺してたのかを検証してるんだね、きつと。

「和久井さん、悪いけど、軽くロープにぶら下がる感じで、自殺しているように装ってくれないかな。死なない程度でいいから」

死なない程度って……こら！その言い種、ちよびつと酷くないかな、和泉君。

内心で愚痴をグチグチ。でも、しっかり従っちゃうあたし。

くいつと首にロープが食い込んで、とってもデンジャラス。

「こんな感じでいい？」

「ああ、うん。いや、そんなに無理をしなくてもいいよ。もう十分だ」

「入り口からの観察は十分なんだね？ そんじゃ、ロープ取ってもいい？」

「構わないよ」

和泉君の許可を得てロープを解こうとする。

あれ、解けない？ 解きたいのに……ぎゅつと結んであるから解けないよー。

モタモタしてたら、和泉君がすつと解いてくれたよ。優しいね。それに、あたしが台に乗ってても、彼の方が背が高いところが憎い

ぞつ。惚れ直しちゃうよ。

「それでは、次の検証に移ろう」

「何するのかなー？」

「ボクは準備室に移動するから、キミはここで大騒ぎして欲しい」

「大騒ぎ？ 椅子とか机を蹴飛ばして、お馬鹿な中学生みたく窓ガラス割って、ピアノの上でダンスしたり？」

勿論、冗談だよ。その辺、和泉君はわかってくれたよね。くすくす笑ってくれてるし。

「ダンス？ 面白いね。是非とも拝見したいけど、実際には大声で喚いてくれれば十分だよ。教室を破壊する必要はない」

「了解しましたー！」

文句なしに笑顔全開で敬礼。

和泉君が準備室のドアをノックしたら、中から応えがあつてオーブンぎドア。

笹倉さくら先生がいたみたい。

「あゝなに？ あれ、君……鈴原先生とこの生徒の……和泉君だっけ？ こんな時間に何の用？ 一発やらせるとか言ったら、ぶっ飛ばすわよ。まあ、君くらいの美少年なら、乳揉み程度なら許可してもいいけど……ん？ そんな気はないって顔だね」

いつも面白い笹倉先生。教師にあるまじき問題発言を平気で連発する破廉恥さが、生徒に大人気なんだよね。

でも、和泉君と笹倉先生がこそこそ内緒話して、あたしは仲間外れ。疎外感でぞんざいな感じ。んー、それは違うかな。単に、ここまで話し声が聞こえないだけだね。

「和久井さん、準備はいい？」

「おっけーだよっ！」

和泉君の声と共に、ドアが閉まる準備室。どうやら笹倉先生に了解を貰えたみたい。

あたしも大騒ぎする準備バッチシ。

「和泉くん！ 騒いでいいー？」

準備室に向けて怒鳴ってみる。

反応ゼロ。打っても響かない鐘。防音効果抜群の特別教室だもん、幾ら叫んでも聞こえないよね。だから、勝手に大騒ぎしちゃおう。

「おい、和泉くん！ 好きだよーっ！ 結婚してくんないかなあ？ そんで一杯子供作って、幸せな家庭築いて…… そんで……。とにかく、保奈美じゃなくてあたしと付き合っただよー！」

この際だから、絶対的防音効果を過信して、恥ずかしさブツギリの恋心を告白しちゃえ、ってことでラウドなシャウト。本人が目の前に立ってたら、それこそ首吊り台でゴートウヘル。っていうか、即座にスーサイド。

これっていつまで騒げばいいんだろう。声帯が壊れて、血を吐くまで叫ばなきゃ駄目かなあ？ もう既に喉が限界っすよー。

それから一分ほどして、準備室から顔を覗かせた笹倉先生に「ちゃんと騒いでる？」と睨まれて、不本意なあたし。

「聞こえなかったんですかあ？ 喉が壊れるほどの大絶叫でしたよー」

「そう？ 全然聞こえなかったわよ」

「防音効果抜群だからでしょ？」

「和久井さんの騒ぎ方がシヨボかったんじゃないかしら？」

言い掛かりですよ、ヤンキーせんせー。

「和泉君大好きーっ！」

唐突に絶叫してみせて、声帯崩壊のカウントダウン開始。

「ちょ、ちよっと、和久井さん、いきなり何を言い出すの！ そんな声で叫んだら……」

「さつきもこれくらいの声で叫んだんですよ。でも、防音効果抜群だから大丈夫ですよー」

「ドア、開いてるわよ……」

「え？」

準備室から顔を覗かせて苦笑している和泉君。

ありやりや……こりや参ったね。何事にも失敗は月のモノっていうけど、これって致命的失敗なんじゃ……。恥ずかしいから弁解しよう。

「えっと……冗談だよ、和泉君。大好きじゃなくて、大親友な感じになりたいなあ、って言ったことにして。保奈美にはシークレットな秘密ってことで宜しくー」

「シークレットな秘密？ 面白い表現だね。意味を重複させることで意思を強調しているのかな？ 何にしても気にしなくていいよ。藤森さんには黙っておこう」

「ありがと」

「どういたしまして」

まあ、和泉君は保奈美しか眼中にない感じだから、あたしの告白なんか戯言程度にしか思わないのかな。それ、ちょっと淋しいよね。

「これで現場検証は終わりだ。付き合わせて悪かったね、和久井さん」

あたしには和泉君が何を検証していたのか理解できてないけど、終わったんならそれでいいかな。でも、えっちな展開になるのをパーセントくらい期待してたりしたんだよ。まあ、笹倉先生が見てる前じゃ何もできないけどね。

「んー、全然問題ナツシングだよ。二人きりで遊べてちょっと嬉しかったかも。和泉君は調べたいこと全部調べ尽くしちゃったの？」

「ああ、十分に。もう不明確な点はない。この後は、キミに付き従おう。駅前のレストランに行く予定だったかな？」

「うん。スイーツなバイキングだよ。和泉君、甘い物って好き？」

「嫌いではないね」

それって、好きでもないってこと？ 男の子って、基本的に甘い物を好んで食べないもんね。んー、でも、こんな機会は二度と来ないかもしれないから、今日はトコトンあたしに付き合ってもらおうよ

っ。

「それでは笹倉先生、ボクたちは帰宅します。ご協力ありがとうございます」

「あれ、もう帰っちゃうの？　せっかく来たんだから、コーヒーでも飲んでいったらどう？　ケーキくらいなら出すわよ」

「お申し出は嬉しいのですが、この後は和久井さんとの約束があるので、今日のところは失礼します」

「あら、そう……残念」

「あたしたち、駅前のレストランでスイーツなバイキングを計画してるんですから、誘惑厳禁ですよっ！　特に、教師が生徒を誘惑するのは倫理的にマズイと思います！」

「誘惑？　フッフ……そうか、誘惑か……」

先生、何気に和泉君を気に入ったみたい。もっとお喋りしたいのかな？　でも、駄目だよー。彼は今から、あたしとデートな感じだからねっ。

あたしは笹倉先生の誘いを笑顔で振り切って、和泉君の腕を掴んで音楽室から強制退去させて、そんでもってゴートウヘブンの予定だったんだけど……。

「そんじゃ、ちょっと待っててよ。十分くらい。私、職員室行っちゃつと用事済ませて、ぴゅつと帰宅準備しちゃうからさ。そんで一緒にスイーツなバイキングしょ」

悪戯っぽい顔で、笹倉先生が一方的に参加希望を表明。

無茶苦茶ですね。

「ちよっ……せんせー！　あたしの恋路を邪魔すんの止めて下さいっ！」

「恋路？　フッフ……そうか、恋路か……」

「教師が生徒の邪魔してどうすんですか！」

「邪魔しないわよ。ただ、不純異性交遊しないか心配してついでにだけ」

不純異性交遊って……えっちのことですかあ？　今時の若者に言

つても無意味だと思っよ、先生。あたしは未経験者だけどね。

「余計なお世話ですよっ！」

「まあまあ、夕食奢るからさ、一緒に行かせてよ。君たちみたいな可愛い生徒とご飯が食べたいの。ただそれだけ。その後で、非避妊でセックスしまくろうが、その結果妊娠して退学しようが、何しようが怒らないからさ。独身女のささやかな望みを叶えて頂戴な」

妊娠って……こら！ 教師の台詞じゃないよーっ！ この先生、やっぱ無茶苦茶っすー。んー……でも、まあ、ご飯奢ってくれんならいいかな。そうすれば、家に帰っても家族と顔を合わせなくて済むし、お小遣いの節約になるし、何よりも退屈しないだろうしね。」「仕方ないなあ……」

洪々に承諾。

嫌々だけど了承。

「和泉君もいいかな？」

「和久井さんが構わないのであれば、ボクに否やはありません」
そりや和泉君は構わないよね。別に、あたしと二人きりになりた
いわけじゃないからさ。でも、ちょっとだけでいいから、あたしの
気持ちに配慮して欲しいぞっ。

「良い子だね、君は。あとでキスしてあげる。それとも、もっと気
持ち良いことしたい？」

全く、この教師は……。

「こらーっ！ この淫行教師！」

「淫行？ フッフ……淫行教師か……。そうだね、その通りだ……。
何年もご無沙汰だから淫乱モード突入中なのかな。生理が近いし」
自分のことを淫乱で認めちゃったよ……。なんちゅー教師だ。教
育委員会に訴えるぞ。

「ほら、和泉君も拒否してよ！」

「先生が望むのであれば、ボクは拒否しません。ボクたちの間で秘
密が守られると仮定しての話ですが」

「和泉君も、こらーっ！」

「あらあら、和久井さん、冗談よ。淫乱教師の馬鹿な戯言だから気にしないでいいの」

「気にしちゃいます！ 和泉君も、真面目な顔で答えちゃ駄目っ！ その台詞、そのまんま保奈美にバラしちゃうよ！」

「ああ……それは困るね」

あたしはぶんすか怒ってたけど、笹倉先生が職員室に行ってる間に和泉君が慰めてくれたから、気分は大改善。っていうか、反転良好でゴートウヘブン。何をしてもらったかは内緒。保奈美には口が裂けても言えないこと。にやははは。嬉し恥ずかし、ほっぺにチューナ感じ？ ボルテージ最高潮なので自分から秘密開示っす。

さすがにくちづけは駄目だったさ。あたしと保奈美の関係がギクシャクしちゃうかもしれないから、だって。うーん、和泉君は保奈美に操を立ててるんだね。

「おまたせー」

職員室から戻ってきた笹倉先生は、服も着替えていてOLちっくな装い。ちよっと遊んでそうなお姉さんて感じかな。お化粧もばっちり直してきたみたいだね。

「さあ、行こうか」

不良教師に引率されるいたいけな生徒二名。

「ご飯を食べた後は、居酒屋でしんみりと語らおうね」

「はあ……。しんみり、ですか……」

なんか、あたし、強引すぎる勢いに吞まれている感じだよ。

「今夜は朝まで飲み倒すぞー！」

気合いと共に飲酒宣言する教師。

あたしも飲むんすか？

大丈夫なのかな、あたしたち……。

「和久井さんはお酒を飲むことができるのかな？」

和泉君に訊かれて、あたしは咄嗟に首肯しちゃったよ。

実際は、一滴も飲んだ経験ナッシング。でも、和泉君と一緒にならいいかな、とか思ったりしちゃう若気の至り。

中略。

結局、家に帰ったのは朝の二時。

笹倉先生の飲酒運転で送ってもらったんだよ。

あの人、本当に駄目教師なんだから……。いつか絶対に教育委員会から叱られると思う。たぶん教員免許剥奪かな。

あたしはシャワーを浴びてベッドに直行。

睡眠時間はなくなっちゃったけど、明日は学校がお休みだし、お酒飲むのも結構楽しかったからオールおっけーだね。

【3・藤森保奈美】

学校から自宅までの帰り道を和泉君と肩を並べて歩き、他愛ない会話を交わして幸せ気分に戻る、という貴重な癒しの時間を泣く泣く放棄してまで家族サービスに努めようとしたのに、母親は妹と二人でフライングスタートしてしまい、わたしが帰宅した時には既に誰もいなかった。こんなことなら非情な家族など放つたらかしにして和泉君と一緒に帰れば良かった、と無人のリビングを呆然と見つめながら思った。まあ、ガツカリはしたし、恨んでるし、拗ねてるし、むかつ腹が立ったのも事実だけど、家族の絆を断絶するほどの怒りに駆られたりはしなかった。わたしを待っていてられない何らかの理由があつたのだろう。そう考えれば、内心に揺らめく不快感は半減する……ような気がした。

「学校に戻ろうかな……」

無人の我が家ではつりと呟く。

今ならまだ和泉君が学校に残っているかもしれない。

いや、駅前に向かう方がいいだろうか。弘美が、駅前に新装開店したレストランに行きたい、と言っていたから、あの子の性格からして今頃は和泉君を強引に誘って一緒に向かっているはずだ。

わたしはカバンを自室に置き、制服から普段着に着替えて、ちょっとお小遣いを多めに持って家を出た。

否、出ようとした。

玄関で靴を履いていると、いきなり、ガチャガチャとドアが異音を発した。

何だろう？

ドアに目を凝らす。

高速で回転するドアノブ。

外からドアノブが乱暴に回されているのだ。

誰かが家に侵入しようとしている？ まさか強盗？ それとも暴

漢？　こんな夕食時に？

わたしはドアノブを回している者の姿を確認しようと思い、ドアに備わっている覗き穴から外を見た。もしかしたら、母親たちが鍵を紛失して家に入らず立ち往生している、という可能性もなくはない。

そつとドアに近寄ってドアスコープに右目を当てる。

ぼんやりとした人影が徐々に形を成し、ある一人の男の姿になった。

「あつ！」

思わず声を上げそうになった。

我が家のドアの前に立っていたのは、かつて詩海高校美術部の副部長だった宮地優だ。

宮地は今現在も警察に身柄を拘束されている、と渦海さんから聞いていたけど……、どうして我が家に？　容疑者なのに、解放されちゃったの？　解放されたのなら、転校したんだし、引越したんだし、もうこの街に留まっている意味はないでしょう？　それなのに、なぜ？

どうしよう……。

ドンドン！

ガンガン！

ドアが軋むくらいの激しいノック。

いや、ノックではなくて破壊行為だ。

施錠は完璧になされている。だから、宮地がドアを破って侵入してくる心配はない。ドア自体を破壊するのも不可能だろう。だけど、他の所から入るのは不可能じゃない。

一番危険なのは、リビングのガラス窓だ。あそこを叩き割られれば、一瞬で屋内に侵入されてしまう。それに、台所の勝手口は、そもそも鍵が掛かっていないと思う。

本当にどうしよう……。

ドンドンドン！

ドンガンドンガン！

更に激しく乱打されるドア。

無言なところが物凄く怖い。

和泉君に電話して助けを求める？ ううん、和泉君は自宅マンションにいないだろうから連絡が取れないに違いない。それなら、神川君に電話する？ いや、彼の家の電話番号は聞いていない。では、学校に電話して……。ううん、違う違う。こういう場合は、真っ先に警察を頼るのが正しい対処方法だろう。万が一の為に渦海さんの連絡先を聞いておけば良かった、と今更ながらに思った。

わたしは忍び足で玄関を後にし、キッチンに入って、テーブル横の台に設置してある電話に縋り付いた。受話器を取って、110番をブツシュ。指が震えて上手くボタンを押せず、三回も掛け間違えてしまった。でも、なんとか掛ける。

電話が繋がった！

そう思った瞬間、パリーン、ガシャン、という不吉な破壊音がリビングの方から聞こえてきた。

入ってきちゃった！

どうしよう。

どうしたら？

耳元で警察の人が何か言っているけど、問答している場合じゃない。

「あの、えっと、ど、どうしよう……。み、宮地……。あの、宮地さんが……。ど、どうしてかわからないけど……。ど、どうしたら？」

自分がパニックを起こしているのを自覚しているのに冷静になれず、何を言えば助けに来てくれるのかわかっているのに口から出る言葉は意味不明。

「落ち着いて現在の状況を伝えて下さい」

そう言う警察の人の落ち着いた声が逆に焦りを生む、という最悪のパターン。

「あ、あの……。わたし……」

みしつ。

廊下の床板が鳴った。

はっとしてリビングのドアに視線を移すと、そこには宮地優の姿があった。

「きゃああ！」

我知らず悲鳴を上げていた。

宮地の手には果物ナイフみたいな刃物が握られている。わたしの為にリンゴの皮を剥きに来てくれたわけじゃない。ナイフで襲いに来たのだ。殺しに来たのかもしれない。

宮地優は普通の状態ではなかった。

虚ろな目。荒い鼻息。痙攣する頬。戦慄く唇。紅潮した顔。血管の浮き出た首筋。ボロボロの服。血塗れの手。剥がれ落ちた爪。滴る血。

どう見ても正気ではない……。

ゆっくりと振り上げられるナイフを見て、わたしは受話器を放り出し、廊下を玄関方向へと駆け出した。

無抵抗で殺されるつもりなどさらさらない。掴まったら命はないだろうけど、逃げ足なら負けない自信がある。そう思ったんだけど、いざ走ってみると足が纏れて上手く走れないことに気付く。脳の命令がちゃんと足に伝わっていない感じだ。でも、死にたくないから玄関まで一生懸命走る。

ドアを開けようとして、鍵が掛かっていることに絶望。ご丁寧にチェーンまで掛けられているので容易に開けられない。

元副部長がドタドタと派手な足音を踏み鳴らしながら追いかけてきた。

ただ内鍵の摘み部分をちょっと捻るだけの作業が上手くできず、もどかしくてならない。

早く開いてよ！

震える手でチェーンを外し、鍵を開けた。

すぐ背後まで宮地が迫ってきている。ハアハアという忙しない呼

吸音が真後ろから聞こえる……。

ちらつと背後を確認してみた。

完全に理性を失った人間がそこにいた。

わたしを凶器で脅して強姦するとか、連れ去って監禁して身代金を要求するとか、そういう感じではない。はなから殺人を犯すことしか考えてない顔だ。

わたしは体当たりするようにドアを開けて、外に逃げ出した。

肩を掴まれそうになったが、紙一重ですり抜ける。

靴など履いている余裕はなかった。

わたしは高級住宅街の坂に向かって、裸足で道路を走った。
なぜそっちに向かったのか……。それは、和泉君の自宅があるからだ。

和泉君……。

和泉君……。

和泉君、助けて！

心の中で彼の名前を叫び、泣いて助けを求めながら走った。

「誰か！ 助けて！ 助けて下さい！」

しかし、今日に限って誰も道を歩いていない。

神様、わたしを見殺しにするつもり？

坂の前の交差点まで来たところで、運悪く信号が赤に変わってしまった。

酷いよ、神様……。

待ってたら殺されると思い、わたしは信号無視をして横断歩道を駆け抜けようとした。

その瞬間から時間の流れがスローモーションになった。

一步一步が遅く感じる。

体が重くて自在にならない。

横から車が接近してくる。

背後で叫び声がした。

神川君の声だ、と気付く。

車がクラクションを鳴らした。

目の前に車体が迫ってきていた。

あつ、ぶつかる、と思った。

こんな惨めな死に方をするのか……哀しいな。こんなことなら、和泉君に押し倒された時に行為を突っぱねなければ良かった……。ごめんね……。

激しいブレーキ音。

外国産の高級車が鼻先を掠めて通り過ぎ、横断歩道の脇で急停止した。

ああ……轢かれずに済んだ。

腰が抜けてしまい、わたしはその場にへたり込んだ。後ろから凶器を持った殺人希望者が追いかけてきているのに、道路の真ん中で座り込んでしまった。足に力が入らない。

もう駄目かな……。

背後に人が駆け寄ってくる気配を感じた。

刺されちゃうんだ……、と半ば諦めた。

しかし、一向に痛みを感じない。

刺されない。

その代わり、誰かがわたしの名前を連呼している。

そつと背後から抱き締められた。

誰だろう？

もしかして和泉君？

わたしは後ろを向いた。

神川君だった。

その向こう側では、何かを喚きながら凶器を振り翳す宮地優とスツ姿の男が揉み合っていた。

もしかして和泉君？ 和泉君が宮地を取り押さえてくれた？

いや……違う。

「剣崎先生……」

わたしを暴漢から助けてくれたのは、美術部顧問の剣崎貴明だった。

剣崎先生は宮地を羽交い締めにして、何かを怒鳴っている。神川君に、警察を呼ぶように命じているようだ。

ああ、そうだ。ちゃんと警察に連絡しないと……。家の電話、受話器が外れたままだったんだ。通話料が高くなっちゃうかな、と馬鹿な思いを巡らせる。

神川君はわたしを抱き締めたまま動かない。

「君を守ると約束したのに……、こんなことになって……ごめん」
そう耳元で謝罪された。

そんなことどうでもよかった。今はただ、ぎゅっと抱き締めていて欲しかった。

遠くからパトカーのサイレンが聞こえてきた。

「おまえの所為で浅宮さんが死んだんだぞおおお！ おまえがいつを野放しにしたから、浅宮さんが死んじゃったんだあああ！」

宮地優の血を吐くような叫びが聞こえてきた。

わたしの所為で浅宮部長が死んだ？

言っている意味が理解できない。いや、意味はわかるけど、理に適っていないと思う。わたしに責任を問うなんて滅茶苦茶だ。的外れである。和泉君を断罪するならまだしも、わたしを襲う意味がわからない。

パトカーが交差点の前で停車し、中から二名の警察官が駆け出してきた。

一人が宮地優と剣崎先生の方へと走り、もう一人がわたしの方に駆け寄ってきた。

ああ……助かったんだ……。

安堵と共に恐ろしいほどの脱力感がわたしから意識を奪った。

よかった……。

気絶するのは怖くなかった。

【4・藤森保奈美】

目を覚ますと、最初に真っ白い天井が視野に入ってきた。

広い天井と蛍光灯の薄明かり。柔らかいベッドの上に寝そべっているのは確かだが、枕に僅かな違和感を覚えた。

自分の部屋ではない。

「藤森さん、大丈夫か？」

「起きてても大丈夫なのか、藤森？」

横から声を掛けられた。

声の方を向くと、神川君と剣崎先生がベッドの端に手をついて、わたしの顔を心配そうに覗き込んでいた。

どうして二人が？

半瞬ほど思考して、現在自分の置かれている状況を認識した。

ここはどこかの病院だ。そして、わたしは宮地優に襲われ、交差点で剣崎先生の車に跳ねられそうになって……、でも轢かれず、神川君が抱き締めてくれて、先生が宮地優を取り押さえてくれて、警察が来て、安堵のあまり気絶してしまったのだ。あの後、意識を失ったわたしを念の為、病院に連れてきてくれたのだらう。だから、真っ白いベッドに寝かされているのだ。

「大丈夫か？」

もう一度剣崎先生に訊かれ、わたしは首を振った。

肯定でも否定でもない曖昧な返事。

実際は、現実味のない記憶の圧迫によって心が混乱しているし、感情が安定せず泣きそうで泣けない状態なので大丈夫ではないが、かと言ってこの状況に不満があるわけでもない。神川君と剣崎先生には、助けてくれてありがとうございます、とお礼を述べるべきだろう。でも、何か喋ろうとすると喉に言葉が引っ掛かってしまい、上手く声が発せられないのだ。

「藤森、あいつに何かされたのか？」

剣崎先生が真剣な顔で訊いてきた。

ショックを受けた様子から、わたしが宮地にレイプされたと勘違いしているようだ。

わたしは首を横に振った。

先生が肩に手を掛けてきた。

力強くて頼もしい手だ。ぎゅっと抱き締めて欲しい、と思った。

「保奈美ちゃん、何か欲しい物ある？」

母親の声が聞こえた。

咄嗟に、先生に差し伸べようとしていた手を引っ込める。

「ママ……」

心がふつと軽くなった。ぐつと胸の内が熱くなる。涙が溢れ出そうだ。感情の制御装置が機能を回復したのだらう。子供のように泣きじゃくりたい欲求が耐え難いレベルに達して心に負荷をかける。でも、ぐつと我慢した。

「ママ……」

「保奈美ちゃん、お水飲む？」

「……………」

わたしは力なく首を横に振る。

今は、そつとしておいて欲しいだけ。

「藤森保奈美さん、落ち着いたのであれば、お話を聞かせていただけますか？」

また知っている声。

そつちを見る。

渦海さんが壁を背にして立っていた。でも、完全な無表情。声音は無感情。事務的な言葉。

「何を言っているんだ、あんたは！ こんな状態で事情聴取などできるわけがないだろ！ 藤森の気持ちを考えてモノを言えよ！ これだから警察は！」

剣崎先生が怒鳴った。

「お静かに！」

「すみません……」

女性看護師に注意され、先生は口を噤んだ。だが、ギリギリした目で渦海さんを睨む。

それを渦海さんは黙殺した。

「藤森さん、お話できそうですか？」

「……………」

「署に来ていただけますか？ それとも、しばらく病院に留まりますか？ 我々としては、警察署に来ていただきたいのですが」

わたしは曖昧に頷いた。

できれば、少しの間だけ母親と二人きりにして欲しい、と思ったけど言葉にできなかった。

「それでは警察車両で……」

「馬鹿な！ 警察なんかが当てになるかよ！ 藤森は俺が連れて帰る！ 元はと言えば、俺の教え子が犯した事件が原因なんだ。俺が面倒を見る義務がある」

わたしの手首を強く掴んで、剣崎先生が激しく主張した。

ああ、それもいいかな、と思った。剣崎先生なら優しく慰めてくれそうな気がする。これ以上悪いことも起きないだろう。

「それは許可できません」

渦海さんが冷たい口調で告げた。

「なぜだ！ 警察なんかより、俺の方が余程、藤森を気遣えるはずだ！」

「安全面に問題があります。貴方は殺人事件の容疑者なのですよ」

「俺が容疑者？ 何を言っている？ 犯人は宮地だろ！ あいつが浅宮を襲い、氷室を刺して、藤森も殺そうとしたんだよ！」

「それは貴方の推測でしょう？」

酷く冷たい口調で言う渦海さん。

一瞬、剣崎先生は怯んだ。

「そもそも、剣崎先生、貴方には藤森さんの安全を確保する能力がないと言わねばならないでしょう。宮地優に二度も逃げられている

ではありませんか。一度目は、自宅謹慎中の彼を引越先へ送り届ける道中で逃げられてしまいましたね。二度目は、藤森さんを助けた際に、宮地優を取り押さえていながら、警察が到着した途端に逃げられてしまっています。そんな詰め甘い人間に藤森さんの身を任せるわけにはいきません」

「俺の方が警察よりマシだ！」

「容疑者の意見など聞いていませんよ」

「！」

剣崎先生が顔を紅潮させて何かを言おうとした。

「僕に任せてもらえませんか？」

横合いから、神川君が申し出た。

「ガキは黙ってろ！」

剣崎先生が一蹴した。

神川君は教師を睨み、唇を噛む。

その時。

「ボクが保護しましょう」

静かな声が病室を支配した。

その声の主は……。

「なんだと？」

先生の苛立った声。

「ボクが保奈美さんを自宅に連れて帰り、暴漢から守ります」

強い意志の込められた言葉。

許せないくらいに頼もしい声がわたしの鼓膜を振るわせ、心を奮わせた。

わたしは意識せずにベッドから飛び出した。

「和泉君！」

入り口近くの壁に寄りかかって腕組みしていた和泉君に、わたしは転びそうになりながら駆け寄り、思いつき抱きついた。

「和泉君！」

「もう心配要らないよ。ボクがついていれば、キミに危害を加える輩を近づけたりはしない。絶対にね」

ぎゅっと抱き締められて、耳に熱い言葉を囁かれた。

労るような優しい抱擁。

わたしはこれを求めていたのだ……。そう思った瞬間、心の中で何かが弾けた。

堰を切ったように涙が溢れてくる。気付けば、恥ずかしいくらい大声を上げて泣いていた。幼児のように泣きじゃくってしまった。

しばらくの間、和泉君に抱きついていた。

安堵感が幸福感に変わっても、抱き締められ続けた。

わたしに自重を求める者などいない。この機会を利用して目一杯幸せを満喫しちゃえ、と彼の胸に頬を押しつける。甘やかな安心感が心身を満たしてくれた。

少し落ち着いた。

「これで涙を拭くといいよ」

和泉君がハンカチを手渡してくれた。

きつと酷い顔をしているに違いない。

わたしは慌てて顔を拭った。

真新しいハンカチが瞬く間に涙と鼻水でぐずぐずになる。

わたしは汚れたハンカチを返さず、自分のポケットにしまった。

洗ってから返そうと思ったのだ。

わたしは改めて和泉君の顔を見上げた。

いつもと変わらない穏やかな微笑み顔。

「お酒の匂いにする……」

和泉君の体から発散される酒臭に気付き、鼻をくんくん鳴らして確かめる。

「お酒、飲んだの？」

「ああ……。さっきまで飲んでいたんだ。学校の帰りに、ボクと和

久井さんと笹倉先生の三人でレストランへ寄った後、居酒屋でね」

「弘美と……お酒を？」

「笹倉先生も一緒だよ」

言い訳じみた台詞なんか聞きたくない。

「わたしを除け者にして？」

「ボクが、そう意図したわけではないよ」

わたしも誘ってくれば良かったのに……。

そうすれば、こんな目に遭わなくて済んだはずなのに……。

「わたしが酷い目に遭ったのに？」

「キミが襲われる可能性を考慮していなかったんだ。今日、宮地優が解放されることを恭子さんから聞かされていれば……。いや、そうではないね。ごめん。ボクの過ちだ」

ぎゅっと抱き締められた。

また涙が溢れてきた。

今度のは悔し涙だ。

「怒っているの？」

「……………」

怒っているに決まっている。和泉君以上に、弘美を恨んでいる。そんな自分に嫌悪感を覚えている。

「ごめん」

そう言って和泉君が額にキスをしてくれた。

一瞬で負の感情が解けてなくなった。

わたしって単純だな……、と思った。

「保奈美さんをお預かりしますが、宜しいでしょうか？」

わたしの母親を真っ直ぐに見て、和泉君が許可を求めた。

返答は、聞かずとも予想できた。

「勿論、いいわよ。どうぞ連れていっちゃって。和泉君にお任せすれば安心よね。むしろ私の方からお願いしたいくらいですよ」

母親がはしゃぐように答えた。

十ヶ月後には孫の顔が見たいとか、この際だから結婚するまで同棲しちやいなさいとか、この機会に乗じてイチャイチャするのよ、
と言いださなかったから一安心だ。

「恭子さん、宜しいですね？」

「ええ。この状況では仕方ないわ。ご両親の許可を得たからには、何も言えないものね。所轄の方には私から言っておくわ。藤森保奈美さんの安全確保は君に一任しましょう」

渦海さんは簡単に了承した。

「事情聴取は君の自宅マンションで行わせてもらっけどいいかしら？」

「構いませんよ」

順調に話が進んでいく。

もしかして、災いが転じちゃった？

しかし、この展開に待ったを掛ける不屈き者がいた。

「そんなことを許可できるか！ 身の危険が明確な藤森を、浅宮を玩んだ挙げ句に自殺にまで追い込んだ奴に任せるなど……。まして、一緒に住まわせるなど、教師として、男として、決して許せるものじゃないぞ！」

剣崎先生がベッドのシーツを叩いて叫んだ。

わたしを気遣って憤怒しているのだ。でも、和泉君を悪者みたいに言うのは止めて欲しい。

「和泉真悟は信頼できます。優れた知能と並外れた格闘能力を合わせ持つ男の子ですから。それに、浅宮雪乃の死因が自殺と断定されているわけではありません。氷室康広と共に殺害された可能性もあるのです」

渦海さんが冷厳な表情を向ける。

剣崎先生は顔に青筋を幾本も走らせ、女警部を睨み返した。

「馬鹿な！ 正気とは思えない！」

「剣崎先生、ご安心下さい。保奈美さんはボクが責任を持って守り抜いてみせます」

「何の力もない子供が責任とか偉そうなことをぬかすな！」

普段見せない悪鬼の形相で剣崎先生は喚き散らした。

ちよつと幻滅した。

「力ですか……」

和泉君は小さくフツと鼻を鳴らした。先生を見下すように嘲笑った。

「何が可笑しい！」

「いえ。可笑しいのではなく、愚かしいと思ったので……。失礼しました。一つお尋ねしますが、剣崎先生は静川玲という三年生の女生徒と親しい間柄なのですか？ 事件当時、美術室で会話をしていたそうですが、お二人はどのような関係なのでしょう？」

「な、なに？ 何だつて？」

唐突な質問に、剣崎先生は面食らったようだ。

「もう一つお尋ねしますが、先生が絵を描く際には、服を汚さない為にどのような手段を講じているのですか？ エプロンのような物を身に着けるのですか？」

「……………」

剣崎先生は和泉君を凝視したまま石にでも変化したように硬直してしまい、質問に答えなかった。

「違うよ、和泉君。エプロンではなくてお医者さんが着るような白衣を着用するの。わたしたち美術部の部員が全員使ってる物よ。先生はその余り物を借りているの」

先生の代わりにわたしが答えると、和泉君は三日月の形に目を和ませて頷いた。

渦海さんがこっちに歩み寄ってきた。

「その質問にはどんな意味があるのかしら？ 事件に関係しているのでしょうか？ 静川玲と剣崎先生との関係に事件解決の糸口があると考えているの？ 美術部員が使用している白衣に何か問題でもあるの？」

「疑問に感じたら、まずご自分で調べるべきだとは思いませんか？」

「……そうね」

渦海さんは唇を噛んで頷き、視線を剣崎先生に向ける。

「剣崎先生、藤森保奈美さんの身に別の意味で危険が及ばないように、私が責任を持って和泉真悟を監視しますので、どうかご心配なさらないで下さい」

剣崎先生は鋭く舌打ちしただけで何も言わなかった。なぜか、さつきまでの威勢が失われていた。

渦海さんの言葉に応じたのは、わたしの母親である。

「あら、そういう意味での危険なら大歓迎なんですよ。ねえ、保奈美ちゃん？」

「ママっ！」

「存分に楽しんでらっしゃいなー」

ひらひらと手を振る不道德な母親。

和泉君の前なのに！

神川君もいるのに！

本当にむかつ腹が立ったので、今年中に孫の顔を拝ませてやろうか、と一瞬思った。

「もう、何言ってるの、ママは！」

顔から目に見えぬ火を噴き出しながら叫ぶ。

剣崎先生と神川君以外の全員に笑われた。

「それでは、ボクたちは失礼させていただきます」

和泉君が一礼して、わたしの手を握った。

「恭子さん、送っていただけますね？」

「当然よ。私も君の家に泊まり込むつもりなのよ。別々に帰る意味はないわ」

渦海さんはそう言って、ポケットから車のキーを取り出し、放り投げた。

和泉君はそれを片手でキャッチする。

「駐車場で待っています」

「一応、周囲に注意を払いなさい。可能性としては低いけれど、宮

地優が隠れ潜んでいるかもしれないわ」

「ボクが一緒であれば問題になりません」

「そうでしょうね。万が一襲われても、十分に手加減なさいよ。いいわね、真悟君？」

「思わず彼を殺害してしまった場合、正当防衛は適用されませんか？」

「されるわけないでしょう？ 勿論、手足を切断したり、骨を砕くのも駄目よ」

「肝に銘じます」

馬鹿丁寧にと和泉君は一礼した。

【5・藤森保奈美】

わたしたちは病室を出た。

女性看護士に玄関前まで送ってもらい、そこからは和泉君と二人きり……ではなく、神川君を含めた三人で歩いた。

病院の駐車場は、少し離れた場所にあるらしい。

夜の十二時を回っているので、周囲には人氣がなく、しんと静まり返っていた。ちょっと不気味な雰囲気である。あんな酷い目に遭ったばかりなので、和泉君と一緒に座り込んで泣き出していただろう。だけど、今は美少年二人に挟まれて守られているから安心だ。両者が片方ずつ手を繋いでくれているのが素晴らしく心強かった。

「ねえ、和泉君」

「なんだい、藤森さん？」

「弘美と何かあった？」

今一番気になるのは、弘美と和泉君の関係だった。一緒にお酒を飲むなんて普通ではあり得ない。二人の関係に何か進展があったのではないかと勘繰りたくもなるだろう。

「何か？ おかしな質問をするね。彼女とは一緒にケーキを食べて、お酒を飲んで、楽しくお喋りをした程度だよ。何も特別な行為には及んでいない」

「お酒をたっぷり飲ませて、べろべろに酔っぱらわせて、えっちなことしようって思わなかった？」

「ボクはそんな姑息な手段を用いてまでセックスをしようとは思わないよ。どんな相手に対しても、自分の欲求をハッキリと伝える主義なんだ」

穏やかな口調で和泉君が答えた。

「そうだな。貴様は欲情すれば、恋人のいる女性に対しても平気で

セックスを要求できる男だ。そして、一度でも肉体的関係を拒まれた場合、二度と求めない。だから、酒で酔わせる必要などあるまい」
神川君が憎々しい口調で応じた。まるで自分の恋人を寝取られたみたいな言い方だった。

「ボクをよく理解しているようだね」

「僕は貴様という人間を知っている」

「ありがとう」

「礼など不要！　僕は、貴様の魔手から藤森さんを守る為にここに
いるんだぞ！」

神川君が怒りを全面に出して叫んだ。

わたしを守る？　和泉君から？　宮地優ではなくて？　意味が分からない。

和泉君は苦笑した。

「前言を撤回しよう。キミはボクを全く理解していない」

「だから、言っただろう！　僕は貴様という人間を知っている、と
！」

知っているけど、理解していない？　意味が分からない。

和泉君は失笑した。

「ああ、なるほど、その通りだ。キミは、ボクという存在をよく知
つてはいるが、少しも理解していないし、理解しようとしなない」

「貴様を理解できる人間など存在しない。いたとしても、それは鬼
畜の類だけだ！」

夜の静寂を引き裂く怒鳴り声。

和泉君は溜め息を吐いた。

「キミは、藤森さんに恋心をいだいているんだね？　だから、ボク
に敵対心を剥き出している。違うかな？」

和泉君がストレートな質問をした。

「……………」

神川君は答えなかった。

無言でわたしを一瞥し、視線を足元に落とす。

数秒間の沈黙。

「話を戻そう」

和泉君が言った。

「正直に言っと、和久井さんとは何もなかったわけではない。一回だけ、彼女の頬にキスをしたよ。回数の問題ではないかな……。キスをしたのは事実だ」

「ほっぺにちゅー？」

「俗っぽく表現すると、そうなるかな」

「族っぽく……」

シヨックである。

ちゅーって、暴走族的な表現なのだろうか。和泉君の認識では、素行の悪い人間が使用する言葉なのかもしれない。ということは、「ちゅー、して」と要求したら嫌われちゃうってこと？ それって、少し悲しい。

「ほっぺだけ？」

「勿論だ。彼女はくちづけを求めてきたけど、キミたちの親友関係を拗らせる危険性が高かったから、思い止まってもらったんだ」

「あの子ったら……」

明日の朝一番に文句を言ってやる、と心の中で誓った。

駐車場に到着した。

三人で渦海さんの愛車に寄りかかってお喋りを続ける。

車のボンネットに腰掛けているけど、大丈夫なのだろうか。外国産の高級スポーツカーなので、傷つけたりしたら物凄く怒られると思う。

「どうしてキスしたの？」

今は渦海さんの車の心配より、弘美と和泉君の関係を心配するべき時である。

「音楽室で事件を検証している時に、そんな雰囲気になったんだよ」
あの子、意識してキスをねだったな、と推測した。抜け駆けしようとしたわけだ。

「お酒の席で弘美に迫られなかった？」

「それはなかったね。笹倉先生も一緒だったから、大胆な行動には出られなかったと思うよ。和久井さんよりも、酔った笹倉先生の方が色々問題があったね」

「へえ……、笹倉先生が……」

笹倉さくらは面白い先生だから、きつとお酒の席は楽しかったに違いない。未成年が居酒屋でお酒を飲むのは非常にマズイだろうけど、今度飲む時には一緒に行きたいな、と思った。

「お待たせ」

渦海さんが駆け足で駐車場に入ってきた。

「あら、神川君も一緒なの？　もしかして、君も藤森さんの貞操が心配で、和泉君の家に泊まり込むつもり？」

「いえ……。渦海さんがしっかりとこの鬼畜男を監視するのであれば、僕は帰宅します」

神川君は苦渋の決断をするように言った。そして、わたしの顔を横目で見ると、彼の口から零れ出る小さな吐息。ついつい迷惑そうな顔を作ってしまったのだろうか。彼は諦めの表情を浮かべ、目を逸らした。

「そう。それなら、家まで送ってあげるわ。三人とも車に乗りなさい。ちょっと狭いかもしれないけど我慢なさいね」

わたしたちは肩を寄せ合って車に乗った。

確かに車内は狭かったけど、このギュウギュウな感じが心地いい。車が急発進した。

和泉君の家へ泊まりに行くのだ。

夢のような展開。

勿論、悪夢ではなくて。

白日夢でもなくて。

全て現実。

宮地優を許そう、とさえ思った。

第六章 緋色のオルタナティブ 【1・藤森保奈美】

和泉君の暮らすマンションには、以前一度だけ来たことがある。初めて会った日に、マンションの場所がわからなかった彼を案内したのだ。勿論、特別なことは何もなかった。市役所への行き方を尋ねられたので、玄関まで上がって紙に描いて説明しただけ。同じ屋根の下にしながら、何も意識しなかった。でも、今日は、今夜は、特別な意識を持って臨んでいる。大好きな男の子の家にお泊まりするのだから、ドキドキワクワクしないわけがない。それに、何よりも、わたしは、他人の家にお泊まりするのは初めてなのだ。親友の弘美の家にさえ宿泊したことがない。そんなわたしに落ち着けと言う方がおかしいと思う。

渦海さんの愛車で移動している時、和泉君から長期の宿泊を覚悟するように忠告されたので、神川君を送り出した後、着替えを取る為に一度自宅に寄ってもらった。

家の中は既に片付けられていて、宮地優が侵入した痕跡は殆ど残っていないかった。

心配してくれているらしい妹と父親にからかわれながら、わたしはそそくさと荷物を纏めて、家出さながらに飛び出した。

幸せになってねー、とか妹に叫ばれ、凄く恥ずかしい思いをした。

我が家から二分で和泉君の自宅マンションに到着。

和泉君が暮らしているマンションは、高級住宅街に建っているだけあって、かなりゴージャスだ。4LDKで広いベランダ付き。警備員が常駐し、監視カメラが幾つも備わっている。暴漢が容易に侵入できない警備体制が整っているのだ。まさに身を隠すのにつつけの場所と言えるだろう。

玄関を上がると、リビングに通された。

「遠慮せずにくつろいでよ」

和泉君にそう言われたけど、革張りのソファといい、ピカピカのフローリングといい、埃一つ付いていない家具といい、なんだか緊張を強いられる空間に感じて、わたしはその場で棒立ちになった。「どうしたのかな？」

和泉君が顔を近づけて訊いてきた。

微笑み顔の美少年を間近にして、どきんと心臓が高鳴る。甘い苦痛だ。

「あ、うん……。わたし、お風呂に入りたいなと思って……。服も着替えたいし……」

宮地優に追いかけられ、走り回って汗を掻いているだろうし、冷や汗にまみれているだろうし、服も下着も汚れているだろう。何もかも脱ぎ捨ててゼロになり、その上で心身共にリフレッシュする為には、入浴することが一番手っ取り早くて効果的だ。

「そうだね。それは良い考えだ」

和泉君はにつこりと頬笑み、バスルームまで案内してくれた。

バスルームは我が家よりも二回りほど広かった。

無論、ユニットバスではなく、湯船も手足が十分に伸ばせる大きさだ。

和泉君がバスルームを出ていった後、内鍵を掛けようかどうか迷ったが、発作など起こしてしまった時のことを考えて掛けないでいた。密室内に一人、という状況が怖かった所為もある。鍵を掛けずとも、入浴シーンを覗く者はいないだろう。和泉君がいる限り、宮地優に襲われる心配もない。そして、彼を警戒する意味はなかった。

わたしは手早く服を脱ぎ捨て、持参したビニール袋に放り込んで、新しい服を全自動洗濯機の上に用意しておいた。

バスタオルを持って浴室へと入る。

まず湯船に熱めのお湯を注ぎ、お湯が溜まるまでの時間を利用し

て体を洗った。ボディソープをスポンジに塗り、手の指先から丹念に磨いてゆく。汚れと一緒に嫌な記憶も流してしまう。全身の皮をべろーんと一枚剥がして、新しい身体に生まれ変わるのだ。色々な意味で何があってもいいように、大切な部分も欠かさず、いつも以上に念入りに洗っておく。和泉君を落胆させないように磨き上げる。「何考えてるんだろう、わたし……」

ちよつと変になっっているのだろうか。

渦海さんが一緒にいるので、彼がえっちな行為を求めてくることはまずない。

まさか三人でえっちを、なんてことはないと思う……。思いたい。そんな破廉恥極まりない妄想で頭の中を一杯にしていると、変態の仲間入りをしてしまいかねないぞ！　しっかりしろ、わたし！

ざつとシャワーを浴びて体についている泡を流し、次に長い髪の毛の洗髪に取り掛かった。これがまた凄いボリュームなので結構大変だ。湯船の具合を確かめてから髪を濡らし、シャンプーを適量手に取り、しっかりと泡立ててから髪に満遍なく塗す。時間を掛けて髪の毛の頭皮をマッサージ。かなりの重労働だけど苦にならない。艶々のサラサラにしなければ髪を伸ばしている意味がないのだ。

そう言えば、和泉君でロングとショート、どっちの髪型が好みなのか？

髪を洗い終え、リンスを髪全体に塗り込めておいて、わたしは湯船に身を沈めた。顎先までお湯に浸かり、ぼんやりと天井を眺める。「気持ちいいな……」

小声で呟く。

無論、それは肉体的な快楽ではなくて、精神的な解放感がもたらした気持ち良さだ。嫌なことなど何もなかったかのよう。熱めのお湯がじんわりと体内に染み渡り、思わず眠ってしまいそんな心地よさ。手足が伸ばせるっていいことだな、と痛感した。

三十分ほど全身浴を楽しんだ。

その後、シャワーを浴びてリンスを流し、もう一度軽く体を洗っ

てから浴室を出た。

体を拭き、髪を乾かし、服を着て、バスルームを出る。

入浴に費やした時間の合計は、およそ一時間くらいだろう。本当ならもう少し長く湯船に浸かっていたかったけど、和泉君とお喋りがしたかったので早めに切り上げた。

リビングに戻ると、渦海さんの姿がなかった。

着替えを取りに、一度自宅へ帰ったそうだ。

和泉君はソファにゆったりと身をくつろげ、何かの雑誌を読みながらお酒を飲んでいた。

「少しは落ち着いた？」

和泉君は手にしていた雑誌をテーブルに置き、肩越しに振り返って、邪念の一切ない澄んだ微笑みを浮かべた。

「うん、もう余裕で大丈夫！」

わたしはガッツポーズを作り、微笑み返して答えた。

「余裕で大丈夫？ 日本語としてはおかしい表現だね。すっかり元の調子、全く問題ない、という表現の方が正しいと思うよ」

真面目に返されて、わたしは可笑しくなった。思わず、くすつと笑いを零してしまった。

「もう完璧に鉄壁だよ。双壁の絶壁ぐらい難攻不落に調子良いかな」
知っている《へき》の付く単語を適当に並べて、下らない冗談を言ってみた。

和泉君は笑ってくれた。それも、声を上げて。

「マー君みたいな台詞を言う。面白いね。できれば、潔癖や悪癖という言葉も用いて欲しかったな。尚かつ文章に意味を持たせれば、彼の模倣者として推薦できるよ」

「……………」

そんな高度な言葉遊びは不可能だった。

「マー君って……誰？」

「いや、気にしないで。そのうち会えるだろうから。それよりも、

キミは想像以上に素晴らしい女の子だね。ボクが思い描いていた理想よりも数段面白いよ。全くの予想外だ。これからキミと過ごす時間が、貴重な思い出になる予感がする。いや、素敵な思い出になると断言するべきだね。今夜、恭子さんが戻ってこなければ理想的なのだけど、キミの置かれている状況を鑑みると、現状で満足するしかないかな」

なんか、手放しに褒められてる？

ちよつと照れた。

ちよつとどころでなく照れた。

「立ってないで座りなよ」

「あ、うん」

どこに座ろうか迷っていると、和泉君が同じソファに座るよう手振りで促したので、わたしは変にドキドキしながら、彼のすぐ隣に腰を降ろした。

「お酒は飲める？」

「え、お酒？　お酒は……ちよつとだけなら……。お正月に甘酒を舐めるくらいに飲むだけけど……」

「甘酒ね……。それだとウイスキーでは少々きついな。かなり薄く作れば大丈夫だと思うから、試しに飲んでみるといい。適度なアルコールは、キミの心身をリラックスさせてくれるよ」

「うん。じゃあ、うすーく、ね」

彼は、冷水と氷とウイスキーを混ぜ合わせ、過分なくお酒を作ってくれた。

わたしは目の前に置かれた琥珀色の液体を見つめて、法律違反なのではないか、と少しだけ躊躇したけど、和泉君に勧められたので思いきつてお酒を飲んだ。

初めての洋酒。

最初の一口は舐める程度。

微かに喉が熱くなる感じ。飲めなくはない。

もう一口飲む。今度は多めに含み、舌で味わってみる。

うんん……不味くはない。

「どう？ 胃の中が熱くなってこない？」

「え？ うん……」

そう言われれば、確かにお腹の中がぽかぽかしてきたような……。和泉君はグラスを傾けて、きゅーっと一気に半分くらい中身を飲んだ。

「和泉君、お酒強いんだね」

「ああ。一般的な高校生よりは強いよ」

「なるほどね……って、こちら！ 何言ってるの、和泉君！ 一般的な高校生はお酒なんか飲まないでしょう！」

「そうなのかな？ ボクは中学生の頃から嗜んでいたけどね」

「こちら」

わたしは和泉君の真似をして、コップの中身を半分くらい一気飲みした。

「ふう……」

吐き出す息が熱いのを自覚。

んっ？ ぽかぽかどころか、かーっと熱くなってきて……。急に血の巡りが良くなった感じがする。

「いい飲みっぷりだね」

「うん。美味しくはないけど、飲んでみると結構いけるかも。なんか大らかな気分になれてる感じだよ」

コップの中に残っている液体をぐくぐくと飲み干した。はしたない飲み方になっていると思うけど、自制が全く効かない。脳味噌が緩み、体内が発熱している。

「もう少し濃くしてみる？」

和泉君が訊いてきた。ていうか、既にお酒を作り始めていた。氷と冷水を少な目のしているようだ。

「そうね。ちよっとだけなら」

手渡されたグラスを唇につけて、ぐくくと喉を鳴らす。食道が焼ける感じが何とも言えない。内蔵を悪くしそうだなあ、と思った。

二杯目をごくごく飲み干す。

なんだかほんわかしてきた……。

「身体に障るといけないから、自分なりに飲むペースをセーブしてね」

三杯目のお酒を作りながら和泉君が忠告してくれたけど、わたしは酔いが回っていく不思議な感覚が面白くて、三杯目、四杯目と早いピッチで飲み干していった。

そして――

「全然平気だよつ。案外飲めるもんだねー。こーんなの軽い軽い！ きやははは！」

自分の口調が段々と弘美みたく変化していくのが物凄く可笑しい。あの子、日頃から酔っぱらっているのだろうか、と馬鹿な想像をする。

「なんかさー、熱くなつてきちゃった、わたしー。服脱いで裸になつていい？ なーんて、脱ぐわけないってーの！ きやははは！」

もう馬鹿丸出しで、本性剥き出し。自己制御機能崩壊状態。弾けているというより、壊れているのだらう。なんか、もう、可笑しくて仕方がない。笑いが止まらない。和泉君の困惑した顔が面白すぎる。明日になれば、浮かれ調子を猛烈に反省して、もう二度とお酒なんか飲みません、と宣誓することが確定的な状態だ。自己嫌悪に苛まれる確率は、百パーセント必至。でも、今日だけは、今夜だけは、今だけはぶっ壊れても許されるのではないか。

和泉君は呆れ顔だけど、軽蔑したり、うんざりしたり、ひいたり、見限ったりはしないと思う……。そう思いたい。

「弘美もお酒飲むのは初めてだっただろうからー、こーんな風にぐでぐでんにみつともなく酔っ払ったあ？」

自分だけが醜態を晒しているのではないという保証が欲しかったので、酔っ払った勢いを借りて訊いてみた。

和泉君は可笑しそうに微笑む。

「ぐでぐでん？ 面白い表現だ。彼女はべろべろに酔っていたよ

うだね。だけど、笹倉先生ほどではなかったよ」

「笹倉先生、どんなだったの？」

「今のキミによく似ているかな。キミはまだ自制心が働いているよ
うだから、酔った勢いで口走った戯言を即座に実行したりはしない
けれど、笹倉先生は有言実行型の酔っ払いだったよ。教師にあるま
じき破廉恥行為を止めるのに随分と苦労したんだ」

「何をしようとしたのお？」

「口では説明できない」

素っ気ない言葉。

恋人に隠し事をするなんて許せない、と思った。

まあ、わたしと和泉君は恋人関係じゃないけど……。

「わたしに言えないようなことをしたの？」

睨み付け、咎めるように訊いてみた。

「未遂だよ。何もしていない」

ちよつと怯んだ感じで弁解する和泉君が無性に可愛い。抱き締め
たい。

「本当かなあ？ 怪しいなあ。何をしようとしたのか教えてくれた
ら、和泉君を信じてあげてもいいよ」

上からモノを言ってみた。

和泉君は穏やかに微笑み、眼鏡を外した。

「教えて欲しいの？」

「うん、教えてえ」

「実践で？」

「うん、実践でー」

え？

実践？

会話のテンポと酔いに任せたノリで鸚鵡返ししてしまったが、泥
酔破廉恥女教師の問題行動を今ここで実践されるのはマズイ気がし
た。酔った勢いで……っていうのは思い出として哀しすぎるから。

「あ、ちよつ……待っ……」

ソファに押し倒された。

「えーっと……、何をしようとしてるのかなあ？」

可愛い子ぶって確認してみた。

「……………」

和泉君は無言で微笑み、わたしの両手を頭の上で押さえつけた。

強引ではないけど、抵抗を許さない感じた。良い言葉だと積極的愛情表現。悪い言葉だと強姦。ていうか、確実にセックスを求められている。

「最初がソファの上なのは哀しいかも……………」

これは切実なる願い。

「……………」

抱き上げられた。お姫様抱っこ。嬉しい気持ち。回避不能の急展開に戸惑う気持ち。お酒の酔いが程良く混沌を生じさせ、頭の中はぐちゃぐちゃ。

「わわわっ！　ちょ…………　ちょっと和泉君？」

「……………」

奥の寝室に運び込まれた。

大きなベッドの上に、そっと寝かされる。

「笹倉先生、こんなことしようとしたの？」

「和久井さん共々、ホテルに連れ込まれそうになったよ」

やっと口を開いてくれた。

「あの先生、淫行教師じゃん！」

「面白い女性ではあるよ」

「淫乱じゃん！」

「教師という職業は、恋人を作る機会が全くないと嘆いていたよ」

「でも、生徒相手はマズインじゃないの？」

「就業時間外であれば何の問題もないのではないかな。先生が誰と恋愛しようと、それは本人の自由だからね」

「でも、和泉君は……………」

わたしの恋人でしょ、と言いそうになり、慌てて言葉を飲み込ん

だ。

いつの間にか酔いはほとんど冷めていた。

和泉君の体が重なった。

微かに体重がかかる。

ベッドが小さく軋んだ。

「キスしてもいいかな？」

「うん……」

うわあ、とうとうこの時が来ちゃったよ。

ドキドキと激しい鼓動。心臓が爆発しそう。

一般的には何でもない単なるキスでも、わたしにとっては初体験だから、物凄く緊張する。

ぎゅっと目を瞑って、その瞬間を待つ。

ちゅっ、と頬が鳴った。

え？

ほっぺにちゅー？

わたしは目を開いて、火照った頬に左手を添えた。

和泉君はにつこりと頬笑んだ。

「これ以上の行為は次の機会にしよう」

「どうして……？」

ベッドから離れ、わたしの手を引いて起こしてくれる和泉君に訊いた。

また何か怒らせてしまったのだろうか、と不安になった。

「まだボクの中で、キミに対する色々な覚悟が定まっていらないんだよ」

「覚悟？」

「キミを独占する覚悟だよ。ボクの独占欲は病的だからね。自分の物……いや、自分だけを愛してくれると確信できない相手には、心を許すことができないんだ。ボクは、世界で一番狭量なんだよ。先日 の件もあって、多少ナーバスになっているのかもしれない」

「ああ、あの時の……」

わたしを《物》呼ばわりしてビンタされたことをまだ気にしている？

だから、わたしを気遣うあまり慎重になってる？

「それに、時間もないうだ」

和泉君はわたしの手を引いて、リビングに移動しながら言った。

「時間？」

何のことだろう。

明日は学校がお休みだから、時間なんか気にしなくてもいいはずなのに。

「恭子さんが戻ってきたんだよ」

「え？」

渦海さんが着替えを取りに戻ってから、はや二時間近く経っている。わたしたちに気を遣って戻ってこないものと思い込んでいたけど、そうじゃないのだろうか……。

玄関の方からドアの開く小さな音が聞こえてきた。

そして、足音がこつちに近づいてくる。

本当に渦海さんが戻ってきたようだ。

どうして和泉君は気付いたのだろうか？

まさか渦海さんの足音が聞こえたとか？

車のエンジン音？

超能力じゃないよね？

「あら、お酒を飲んでいたの？」

紙袋を手にした渦海さんが、リビングに入ってくるなり不満げな声を発した。

さすがに警察関係者の前での飲酒はマズイだろうか。わたしたちは未成年者なのだから。

「リラックスするには一番の薬でしょう？」

和泉君は平気な顔で答えている。

渦海さんて真面目で怖そうな人だから、二人とも正座させられてお説教されるのかな、と思ったけど、そんな心配は杞憂に終わった。

渦海さんは紙袋を放り出し、一人掛けのソファに身を沈め、空のグラスを手にして、和泉君にお酒を作るよう要求したのだ。

「そのお薬、私にもいただけるかしら？」

「喜んで作って差し上げます。ウイスキーで宜しいでしょうか？」

「そうね。いいわよ。でも、きつめに作って頂戴な」

「貴女の好みは熟知しています」

和泉君は、受け取ったグラスに氷を入れ、ウイスキーを注いでいく。水を入れないようだ。見た目に、凄く濃そうである。

それを受け取った渦海さんは、三分の一ほど一気に呷り、深い溜め息を吐いた。

「ああ……生き返るわね」

「はい、藤森さんも飲み直して」

わたしの前にグラスが置かれた。

一口含んだ。

濃い。

喉から胃にかけて、かーっと熱くなる。

いいところを邪魔されたので、渦海さんには文句を言ってやりたかったけど、事件が無事に解決してからなら和泉君との関係を思う存分に深められるだろうから、今日のところは慣れないお酒を楽しく飲もうと思った。

【2・藤森保奈美】

和泉君がお風呂に入ると言い残してリビングを出ていった。

その所為で、わたしと渦海さんは二人きりの空間に取り残されてしまった。

ちよつと気まずい。

どんな話題を振れば良いものやら……。

こつちから話を切り出そうにも、共通する話題が何も思い浮かばない。わたしの知らない、詩海高校に転校してくる前の和泉君の話を聞きたいけど、それを渦海さんに質問して良いものかどうか……。難しいところである。

しかし、怒りを買ったら嫌だな、という不安に縛られて声を掛けられずにいると、渦海さんの方から話し掛けてきてくれた。

「ごめんなさいね、藤森さん。和泉君と二人きりで過ごしたかったでしょうに。私も邪魔虫にはなりたくなかったけど、職務上、目を離すわけにはいかないのよ」

「あ、いえ、そんな……。わたしと和泉君はそんな関係じゃないですから、気を遣わないで下さい。わたしたち、ただのクラスメイトなんです」

手を前に突き出して、わたしは大袈裟に関係を否定した。

渦海さんは優しい感じに笑った。

「隠さなくてもいいわよ。恥ずかしいことではないでしょう?」

「いえ、本当に、まだ何の関係もないんです。完全な無関係でもないけど……何て言うか……渦海さんが勘繰ってる関係じゃないんです。まだ……」

「……君を信じるわ」

若干の疑惑が渦海さんの瞳に宿っていたが、それ以上は深く追求してこなかった。

性格の悪い人ではなさそうである。

「あの……。事件のこと、訊かないんですか？」

職務を忘却して完全にリラックスしている様子の女刑事に疑問をぶつけてみた。

「事件というと、どの事件かしら？ 浅宮雪乃と氷室康広が殺害された事件？ それとも。君が襲われた事件？」

「わたしが襲われた事件です」

「それについて私が質問する意味はないわ。まず所轄の刑事が宮地優の身柄を拘束することが先決。その後で、君が被害届を提出すれば、事件は成立して私の役目は終了。被害届を出さないのであれば、彼を強制的に引っ越し先へと連れていって、地元警察の監視下に置いて終了。私の出番などないわよ」

「えっ？ だって、渦海さんが病院で、わたしの事情聴取を和泉君の家でするって……。仰ってましたよね？」

「言ったわね。でも、それは、私の仕事ではないわ。所轄の刑事がやるべき仕事よ。今、私に課せられている使命は、君の安全確保。勿論、宮地優から身を守るのではなくて、和泉真悟から貞操を守るのよ」

「はあ、貞操ですか……」

さつきも一応、本人の意識に関わらず、貞操を守ってもらえたわけだ……。

「ありがた迷惑かしら？」

「そ、そんなことはありませんよ……」

「真悟君のこと、好きなんでしょう？」

「はい。好きです」

わたしは誤魔化さず、和泉君への想いを正直に明かした。
「彼も君を大切にしているようね」

「……………」

それは、わたしには答えられない。だから、反対に問い質す。

「渦海さんと和泉君の関係を訊いてもいいですか？」

「私と真悟君の関係？ 聞きたいの？」

「はい。是非とも」

「そうでしょうね。新しい恋人には、聞く権利があるわよね。でも、私と真悟君との間に直接的な結びつきはないわ。彼のお父様と私が上司と部下の関係にあっただけ。色っぽい間柄ではないわ」

そう言って渦海さんは艶っぽく微笑んだ。

それは、つまり、和泉君のお父さんが警察関係者だということだろう。

「和泉君のお父さんは、警察の偉い人なんですか？」

「いわば、エリート官僚ね。現場でも有名な切れ者の管理職だったわ。誰もが尊敬していた人よ。私も含めて……ね」

渦海さんはどこか寂しそうに言った。

「だから、和泉君は、こんな家に一人で住めるくらいお金持ちなんですね？」

「いいえ、違うわ。真悟君がお金持ちなのは、彼の母親が会社経営者だったからよ。九州から東海地方にかけてフランチイズ展開している有名ファーストフード店のね」

「ああ、そういうことですか！ わかりました。和泉君がご両親と一緒に暮らしていないのは、両方ともお仕事が忙しいからなんですね？」

わたしの言葉を聞くなり、渦海さんは顔を寄せてきて声を潜めた。
「真悟君のご両親は、既に亡くなっているわ」

「え……」

一気に酔いが覚めた。

というより血の気が引いた。

これは、お気楽に口に出して良い話題ではない。和泉君は自由気儘な一人暮らしをしているわけではなく、家族を亡くしてしまったから仕方なく一人で暮らしているのだ。それでも微笑みを絶やさない彼の気丈さに胸が痛んだ。

「どうして彼のご両親は亡くなられたんですか？ お二人ともご病気ですか？」

「ある殺人事件に巻き込まれて……、と言っておこうかしら。その事件には、私も深く関わっていたわ」

渦海さんはそう言って唇を噛み、眉間に深い溝を刻んだ。

「どんな事件だったんですか？」

「それは、真悟君から直接聞きなさい。私の口から軽々しく話せる内容ではないわ」

「はい……」

ぐつと胸の内に熱いものが込み上げてきた。

わたしの家族は健在だから、和泉君の気持ちを理解してあげられないかもしれない。でも、両親と妹が死んでしまったら物凄く悲しいのはわかる。独りぼちで生きていく自信などない。彼は真の意味で強い心の持ち主なのだろう。酔いの所為もあり、なんだか泣きなくなつた。

「暗い話題は切り上げて、楽しい話をしましょう」

渦海さんは気を取り直すように、明るい声で言った。

その提案には大賛成である。

それでは質問の切り口を変えてみよう。

「あの……、転校する前の学校で、和泉君で恋人がいたんですか？あれだけ優しくて格好良い男の子だから、可愛い恋人がいたに決まっていますよね？」

クラスのみんなが聞きたがっているであろうことを、過去の和泉君を一番よく知っているであろう人に質問してみる。

「気になる？」

渦海さんはちよつと意地の悪そうな笑みを浮かべた。

首を横に振る動作に意味はないので、わたしは素直に頷いた。

「綺麗な女の子だったわよ」

得られた情報はそれだけだった。

わたしよりも？

思わず自意識過剰な詰問が口から飛び出しそうになり、死に物狂

いでストップを掛ける。そして、質問の角度を三度傾けた。

「その女の子と和泉君は、ずっと付き合ってたんですか？」

「いいえ、期間は短いわよ。二、三ヶ月程度だったと思うわ。それ以前の恋人については……私の口からは言えないわね」

「そうですか」

「別に私は、真悟君の交際相手についての情報を故意に隠しているわけではないのよ。ただ……」

渦海さんは一瞬口ごもった。

「……ただ、一人を除いて、真悟君の恋人になった女の子は、全員死亡しているのよ」

「え？」

この人、何を言っているのだろう……。

恋人が全員？ 死？

「殺人事件が発生する度に、彼と彼の周囲にいる人間が巻き込まれて、最も悲惨な形の死体で発見されるのが彼の恋人だったわ」

「そんな……」

最も悲惨な形の死体？

「もし君が宮地優に殺されていたら、私は、真悟君の人生は呪われている、と断言していたでしょうね。何か悪い霊に憑かれている、ってね」

だから、浅宮部長も？

わたしは恋人じゃなかったから死なずに済んだ？

「詳しい話を聞きたいのであれば、真悟君から直接教えてもらいなさいね」

「はい……」

そんな怖い話題を切り出せるわけがなかった。それに、その話が事実だとしても、和泉君の所為ではない。単なる偶然の連鎖だ。悪いのは、女の子を殺した犯人である。

ふと、わたしは気付いた。

「和泉君が転校してきた理由って……。もしかして、その街の人に

……」

ネガティブな思考が心の中で旋回する。

渦海さんは手の平をこっちに向けた。

「違うわよ、藤森さん。真悟君は強い男の子なの。君が今想像しているような理由で転校するわけないでしょう?」

「それなら、どうして?」

「理想の女の子を探す為ですって」

渦海さんはそう言って、控え目なくすくす笑いを零した。

「現実主義者の彼にしては、軟弱と言っていていくらいロマンチックな理由よね」

「理想の女の子ですか……」

和泉君はわたしのことをそう呼んだ。

彼をビンタした時、「理想の女の子だと思ったのに」と言われた。わたしという人間と、彼の理想的女性像が合致した?

つまり、わたしに会う為に転校してきたようなもの?

いやいや、落ち着け。自分に都合の良い解釈をしては駄目だ。そんなに人生は甘くない。今は良い関係だけど、事件後も二人の距離を離さずに一歩ずつでも縮めていけるかどうかは不定だ。わたしより素敵な女の子など世の中には大勢いる。最終的に和泉君の優しさが、わたしにはではなく、他の女の子に向けられる可能性の方が現実的には高いのだ。

「それじゃ、神川君はどうなんですか? 彼って、転校してくる前の和泉君をよく知っているみたいですけど……。あの二人、どんな関係なんですか?」

「それは……」

渦海さんが答えようとすると、廊下の方からカチャと音が聞こえてきた。

和泉君がお風呂から出てきたようだ。

渦海さんは、リビングに入ってきた美少年に微笑みかけた。

和泉君は、無地のトレーナーに細身のズボンを穿いていた。制服姿ではない彼は視覚的に新鮮だ。シンプルな装いだけど、十分に格好良い。しかもお風呂上がりである。なんか、ちよっと興奮した。「ボクの話をしていたのかな？」

和泉君はソファに腰を降ろしてグラスにウイスキーを注ぎ、こつちを見て目を細めた。

眼鏡を着用していないから見難いのだろう。断じて、わたしが醜いのではない。

「何か質問がある？」

「えっと……」

質問事項は心の中に山積しているけど、渦海さんの話を聞いてしまった後なので言葉にできなかった。死んでしまった人の話題を気軽に持ち出して良いわけがないのだ。特に、ご両親の話は厳禁である。わたしは馬鹿ではないので、振ってはいけない話題の区別はつく。でも、そうすると質問がかなり制約されてしまう。恋人の話だけは是非とも聞きたいのだけど……。

そんな風に逡巡していると、渦海さんが予想外の質問をした。

「理想の女の子は見つかった？」

手加減抜きの剛速球だった。

わたしが質問したわけではないのに、胸がドキドキ、鼓動がドクドク、ワクワクの期待感とビクビクの不安感が心の中で混声合唱を響かせる。

和泉君は余裕ある笑みを、渦海さんからわたしへと移した。

「理想の女の子は発見したのですが、肉体関係を迫ったところ、平手打ちを喰らい見事に玉砕しました」

「平手打ち？ 玉砕？」

渦海さんが驚きの顔を向けてきた。

なぜ拒んだのだ、と言わんばかりの表情だった。

わたしは俯くしかない。

あれ？ 身体が自由が利かない？ 急に酔いが回ってきた？

下から頭を引っ張られるように、わたしはソファに横たわった。

「あらあら、藤森さん、どうしたの？ もうダウンかしら？」
からかいの言葉。

でも、頬に張り付く革張りのソファが気持ち良くて顔が上げられない。それに、全身を侵食するアルコールが、もっと会話をしたいと望むわたしを心地よい眠りへと誘うのだ。

「まあいいわ。彼女は眠らせてあげましょう。それよりも、真悟君、ビンタする女の子が好みなのね。鷹峰さんにもビンタされたんでしょう？」

「……………」

「彼女の話題は嫌？ 藤森さんなら眠ってしまったから大丈夫よ。眠ったふりをして、こっそり聞き耳を立てているかもしれないけど、過去の恋愛事情を聞かれて羞恥を覚える君でもないでしょう？」

「貴女にもされました」

「藤森さんのことが好きなの？」

「……………」

「黙秘権を行使？ 私には正直な気持ちを聞かせて欲しいわよ」

「……………何ともお答えできません。まだボクは、自分の中で気持ちの整理が——」

あれ……………二人の話し声が遠くなっていく。

気付けば、頭の中がグルグルと回り出し、睡魔が耳元で子守歌を唄っている。

身体がだるい。

瞼が開かない。

でも、心は軽い。

和泉君の言葉とアルコールの相乗効果で嫌な記憶が払拭されたのだ。

わたしは眠気に身を任せた。

怖い夢など見ない、という確信があった。

【3・神川真治】

想定外の事件が立て続けに発生した為、僕の望んでいた展開からは百八十度かけ離れた状況に陥ってしまった。

いや、全くの想定外だったわけではない。浅宮雪乃と氷室康広が殺害（自殺の可能性も残されている）された事件については、あの鬼畜が関わっている以上、浅宮雪乃が宮地優に襲われた時点で悲惨な結末を迎えることが確定的だったので、音楽室で二人が死んでいたことを聞かされても僕は驚かなかった。

あの事件は、間違いなく奴が解決に導くだろう。しかし、それは、第二、第三の殺人事件が発生してからである。奴の身近な人間（奴に好意をいだく美少女）がバラバラ死体となつて発見された後、ようやく事件の推理を始めるのだ。奴自身が犯人なのに。

それが今までのパターンだった。そして、当初の予定では、そのバラバラ殺人事件を未然に防ぎ、最もむごい殺され方をするであろう藤森保奈美を、奴の狂気から守り抜く役目を僕が担うはずだったのだ。その為に僕は奴を追って転校してきたのだ。それなのに……。宮地優が想定外の行動を起こした所為で、何もかもが歪んでしまった。

このままでは、奴の名がヒーローとして藤森保奈美の心に刻まれるだろう。いや、既に深く刻み込まれているに違いない。宮地優から彼女を守ったのは、僕と剣崎貴明であり、奴は何の役にも立たなかったのに……。それなのに、最終的にヒーローとして映ったのは奴だ。

藤森保奈美だけではなく、奴を取り巻く人間全員がそう認識しただろう。

奴は常にヒーロー的立場を確保するのだ。

意識して正義の味方を演じ、周囲に認めさせる才能がある。

最悪の犯罪者として裁かれるべき人間（鬼畜男）なのに、蔑視さ

れることはまずない。

実に厄介な存在だ。

こんな展開になってしまつては、どうやって奴を始末すればいいのか、もう僕にはわからない。今後、もし新たな殺人事件が発生した場合、藤森保奈美が惨殺される危険性もあるが、今の段階で奴が彼女を切り刻む心配はないのだから……。彼女に危険が及ばなければ、僕に存在意義はなく、彼女の心を奴から奪い返すことはできない。僕が彼女を幸せにすることができない。

全ては、宮地優の所為だ。あの道化者が余計な行動に出るから、僕の計画が水泡と化してしまつたのだ。浅宮雪乃のような娼婦紛いの馬鹿女に熱を上げるのは勝手だが、その余熱を周囲に放出して害を与えるのは止めて欲しいものである。まして無関係な藤森保奈美を逆恨みして襲うなど言語道断であり、その結果、奴の株を大幅に上げてしまつたのだから、もう最悪の称号を授与するしかない駄目人間だろう。

宮地優が警察の手によって身柄を拘束されるまで、藤森保奈美は奴の家に泊まり込むことになった。もう彼女の貞操は守れないだろう。彼女は今まで処女を守ってきたそうだが、今夜か明日には失つてしまつだろう。それは仕方がない。僕は、性体験の有無に関するこだわりを持っていないから、彼女に幻滅することはない。

そして、渦海恭子には何も期待していない。所詮は、奴に誑かされた女の一人でしかない。僕の恋人だった梶浦京香のように、骨の髄まで支配されているのだ。死ぬ瞬間まで、奴の手で無惨に切り刻まれるまで、奴の正しさを信じ続けるのだろう。

しかし、だからこそ、藤森保奈美の心を奴から引き離さなければならぬ。

絶対に縁を切らせなければならない。

でも、どうやって？

僕に何ができる？

今の僕にどんな選択肢が示されている？

藤森保奈美の心を得る選択肢は、まだ残されているのか？
わからない。

「あのさ、神川君で可愛い女に興味ない人なの？ それとも私に女の魅力を感じないから無視してるとか？ そうじゃないなら、なんで黙ってるの？ せっかく一緒に歩いてるのに、全然話してくれないじゃん。それって結構傷つくんだよ」

静川玲が絡ませた腕に体を押しつけて抗議してきた。

なぜ彼女と一緒になのかと言うと、渦海恭子の車で自宅まで送ってもらった後、空腹を覚えて近くのコンビニへ向かい、夜食を購入して帰る途中、いきなり声を掛けられたからである。

「ああ、すみません。ちょっと考え事をしていたもので……」
「何を？」

藤森保奈美の心から和泉真悟を追い出す方法を考えていた、とは言えない。

「事件について」

「事件で……音楽室の？」

「はい」

「ふーん……」

静川玲は口の端を歪め、窓ガラスを爪で擦った時に発する音のような笑い声を漏らした。

非常に耳障りだ。馴れ馴れしく絡めてくる腕も気に障る。存在自体が気に入らない。本人は美少女の範疇に入っているつもりだろうが、オレンジ色に髪の毛を染色している時点で僕の彼女に対する評価は最低ランクである。吐く息にタバコの香りが混じっている点も大きなマイナス要素だった。

「神川君は誰が犯人だと思ってるの？」

静川玲の質問に答えるべく僕は事件を推理しようとしたが、三秒と考えるまでもなく首を左右に振った。

「僕の持っている情報では何も推理できません。あの事件が起こっ

ている時、僕は宮地優を取り押さえることに勤しんでいたのです。それに、あれが殺人事件だと主張しているのは和泉だけであって、警察は自殺の線で動いているはずですよ」

「あ、そうなの？ 私は宮地が犯人だと思ってるけど、違うんだ？」
「違うとは言い切れません。僕がクラスメイトと一緒に宮地優を取り押さえるまで、時間を何分か要したので、その間に殺人を犯した可能性も否定できません」

「へえ……。そうなんだ」

静川玲は何とも判じ得ない表情で僕の顔を一瞥し、掠れ声の笑いを零して視線を足下へと落とした。

「もし宮地が犯行を自供したら、それで犯人に確定ってことになるのかな？」

「証言を他者に強要されていない、という前提なら、間違いなく確定でしょうね。日本は物証よりも自供を重視する傾向が高いようですから」

「あいつ、かなり頭壊れてるけど、それでも自供は有効なのかな？」

「それを判断するのは裁判所だと思います」

「そうなんだ……。ふーん、なるほどねえ」

静川玲は納得した様子で数回頷いた。そして、徐に顔を上げ、僕を見据えた。

「もし私が事件の犯人を知ってるって言ったら、神川君はどうする？」

予想だにしない質問が彼女の口から発せられた。

事件の犯人を知っている？

何の事件の？

あの事件の？

「……仰っている意味がわかりません」

「浅宮雪乃と氷室康広を殺した人間を知ってるって言ってるんだよ」
自信に満ちた言葉。

静川玲は、答えの正否はともかく、美術部員二名を殺害した犯人

を特定しているようだ。

「……誰なのですか？」

「教えて欲しい？」

「是非」

「ヒツヒツヒ」

奇怪な笑いが夜の高級住宅街に響き渡った。

「私さ、和泉真悟君と付き合いたいんだよ」

そう告げられた。

「……答えになっていません」

「あんた、藤森保奈美のこと、好きなんだよね？ だから、和泉真悟君が邪魔なんじゃないかな？ どう？」

「……それも答えになっていません」

「あれれー、案外鈍いなあ」

静川玲は絡めていた腕を外し、僕の前に進み出て、接吻するように顔を接近させた。

「あんたが藤森をモノにできれば、自ずと私の下に和泉真悟君が転がり込んでくるって寸法だよ。わかる？」

「静川さんの仰っていることの意味は理解できますが……」

僕と藤森保奈美が結ばれたからと言って、奴と静川玲が結ばれるとは限らない。

そう思ったが、忠告はしない。妄想をいただくのは個人の自由だ。

「静川さんの自宅はこの辺なのですか？ 万が一、宮地優の襲撃を受ける危険性もあるので、自宅までお送りしますよ」

勘違い女と一緒にいる時間を一秒でも短縮するべく提案した。

しかし、無視された。

「もし事件の犯人を和泉真悟君よりも先に言い当てられたら、きっと藤森は神川君のことを見直すと思うよ。そうすりゃ、心に隙もできるだろうね。あんたなら、その隙を突いて藤森をゲットできるん

じゃないの？ 和泉君の方は、私が責任を持って藤森から引き離してあげるからさ。早くしないと、あの子、悲惨な目に遭っちゃうよ。ヒヒヒ。今頃、どこで何しているんだろうねえ。ヒッヒッヒ。イカレ宮地に襲われそうになって正常な判断ができなくなってるだろうから、優しい言葉を掛けてくる男に易々と心を許したり、体を許したり、ヒヒヒッ」

この女は……。

気絶しそうなほどの嫌悪感に心を苛まれ、僕は自宅に向かって駆け出した。

あと二秒と顔を合わせていたら、衝動的に彼女の顔を拳で潰し、汚らしい口を耳まで引き裂いていただろう。

心を侵食する想像上の情景。

また、好きな女の子を奴に奪われる？

重なり合い愛し合う二人の姿を想像して狂い回らなければならぬのか？

そんなこと、もう堪えられない。我慢できない。

だったら、どうする？

「僕が選ぶことのできる選択肢の中で、藤森さんの心を引き寄せられる可能性があるのは……。それは……」

たった一つしかない。

静川玲の言っていたように、どうにかして事件の犯人を奴より先に特定するのだ。

その為には、犯人の目星をつける必要があるだろう。

「聞き出すしかないな」

静川玲の口を引き裂いてでも、犯人の名前を聞き出す必要がある。もしくは、彼女の卑劣な企みに力を貸すことになっても、だ。

背後を振り返った。

しかし、全力で走った所為もあり、どこにも静川玲の姿はなかった。

【4・静川玲】

四月二十六日、土曜日。

さつき、ふざけた電話が入った。

友達に約束をドタキャンされたのだ。

「はあ？ 冗談じゃねーってーの！」

受話器越しに怒鳴るが、相手は「ごめーん、デートなのー」の一点張り。

そんな言い訳が私に通用するか、と心の中で叫んだが、自分も同じ理由で約束をすっぱかしたことがあるので、強く言えない。

まあ、仕方ないか……。

私は半分キレ気味で自室に戻り、今日の予定を変更して、一日中室内でゴロゴロすることにした。

「仁科のくそ女、急にデートすることになったとかぬかしやがって……ふざけんなよ」

ぶつくさ文句を吐きながら、お気に入りの服を脱ぎ捨て、部屋着に着替える。

「計画通りにことが運んでれば、今頃は私も和泉とデートしてただろうに……。剣崎の馬鹿は何をモタついてやがるんだか……」

さっさと藤森をモノにしちまえ。そうすりゃ和泉も藤森を見捨てて新しい相手を求めるだろう。その相手が私ってわけだ。そして、失恋して傷ついた心を色々な技で癒してあげれば、彼を容易に射止められるに違いない。その結果、神川真治の協力は必要なくなるが、そんなの知ったこっちゃない。藤森の相手が誰だろうと構わない。

要は、和泉真悟が藤森に振られればオッケーなのだ。その為の下準備は完璧だったのに……。

何もすることがないので、テレビの音を聞きながら、ベッドに寝転がって雑誌を読んでいると、十一時半過ぎにテレビのニュース速

報が流れた。

特徴あるチャイムの音に注意を引かれ、雑誌から顔を上げる。

テレビ画面に、《有名進学校で起こった連続殺人事件の容疑者の身柄を拘束》というテロップが流れていた。

ああ、宮地のやつ、捕まりやがったか、と内心で呟く。

どうでもいい情報だ。身代わり人形は使い捨てが基本。町中を、我が物顔で闊歩されちゃ困る。廃棄物は速やかに処理しないと、使用者が迷惑を被る危険性が高まっちゃうよ。まあ、宮地が捕まったんなら、詩海高校で起こった事件は予定通りに解決するだろう。恋愛関係の縛れによる自殺が、一転して殺人事件となった時は正直ビビったけど、これで平和な日々が戻ってくる。

平和な日々？

ヒッヒッヒ。

誰にとつて？

藤森保奈美か？

いや、あの女は剣崎にくちゃぐちゃに犯されて孕まされ、妊娠発覚と同時に学校を強制退学させられた挙げ句、墮胎後に捨てられ、そのショックで馬鹿男どもに股を開く便所女になり下がって、散々使い回されて心身共にボロボロにされ、最後には我が身の不運を呪いながら自殺する、という悲惨な人生を歩んでもらう予定なのだ。否、確実に歩まされるだろう。昨夜から今朝にかけて、剣崎の汚い腕の中で眠ったのかもしれない。それを想像するだけで顔がニヤついてしまう。かと言って、剣崎に幸せが訪れるかと言えば、そんなわけではない。本人は藤森保奈美と淫靡な生活を送る予定だろうが、そんな幸福など私が片手で壊してやる。あの二人に幸せな人生など許されない。しっかりと私がプロデュースする地獄の人生を満喫していただくのだ。

私より可愛い女や私を振った男に、幸せの女神が微笑んで良いわけがない。奴らに微笑むのは地獄の鬼だ。死ぬほどの苦しみを味わってから死ねばいい。そして、私だけが和泉とイチヤイチャしながら

ら、嬉し楽しい残りの高校生活を満遍なく味わうのだ。

ヒッヒッヒ。

しかし、剣崎は何をしているのだろう。警察署まで宮地を迎えに行つてから一切の連絡が取れない。計画は予定通りに進行しているのだろうか。ちゃんと藤森を助け、自宅に連れ帰つて犯しまくつたのだろうか？ それとも失敗したのか？ 結果がわからない。電話の一本も入れてくれりやいいのに……。いったいどうしたんだ？

藤森が宮地に殺されたというニュースはない。反対に、剣崎が宮地に返り討ちにされて死んだというニュースもない。事件の進展が全く掴めない。だからと言つて、こつちから連絡を取るのも憚られる。

私は雑誌を放り出して仰向けになつた。
すると、突然。

「おねーちゃん！ おねーちゃん！」

廊下から妹の悲鳴じみた叫び声が聞こえてきた。

「かーさんが！ かーさんがあー！」

いつもながらに騒々しい妹だ。姉が不機嫌な時くらい黙つていられないのだろうか。今すぐ唇にチャックを縫いつけてやりたい。

ドタドタと廊下を走る音。

家の中で運動会でも始めたのか？

台所の方からドスンという重い衝撃音が聞こえてきた。

足音が止み、一瞬静かになる。

母さんと二人でプロレスか？ 騒ぐ娘に、ブチ切れた母さんがフライングニードロップでも叩き込んだのか？ 三角締めでギブ待ちか？ 何にせよ、せつかくの土曜日なのだ。家でのおんびり過ごすか
らには、このまま静かにしていて欲しいものである。

「ああ！ おねーちゃん！ かーさんが！ かーああ！ た、た
す……あがぁ！」

声が止んだ。

母さんにぶん殴られたのだろう。

当然の結果である。

自業自得を自覚して、日頃から可愛い子ぶっている自らを戒め、成績優秀なのを鼻にかけて私と比較する腐った根性を悔い改め、奈落よりも深く反省した後に関心を入れ換えて、これからは姉の幸せに貢献するべきである。

私は雑誌を拾い上げ、パラパラと捲った。
みしみし。

床が軋む微かな音が近づいてくる。

今度は忍者ごっこか？ 中学三年生にもなつて何してんだか……。部屋の前で音が止んだ。

何の前触れもなく、唐突にドアが開いた。

「入ってくんなよ！」

妹だと思い、声を荒らげる。

姉の部屋に勝手に入るな、と日頃から言い聞かせているのに、馬鹿だから理解できないらしい。受験勉強するより先に一般常識を学べ、と体に教え込んでやろうか……。ん？

「お邪魔します、静川さん」

私の部屋に入ってきたのは、母さんでも妹でもなかった。

「あ、え？ い、和泉……君？」

驚きを隠せなかった。

慌ててベッドから飛び起き、服の乱れを正して髪を撫でつける。

大股開き状態だったので、スカートを穿いていたらパンツ丸出しのはしたない姿を見られるところだ。でも、ノーメイクの顔を見られるのは、パンツを見られるよりも恥ずかしかった。

「え……っと、何？ わ、私に何か用？」

情けなくも意表を突かれた所為で舞い上がってしまい、無様なくらいにしどろもどろだ。

「綺麗なお母さんと可愛らしい妹さんですね。少しお話をしてきました」

和泉は微笑み顔で言って、何の断りもなく部屋の中に入ってきた。

まあ、彼の入室を咎める口など私は持っていない。急いで座布団を用意し、座ってくれるように促す。そこで初めて彼の格好が気になった。

変な格好をしている……。

黒いシャツに黒のズボン。黒のニット帽を被り、黒い革手袋を着け、黒いバッグを背負っているのだ。

頭天边から足の爪先まで真っ黒い装備で統一している？

格好悪くはないけど、安っぽい殺し屋みたいで私は好きじゃなかった。

「うるさい妹でしょ？ イラッとしなかった？」

私は年中苛々しっぱなしだ。

和泉は首を傾げた。

「元気そうな女の子ではありましたね。お母さんも優しそうでした。しかし、もう気にする意味はありませんよ。彼女たちはもういないのですから」

いない？

私を置いて買い物にでも行ったのか？

「もしかしてあの二人、出かけた？」

「そうですね。そう言って良いでしょう。確かに、二人は今しがた出かけました」

和泉は眼鏡の奥に輝く目を僅かに細めて、ちょっと皮肉っぽく言った。

「ふーん……。まあ、いいけどね」

好都合である。

私と和泉が愛を語らう時間は邪魔されたくない。

だから、二人がどこへ行こうが知ったこっちゃなかった。

「和泉君、ジュース飲む？」

「いいえ、お構いなく」

私が台所へ行こうとすると、和泉は手を伸ばして手首を掴んでき

た。

え？

驚きを表現する間も与えられず、引き寄せられてベッドに押し倒された。

「和泉君？」

「もう部屋からは出しませんよ、静川さん」

甘い囁き声。

私に拒否する意思などない。

「藤森さんは……いいの？ これって立派な浮気だよ。彼女、和泉君の恋人なんでしょ？ マズインじゃない？ だいたい、二股は浅宮さんの件で懲りてるでしょ？ 下手すると、あの子も自殺しちゃうよ」

押し倒されはしたが、一向に何もしてこないの、こっちから挑発的な言葉を投げ掛けてみた。

うつすらとした微笑みを返された。

「浅宮雪乃の死に関しては、貴女たちに変感謝しています。殺害方法は目を覆いたくなるほど粗雑で稚拙なものでしたが、タイミングとしては最高でしたよ。邪魔者の始末を代行してくれて正直助かりました」

自然な笑みを浮かべて、和泉は私の髪を優しく撫でた。

「え？」

一瞬、聞き間違いかと思った。

しかし、聞き間違いではなかった。

邪魔者の始末？

私たちが殺害？

私たちに感謝？

なぜ知られた？

「しかし、その後が宜しくなかった。宮地優に藤森さんを襲わせるなど、到底許せる所業ではありません」

口調ほど言葉に優しさはなかった。

「え……う……」

何もかもバレてる？

どうしてバレた？

「しかし、結果を鑑みるに、貴女たちの計画によって邪魔者が消え去り、ボクたちの仲が深まったのだから、過剰な断罪は控えます」

「な……何を……」

怒鳴り散らして部屋から追い出そうと思ったが、声が出せないだけでなく、身体も動かせない。目に見えない鎖で全身をグルグル巻きにされている感じた。

異様な威圧感。

「浅宮雪乃はともかく、宮地優、氷室康広、剣崎貴明の三名を排除できたのは、今後ボクたちが有意義な部活動を勤しむ上で、非常に喜ばしいことです。特に剣崎貴明は、藤森さんにとって無視できぬ危険因子でしたからね。この機会に処理できて良かったと思います」

「あう……あ、何を……」

排除？

イカレ宮地は警察に捕まったらしいけど、変態教師の剣崎は……。

危険だから処理？

処理……って？

「貴女には感謝してありますが、藤森さんを危険な目に遭わせた責任はちゃんと取っていただきます」

「そ、それは……けんざ……」

それは、剣崎が藤森をモノにしたいって言ったから、仕方がなかったのだ。あいつの希望にも添わないと、計画が成り立たなかったのだから。

「全て剣崎貴明の仕業であり、自分は関与していないと言いたいのですか？」

にこりと笑顔を作る和泉。でも、目は笑ってなかった。冷酷なまでに無感情だった。

私は必死に頷いた。

えも言えぬ恐怖に、自然と涙が溢れてくる。

「わた……私は……」

「ボクに好意を寄せているのであれば、陳腐な策を用いずに、想いを直接訴えれば良かったのですよ。浅宮雪乃のように大胆な行動に出ても良かった。理想の女の子と結ばれるまでは、ボクは来る者を拒みませんからね。しかし、貴女は選択を誤った。頭の悪い人間が策謀に知恵を絞ると、このように悲惨な結末を呼び起こしてしまいます。よくある悪例ですよ。この結果を来世に活かすべく、恐怖と悔恨を深く魂に刻みなさい。でなくば、巻き添えになった妹さんとお母さんが浮かばれません。後ほど詫びておくと良いでしょう」

「い、妹が……母さんが？ どうして？」

妹に詫びる？

母さんが巻き添い？

「深い理由はありません。ボクがこの家に無断で侵入した際に、咎められて騒がれたので、強制的に黙っていたいただきました。貴女が眠る際には、絶対に煩くしないと思うのでご安心下さい」

強制的に……黙らせた？

それは、つまり……二人を殺した、という意味だ。

「こ、殺したの？」

確認なんかしたくないけど……。もし本当なら、それは……。

「はい。速やかに死んでいただきました」

和泉は簡単に殺人を認めた。その表情には罪悪感など微塵も浮かんでなかった。むしろ爽やかですらあった。

「ど、どうして……そんな……」

涙で視界がぼやけた。

不思議と嗚咽にならない。

「その質問には既に答えました」

騒いだから殺した？

それだけの理由で？

「私たち家族は何も……。悪いのは剣崎一人で……」

家族は何も悪いことしてないのに……。

殺される理由なんてないのに……。

「全ての計画を立てたのは、剣崎貴明ではなく貴女なのでしょう？」
何でも知っているような口振り。

「実行したのは……あいつだから……」

「そうですね」

和泉は優しそうな微笑みを浮かべた。

「だったら……」

私ではなく、あいつに責任を取らせるべきだろうに……。

「ご安心を。剣崎貴明にも罪を償っていただきました。否、現在償っている最中でしょう。今頃は、浅宮雪乃や氷室康広に心から謝罪しているかもしれませんね」

和泉は可笑しそうに唇を綻ばせる。

「こ……ころ……殺したの？」

「いえ。過去形ではありません。今まさに彼は死につつあるのです。否、自分の犯した罪を悔いて自殺した、というように偽装死させられたのですよ。宮地優の手によってね。そういう真相に導かれます。そうだ、これを見て下さい」

和泉は背負っていたバッグを降ろし、中からビニール袋を取り出した。ビニール袋の中には刃先をタオルでくるんだ包丁が入っている。それを出して見せ、皮肉な笑みを浮かべた。

「この刺身包丁は、警察に保護されていた宮地優を剣崎貴明が警察署から自宅へと送った際に、部屋から持ち出した物だそうですね。両者とも、これで何をしようと企んでいたのやら。物騒ですね」

「それで私を殺すの？」

「いえ。これは、全ての罪を宮地優に被ってもらい、一連の事件を速やかに解決させる為の小道具です」

「宮地はさつき警察に捕まったんだよ？」

「そうですね？ それでは、短時間で心行くまで遊ぶ為にも、この辺りで無駄な会話を切り上げましょう」

嘲笑うような言葉。

「ああ……そんな……」

剣崎も……殺される。

首吊り自殺させられる……させられた？

「和泉君……どうして？」

「その質問は三度目です」

「こんなんじゃ、和泉君も人殺しになっちゃうんだよ……？」

和泉は破顔した。

にっこりと頬笑んだ。

純然たる満面の笑みだった。

「ご心配には及びません。ボクは既に何名もの人間を殺めています。神川真治の思い人であった梶浦京香も、ボクが殺害しました。しかし、ボクは人殺しではありませんよ。《殺人鬼》です。人間を綺麗に切り刻んで遊ぶ鬼なのです」

「さ、殺人鬼……」

「浅宮雪乃は頃合いを見計らって綺麗に切り刻む予定だったのですが、貴女たちによって邪魔されてしまいました。しかし、その代わりに貴女が遊んでくれるのであれば、ボクは文句を吐きません」
くすくすと笑う美少年。

「私も……殺すの？」

「殺す、という表現は適切ではありません。綺麗に壊すのです。バラバラに切り刻んで遊ぶだけなのです。その結果としての殺人ですね」

「警察に……捕まるわよ」

「ボクは逮捕されません。なぜなら、警察はボクの推理する《真相》を鵜呑みにし、先程身柄を拘束されたという宮地優を猟奇殺人事件の殺人犯として逮捕するのですからね」

「そんな……」

自分に都合良く事件の真相を仕立て上げ、自分の犯した罪を他者に背負わせて処理してしまう少年探偵……。

血塗れの名探偵。

血色のヒーロー。

そんな冗談みたいな話が……。

「さて、そろそろ遊ばせていただきますよ、静川さん。死亡推定時刻がズレてしまつては、ボクの推理が成立しなくなつてしまいます。そうになると、新たな犯人を仕立てねばなりません。それに、藤森さんがボクの自宅で帰りを待っているのです。導眠剤で眠っているとはいえ、二日酔いでダウンしている彼女を長い時間放っておくわけにはいきません」

和泉は黒シャツの胸元をはだけて、中から大ぶりの首飾りを取り出した。

「十字架の……首飾り？」

しかも上下が逆しまだ。

「母の形見です」

「……………」

その十字架の真ん中に輝いている赤い宝石の部分を親指で押さえ、引つ張ると、カチツと小さな音が鳴つて十字架が抜け落ちた。

いや、そうではなく……。

「これは十字架型の携帯ナイフなのです。ペーパーナイフとして用いる為に母がある業者に特注した一品物ですが、切れ味があまりに鋭いので、紙以外の素材も切断可能です。骨はおろか鋼鉄ですら容易に斬れます。その切れ味は、既製品の刺身包丁などとは比較になりませんよ」

十字架型の凶器……。

「覚悟はできましたか？」

「あ……」

あ、と思う間もなかった。十字架型のナイフが、いともあっさりと私の首に突き刺さる。衝撃は僅かであり、痛みも殆ど感じなかった。ただ、刺された瞬間から頭部以外の感覚が麻痺し、体の自由が全く利かなくなつてしまつた。

「キミはボクにとって、五十五人目の犠牲者です。剣崎貴明は今まさに死への過程にあります。五十六人目にはカウントしません。あれは遊ぶに相応しくない、醜い人間ですからね」

私は五十五人目の犠牲者……。

転校してくる前に五十四人も？

神川の恋人も五十四人の中に？

この男は……人間を刻んで快楽を得る種類の犯罪者だ……。

「ナイフの痛みは、首筋に多少感じる程度でしょう？ それとも、酷く痛みますか？」

「い……や……ゆるし……」

「自分の身体がどのように切り刻まれてゆくのか、己の眼で最後にじっくりと観察してみますか？」

そう言つて和泉は私の頭の下に枕をあてがい、私の視界に自分自身の身体全体が入るように上半身を固定した。

許して！

自分が解体される光景なんか見たくない！

殺すなら一思いに刺し殺してよ！

「まずは裸になつてもらいます」

和泉は幼い子供のような笑みを浮かべ、私の服を手際よく脱がせていく。

もはや抵抗は不可能。既に死んだも同然。

上下の下着を剥ぎ取られ、全裸を晒す。

「綺麗な身体ですね」

乳房から下腹部にかけてを撫で回された。

それは目に映る光景。

私には触られている感覚がない。首から下は、もう何も感じない。

「実に刻み甲斐のある身体だ」

和泉は独り言のように呟き、ナイフの先を私のお腹に当て、すーっと何の躊躇もなく臍まで滑らせた。

ナイフの軌跡を彩るように赤い筋が走り、少ししてぱっくりと切

り口が開く。

鮮やかな色の血が、細長い傷口から溢れ出てきた。

「痛みはありませんね？」

確かに痛みはないけど……。

「やめ……て……」

掠れた声しか出せない。

更に大きくお腹を切り開かれた。

中身がどぼつと零れ出る。

ピンク色の腸だ。

無造作に腸が引っぱり出された。

続いて、赤黒い塊が掴み出される。

肝臓？

腎臓？

「処女ではないようですね」

下腹部にナイフを走らせていた和泉が感情のない声で言った。

膣から子宮にかけて切り裂かれ、性体験の有無を確認されたのだ。不思議と恥辱感はなかった。

もう助かる可能性がゼロだから、和泉に何もかも見られたいとすら思った。

「妊娠はしていないようですね」

しているわけがない。セックスをする際には、常に完全な避妊を心掛けていたし、相手にも徹底させていた。

「ボクは一度、妊娠している女性の子宮を切り開いた経験があります」

くくくつ、と和泉は含み笑いを漏らした。

「ボクの子供を宿した子宮でした。あれは最悪の体験でしたね。もし彼女の受胎を知っていたら、ボクは……」

一瞬、和泉は激しく顔をしかめた。

自分の子供を妊娠している女を切り刻んで殺した？

正気じゃない。

「さて、次は……」

胸が切り開かれ、肋骨を切断された。

心臓を掴み出して遊ぶ為だそうだ。

ああ……もう、意識が……。

夥しい出血の所為だろう。

「静川さん？」

「いず……み……く……」

視界に霧がかかっていくように、ぼんやりと周囲が暗くなっていく。

ああ、私はこんな風に死ぬのか……。

自業自得かな……。

私たちが馬鹿だから……計画に参加した全員が殺されるのだ。

ピンポーン。

遠くからチャイムの音が響いてきた。

誰か来た？

助けが来た？

「おや、お友達の訪問ですか？ それとも、他に家族がいるのですか？ 玄関には一応鍵を掛けておきましたが、もし訪問者が勝手に入ってきたら、妹さんとお母さん同様に死んでいたかなければなりませんね」

和泉は可笑しそうな口調で独り言のように呟き、私を放置したまま部屋を出ていった。

「……………」

闇に閉ざされゆく視界。

静かな足音。

和泉が戻ってきたようだ。

「面白いほうも————したよ。神か————が何か貴女に用が————しません。それとも貴女たちは親密なかんけ————すか

？」

よく聞こえなかったけど……。

もしかして神川が来ていた？

でも、何をしに？

私を助けに？

それとも別の理由で？

「神川く——は利用できますね。宮地優ではなく彼を——
れば全ての危険因子がボクの——り除かれる」

ああ……駄目だ。

意識が闇に引きずり込まれる……。

「し——さん、ボクの声が聞こ——瞬きを三度して下さ——」

聴覚も失いつつある。

「おや、しず——う限界で——か？」

残念そうな呟き声が聞こえる。

途切れ途切れに聞こえていた声も、もう微かにしか聞き取ることができない。

「さ——なら——ず川さ——」

そして何も聞こえなくなった。

最期の瞬間。

僅かに残っている意識の欠片。

必然の死と突然の死に思いを馳せる。

私は構わない。

だけど……。

最後に謝りたかった。

何の罪もなく殺された家族に。

ご……め……

第七章 際限なき戯言を紡ぐ口 【1・藤森保奈美】

四月二十八日、月曜日。

ジジ、ジジ、ジジ、という聞き慣れない目覚まし時計の音に起こされた。

現在の時刻は、七時二十分。そして、ここは和泉君の寝室である。大きなベッドの上には、当然のことながらわたし一人。

部屋の主は、リビングで毛布にくるまって眠ったようだ。

その点に多少の不満を感じている。

もしかして、わたしって女としての魅力に乏しかったりする？

フェロモンゼロ？ それは悲しかったり……。しかし、まあ、いきなり初体験は怖いから、まず添い寝から始めて、心と身体を慣らししていくことを提案したい。なーんてね。そう内心で戯言を吐くわたし。

ちなみに、渦海さんは泊まっていない。昨日、剣崎先生と静川玲が殺害されたとの連絡を受けて、事件現場へと駆り出されたのだ。

最初は何かの冗談かと思った。我が耳を疑った。剣崎先生と静川先輩が死んだなんて信じられなかった。和泉君はさもあらんという顔をしていたけど……。

どうやら、剣崎先生が静川さんを刺殺して、彼自身も首吊り自殺したらしい。

その理由は、まだ不明だ。

コンコン。

ドアをノックする音。

和泉君だ。

起こしに来てくれたのだろう。

「はい」

返事をする。

応えておいて、自分の格好に思い至り、慌てた。下着以外、何も身に着けていなかったのだ。こんなはしたない姿は見せられない。そう思ったのだけど、ベッドを飛び出して服を着ようか、布団を被って体を隠そうか、判断に迷ってあたふたしている間に、力チャリとドアが開き、和泉君が入ってきてしまった。

彼は身嗜みを整え終え、制服を身に着け、既に学校へ行く準備ができていた。

「おや、素敵な格好だね」

わたしの下着姿を見るなり、彼は目を細めて口許を綻ばせた。

わたしは大慌てで布団を引き上げた。きっと全身が紅潮していただろう。いつもはパジャマを着て眠っているのだ、と言いついたけど、口を開閉させても空氣の塊しか出てこなかった。

「おはよう、藤森さん」

「お、おはよう、和泉君……」

「朝食の用意ができているから、キッチンに来て欲しい。でも、慌てる必要はないよ。ゆっくりとシャワーを浴びてくるといい」

そう言い残して和泉君は自分の寢室から出ていった。

おはようのキスとかしてくれたら素敵なのに、と思ったが、期待を言葉に変換して要求する勇氣など持っていない。そんな妄想を巡らせてないでさっさとシャワーを浴びに行くべきだろう。

わたしはベッドから出て荷物をあさり、下着姿のまま着替えを小脇に抱え、部屋からバスルームへと忍び足で移動した。

浴室内はほんのりと温かく、仄かに湿気を帯びていた。和泉君がシャワーを使用した後だからだろう。そう思うと、なんだかドキドキした。

わたしは手早くシャワーを浴び、身繕いをし、制服に着替えてからキッチンへと向かった。

キッチンのドアを開けると、何とも言えないバターの芳香に鼻を擽られ、途端に空腹を覚えた。

「トーストでいいかな？」

わたしが入っていくや否や、和泉君は椅子を引いて音も立てずに席を立ち、微笑みを浮かべて訊いてきた。

今日は《洋》の朝食だ。ベーコンエッグとトマトサラダが二人分、テーブルの上に用意されている。

わたしは基本的に朝食のメニューにこだわりを持っていなかった。なので、トーストでも白米でも構わなかった。だから、簡単に頷いた。「飲み物は？」

「あ、うん。オレンジジュースがいいかな」
わたしは椅子に座りながら答えた。

和泉君は、冷蔵庫の中にオレンジジュースと紅茶とスポーツ飲料を常備し、好きな時に思う存分飲めるようにしている。

一昨日、わたしは随分とスポーツ飲料のお世話になった。死ぬほどの二日酔いだったのだ。あの苦しみは二度と体験したくない。あんな風に酷く体調を崩すから未成年者の飲酒は禁じられているんだな、と反省した。まあ、和泉君に貰ったお薬のお陰もあり、半日くらいで体調は回復したけど、当分お酒は控えよう、と思ったものである……。

和泉君は冷蔵庫を開けて二リットル入りのペットボトルを取り出し、大きなコップになみなみと注いで、わたしの前に置いてくれた。彼自身は熱いコーヒーである。砂糖もミルクも一切入れない完全なブラックで飲むのが好みなのだそう。その点は、わたしの嗜好とは違っている。朝から濃いコーヒーなんか飲んだら、胃がボロボロに荒れて一日中腹痛に苛まれてしまうだろう。彼はきっと強靱な内臓の持ち主なのだ。お酒も物凄く強いし……。

トーストを一口囓り、十数回咀嚼して飲み込む。
美味しい。

スーパーで売っているような安物のパンではない。ちゃんと鼻屑にしているパン屋さんで購入している食パンなのだろう。我が家もこういう拘りを持って欲しいな、と思う。

サイドメニューのベーコンエッグとサラダを交互に食べ、トーストの味に変化を与えた。

両方とも美味しい。

和泉君はお料理上手だ。

土曜日の夕食は、渦海さんと共同で手料理を振る舞ってくれた。

簡単な中華料理。でも、最高に美味しかった。わたしが手伝う余地はなく、後片付けを率先して行くくらいしか活躍できなかった。そして、今朝も和泉君の手を煩わせている……。不甲斐ない。もし次の機会があるなら、是非ともわたしが得意料理を振る舞いたいものである。

「ごちそうさま」

「ジュースはもういい？」

「うん、ありがとう」

ご馳走様をして、二人で流し台の前に並んで立って後片付けを始めた。

和泉君は何事も手際良く進めていく。ぱっぱっぱとお皿を洗い、食器乾燥機に並べ、スイッチを入れてコーヒーを飲む。フライパンを洗い、水気を拭き取り、棚に並べてコーヒーを一口。わたしのエプロン姿を褒め、結婚するなら恭子さんよりもキミを選ぶよ、とからかっておいてコーヒーをぐくり。あらゆる行動をコーヒーで一区切りするのが彼のスタイルらしい。

後片付け終了。

「和泉君でコーヒーが好きなんだね」

エプロンを外しながら訊いてみた。

淡い微笑みを向けられた。

「紅茶の方が好きだよ」

「え、そうなの？　じゃ、どうしてコーヒーを飲んですの？」

「朝は熱いコーヒーを飲むのが習慣なんだよ。特別な理由はない。強いて言うなら、母親の生活スタイルがボクの体に染みついているのだからね」

「ああ……」

返答に詰まった。

和泉君の母親は亡くなっている。

和泉君の父親も亡くなっている。

二人とも殺人事件に巻き込まれて死んでしまったそうだ……。

わたしは気を取り直すように頭を振った。

「そう言えば、和泉君でお昼はいつも冷たい紅茶か果汁百パーセントのジュースだね」

「甘い飲み物が苦手なんだ」

「スポーツ飲料を買い置きしてるの？」

「一昨日のキミのように、二日酔いになった者にはスポーツ飲料が不可欠なんだよ」

「わたしの為に？」

わたしが二日酔いになるのを見越して前もって用意しておいてくれた？

「結果的にはキミの為に買ったね」

結果的……。

それはつまり、わたし以外の誰かの為に購入したということだ。

ちよつとムツとした。

「本当は誰の為に？」

口調がつっけんどんになっていると自覚。

和泉君は柔らかに微笑んだ。

「誰でもないよ。ボクの家には、来客の急なニーズに对应えられるように、色々な物があらかじめ備えてあるんだよ。必要になってから買いに行っている間は間に合わないこともあるからね。キミが邪推しているような理由で購入した物ではないよ」

邪推……。

わたしは不愉快顔を改め、同時に深く反省した。

「キミはコーヒーを好まないようだね」

「うん。和泉君が飲んでもブラックなコーヒーは好きじゃないよ。」

お砂糖やミルクを入れれば嫌いでもないけど。あ、でも、缶コーヒ―は好きだよ」

「缶コーヒーね……」

和泉君はフツと鼻を鳴らした。

缶コーヒーは嫌いらしい。

「そろそろ学校に行く時間だよ」

わたしは壁に掛けられているデジタル時計の数字を確認して告げた。

「キミは、教科書やノートを取る為に、一度自宅に戻る必要があるね」

「うん」

「では、急ごう」

和泉君の家から出た。

エレベーターでエントランスホールへと下り、オートロックのドアを抜けてマンションの外に出た。すると、見覚えのある外国産高級車が目に入った。

「あ！」

渦海恭子の愛車である。

渦海さんは車のボンネットに腰を降ろし、小さな手帳に目を落としつつタバコを吸っていた。その姿が凄く様になっている。男社会で奮闘する有能な女性という感じだ。今日の彼女の服装は、シンブルな濃紺のレディーススーツ。深く切れ上がったスリットが、ちょっと妖艶な色気を醸し出している。

わたしたちが近づいていくと、渦海さんはすぐに気付き、タバコを足下に捨てて軽く手を翳した。

「恭子さん、おはようございます」

和泉君が丁寧な朝の挨拶をした。

「渦海さん、おはようございます」

わたしもそれに倣って頭を下げた。

「おはよう、お二人さん。待っていたわよ」

渦海さんは挨拶に応じつつ、火のついたタバコをヒールの踵部分で踏み消し、車のドアを開けた。

乗りなさい、という意味だろう。

何かの容疑で警察署に連行されるのだろうか、と不安になりながら車に乗り込もうとするわたしを、和泉君が手振りで止めた。そして、渦海さんを見据えて静かに注意した。

「タバコのポイ捨ては感心できませんね。貴女は曲がりなりにも法を守らせる側の人間なのですから、喫煙者に課せられた最低限のマナーくらい守って下さい」

「あ、そ、そうね。以後、気を付けるわ」

渦海さんは多少慌て気味に、ポイ捨てしたタバコを拾い上げ、ハンカチを取り出して包み、それをポケットにしまった。

「車に乗ってくれるかしら？」

改めて要求された。

「理由をお聞かせ下さい」

「君に事件を解決してもらう為よ」

「剣崎貴明と静川玲が殺害されたとはいえ、宮地優が逮捕されたことにより、一連の事件は一応の解決を見ました。もう新たな犠牲者は生まれないでしょう」

和泉君は朗らかに言った。

渦海さんは眉を寄せる。

「いまだに警察は、詩海高校で起こった殺人事件の犯人を断定できていないわ。どうしても音楽室の密室トリックが解けないのよ」

「ヒントは与えました」

和泉君が冷たいくらいに素っ気なく言った。

「不十分なのよ」

これまた短く返す渦海さん。

「恭子さん……。実際は、最初から事件の推理をボクに任せるつもりで、密室トリックを薄々感づいていながら、全くわからないふり

をしているのでしょうか？」

和泉君は仕方なさそうに言った。確認ではなく、そうと断定しているからだ。

「君の能力を高く評価しているのよ」

それは、男の子が綺麗な女性に言っただけの台詞の中でも、最上位にランクされるものだろう。美女に免疫のない男の子なら、褒められた嬉しさで天より高く舞い上がったに違いない。でも、彼は至って平静を保っており、僅かな照れさえ見せなかった。

「貴女は優秀な人間です。この程度の単純なトリックなど、少し脳味噌を働かせれば容易に解けるはずですよ」

「君に解かせてあげたいのよ」

渦海さんは一度わたしに視線を移し、すぐに和泉君へ戻して、意味ありげに微笑んだ。

「ああ、なるほど……」

和泉君は何かを察した様子で、大きく頷いた。そして、くすつと笑いを零した。

「恭子さんはボクに、覚悟を決めろ、と仰りたいのですね？」

「ええ」

「まだ心の準備ができていないのですが」

「そんなの一生できないわよ。この週末、一緒に暮らしていて、結局何もできなかったのでしょう？ 君ともあろう男の子が、本当に好きな女の子相手には、随分と臆病になってしまふのね。なんだか可笑しいわ」

渦海さんはくすくすと笑った。

「事実なので何も言い返せませんね」

自嘲気味に呟く和泉君。

あれ、この会話って……わたしのこと？

気付いて、眩暈を覚えた。血圧が急上昇し、全身が紅潮していくのがわかる。心臓の音が煩い。

「事件を推理している君が一番格好良いんだから、その姿を見せて

あげなさいな。尊敬されこそすれ、侮蔑されることはないわ」

「そうですね。貴女のアドバイスに従ってみましょう」

「その後は……、君の覚悟次第ね」

渦海さんは和泉君の肩を叩いた。

「お心遣い感謝します」

和泉君は深々と頭を下げた。

「さあ、車に乗りなさい。捜査一課の刑事たちが名探偵の登場を待っているわ」

「乗用車での送り迎えは校則で禁止されていたと思いますが」

「手錠を掛ければ問題ないわ」

「ボクは犯罪者ではありませんので、手錠での拘束はご遠慮願います」

「だったら素直に従いなさい」

「従いましょう」

わたしたちは車に乗り込んだ。

「良い子ね」

渦海さんは運転席に座り、シートベルトをキツチリと締めてからアクセルを踏み込んだ。

【2・藤森保奈美】

音楽室には警察関係者と思われるスーツ姿の男たちが数人たむろしていた。みんな殺人課の捜査員らしい。わたしたちが入っていくと、彼らの視線が一斉に和泉君を捉え、声にならないどよめきを漏らした。渦海さんと同様に、全員が彼と顔見知りのようだ。

音楽室内には警察関係者の他に、数名の生徒と事件に関わった教師が集められていた。勿論、弘美と神川君もいる。それに、なぜか中嶋君や菅野の姿もあった。もしかして野次馬？

「保奈美、和泉君、おはようー！」

こんな凝固した空気の中にあっても、弘美はお気楽な声音で朝の挨拶をしてきた。

大した肝っ玉をお持ちですね。さすが、はっちゃけ娘。

「おはよう、弘美」

「おはよう、和久井さん」

わたしたちは声を揃えて挨拶を返した。

弘美は、わたしたちの間に何かがあったと勘繰っている様子で、今すぐ先週末の出来事を根掘り葉掘り聞き出したいという顔をしていたが、この状況ではさすがに私語を交わす度胸はないらしく、部屋の隅で神川君たちと大人しくしていた。

神川君は、なぜか哀れむような目で、じっとわたしを見据えている。

「さあ、真悟君。以前と同じように、君の名推理を披露して頂戴な」前置きも自己紹介もなく、渦海さんは女王様のごとく凜然と、和泉君に手を差し伸べて真相解明を促した。

和泉君は軽く頷き、音楽室の中央に歩み出た。そして、一同に対して会釈をし、小さく咳払いをしてから話し始めた。

「さて、何から話せば理解しやすいでしょうか。そうですね……。まずは、浅宮雪乃が何故にボクたちの到着を待つようにして自殺を

図ったのか、を解説していきましょう」

「あら、それは先日聞いているから話す必要はないわよ。君にとっても、クラスメイトの前では話しづらいでしょう？」

「いえ、恭子さん、先日に話をした内容の再現ではありませんよ。」

ボクと浅宮雪乃の関係ではなく、浅宮雪乃と静川玲の関係です」

「え？ あの二人に接点なんてあったのかしら？ 同じ三年生ではあっても、クラスは違うし、所属している部も別々だったのでしょう？」

渦海さんは手帳を捲りながら言った。

「美術部と軽音楽部は仲が悪かったから、むしろ犬猿の仲だったと思うわよ、あの二人」

笹倉先生が口を挟んだ。

わたしも同意見である。浅宮部長と静川玲が仲良しだったなんて考えられない。

「仲の良し悪しではありません」

「いいわ、話を続けて頂戴」

渦海さんが促すと、和泉君は淡い笑みを浮かべて、再び話し始めた。

「宮地優の暴行未遂事件の後、ボクは浅宮雪乃を護衛する為に、彼女の自宅から学校まで送迎していました。その様子が交際しているように映ったでしょう。静川玲はボクに恋心をいだいていたらしく、表面上良い関係を築いているように見える浅宮雪乃を羨み、妬み、恨み、どうにかして排除したいと思い、陥れる機会を窺っていたのです。そして、宮地優が引越しをする日。つまり、事件当日です。その日の放課後から浅宮雪乃の身の安全が保障されるので、ボクが彼女を送り迎えする最後の朝となります。静川玲はこれを絶好の機会と判断し、自殺を装ってボクの気持ちを極めるように浅宮雪乃を嚇けたのです。浅宮雪乃は、ボクと藤森さんの関係を疑っていたので、偽装自殺の誘いを迷いなく承諾したでしょうね。そして、その一方で静川玲は、藤森保奈美に思いを寄せる男性にも、偽

装自殺に協力するよう声を掛けました」

いきなりフルネームを呼ばれて、心臓がどくと跳ねた。

わたしに思いを寄せる男の子……って誰？

もしかして菅野？

まさか、中嶋君？

それとも、神川君？

「氷室康広と剣崎貴明の二名です」

氷室と剣崎先生？

氷室はともかく、剣崎先生が？

思わず声を上げそうになり、ぐっと我慢。

「えっ、剣崎先生が？ うそお！」

溜まらずという感じで弘美が叫んだ。でも、和泉君に横目で睨まれると、自ら口を押さえて二言目を封じた。

和泉君の解説は続く。

「浅宮雪乃に偽装自殺をさせてボクを動揺させ、その隙に藤森保奈美の心を掴む、という計画に氷室康広はあっさりと乗せられました。愚かと言えませんが、恋に狂った心では正常な判断ができませんでした。しかし、その計画には裏のシナリオが隠されていたのです。剣崎貴明と静川玲にとって邪魔者でしかない浅宮雪乃と氷室康広を殺害してしまおうという殺人計画です。つまり、二人を恋愛関係の縛れによる自殺に仕立て上げ、自分たちはおるかボクと藤森さんにも容疑がかからないように謀ったのですよ。多少の悪知恵を働かせたに過ぎませんが、警察をたばかる程度のトリックではありません。実際、所轄の刑事さんたちは、大した捜査もせずに自殺と断定していたようです」

和泉君の皮肉に、スーツ姿の大人たちが一斉に苦虫を噛み潰した。

「この計画を立案したのは、剣崎貴明ではなく静川玲でしょうね。」

前者が肉体労働を担当し、後者が頭脳労働を担ったのだとボクは考ええています」

そこで彼は一度解説を切り、一同を見回した。

「これが、浅宮雪乃が偽装自殺を図った理由です」

「そんな……。それじゃ氷室は、浅宮が自殺したのを見て、好きな女が死んでしまったと絶望して、後追い自殺をしたんじゃないかなかったのか……」

鈴原先生が愕然として言った。

「はい。氷室康広の恋愛対象は藤森保奈美だったのです。ボクは転校してきて日が浅いので彼との付き合いは短期間でしたが、彼が浅宮雪乃に好意をいだいているようには見えませんでした」

「なるほど」

渦海さんは頷きながら手帳に鉛筆を走らせていく。

「和泉……、氷室と浅宮を殺した犯人は剣崎先生なのか？」

鈴原先生が一瞬の間隙を縫って質問した。いや、確認したと言っべきか。

「剣崎貴明が犯行に及び、静川玲がアリバイ工作に手を貸したのです」

「氷室君と浅宮さんは騙されていたのね？」

笹倉先生が目をキョロキョロさせながら訊いた。

「浅宮雪乃は、ボクと藤森さんを騙すつもりだったのでしょうか。氷室康広は、ボクと藤森さんと浅宮雪乃の三人を騙すつもりだったのでしょうか。しかし、剣崎貴明と静川玲は、事件に関わった全員を騙すことに成功したのです」

「みんな、剣崎先生と静川さんに踊らされたっていうことね？」

「はい。全員が無様に踊りました」

そうだろうか、と疑問に思った。

和泉君はあの事件の後、犯人こそ特定できていなかったみたいだけど、自殺ではなく殺人事件だと断定していたように思う。それに、密室のトリックも解いていたようだ。

「それでは次に、この音楽室で行われた殺人を、実際に再現してみましょう」

そう言つて、和泉君は音楽室内にいる全員を一度廊下へ追い出した。

「どう再現するの？」

「事件に関わつた者全員に、事件当日と同じ行動を再現してもらい、剣崎貴明が浅宮雪乃と氷室康広を殺害できたかどうか、実際に試してみるのです。死んでしまった者は、代役を立てましょう」

和泉君は一同をぐるっと見回し、廊下の隅で大人しく話を聞いていた弘美と中嶋君と菅野を呼び寄せた。

「和久井さんには浅宮雪乃を演じてもらおうかな」

「了解しましたあつ！」

重要な役を割り振られ、嬉しそうに歓声を上げる大親友。

首吊りで死ぬ役がそんなに嬉しいのかな、と内心で軽く皮肉るわたし。

「菅野君は氷室康広を演じて欲しい」

「う、うん。わかった」

おっかな吃驚の菅野。ちょっと迷惑で困惑げ。

「中嶋君は……」

「俺は殺し屋の剣崎を演じるのかよ」

中嶋君は面倒臭そうに言った。神川君の真似をするように、唇を斜めに歪め、大袈裟に肩を竦める。

「俺、演技なんてできねえぞ」

「演技など一切必要ない。タイミングを見極めるだけの役だ。キミになら容易にこなせる役だと思つよ」

「嫌な殺し文句だな」

「お願いできるかな？」

「仕方ねえな……」

渋々という感じで中嶋君は引き受けた。

「神川君は静川玲役を頼むよ」

「わかった」

少し離れた場所に立っていた神川君は、性別の違う役を振られて

も文句を言わなかった。

「それでは始めましょう。事件関係者は、全員配置について下さい」
和泉君が手を叩いて号令を掛けた。

「おいおい、和泉。あの時、俺は職員室にいたんだぞ。いちいち職員室まで戻らなきゃならないのか？」

こんな大切な時なのに、鈴原先生が文句を吐けた。

「例外はありません。移動して下さい」

「とほほ……」

冷たい微笑みを返され、鈴原先生は嫌々行くのを隠さず、のそのそと背を向けた。その後を刑事さんの一人がついていく。

笹倉先生は促されるまでもなく準備室に入っていた。すぐ隣なので、移動は苦にならないのだろう。しかし……笹倉先生、弘美と和泉君をいかかわしいホテルに連れ込もうとしたらしいけど……、それって教師として大問題ではないのか？

彼女に対して微妙な苛立ちを感じている自分に気付く。

弘美も弘美だ。わたしに一言もなく和泉君とお酒を飲むなんて……。

弘美は、菅野と中嶋君と共に廊下の隅に呼び寄せられ、和泉君から何かをヒソヒソと耳打ちされた。そして、中嶋君は美術室に入っていく、弘美は音楽室の前へ、菅野はわたしの隣に移動した。

菅野は氷室の役か……。あまり近づいて欲しくない男の子だけど、手を繋いだり、抱きついたり、キスしたりするわけじゃないから、まあ仕方がない。それに、苦手だからと言って毛嫌いするのは人として良くない。

「それでは、ボクと藤森さんが部活に参加する為に美術室を訪れようと六階に上がってきた場面から始めましょう。宜しいですね？」

和泉君はそう言って、わたしと菅野を階段の前まで先導した。

「ちなみに、氷室康広と遭遇したのは、ボクたちが五階まで階段を上がった時でした。きつと待ち伏せしていたのでしょう」

和泉君は手を翳して、弘美に合図を送った。

弘美は頷き、あの日の浅宮部長のように、こつちを怖い顔で睨んだ。

「和泉君！　あたしとの交際は今日でお終いな？　あたしより保奈美を選ぶの？」

弘美が悲鳴に近い声で喚いた。表情は真剣そのものであり、演技をしている感じは皆無だ。

鳥肌が立った。なぜか言い知れない寒気を感じた。

「迫真の演技だね」

和泉君が苦笑気味に呟いた。

弘美はとんと足を踏み鳴らし、涙を湛えた顔を陰しく引きつらせた。

「あたし、死ぬからっ！」

キンキン声で叫び、弘美は音楽室に駆け込んだ。
ばたんとドアが閉まる。

「死ぬとか言ってたけど、いいのかな？」

菅野が大根役者も裸足で逃げ出すくらいの棒読み台詞を口から紡ぎだしたけど、それについては誰からも文句は出なかった。

次は、わたしの台詞だ。

「和泉君……どうしよう？」

弘美に倣って、自分なりに演じてみせる。

和泉君は穏やかに微笑んだ。

「とにかく音楽室へ行こう」

わたしたちは警察関係者が見守っている音楽室の前まで早足で移動した。そして、ドアを開けた。勿論、この時点ではドアに鍵は掛かっていない。

室内に踏み込む。

弘美がぶら下がっていた。あの時と同じ場所で、浅宮雪乃と同じ風に、首を吊っていた。

「あ……」

わたしは記憶にある通りの微声を漏らした。いや、目の前の光景があの時と同じだった為、意図せず自然な呻き声を漏らしてしまった。

「弘美……嘘でしょ……」

本当に首を吊って死んでいるように見える。

「藤森さん、台詞が間違っているよ」

和泉君に小声で注意された。

「浅宮部長……」

すぐに言い直す。

「冗談じゃないよ……」

菅野が愕然とした顔で言った。その表情は演技ではない。本気で驚いている。でも、一拍の間を置いて、はっと正気に返り、わたしたちを見た。

「君たちは先生を呼んできて！ 早く！」

鋭く命じられ、和泉君はわたしの手を掴み、廊下を走りだした。

「うわわわっ！ い、和泉君、そんなに急いだら転んじゃうよっ！」

和泉君はあの時と同じようにわたしを抱き上げて、物凄い勢いで階段を駆け下りていった。

後ろから若い刑事さんがあたふたと追いかけてくる。

和泉君は職員室の前でわたしを降ろし、一礼して中に入った。

「おう、待ってたぞ」

鈴原先生が嬉しそうに手を上げた。

結婚云々の台詞は言ってくれないようだ。きちんと事件当日の会話を再現して欲しいものである。

わたしたちは階段を駆け上がり、音楽室の前へと戻った。

鈴原先生がドアノブに手を掛けた。

「ん？ 鍵が掛かってるな」

ガチャガチャとノブを捻って首を傾げる。

「変ですね。このドアは先程、施錠されていませんでした。しかし、室内に氷室先輩がいるはずなので、呼び掛ければドアを開けてくれ

るでしょう」

和泉君が落ち着いた口調で言った。

「おい、氷室！ ドアを開けてくれ！」

鈴原先生は大声で呼び掛けながら、ドアをドンドンと叩いた。事件当時よりも大袈裟だ。

「何なの？ 騒がしいわよ！」

音楽美術準備室のドアが開き、笹倉先生が顔を出して、宝塚歌劇団ちっくな身振り手振りで叫んだ。この人も演技が過剰だ……。

「音楽室で浅宮雪乃が首吊り自殺していると、うちのクラスの生徒が言うものですから」

「浅宮さんが自殺……？ それは何の冗談ですか？」

「冗談じゃありません！」

わたしは必死な声を意識して出した。

「ドアを破壊しても宜しいでしょうか？」

和泉君が酷く冷静な声音で訊いた。

傍で見ていた渦海さんが、「ドアを破壊？ 真悟君らしいわね」

と言って、くすつと笑った。彼女の認識では、和泉君は破壊行為に躊躇しない人間なのだろうか……。

「破壊しないで。準備室に鍵があるのよ。ちょっと待ってなさい。取ってくるから」

笹倉先生は準備室に戻り、十秒ほどで廊下に出てきた。そして、わたしに向かつて肩を竦めてみせた。

「鍵、なくしちゃったみたい。でも大丈夫よ。剣崎先生が同じ鍵を持ってるから。美術室にいると思うから、借りてきなさい」

「はい」

わたしは大急ぎで美術室へと走り、ドアを開けて室内に入った。渦海さんも後をついてきた。

美術室内では、中嶋君が白衣を纏って真っ白いキャンパスに向かって筆を走らせていた。

その隣には角刈りの刑事さんが怖い顔で立っている。

「剣崎先生、美術室の鍵を貸して下さい」

「おう。この鍵で準備室の俺の机の引き出しを開けてくれ。中に美術室の鍵が入ってる」

中嶋君はそう言っ、ズボンのポケットから小さな鍵を取り出した。

それを受け取り、わたしは音楽室の前にとんぼ返りした。そして、笹倉先生に机の鍵を手渡した。

笹倉先生は三十秒ほどで銀色の大きな鍵を持って出てきた。

音楽室のドアが開かれた。

室内に踏み込む。

「ああ……そんな……」

笹倉先生が溜め息のような声を出した。

わたしは呆然と立ち尽くす。

弘美は首を吊ったままの状態だった。だけど、菅野は床に倒れていた。

「以上が事件の再現です。ご理解いただけただけでしょうか？ 演技の途中、台詞に若干の間違いがある者もいましたが、行動自体に間違いはなかったので問題ないでしょう」

和泉君は刑事さんたちに微笑みかけた。

【3・藤森保奈美】

渦海さんは眉間にシワを刻み、和泉君を睨んだ。

「君たちが職員室へ行っている間に、剣崎貴明が美術室から音楽室に移動し、中から鍵を掛け、氷室康広を殺害したことは見て理解したわ。でも、どうやって音楽室から美術室へと移動したのかしら？」

その重要な部分が明らかになっていないわよ」

「恭子さん……貴女は既に理解しているはずです。それに、中嶋君の行動を監視していた刑事さんから説明を受ければ、全員が理解できるはずです。解説など不要でしょう？」

「真悟君の解説を聞きたいのよ。ここにいる全員が理解できるように、密室トリックを解説しなさい」

渦海さんは命令口調を用いた。

「ボクよりも、今実際に剣崎貴明役を演じた中嶋君の説明を聞いて下さい」

和泉君は丁度音楽室に入ってきた中嶋君を指差して言った。

「んー？ 何だ？ 何か問題ありか？ 俺、上手くやったつもりだぞ」

いきなり注目を浴びた中嶋君は、少し不安そうに首を傾げた。

「中嶋君、君はどのような方法で密室状態の音楽室から美術室へ移動したの？」

渦海さんに強い眼光で直視され、中嶋君は目に見えて怯んだ。彼は剛胆な男の子だけど、日頃から凶悪な犯罪者を相手にしている女警部に睨まれては、いつものように平然としてはいられないのだろう。平常心を失わないのは、和泉君ぐらいだ。

「密室？ 俺は……ただ、和泉に言われた通り、準備室のドアから出ただけっすよ」

オドオドしている中嶋君は、見ていて新鮮である。

「準備室には笹倉先生がいたでしょう？ なぜ君は見つからなかった？」

たのかしら？ 笹倉先生が共犯者だった、というわけではないでしょう？」

渦海さんは微量の疑惑を視線に宿して、笹倉先生に硬質の声を投げ掛けた。

疑われた笹倉先生は、大慌てで両手を突き出し、バイバイするような手振りで共犯を否定した。

「私は共犯者じゃありませんよ！」

「笹倉先生は関係ないっすよ。俺は、先生が廊下の騒ぎを聞きつけて準備室から出ている隙に、音楽室から準備室を通って美術室に移動したんすからね」

中嶋君が種を明かした。

「音楽室から準備室に通じるドアには鍵が掛けてあったでしょう？」

「ああ、そりゃ神川が準備室から開けてくれたんすよ」

なるほど。理解できた。

難しいトリックは何も用いられていない。

廊下側のドアが閉まっていれば、わたしたちが室内の氷室康広にドアを開けるように呼び掛けるのは自然な行動だ。その騒ぎを聞きつけて、準備室にいた笹倉先生が廊下に顔を出すのは必然。犯人は、共犯者が準備室側のドアの鍵を解除するのを待って、タイミングを見計らって音楽室から抜け出しただけ。ただそれだけで密室の完成だ。

なにそれ……馬鹿馬鹿しい。

「なるほど、わかったわ」

渦海さんは簡単に頷いた。

「ほんの十数秒間の隙を突いて、共犯者に準備室へのドアを開けてもらい、二人で音楽室から準備室へ移動し、そのドアに鍵を掛け直し、そのままこっそりと美術室へと移動して、二人して何食わぬ顔で絵を描いていたわけね。ふふっ、下らないトリックだけど、それしか密室を作る方法はないわね。真悟君、君は事件後の事情聴取の時点で、そのトリックに気付いていたわよね？」

「はい」

軽快な返事。

「捜査一課の無能を内心で嘲笑っていたのかしら？」

「いいえ。自殺説に固執せず、剣崎貴明と静川玲の共犯関係に思い至れば、誰でも容易に事件を解決させることができたと思います」
淡々とした返答。

「その点に思い至らなかったから……。本当に君は……。変わらないわね」

渦海さんは唇を歪めて言った。何かを諦めるような溜め息混じりの苦笑。

すると、そこへ。

「和泉くーん、いつまで死んでなきゃなんないのお？」

弘美の情けない声が響いてきた。

ああ、忘れてた。

まだ弘美は首吊り状態だ。

和泉君は、まず死体を演じ続けている菅野に労いの言葉を掛け、手を貸して引き起こした。そして、弘美に微笑みかける。

彼女は小さな台の上に乗っていた。

入り口から台は見えない。大きなピアノが邪魔になって、本当に首を吊っているように見えていたのだ。

「すぐに降ろしてあげるよ」

和泉君は、弘美の首に巻き付いているロープを解きにかかった。

それへ、渦海さんが疑問を投げ掛けた。

「浅宮雪乃の死は、自殺と他殺のどちら？」

その疑問は警察として当然のものだろう。

わたしも知りたい。

「他殺です」

素っ気ないまでの断言。

「どうして言い切れるのかしら？　もしかしたら、君にふられたことに絶望して、本当に首吊り自殺をしたかもしれないでしょう？」

ちよつと意地の悪い訊き方だ、と思った。

和泉君は苦笑した。

「もし最初にボクたちが音楽室に入った時点で浅宮雪乃が本当に首吊り自殺を図ったのであれば、氷室康広は彼女を降ろして救命行動に出るか、もしくは美術室にいる剣崎先生に助けを求めたでしょう。また、氷室康広を刺殺した後に自殺したとも考えられますが、返り血を全く浴びていない点を考慮すると、その可能性は殆どないと思います」

「ふむ。確かに君の言う通りね。でも、それなら、彼女を殺害したのはどちらかしら？」

「剣崎貴明です」

「断定できるの？」

「できますよ。もし氷室康広が彼女を殺害してしまった罪の呵責から自殺を図ったのであれば、音楽室に鍵を掛ける意味などありません。また、最初から彼女を殺害する意思があつたのであれば、自殺する意味がありません。彼女を殺害した後に彼も刺殺されたと仮定すると、無抵抗で刺殺された説明がつきません。剣崎貴明が二人を殺害したと考える以外に、理に適った仮説は成り立たないのです」

「……言葉では理解しにくいわ」

渦海さんは端正な顔を厳しくしかめ、縦ジワの入った眉間に指を当てた。和泉君の解説が消化不良を起こしている様子だ。

「詳しい解説が必要ですか？」

「いいえ。言葉の解説ではなく、目に見える形で犯行を再現して頂戴」

「承知しました。ご希望に従い、犯行を再現してみせましょう」

和泉君はそう言つて、首吊り状態のままの弘美を見た。

「もう少し我慢して、和久井さん」

「あーん、もう！ 苦しいのにい！」

優しく頭を撫でながらの言葉に、弘美は文句を吐きながらもちよつと嬉しそつだった。

和泉君は菅野を音楽室の入り口前に連れていき、弘美を指差した。
「ボクと藤森さんが職員室へ行っている間に、剣崎貴明は音楽室を訪れました。浅宮雪乃は、ボクたちに職員室まで先生を呼びに行かせる、という氷室康広の予定外の行動に対して少なからず驚いたでしょう。しかし、剣崎貴明に宥められ、大人しく首吊り状態を保ち続けました。けれど、今度は剣崎貴明が予定外の行動に出たのです」
和泉君はつかつかと弘美に歩み寄り、彼女の腰を抱えると、唐突に足下の台を蹴り飛ばした。

「ひう！」

突然のことに、おかしい悲鳴を発する弘美。

もし腰を支えられていなければ、絞首刑になっていただろう。

「ちょー！ い、和泉君！ 何をするの！」

あまりにも無茶苦茶で酷い行動に、わたしは声を荒らげた。

和泉君は全く表情を変えず、自分の代わりに弘美の体を支えているよう渦海さんに要求した。

「実際には、他者が支えていなくても、手の力で数分間は持ち堪えられるでしょう。そんな浅宮雪乃を見て、氷室康広はすぐさま助けに走りました。剣崎貴明に罵声を浴びせながら駆け寄ったのかもしれないません」

そう言っ、和泉君は菅野を手招きした。

氷室役の菅野は、言われるままに駆け寄ってきた。そして、弘美の体を支えようと手を伸ばしたところで、和泉君に押し倒された。

そこは、まさに、氷室康広が刺殺されていた場所だった。

「こうして氷室康広を殺害し、次に藻掻き苦しむ浅宮雪乃の手を引き剥がして抵抗を封じ、強制的に首吊り自殺させたのですよ。いいえ、この場合は絞殺したと表現するべきですか」

和泉君はうつすらと微笑んだ。そして、弘美の首に食い込みかかっていたロープを解き、彼女の頑張りを褒めるようにふわりと抱き寄せた。

「ごめんね、和久井さん。大丈夫かな？」

「ちゃつと酷かったんだよおー」

口を尖らせて文句を言っているが、弘美は抱き締められて目尻を下げていた。更に、こともあるうちに、緩んだ顔をわたしに向けてVサイン。

まあ、仕方がないかな……。

「氷室康広の刺殺に用いた凶器は、宮地優が浅宮雪乃を襲撃した際に用いた物が借用されました。職員室に保管されていた物を剣崎貴明が盗用したのです。刺殺した際に返り血を浴びていなかったのは、美術の部員が部活動の際に服の汚れを防ぐ為に身に着けている白衣を着用していたからです。誰かの白衣に、絵の具に混じって、氷室康広の血液が付着していたはずですよ。その点の確認はなされていますね、恭子さん？」

「ええ。和久井弘美の白衣から氷室康広の血液が検出された、との報告を受けているわ」

「宜しい。ちなみに、この事件に関しては、宮地優は全くの無関係です。事件当日に身柄を拘束された彼が音楽室の鍵を所持していたわけは、その日に彼の旧宅から引越先の新居へ身柄を移送させる役目を担っていた剣崎貴明が、あらかじめ盗んでおいた笹倉先生の持つ音楽室の鍵を、隙を見て彼の服に忍ばせたからでしょう。そして、故意に彼を逃走させたのです。以上で剣崎貴明による浅宮雪乃および氷室康広の二名を殺害した偽装自殺殺人事件についての解説を終了します」

和泉君はそう結び、しがみついたまま離れようとしないうちに弘美を立て、掴んで離さない彼女の手をやりわりともぎ離れた。

もっと抱きついていなかったのか、弘美は不満そうだ。

「ご理解いただけましたか？」

「ええ。十二分に理解したわ」

渦海さんがにつこり笑って頷くと、全員の口から一斉に小さな溜め息が漏れた。

渦海さんは表情を改めた。

「剣崎貴明と静川玲の死については、我々の見解通りで正しいのかしら？」

「それについては、ボクの持っている情報があまりにも少ないので、迂闊にはお答えできませんね。コメントは差し控えさせていただきます」

和泉君は腕組みをして窓ガラスに寄りかかり、いつもと変わりない穏やかな顔で答えた。

渦海さんは手帳を捲り、情報を提供する。

「剣崎貴明は自宅マンションの寝室にて、首吊り死の状態で見えられたわ。玄関のドアと全ての窓が施錠されていて、現場は完全な密室状態だったそうよ。我々は自殺と見ているけれど、浅宮雪乃という前例があるから、まだ自殺とは断定していないわ」

「犠牲者以外の指紋は検出されましたか？」

「幾人かの女性の指紋が出ているわ。その中に静川玲も含まれていたそうよ」

「二人は交際していたのかもしれませんがね」

他人事と言わんばかりの和泉君。

すると、笹倉先生が遠慮がちに手を挙げた。

「剣崎先生と静川さんが交際していたのは事実ですよ」

「どれほど信頼性のある情報ですか？」

鋭い眼光で渦海さんが訊いた。

「昨年、二人が準備室でイチャついている様子を何度も見てるから、二人の間に親密な交遊関係があったと断言できます」

皮肉っぽく口を歪め、笹倉先生は明快に答えた。

剣崎先生って、可愛い女生徒には軒並み声を掛けていたんだ……。わたしも大人の付き合いを持ちかけられたし、浅宮部長も同様に冗談めかして肉体関係を求められていた。節操のない男性だったのだから。学校内でイチャつくなんて、教師として大問題である。そう言えば、笹倉先生も和泉君に手を出そうとしたらしいし……。この

学校の教師はモラルが欠落しているようだ。まさかとは思うけど、鈴原先生もクラスの女生徒に手を出しているのでは？

「剣崎貴明と静川玲に交際歴があつたのだとすれば、今回の事件で協力し合つてもおかしくありませんね。それは、真悟君の推理を裏付ける証言になります」

渦海さんはメモを取った。

「剣崎貴明の死に何かしらの不審点が見られましたか？」

何の興味もなさそうに和泉君が訊いた。

「密室での自殺だったことが少々引っ掛かるけど、それ以外に不審な点はないわね」

渦海さんは微笑む。

和泉君は眼鏡のフレームに指を添えた。

「静川玲に殺害された可能性は？」

「それはないわ。剣崎貴明の死亡推定時刻は、土曜日の正午から午後三時頃までの約三時間。静川玲の死亡推定時刻は、土曜日の午前十時二十四分から午前十一時五十分の約一時間半。どんなトリックを用いても、静川玲が剣崎貴明を殺害することはできないわよ。でも、剣崎貴明が静川玲を殺害した後、自宅マンションに戻って自殺した、という仮説は成り立つわね」

「静川玲の死亡推定時刻が分単位まで絞られている理由は？」

「彼女の友人が土曜日の午前十時二十四分に電話で直に会話しているのよ。そして、彼女の妹の親友が午前十一時五十分に電話した時には誰も出なかったそうなのよ。彼女の家族三人がほぼ同時刻に殺害されているところから考えて、死亡推定時刻はその間の約一時間半と断定できるわ」

和泉君は小さく頷き、眼鏡を外して、裸眼で渦海さんを見据えた。
「静川玲の死については？」

女警部は何気なく視線を逸らした。普段は眼鏡と表情で誤魔化しているが、和泉君は目つきが鋭すぎるので、優しさの欠けた視線を向けられると物凄く怖い。わたしは一度冷たい目で睨まれているか

ら、彼女が今感じているであろう思いがよくわかった。

「そちらは惨殺事件。静川玲とその家族が何者かに皆殺しにされたのよ。彼女の母親と妹は二人とも頸骨を折られた後、頸動脈を切り裂かれて失血死。静川玲は自室のベッドでバラバラに切断されていたわ」

淡々とメモを読む渦海さん。

バラバラ……。

静川玲が？

その姿を想像してしまい、思わず嘔吐しそうになった。

他の生徒たちも同様の反応を示している。

ただ神川君だけが違う反応を示した。彼は愕然とした面持ちで数秒間硬直すると、両手の拳を握って天井を見上げ、短く何かを呟いた後、弾かれるように和泉君を見据えた。

静川家一家惨殺事件……。想像しなくても悲惨な事件だとわかる。もし宮地優が犯人なら、浅宮部長を死に追いやった静川玲を残忍に殺す意味だけは理解できなくもないけど、家族全員を惨殺したとなると理解不可能だ。マトモな人間の所業ではない。狂人の仕業とは思えない。医者でもないのに人をバラバラにするなんて……。正気の沙汰じゃない。いや、宮地優はマトモじゃなかったのだ。わたしを襲った彼は、既に気が変になっている感じだった。完全に正常な判断力を失っていた。だから、一家惨殺事件なんかを起こした？

静川さんの家族が皆殺しにされたと聞いても、和泉君は何の反応も見せなかった。つい先日告白してきた女性が死んだことに何の感想も持っていない様子だ。浅宮部長が死んだ時も平気な顔をしていたし、死を悼む素振りも見せずに、平然といつもの微笑みを浮かべていた……。そんな部分は少し怖かったりする。身近な人間の死を悼む心の機能が麻痺してしまっているのだろうか。渦海さんの話では、過去に和泉君と交際していた女の子はみんな死んでしまったそうである。呪われているかのように……。彼のご両親も亡くなられている。それゆえに、心に何重もの防御壁を築いて感受性を鈍くし

ておかなければ、彼は正常な自分を守ることができなかったのかも
しれない。そうに違いない。そう思っておこう……。

「我々は、剣崎貴明か宮地優の犯行ではないか、と考えているわ。
でも、剣崎貴明は死亡しているし、現在の宮地優は心神喪失状態に
あつて取り調べに応じられないそうよ。この先、証言を得るのは不
可能に近いでしょうね。近く、精神鑑定を受けさせると思うわ」

「精神鑑定ですか。そこまで彼は正気を失っているのですか？」

「浅宮雪乃の葬式に参列させろ、という台詞が、彼が口にして意味
を成した唯一の言葉だそうよ。あとは事件に全く関係しない怪しげ
な単語をただただ羅列するだけみたいね」

「自白は望み薄ですね」

和泉君は酷薄な笑みを浮かべた。

「しかし、そうであるならば、静川玲の事件に関しては、ボクが現
場に赴いて調べてみてもいいですよ。多少なりともお役に立てるか
もしれません」

「剣崎貴明の件については？」

「……お望みとあらば両事件とも放課後に調べてみましょう」

和泉君は眼鏡のレンズをハンカチで拭いて装着し直し、淡く微笑
んだ。

「わかったわ。本当なら今すぐに現場へ行つて欲しいのだけど、君
たちには授業があるものね。では、放課後に会いましょう」

渦海さんは諦めたように肩の力を抜き、柔らかな笑みを浮かべた。

【4・和久井弘美】

一番偉い渦海さんを残して、刑事さんたちは帰っちゃったよー。この学校で起こった事件は無事（？）に解決しそうだったさ。日本の警察は優秀だよ。ああ、でも、この事件は殆ど和泉君の知恵を借りて解決したようなものだから、警察を褒めるのは変かな？ やっぱ、和泉君の知能を称えるべきだよ。凄いぞーっ、かつくいー。あたしと結婚してちょ。なーんて、それは無理か……。にゃはは。

渦海さんは和泉君を連れて校長室に行って、校長先生とお話中。その後は、職員室で事件についての報告会をするみたい。色々な人が事件の真相を知りたがってるから、二人とも今日一日は大忙しだね。マスコミとかも学校の前で人間バリケードを作ってるみたいだし。

ん？ あれれえ、おつかしいぞー。和泉君が渦海さんに付き添う必要なんてないんじゃないかな？ 彼は事件を解決に導いたところでお役御免なんじゃないの？ その後の雑務は警察の役割でしょ？ もしかして、渦海さんが彼と一緒にいたいだけの理由で連れ回してるのか？ それって警察の特権ってやつですか？

和泉君が女警部に連れてかれちゃったので、音楽室に取り残された保奈美は少し寂しそう。

菅野が気落ちしている彼女に取り入ろうとして、周りをちよろちよろしているのが実に鬱陶しいですねー。いくら邪魔と思っても、保奈美の性格じゃ菅野をシッシツと追い払えないんだよね。誰に対しても優しいのは間違いじゃないけど、過剰な思いやりは自分だけじゃなくて相手も傷つけるんだよ。わかってる、保奈美？ 勘違いされないように、仲良くする相手をちゃんを選ばなきゃいけないかな。まあ、保奈美は優しいから何も言わないんじゃないって、菅野が怖いから何も言えない、つてのが本当のところだろうけど……。

だから、引っ込み思案な保奈美の代わりに、あたしが彼を追い払ってあげたんだよ。親友だもん、当然の行為だよ。好意的厚意？
なーんて、にやははは！

おや、今度は中嶋君が保奈美にアプローチをかけようとしていますよ。以前振られてるくせに、懲りない連中ですな。でも、中嶋君は潔い男の子だから、もう一度振られれば、今後二度と彼女に変なちょっかいをかけないんじゃないかな。彼は和泉君とも仲良しになったみたいだしね。

キーンコーンカーンコーン。
キーンコーンカーンコーン。

おっと、お昼休みのチャイムが鳴り始めちゃったぞつ。こうしちゃいられない。即刻即座に屋上へゴー！　そんでランチであつ！

「保奈美、屋上でお昼食べよー」

「うん……」

和泉君がいないから、保奈美は元気がないみたい。それに、さっきは、バラバラ殺人とか、一家皆殺しとか、気味の悪い内容の話が盛りだくさんだったから、気分が盛り下がrippばなしかったんだよ。ね。まあ、殺人課の刑事さんが担当する事件なんだから、残虐なのが普通なのかも。でも、あたしたちのような平凡な高校生にはショック大きすぎだよー。あたしも、自殺の話題は勘弁して欲しいかなつ。お兄ちゃんのこと、色々と思い出しちゃうから……。

「大丈夫かな、藤森さん？」

神川君が保奈美に寄り添って優しい声を掛けてるよー。

美男美女のカップル、って感じかな？

彼は和泉君がいたら絶対に保奈美と仲良くしないけど、それってどうゆうこと？　あたしにはその理由がわかんないけどさー。その優しさを六割ほど分けてくりー。

「うん、平気……。でも、ちょっと……ね」

保奈美は最近、神川君を避けてるみたい。和泉君のことをすぐに悪く言うから、ちょこつとずつ嫌いになっちゃってるのかも。でも、

今日に限っては、彼の優しさに甘えちゃいたい気分なのかな。肩を抱かれても、さり気なく逃げたりしないし……。

「静川さんのことで？」

「うん……それもあるけど……」

「和泉のことで？」

「……………」

曖昧な表情の保奈美。

それって肯定だよな。

神川君は悔し涙？

「落ち込んでる保奈美は見たくないかなっ。だから、お昼ご飯食べ
て元気だしてよ」

「うん」

あたしの提案に、保奈美は即答でおっけー。

屋上に移動してランチ開始っす。

中嶋君と一緒にいてきて、ちゃっかり保奈美の隣に座っていたりする。ずーずーしいけど、面白い男の子だから追い返さないで
こう。

ちなみに、神川君はあたしの隣っすよ。

「保奈美って、金曜日から和泉君の家に泊まってたんでしょ？」

開口一番にクリティカルな話題を振って保奈美の動揺する様を観
察しちゃおう、という大親友らしからぬ意地悪さを発揮。あたしっ
て鬼っすか？ んー。初手から飛ばし過ぎちゃったかなー。

予想通り、保奈美はあたふたと両手をバタつかせて滑稽なダンス
ダンスダンス。

「そ、それは、宮地副部長がわたしを狙ってて危険だったから……
仕方なく……だよ」

「仕方なく？ ほんとほ、この機会に関係を深めちゃえ、とか思っ
てなかった？」

「……………」

答えられないところを見ると、関係を深めたい気持ちはあったんですな、保奈美さん。

もしかして、既に二人はえっちな関係？ まさか保奈美ってば、大親友のあたしを差し置いて和泉君と初体験な感じ？ こらーっ！ そんなの許しませんよ、保奈美さん！

その辺を根掘り葉掘り突っ込んで訊かなきゃなりませんな。

大親友としての使命感が言葉を紡がせるんだからしょうがないよね。

「保奈美、もしかして、和泉君とえっちしちゃったとか？」

「そんなわけないよ。渦海さんが一緒だったんだもの」

言い訳してるけど、僅かな不満が顔に滲み出ているぞ。でも、その様子だと、ほんとに何もなかったみたいだね。

「和泉君は紳士だから、わたしがお酒で酔っ払ってソファで寝ちゃってても、抱き上げてベッドまで運んでくれただけ。それだけよ」

「うわ、考えらんねえな！ 藤森さんの無防備な姿を前にしてセックスどころかキスもしないなんて、正気じゃねえぞ。あいつ、男じやねえよ。ある意味、ホモだ」

中嶋君の暴言を聞いた瞬間、保奈美が目から怪光線を発射するくらいに眼圧で睨んだんだよー。怖いねー。あんな怖い顔の保奈美さんを見るのは初めてかな。

まあ、好きな男の子をホモ呼ばわりされたら誰だって怒るよね。

中嶋君てばお馬鹿さん。

ついでだから、あたしも睨んどこつ。あー、中嶋君、びびって俯いちゃったよ。

神川君は、保奈美と和泉君がえっちな接触をしてないと聞いて希望の光を見出したみたい。さっきまでの陰鬱な表情が嘘のよう。あからさまに安堵しているのがわかる。そんなに保奈美のことが好きなのかな？ あたしじゃ駄目？

「弘美は週末、何をしていたの？」

「お兄ちゃんのお墓参りだよー」

「あ！　そうか……。そうだよな」

保奈美は沈痛な面持ちになってトーンダウン。

あたしのお兄ちゃんと保奈美は小さい頃によく遊んだ仲だから、毎年一回行ってるお墓参りをサボっちゃうと、やっぱ気にしちゃうのかな。

「わたしも一緒に行きたかったよ。誘ってくれば良かったのに……」

申し訳なさそうに保奈美は言うけど、そんなに辛そうな顔をしながらもいいよ。

一回来なかったくらいで、お兄ちゃんは怒ったりしないと思うからねー。

「保奈美は殺されちゃいそうだったんだから仕方ないよ」

「うん……。来年は一緒に行こうね？」

「おっけー。んじゃ次は、和泉君も誘っちゃおうかなっ！　みんなでワイワイ行った方がお兄ちゃんも喜ぶと思うんだよ」

「そうだね」

優しい親友を持って、あたしは嬉しいよ。まさに心の友だね。益々幼なじみとしての絆が深まった感じだよ。女の友情も満更捨てたもんじゃないね。

「そんな時は俺も連れてけよな」

俯けていた顔を上げて、あたしのお兄ちゃんのお墓参りに参加希望を表明する中嶋君。

それって意味不明だよー。

「中嶋君が来ても意味ないじゃん」

「和泉も意味ねえじゃんよー」

ブー垂れる中嶋君。

「和泉君は同じ美術部の部員だから参加おっけーなんだよ。中嶋君は違うから駄目え。あ、神川君は同じ部員だから一緒に来ていいよ」

「ありがとう、和久井さん」

神川君に感謝されちゃいました。

「そんじやー、俺も美術部に入る！」

寝言をほざく中嶋君。

「中嶋君は運動部の人じゃんか。今更所属する部を変えたりできないと思うよー」

「できる！俺はやる男だぜ。どんな困難にでも立ち向かってやるさ！」

言ってることが滅茶苦茶だよー。

でも、中嶋君なら本当に美術部に編入してくるかもね。運動部ってつまんなそうだし、練習が辛いし、夏は暑いし、休みも返上して部活動に勤しまなきゃなんないから、文系の方がすごく楽だもん。あー、だけど、それもこれも美術部が存続するって仮定しての話なわけで、廃部になっちゃったらこの会話も無意味なんだよね……。落涙。

「美術部ってどうなるのかなー？ 事件の所為で部員が極端に減っちゃったから、やっぱり廃部なのかな？」

廃部は嫌だよー。部活動に参加したのはたったの一、二回だから、美術部には大した思い入れなんかないけど、廃部になると思うと途端に愛着が湧いてくるってもんだよね。

「そうだね。どうなるのかな……？ 顧問の剣崎先生も死んでしまつて、中心人物がみんないなくなつてしまったものね。でも、廃部は悲しいな……。死んだ人たちの為にも存続させたいよね」

「絶対に存続させるよーっ！」

拳を突き上げて宣言。

すると、中嶋君も拳を振り上げて同調してくれたつす。これがクラスメイトの絆ってやつですか？ 何にしても感謝！

「俺が断固として美術部の存続を訴えてやる。校長の髭を筆つてでも存続させる！」

「おー、頼もしいぞお、中嶋君！」

肩を叩いて持ち上げると、中嶋君は調子付いちゃったみたい。こともあるうちに、あたしの肩に馴れ馴れしく手を乗せ、にかーっと陰

なく笑って、真っ白い綺麗な歯を見せて、ぐっと親指を立てたから堪らないよ。あたしって、こう見えて、あんまし男の子に対して免疫ないからねー。無闇に身体を触られると困るかも。和泉君になら無条件でお触り自由の大サービスをしちゃうけどね。

「俺ってやる男だからな！」

何をやるのも中嶋君の勝手だけど、あたしをやらないうで欲しい。

お触り厳禁！

けしからん手をそれとなく払い除けて、傷ついた様子の彼に可愛い笑顔をプレゼント。

「新部長は保奈美で決まり？」

「俺が部長になる！」

拳手して立候補する軟弱者。こんないい加減な男の子が部長になったら、美術部が胡散臭い低俗なモノに貶められちゃうよ。そんな暴拳は断固として阻止せねば、今は亡き浅宮部長に申し訳が立たぬ……、って罰当たりな発言だね。反省するっす。

「こら、中嶋君！ 馬鹿言っちゃ駄目だよ」

今日までの己の行いを振り返って、自分が人の上に立つ人間として相応しいかどうか、じっくりと考えてみなさい！

「俺は馬鹿言っちゃいねえよ。マジだ。それに、俺よりも部長に適してる男なんていねえだろ。でもまあ、藤森さんが部長になるなら、俺は副部長で我慢してやってもいいぜ」

マジ顔で戯言をほざいてるよ……。大したお人だねえ。頭蓋骨こじ開けて脳味噌を拝見したいです、ほんと。

「二人とも何言ってるのよ！ ふざけているの？ 真面目なお話をしているのよ！」

ぷんすか怒る保奈美。

ちよつと馬鹿が過ぎちゃったね。大反省するから睨まないで、保奈美さん。

「ごめんごめん。ここは順当に、頭が良くて格好良い和泉君が部長、神川君が副部長だね。あ、それとも、美人で可愛くて真面目さん

でヴァージンな保奈美が副部長になる？」

「ヴァージンは関係ないでしょう！」

顔を真っ赤にしてカンカンに怒る保奈美。

「ほらほら、保奈美さん。お茶目な冗談なんだから、そんな怖い顔して怒らないでよ。この通り、心の底から謝るから、ね？ ごめん、保奈美。大後悔で熱烈大反省しちゃう弘美さんだから、許してあげてよ。そんな顔していると、男の子に嫌われちゃうぞっ」

「もう！」

保奈美はどんなに不機嫌になっても、あたしが手を合わせて拝みながら謝れば、仕方なさそうに微笑んでくれるんだよ。

「んで、新部長は俺で決まりか？」

この男、まだ懲りずに戯言を吐くか。やる男だから懲りないのかな？ まあ、確かに、中嶋君らしい有言実行だよな。真似したくないけどさ。

「新部長は、和泉君か神川君だよっ！」

「違うでしょう、弘美！ 新しい部長と副部長は、部員全員の話し合いで決めなければ駄目でしょう！」

「そうだよな！ 保奈美の仰る通りだよっ」

「全く、弘美は……」

呆れ顔の保奈美。

「美術部については、あとで鈴原先生に相談しましょうよ」

「そうだね。今はお弁当食べる時間だよな」

あたしの意見に誰も反対しなかったから、話はひとまず終了で、お弁当タイム開始。

あたしと保奈美は家から持参したお弁当。

神川君はコンビニのお弁当。

中嶋君は、駅前のパン屋さんで購入してきたという数種類の美味しそうな惣菜パン。

「中嶋君、一口だけ頂戴っ！」

「おう、いいぞ」

どうしても味わってみたから、おかずと交換ってことで、
ちよつとだけ中嶋君の手にしてるパンをがぶり。

うん、美味しい。

「もう一口いい？」

「弘美！」

意地汚いことは止めなさい、って保奈美に叱られちゃったけど、
欲しい物は欲しいから仕方ないよね。

【5・藤森保奈美】

その日の放課後、わたしと神川君は、和泉君の付き添いとして、渦海さんの愛車に乗って静川玲の自宅へ向かった。

わたしが付き添った理由は単純明快。宮地優に襲われた時のショックが抜け切れておらず、まだ一人で外を歩く勇気が湧かなかったからである。

神川君が同行を申し出たのは……なぜだろう。わからない。

渦海さんの部下らしき年配の刑事さんは、わたしたちの同行に良い顔をしなかったけど、和泉君に口添えをしてもらい、渦海さんにも頼み込み、無理を通してもらった。

学校から静川玲の自宅までは、車で約十分の距離であり、隣町ではあるが我が家から程遠くない高級住宅街の外れに位置していた。

車は玄関前に停車した。

「ここが静川さんの自宅ですか？　なかなか趣のある家ですね」

助手席に乗っていた和泉君が、シートベルトを外しながら言った。後部座席に乗っていたわたしと神川君は、先に車を降りて、静川宅の外観を眺めた。

平屋の一戸建て住宅。趣があるのかどうかわたしの鑑定眼では識別できないけど、少し古めの建物であり、小さな庭には空の犬小屋が設置されていた。

「飼い犬がいたけど、首を切断されて殺害されていたわ」

車を降りてきた渦海さんに事務的な口調で告げられた。

ちよつと胸の内がすばむ感じ。

苦しい。

「犯人には邪魔だったのでしょうね」

和泉君は酷く素っ気ない。人間の死すら簡単に受け容れてしまうのだから、犬の一匹や二匹死んだと聞かされても何の感慨も湧かな

いのだろう。

そういう彼を見ると、なんだか可哀想で、心が痛くなる。

神川君は主を失った犬小屋の前に立ち、冥福を祈るように目を瞑った。

和泉君と渦海さんはそれに構わず、ずんずんと庭を突き進んでいき、家の裏側に位置する台所の勝手口まで移動した。

わたしたちも慌てて後を追う。

「ご主人の帰宅時、防犯チェーンが掛かっていたそうだから、犯人はこのドアから侵入したと思われるわ」

「このドアは施錠されていなかった？」

「どの家でも大抵の場合、家主が不在でない限り、勝手口は施錠されていないものだわ」

「そうなのですか？ 不用心ですね」

「真悟君はずっとマンション暮らしだったから、勝手口の存在意義を知らなくて当然ね」

渦海さんはちょっと可笑しそうに言い、勝手口のドアを開けた。

「靴は脱いで頂戴。それと、帰りは玄関から出るから、靴は持って歩きなさい」

言われるままに靴を脱いで手に持った。

そして、二人に続いて台所に入った。

「！」

入った瞬間、目に飛び込んできた光景に思わず絶句してしまった。持っていた靴を落としそうになる。

人間の形に貼られた白いテープ。

散らかされた食器類。

床を汚す生々しい血の痕。

「ここで静川玲の母親が頸骨を折られ、頸動脈を切り裂かれて殺害されていたのよ」

「凶器は？」

「彼女自身が料理に用いていたと思われる果物ナイフよ」

「指紋は？」

「この家族のもの……不思議なことに剣崎貴明の指紋も検出されたわ」

「ほう……」

和泉君は僅かに目を細め、唇を真一文字に引き締めた。

「被害者が抵抗した形跡はありませんか？」

「ええ。首の傷以外、どこにも外傷は見られなかったわ。およそ彼女は不意を突かれて首の骨を折られ、その直後に首を切り裂かれたのだと思うわ。食器が散らばっているのは、争ったように見せかける偽装工作ね」

「そうでしょうね」

二人は頷き合い、台所を出ていった。

その後をわたしと神川君が追う。

廊下を玄関方向へ歩いていくと、トイレの前に白いテープで人間の形が作られていた。台所と同じだけど、二回りほど形が小さい。ここで子供が一人死んでいたようだ。

「ここで静川玲の妹が殺害されていたわ」

「同じように？」

「ええ。右半面に打撲痕が残っていたけど、たぶんそれは転倒時に顔面から床へ激突した結果の痣ね。死因は、急激な加圧による頸骨の損傷よ」

「なるほど。母親と妹の二人は、庭の飼い犬と同じで、静川玲を解体する作業の邪魔にならないように殺害されたのですね。いわば、とばっちりで殺されたわけですか」

「真悟君、言葉が悪いわよ。せめて、巻き添いになった、と表現しなさいな」

「ご忠告を胸に刻みます」

和泉君は慇懃無礼な感じに一礼した。

わたしたちは廊下を更に奥へと進み、突き当たりの右側に位置す

る部屋のドアの前に立った。ドアには《KEEP OUT》と書かれたプレートが掛けられている。

渦海さんがドアを開けた。

室内から流れ出てくる異臭に、思わず鼻と口を手で覆って、顔を背けてしまった。それくらいの悪臭。生臭い匂い。吐き気を催させる血臭。

この部屋には入りたくない。

しかし、和泉君と渦海さんは平気な顔で入っていつてしまった。

神川君もハンカチで口許を押さえつつ入っていく。

仕方がないので、わたしも入った。

ぱっと室内を見て、入室を後悔。ベッド上は血の海。壁や床にも夥しい量の血が飛散している。地獄絵図だ。嘔吐感を堪えるのに必死。涙が溢れ出てくるけど制御不能。逃げ出さない努力が大変だった。

「解体場所はベッドですね」

「ええ。酷い有様だったわ」

わたしに配慮してか、渦海さんは死体の描写を控えた。

わたしは心の中でお礼を述べた。口を開くと胃の内容物が逆噴射してしまうだろうから、声に出せなかったのだ。

「死因は？」

「解体行為による出血死よ」

「死後に解体されたのではないと？」

「ええ」

短い返事。

神川君が驚きともつかない小さな声を発して、目を見開いて和泉君を睨んだ。

和泉君は横目で神川君を一瞥したけど、何も言わず、再びベッド上に目を向けて、血塗れのクッションを指先で押した。

「このクッションが被害者の頭の下に置かれていたのだとすれば、自分が切り刻まれていく様子を見せられたわけですね」

和泉君はそう呟き、指に付着した汚れをティッシュで拭い、表情を隠すように顔を俯け、眼鏡のレンズを押し上げる仕種を見せた。
「悲惨ですね」

それが唯一、静川玲の死に対して和泉君が漏らした人間らしい感想だった。

「解体作業に用いられた凶器は、母親と妹に使用された物と同じですか？」

「いいえ。凶器から採取された血液は、母親と妹の物だけで、静川玲のものは検出されなかったわ」

「ほう。すると、静川玲に使用された凶器だけが持ち去られたのですか？」

「ええ。遺留品は、母親と妹に使用された凶器のみで、屋内には不審者の髪の毛一本残されていなかったわ」

「屋外には残されていた？」

「ええ。事件に関係しているかどうかは断定できていないけど、玄関のドアと呼び鈴に神川君の指紋が多数付着していたわ。神川君には、その点の説明を聞かせて欲しいものね」

渦海さんと和泉君に疑惑の目を向けられると、神川君は明らかな動揺を示した。

「僕は……」

「キミは、この家を訪問したことがあるのかな？」

穏やかな口調で和泉君に訊かれ、神川君は血が滲むくらい強く唇を噛んだ。

「僕は……一度だけ来たことがある」

「つい最近？」

「土曜日だ」

土曜日と言えば、事件の起こった日だ。

「事件当日に何の用でこの家を訪れたのかしら？ 詳しく聞かせて欲しいわね」

渦海さんの目が、ぎらつと光った。

「静川さんに聞きたいことがあったのです。しかし、呼び鈴を数回押しても応えがなかったので、留守だと思って帰宅しました」

「不審者を見なかった？」

「見ませんでしたよ。いえ、見る角度によっては、僕が不審者でしたね」

皮肉満載の口調で言う神川君。容疑者にされかねない自虐発言だ。すると、渦海さんが口を開くより先に、和泉君が問い掛けた。

「静川玲とキミとの関係は？」

「無関係だ！」

神川君は声を荒らげた。

「無関係なのに上級生の自宅を前置きなく訪問したの？　そうまでして聞きたかったことは何なのかな？」

「貴様には答えたくない！」

神川君は彼らしくもなく、顔を紅潮させて怒鳴った。

「落ち着きなさい、神川君！」

「落ち着いてなどいられませんよ！　こいつは、今度は僕を犯人に仕立て上げて、罪から逃れようとしているのですから！　渦海さん、貴女は何度この鬼畜に騙されれば気が付くのですか？　いい加減、真実に目を向けて下さい！　いつもいつもバラバラ殺人が起こる度に、こいつの推理を鵜呑みにして……」

「神川君、口が過ぎるわよ！」

渦海さんに厳しい口調で咎められると、神川君は冷静さを取り戻したようだ。

「申し訳ありません……」

神川君は、和泉君を険しい目で睨んでおいて、渦海さんに頭を下げて謝罪した。

「神川君、事件当日にこの家を訪問した理由、後で聞かせてもらおうよ。いいわね？」

「はい」

悪し様に罵られた和泉君は、二人のやり取りに加わって神川君の

言葉を否定しようともせず、我関せずの態度で室内を見回していた。

そして、二人のやり取りが終わったのを見て、質問を再開した。

「話を屋内に戻しましょう。あと、何か不審点がありましたか？

貴金属が盗難にあったということはありますか？」

「盗難？」

渦海さんは、今更それを問題にする意味があるのか、と言わんばかりに鼻で笑った。

「これは、強盗殺人ではあり得ないわよ。犯人は静川玲だけを執拗に切り刻んでいるもの。怨恨による殺人か、もしくは快樂殺人に類する猟奇的殺人事件だわ」

「だから、宮地優と剣崎貴明が有力な容疑者なのですね？」

「ええ」

「わかりました。それでは次の事件現場へ移動しましょう」

わたしたちは予定通り、玄関から外に出て車に乗り込み、剣崎先生の自宅マンションへ向かった。その途中でコンビニに寄ってもらい、スポーツ飲料を購入し、移動中に少しずつ飲んで、灼熱地獄と化した胃の中を冷却した。まあ、道中、和泉君に隣に座ってもらって、ずっと手を握ってもらっていたので、それだけで心は水を打ったように静まり、気持ちの悪さも払拭されたのだけど、その上で肩を抱いてもらいながら飲むジュースは最高の味だったから、彼の優しさに甘えてしまった。

今後、弘美の図々しさを責められないな、と思った。

【6・藤森保奈美】

剣崎先生の自宅マンションは、詩海高校から二駅先の商店街裏にあった。和泉君の自宅マンションにも引けを取らない豪勢な建造物であり、ギリシャ神殿を思わせるエントランスがとてもお洒落だ。

先生の部屋は二階の角部屋。

このマンションの管理人らしきおばさんにドアの鍵を解除してもらい、わたしたちは部屋の中に足を踏み入れた。下駄箱から廊下を通って、正面に位置する寝室へと直行する。そこで先生は首を吊って死んでいたらしい。

「趣味の良い寝室ですね」

神川君が評した。

確かに、調度品の趣味は悪くない。それに、室内は綺麗に整頓されており、散らかっている物と言えば、寝室の隅に置かれた台の上から落ちたと思われる水槽と、その傍に倒れている椅子くらいであった。

和泉君はその椅子の上方を指差した。

そこには、西洋風の照明ランプが天井からぶら下がっていた。

「剣崎貴明はあのランプにロープを通して首吊り死していたわけですね？」

「ええ、その通りよ。ロープがない状態でよくわかったわね。さすがは真悟君」

渦海さんは目を丸くして称賛したが、和泉君は笑みの影すら刻まらず、得意げな様子もなく、無表情のままにクローゼット前に倒れている椅子に歩み寄って手を掛けた。

「警察の見解は、剣崎貴明が自らこの椅子に乗り、ランプの傘にロープを通し、首を吊った上で椅子を蹴り倒した、というものなのでしょうね？ 落下して破損した水槽は、彼が藻掻き苦しんだ拍子に身体の一部をぶつけて床におとししてしまった、と見ているのではあ

りませんか？」

そう推測された渦海さんは、スーツのポケットからお馴染みの手帳を取り出して、ぱらぱらと数ページ捲り返した。

「……私の手帳を覗き見た風に言うわね。知らない間に抜き取ってカンニングしたの？」

「いいえ、見ていませんよ。警察の見解など容易に想像できます」
和泉君が皮肉を言った。

「この状況を見て、それ以外の見解ができるのかしら？ 死体発見時、この家は完全な密室状態にあったのよ。全室の窓が施錠されていて、玄関のドアにもしつかりと鍵が掛けられていたわ」

渦海さんは挑戦的な口調を用いた。挑発行為によって和泉君の発憤を促す意図があったのかもしれない。

でも、和泉君は相変わらぬ冷静さを維持していた。

「第一発見者は誰ですか？ その人物は合鍵を所持していたのでしょうか？」

「ええ。遺体の第一発見者は、彼の婚約者とその友人四名よ。一応言っておくと、彼女たちのアリバイは完璧だわ。死亡推定時刻から死体発見時まで五人一緒に団体行動をしていて、しかも誰一人として五分以上の個人行動をとらなかったそうよ」

「その五人が口裏を合わせている可能性はないのですか？」

「五人は単なる大学のクラスメイトだから、何の利害関係もないわ。口裏を合わせる意味がないのよ」

「なるほど」

和泉君は一つ頷いた。

「剣崎貴明自身が所持していた自宅の鍵は、どこにあったのですか？」

「倒れていた椅子の下敷きになっていたわ」

「椅子の下敷き？ なるほど、自殺偽装の密室トリックがわかりました」

和泉君は明快に言って、穏やかに微笑んだ。

「……解説して欲しいものね」

惘然とした表情で要求する渦海さん。

「喜んで」

和泉君は、形だけは礼儀正しいお辞儀をして見せ、倒れている椅子を起こした。

「それでは、いかにして犯人が剣崎貴明を首吊り自殺に見せかけて殺害し、どのように密室状態を作り出したか、それを実践しながら解説していきましょう」

和泉君はそう言って周囲を見回し、一旦寝室を離れた。

数分後に戻ってきた和泉君は、拳大の氷のブロックを数個乗せたお皿と粗塩の袋を抱えていた。

「藤森さん、悪いけど、剣崎先生の役を演じてくれないかな？」

「え？」

嫌な予感がした。

「もしかして……この前の弘美みたいに、わたしに首を吊る真似をしろって言うの？」

不愉快さが自然と声音に表れてしまった。

普段の和泉君なら「嫌なら断ってくれて構わないよ」と言ってくれるのだけど、今日の彼はいささか強引であり、有無を言わせぬ空気を漂わせ、ランプの真下までわたしをエスコートした。

わたしよりも剣崎先生役に適している神川君が身代わりになってくれるのではないか、という僅かな期待も、彼の傍観者に徹する意思を表明しているであろう能面顔を見て打ち砕かれた。はいはい、わかりましたよ。やればいいんでしょう！

何を思ったのか、和泉君はわたしの横に椅子を逆さまに立てた。背もたれの部分でしか支えられていない椅子。酷く不安定だ……。まさか、これに乗れ、と言うんじゃないでしょうね？　そういう怒りの抗議を込めて和泉君を睨み付けてやった。

和泉君は微かに表情を崩した。

「キミに大道芸を強要したりはしない」

察しの良い男の子である。

しかし、氷の塊と塩で何をしようというのだろうか……。

そう思っていると、和泉君はお皿を引き寄せて氷のブロックを一つ取り、絨毯の上に置いた。そして、その上に塩をふりかけてブロックを積み重ね、また塩をふってブロックを重ねた。その作業を慎重に五回繰り返し、なんと椅子の背もたれ部分と同じ高さの氷の柱を作ってしまった。

逆さま状態で安定してしまった椅子。

「塩は氷と氷を接着させる役割を担ってくれているんだよ。昔、理科の授業で習っただろう？」

「あうう……そ、そうだったかな？」

「さあ、藤森さん、この椅子に乗って」

「う、うん」

わたしは脇の下に手を差し込まれ、椅子の上まで抱え上げられた。軽々という感じのリフトアップ。

ちよつと嬉しくて、少し気持ち良かった。

「藤森さん、しばらく椅子の上で立っていてくれないかな。上のランプに掴まっていれば身体が安定するから、バランスを崩して落下する心配はないと思うよ」

「うん、いいよ」

わたしは言われた通り、そつと頭上に手を伸ばし、天井から吊り下げられているランプの傘を両手で掴んだ。

確かに身体が安定し、恐怖が薄らいだ……気がした。

「さて、これで時限式首吊り装置の完成です。次に、密室作成装置を作りましょう」

そう言つて和泉君はポケットから長くて透明な糸を取り出し、わたしたちに見せた。

「この糸は、リビングに置いてあった釣り糸です。長さは玄関から寝室までの往復分くらいです。それでは恭子さん、このマンション

の鍵か、それに代わる物を貸して下さい」

「私の車のキーでいいかしら？」

「はい」

和泉君は、渦海さんから車の鍵を受け取ると、その鍵に糸を通し、更に椅子を支えている氷の柱と背もたれ部分の間にも糸をくぐらせ、糸の両端をきつく結び合わせた。そして、結び目の所に鍵が引っ掛かるように、位置を調整した。

「これで準備万端です。あとはエアコンを作動させ、頃合い良くエアコンが停止するようにタイマーをセットするだけです。そうしておいて、犯人は外に出る際、この鍵を郵便受け口から外へと出し、玄関のドアを外から施錠して、ロープウェイの要領で寝室まで戻したのですよ。実際にできるかどうか、ボクが実演してみせましょう」
そう言い残して、和泉君は糸を通した鍵を持って寝室から出ていった。

わたしの位置からだと玄関がよく見える。

和泉君は玄関のドアに備わっている郵便受け口から鍵を外に出し、自分も外に出た。

ガチャツと鍵の掛かる音が聞こえてきた。
そして。

寝室から玄関の外まで伸びている糸がぴーンと張り詰めたかと思った瞬間、カチャツと音がして郵便受け口が開き、氷を支点にして糸の輪が回転し始め、糸の動きと共に鍵がゆっくりとこつちへ移動してきた。

まさにロープウェイだった。

「冗談ではないわよ……」

小声で吐き捨てる渦海さん。

鍵が氷の柱に引っ掛かった所で糸の輪の動きが止まった。本当に冗談みたいだけど、外から郵便受け口を覗き込んでも寝室の中は見えないはずなのに、まるで計ったようにピタツと止まった。次の瞬間、糸の輪の張力が失われ、鍵が絨毯の上に落下し、再び糸が動き

始めた。外で輪を切ってから、糸を巻き取っているのだ。鍵は氷の柱に引っ掛かったまま動かず、長い糸だけが鍵から抜け、氷の柱と椅子の背もたれの間を通り抜け、廊下を通って玄関へと巻き取られ、郵便受け口をくぐり抜けていった。

これで密室の完成？　こんなに簡単に？

ピンポーン。

チャイムの音。

渦海さんは震えるような溜め息を吐き、一度わたしに苦笑いを見せ、玄関に赴いてドアを開けた。

「どうですか？　きちんと密室を作り上げることに成功したと思いますか？」

「ええ」

成功を称えるも、渦海さんは複雑な表情。殺人課の捜査員としての悔しさが声音に滲み出ていた。

神川君は何のリアクションもせず、無言を貫いている。

和泉君は寝室に戻ってくると、わたしの腰に手を回し、椅子から抱き下ろしてくれた。

「藤森さん、ありがとう。実験は成功だ」

微笑みと共に両手を握り締められ、労いの言葉を掛けられた。

「恭子さん、どうです？　これが剣崎貴明を密室での首吊り自殺に見せかけて殺害したトリックですよ。この椅子、今はまだ安定しています。すぐに氷が溶け始めて不安定になります。常温なら、もって数十分。冷房の温度設定によっては長時間椅子を安定させておくこともできますが、その辺りは剣崎貴明の体重とバランス感覚、そして生に対する執着心によって多少左右されますね」

目の前で密室を作られた渦海さんは、一言もなく、怖い顔で逆さの椅子を睨み付けている。

その気持ち、わからないではない。冗談みたいな光景なのだ。逆さの椅子と氷の柱で時限式の首吊り装置を作り、更にそれを利用して密室を作ろうなんて普通は考えない。

渦海さんは絨毯の上に転がっている愛車の鍵を拾い、それを強く握り締め、その場で壁と睨めっこするように仁王立ちした。

数秒間の沈黙。

「二つ疑問点があるわ」

挑むような口調の女警部。

「何でしょうか？」

「犯人はどうやって剣崎貴明を逆さまの椅子に上がらせたのかしら？ 凶器を突きつけられ、首を吊るように脅されたとしても、そんなに素直に応じたとは思えないわ。それに、手が自由なのだから口ブを解くこともできたと思うわ」

「彼の死体には、首以外に外傷はなかったのですか？」

「両手の爪が何枚か剥がれていた点と、全身数力所に切り傷があつたけれど……。手の爪は、苦しさのあまり首に食い込む口ブを思わず引き剥がそうと掻きむしった際に剥がれたのだろっし……。身体への傷は、水槽を倒した際にできたものだろうから……」

和泉君は柔らかな笑みを浮かべ、今度は床に落ちて壊れている水槽を指差した。

「この落下して破損した水槽は、死体発見時に溶けた氷で絨毯が水浸しになっていても不自然ではないように、わざと落として割っておいたのですよ。なかなか細やかな演出ですね」

「……わざと？ では、身体への傷は……」

「ガラス片で斬られたのだと思います。簡単に言えば、拷問されたのですよ」

「拷問……」

「これは想像ですが、逆さまの椅子の隣にもう一脚椅子が普通に並べ置かれていたのではないのでしょうか。そして、剣崎貴明は首を吊られる直前まで両手を拘束されていたのだと思います。その上で、首に口ブを巻き付けられ、ランプの傘に通された口ブを引っ張

られれば、彼は苦しさのあまり逆さまでない方の椅子に上がるでしょう。更に、ガラス片で斬りつけられ、椅子を取り除くから隣の椅子に移動しなさい、と言われれば、嫌々ながらも逆さまの椅子に移らざるを得ません。その後、手の拘束を解かれたのです。どうして自由になった手でロープを解かなかったのかは……言わずもがな、ですね」

「爪が剥がされていたから？」

「そうです」

「……いつもながらに見事な推理ね、真悟君」

大人の対応だ。

渦海さんは器の大きな女性である。わたしが彼女の立場だったら、少年探偵の才能に嫉妬し、自分の無能さに悩乱し、即座に辞職願いを提出するか、もう二度と彼を捜査に関わらせないでおこうと誓うだろうから。

「お褒めいただきありがとうございます。しかし、これはあくまでもボクの推理であり、正解ではないかもしれません。もしこれが正解であった場合、静川宅の惨殺事件における剣崎貴明のアリバイは、条件付きではありますが立証されます」

「なるほど……。剣崎貴明は静川玲が殺害される前に、既に首吊り状態にあり、死を待ただけだった可能性もあるわね。つまり、二件の殺人は同一犯の仕業であり、先に襲われたのが剣崎貴明で、次に静川宅が襲撃されたと言っているのね？」

「はい。そう考えれば、静川宅に残されていた凶器から剣崎貴明の指紋が検出された説明がきます」

「ああ。なるほど。確かにそうね。しかし……そうになると、事件関係者全員のアリバイをもう一度洗い直さなければならぬわ。大至急、捜査員を集めなければ……」

愛用の手帳をポケットにしまい、渦海さんは眉間に厳しいシワを刻んだ。

和泉君は椅子を正常位に戻し、氷の柱と塩の入った袋を片付け始

める。

それを見て、渦海さんが小さく舌打ちした。

「しまったわね……。手の空いている者呼んで、ビデオを撮らせておけば良かったわ。真悟君、申し訳ないけど、今のトリックを明日にでももう一回、今度は他の捜査員の前で実演してくれないかしら？」

「構いませんよ」

迷惑そうな顔を欠片も見せず、和泉君は要請を承諾し、氷の塊をお皿に乗せてキッチンへと向かった。

後片付け終了。

「さあ、帰りましょう。神川君と一緒に署に来てもらうわよ。真悟君と藤森さんは家まで送ってあげるわ」

「はい、ありがとうございます」

渦海さんに促され、わたしたちは所有者を失ったマンションを後にした。

第八章 真相自由自在 【1・神川真治】

四月二十九日、火曜日。

色々な意味での敗北を噛み締めて、僕は学校へと続く歩道を歩いている。しかし、身体が鉛を含んだように重い。足が動かない。一歩進む毎に足の裏が地面に吸い付いて離れようとしない。それでも僕は、両足を交互に引きずり出して、詩海高校へと一歩一歩近づいていく。より大きな屈辱を胸に刻む為に登校する。無情極まりない現実を直視して自分の無力さを自覚する為に……。自虐が最低の自己防衛行為だと知っていて尚、僕は詩海高校一年A組の教室へと向かっているのだ。

「キミは楽をしなさ過ぎる。失ったものの為ではなくキミ自身の為に、もっと肩の力を抜いて生きるべきだ」

並んで歩いている和泉が、昔から変わらない無感情な声で言った。

こんな奴にアドバイスされるなど……。

刹那の反発心は、しかし敗北感と自己嫌悪によって駆逐され、かつての親友に氣遣われた喜びの心が心に染み渡っていった。あれほど忌み嫌っていた和泉真悟と何故に行動を共にしているかと言えば、理由は単純、自宅が近いので登校する時間さえ合えば自ずと同じ道を歩くことになるのだ。それでも今までは、僕が意識して身を遠ざけ、決して肩を並べることがないように注意を払ってきたのだけど、今日は和泉の接近を故意に回避しなかった。

「僕から藤森さんを奪っておいで、よくもそんな台詞が吐けるな」

「奪ったつもりはないよ」

穏やかな否定の言葉。

そう、和泉は奪ったわけではない。梶浦京香の時も、今回の藤森保奈美の時も、選ばれただけだ。言い換えれば、僕は常に選ばれなかった、ということである。それを理解しているからこそ悔しいのだ。

「貴様の認識ではなく、僕がどう感じているかが重要なのだ」

「ボクを恨んでいるの？」

「……………」

恨んでいるに決まっている！

そう叫ぼうとして失敗した。昨日の午前中までは和泉こそが解体殺人事件の犯人だと確信していたのに、放課後の現場検証を終えて帰宅した時には自信が揺らいでいた。もしかしたら、恋人を奪われた恨みから和泉を犯人と思い込んでしまっていたのではないか、という自分自身への疑惑が浮かんできたのだ。なぜなら、静川玲の死亡推定時刻に、和泉は二日酔いでダウンした藤森保奈美の看病をしていた、と彼女自身が断言したからである。彼女は正直な女性なので、疑わしい人間を庇い立てすることはまずない。それが好きな男であつたとしてもである。だからこそ、僕の自信は揺らいでいるのだ。

「おや、返答をしないところを見ると、ボクを許す気になつたのかな？ それとも、言葉にできないくらい恨みが増した？」

「……もう貴様を恨む気持ちはない。ただ悔しいだけだ……」

「ほう……。それでは、梶浦京香の貞操を奪っておきながら、命を守れなかつたボクを許してくれるの？」

和泉が切れ上がった目を丸く見開いて訊いてきた。

新鮮な反応だ。なんだか可笑しい。笑いの衝動を噛み殺す。

「許すも許さないもない。貴様にどのような感情をぶつけても、もう彼女は戻ってこないのだ。今の僕は、死んでしまった者の冥福をただただ祈りたいだけだ」

「あの子の死を吹っ切つたんだね」

「吹っ切つたわけではない。僕は貴様とは違う。感情のスイッチを切り替えるようにして、梶浦さんへの思いを吹っ切ることなどできない。ただ……僕は……」

唇を噛み千切るくらい強く歯を立て、一步先のアスファルトを睨む。

今から僕が口走る台詞を聞いたら、和泉はどんな反応を示すだろうか。笑うか？ 嘲笑うか？ 侮蔑するか？ 嫌悪するか？ 感動して戦慄するか？ 無感動のままか？

ある種の期待を胸に、横目で和泉を見た。

「なあ、真悟」

呼び掛ける。

親友だった頃の呼び方で。

「何かな、真ちゃん」

ごくごく自然な応答。

でも、昔の呼び方で返してきた。

まるであの頃のままのように……。何も変わっていないかのよう
に……。

瞬間、心が熱を帯びて何かを押し上げた。

鼻の奥に熱塊が生じる。

歓喜が動揺を生んでいるのだと自覚した。

「僕は間違っていたのかな？」

込み上げる感情を押し潰して平静を装う。

真悟はこっちを見て少し口許を緩めた。

「何に對して？」

「君への対応だ」

「間違つてはいないと思うよ。恋人を奪われれば誰だって相手に対して憎悪をいだく。その上、凶悪な殺人鬼に狙われ、恋人だった女の子を惨殺されれば、逮捕された犯人ではなく、恋人を奪っておきながら守り抜けなかった者を呪って当然だ」

「君は何人もの恋人を奪われたが、後悔の涙に暮れている姿を見たことがない。恋人を奪った殺人犯に憎悪を……殺意をいだいたこと

はないのか？」

「その質問に対しての答えは既に行動で示しているよ」

「行動で？」

「ボクの全能力を用いて、彼女たちを殺害した犯人の逮捕に協力した」

「ああ……そうか……。犯人の逮捕に協力することで負の感情を処理してきたわけだな」

それは僕が真悟に対して行おうとしていたことと同じである。違いは、その意志を維持する心の強さと、それを結果に結びつける能力の高さだ。

「もし僕が嫉妬と憎悪に身を任せて、君を傷つける為に藤森さんの処女を力づくで奪ったらどうする？」

「どうする、とは？」

全く表情を変化させず、真悟は静かな声で聞き返してきた。

「好きな女の子を傷物にされた怒りを僕にぶつけるか？」

「ぶつけはしないよ。ただ、キミが性犯罪者としての汚名と引き替えにしてまでボクを傷つけようとした理由を考え、深く傷つくであろう藤森さんを慰めるだろうね」

「君らしい返答だな」

真悟は、僕と同様に、好きな女性の性体験の経歴を問題にしない男だ。

「そうかな？ キミが同じ質問をされたら、ボクと同じ答えを返すだろう？ それに、何より、藤森さんの純潔が汚されたくらいで傷つくほどボクの心は脆くないよ」

「君は強いな」

「キミも昨日までは強かったね」

「皮肉か？」

「ちよつとした仕返しだよ。キミの執拗なバッシングには辟易していたからね。反撃する権利はあると思うよ」

くすくすと笑いながら言う真悟。

「……その程度の仕返しでいいのか？」

「キミの度重なる嫌がらせ行為は、その程度のダメージでしかなく
つたんだよ」

「……その暴言も仕返しか？」

「うん」

「ははは！」

思わず声を上げて笑った。

二年ぶりの笑いだった。

心が軽い。

忘れていた何かを取り戻せた感じがする。

その後しばらくの間、無言で歩いた。

高級住宅街から藤森保奈美の自宅へと下っていく坂道を進む。

そこで僕は足を止めた。

「なあ、真悟」

「何かな、真ちゃん」

真悟も歩くのを止めてこっちを向いた。

「藤森さんと合流する前に聞いておきたいことがあるんだ」

「事件のことです？」

「ああ」

「何なりと質問して」

穏やかに促された。

僕は一度、上下の唇に舌を這わせて潤いを与えた。

「君は、静川家の三人と剣崎貴明を殺害した犯人を特定しているだ
ろう？ 誰だと考えているんだ？」

「その質問に答える為には、先にキミがボクの質問に答えて欲しい」
「僕が？ それは構わないが……。何を知りたいんだ？」

「なぜキミが先週土曜日、静川玲が惨殺された日に、彼女の家を訪
問したのか、だよ」

その質問を聞いても、僕は驚かなかった。想定内だったのだ。

「ああ、そのことか……。確かに、僕が容疑者である以上、犯人を特定する為には訊かざるを得ないことだろう。しかし、少し答えにくい質問ではあるな」

「それでも、キミはキミ自身の潔白を証明する為に答えざるを得ないだろう？」

「君に証明してもらう為に、だな」

「そうだね」

昔と何ら変わらない真悟の無感情な微笑み。

それを見て僕は意を決した。

「静川玲が、詩海高校の音楽室で起こった事件の犯人を知っていると仄めかしたから、それを聞き出す為に訪問したんだ」

「静川さん自身が？ それは面白いね。彼女は犯人グループの主犯格だったのだから、犯人が誰なのかを知っていて当然だよ」

「そうだな。しかし僕は、彼女を嫌ってはいたが疑ってはいなかったんだ」

「そうだね。キミが事件を推理するには、持っている情報があまりに少なすぎた。だけど、なぜ彼女から聞こうと思ったの？ ボクに訊いてくれば、惜しみなく情報を分けてあげたのに」

「それは……。あの時はまだ君のことを解体殺人犯だと思い込んでいて……。藤森さんの心から君を追い出して僕の名を刻むには、君の力を借りずに、事件を君より先に解くしかないと思っていたんだ」
自虐口調で恥を晒す。

笑われても仕方ないと思ったが、真悟はくすりともしなかった。

そうだった。昔からこの男は、必死になって苦しみ藻掻いている人間を手助けしこそすれ、嘲笑ったことはないし、見下したこともないのだ。それを僕は、偽善行為だと罵っていた……。

「短絡的な考えだよ」

「ああ、わかつている。でも、あの時は、そうするしか僕に残された選択肢がないと思い込んでいたんだ」

「恋は人を盲目にする、とは良く言ったものだね」

真悟は刹那の憐れみを瞳に宿した。しかし、すぐに無表情になる。

「キミと静川玲は、昨日言っていたように、本当に無関係なの？」

「それは神に誓って。僕と静川玲が二人きりで会ったのは、先にも後にもたった一度だけ、先週金曜日の夜中だ」

「先週の金曜日と言えば、藤森さんが宮地優に襲われた日だね」

「ああ。あの日、事件後に渦海さんの愛車で君たちと一緒に自宅マンションまで送ってもらった後、夜食を購入する為にコンビニへ向かったんだ。その帰り道で突然、彼女に声を掛けられた」

「夜中に突然？ そんな時間に静川玲は何をしていたのだろうね。」

藤森さんが計画通り宮地優に襲われたかどうかを確認しに来ていたのかな？ それとも、宮地優を回収しに来たのだろうか？ まあ、その辺りの疑問は謎のままになりそうだね」

真悟は冷酷な笑みを刻む。

「それで、その時、静川さんとキミは音楽室で起こった事件について話をしたんだね？」

「ああ。彼女は、犯人を知っていると云った後、藤森さんと真悟を引き離す手伝いをして欲しいと持ちかけてきたんだ。彼女は真悟に懸想していて、僕は藤森さんのことが好きだったから、お互いが同時にアプローチすれば、効率良く相手の心を落とせる、とね」

「唆されたわけだね？」

「ああ……」

愚か者の僕は、真悟と目を合わせることができず、がつくりと項垂れた。

「静川玲と肉体的な接触は一切なかった？」

「ああ。それは断言する」

「そうか。信じよう」

あつさりと頷く真悟。疑念の欠片もない瞳。

僕は、信用されている。昔から、ずっと。

「僕の容疑は晴れるかな？」

「すぐにでも晴らしてあげたいけど、いかんせん全くアリバイのな

「いキミの潔白を証明するのは、犯人を特定するよりも難しい」

「犯人が特定されれば、僕の容疑も晴れるだろう？」

「共犯関係かもしれないと疑われるんだよ。あくまでもキミ自身の潔白を証明する必要がある」

「……僕は天涯孤独の独り身だ。君は僕の言葉を信じてくれたけど、事件当日に静川玲の家に訪問してしまった以上、疑われる材料は山盛りであり、潔白を証明する材料などない。そうだろう？」

「否定できないね」

「否定してくれ、とは言えないな……。しかし、捜査一課の刑事の中には、過去の事件を持ち出して、連続解体殺人の真犯人は僕なのではないか、と言い出す者まで現れたそうだ。こともあろうに、僕が梶浦京香を切り刻んだ、と疑い出したんだ。渦海さんは僕の無実を信じてくれているけど……」

「重要参考人として警察署への出頭を求められる可能性がある？」

「その可能性が高い」

「何とかしなければならぬね」

まるで放課後に教室内のゴミ捨てを引き受けるかのような気楽さで真悟が応じた。

しかし、信頼度は抜群だった。

「では、改めて訊こう。君は今、誰を犯人と見ているんだ？」

「キミを除けば、犯人は宮地優しかない」

「……嫌な答え方をする。つまり僕の容疑が晴れさえすれば、宮地優の犯行が確定すると言うわけか……」

「確定するわけではないけど、ボクが自分の推理を確信できるんだよ」

「結果的には同じ意味だろ」

「否定できないね」

同調する笑い。

澱んでいた心が更に洗い流されていく。

僕たちは再び学校に向かって歩き始めた。

徐々に藤森保奈美の家が視界に入ってくる。

玄関前に立つ彼女自身の姿も見えてきた。

「なあ、真悟」

「何かな、真ちゃん」

「僕は、やり直せるかな？」

「やり直す、という表現は不適切だよ。キミは何も間違っていない。単に感情のまま行動しただけだ」

「それはわかってる。僕が聞きたいのは、君と昔みたいな関係に戻れるかどうかだ」

僕は照れを隠し、若干の不機嫌を装って言った。

「キミが望むのであれば幾らでも」

即答だった。

「ボクの側からキミを拒んだことは一度としてないだろう？」

訊かれた。

その通りだった。

「ありがとう、真悟」

「どういたしまして」

仰々しい一礼をお互いに見せ合う。

昔懐かしいやり取り。

普通のやり取り。

梶浦京香への思いを忘れることは絶対にないけど……だけど、僕は、この世界で生きていける。そう確信した。

【2・藤森保奈美】

四月三十日、水曜日。

放課後の帰り道。

わたしは憂鬱の粒子で形成された不可視の流砂に飲まれ、被虐の海に沈み込んでいた。いや、陰鬱の陥穽にはまり、落ち込んでいるのか……。とにかく上を向いて歩けない心境だった。

昨日行われた浅宮雪乃と氷室康広のお葬式は、苦痛極まりないものだった。まだ世間では自殺説が有力であり、わたしと和泉君は針のむしろに正座させられているも同然で、親族の面々には「自殺に追い込んだ人間がよくもノコノコと参列できたな」という目で睨まれ、居たたまれない気持ちにさせられたものである。氷室康広の家族はまだしも、浅宮雪乃のご両親は錯乱状態にあつたので、お葬式中も周囲を憚らず夫婦喧嘩をするわ、謝罪した和泉君を口汚く罵倒するわ、精神的苦痛に対する慰謝料を払えと喚くわ、木魚を凶器にして彼に暴力を振るおうとするわ、見かねて止めに入った人たちと殴り合いの喧嘩をするわ……。終いには、親類に取り押さえられ、お葬式の会場から連れ出される始末。

その悲劇がまたもや繰り返されようとしている。

今日、剣崎貴明と静川玲のお葬式に参列する予定なのだ。

ああ、本当に気が重い。

もし和泉君が実況見分の立ち会いに時間を取られたままお葬式の時間に間に合わなければ、わたし一人で参列しなければならぬ。弘美は家庭の事情もあって夜中の外出が許されないだろう。渦海さんは捜査で忙しいだろうし、中嶋君や神川君といったクラスメイトを連れて行くわけにもいかない。わたしって思いの外、頼れる友人が少ないんだなあ、と嘆息。いざという時に心の負担を半分肩代わりしてくれる親友に恵まれていない。なんだか病気になる気がする。今すぐ高熱で倒れて病院に運ばれたい。そうすれば、和泉

君も警察のお手伝いなんか放つたらかして、わたしの下に駆けつけてくれるに違いないのだ。

「おねーちゃん、何してんの？」

公園横の歩道をとぼとぼと歩いていたら、背後から声を掛けられた。

顔を確認するまでもなく、我が妹だった。

「真悟さんは一緒じゃないの？」

ちよこちよこと駆け寄ってきて隣に並び、横から顔を覗き込んできた。

「和泉君は警察に協力している真っ最中よ」

何でもない風に言っただけだが、つつけんどんな口調になってしまったようだ。

妹は可笑しそうに鼻から息を吹き、わたしの二の腕を小突いた。

「明日からゴールデンウィークだったのに、お姉ちゃん、もしかしてふられた？」

げんこつ。

「いったーい！　なんで叩くの！　お姉ちゃんの乱暴者っ！」

「……………」

冗談は時と場所を選ぶべきだし、言っただけの良い言葉と悪い言葉があるはずだ。そして、それは、冗談でなければ最悪だし、冗談であっても最低な質問である。もし実際に和泉君との関係が破綻していたら、妹はどんな言葉を用いてフォロースするつもりだったのだろう。お馬鹿な子だから、思いつきを換言したのかもしれない。げんこつだけで済ませた優しい姉に感謝して欲しいものである。

「ふられるも何も、わたしと和泉君はまだ交際していないもの。その質問は的外れね」

「ふーん。まだ付き合ってたんだ？」

妹は疑惑の目でわたしを刺してくる。

小さな苛立ち。

後頭部をひっぱたきたい衝動に駆られたが、公道で乱暴者を自己アピールする蛮勇とは無縁の性格なので、我が家に到着するまでは我慢だ、と心の手綱を引いてストレス発散行為への誘惑を断ち切った。

「えっちなことしてるのに？」

「してません！」

感情抑制装置をフル稼働させているはずなのに、つい叫んでしまった。

妹に相對する時のわたしは、反射的に感情を剥き出してしまう悪い癖があるようだ。口喧嘩などは可愛い方であり、咄嗟に手が出てしまう場合が殆どである。でも、ギスギスした関係ではない。大喧嘩した十分後には笑っておやつを分け合う、という仲だ。

「してたじゃん。この前、お姉ちゃんの部屋でイチヤイチヤしてて急に喧嘩になって、大声上げてたじゃん。えっちなもいって叫んでたじゃん。それで、その後、いい感じに抱き合ってたし……。怪しいなあ」

あの時、覗かれていたらしい……。今更だけど恥ずかしすぎる。それを大きな声で公表され、わたしは羞恥のあまり全身火傷を負った。屈辱で全身が紅潮。周囲に知人の耳がないかを確認。幸い人氣はなかった……。でも、妹の口を塞いで、お尻を蹴飛ばしてやりたい気持ちが増幅されていく。人間には我慢の限界値が設定されていて、それを超える負荷が心を圧迫すると、どんな温厚な紳士淑女であつてもブチ切れるのだから。

今現在のわたしが、まさに限界ギリギリの半切れ状態だった。

「怪しくない！ あれは……。確かに喧嘩してたけど……。言葉の綾で、どっちも悪くなくて……。お互いにちょっとした誤解をしてしまっただけなのよ！」

弁解になつていないのは百も承知しているけど、黙ったまま放置しておく、他愛ない痴話喧嘩を変な風に解釈されてしまい、それが家族の中での事実と認定され、今後一生語り継がれてしまうだろ

う。そんな不安を覚えたので、苦しい言い訳を試みたのだ。

しかし、悲しいかな、お馬鹿な妹に言い訳など通用しない。

姉の苦しい胸の内を察する聡明さが欠片もない。

ほんと、素晴らしい妹を持ったものだ……。

「関係修復してラブラブな恋人同士？」

誤解も行き過ぎると可笑しくなってくる。

可愛いものだ。良い子良い子と頭を撫でてあげたい。

でも、その二秒後に、お尻ペンペンの刑をもつて肅正である。

「違うつて言っているでしょう！」

叫びながらも、ちよつと顔が笑ってしまった。

一分前までは落ち込んでいたけど、今は悪い気分ではない。不安感を払拭できたわけではないにしても、妹との会話が気張らし効果を発揮したようだ。

「ムキになるところが怪しいなあ」

からかいを含んだ言葉も気に障らなかった。

「勝手に怪しんでなさい」

「ありや、開き直っちゃったよ」

妹は華奢な肩を竦めた。

少しの間、黙ったまま歩く。

「お姉ちゃん、大丈夫？ 色々大変だったから、色々辛くて気落ちしちゃってるかもしれないけど、色々暗くならずに元気出してよ」

急に妹が真面目な顔をして、呟くように言った。

その言葉から彼女なりの気遣いを感じた。感受性ゼロの大馬鹿妹ではないようだ。でも、《色々》の使用方法が変である。彼女の通っている中学校では《色々》という言葉の乱用が流行っているのだろうか？

「それ、慰めてくれてるの？」

「まあ、色々一応ね……。妹だしさ。色々と気を遣ってるわけな

んだよーっ」

一転、お茶だけ顔になる妹。

「真悟さんと交際する予定は？」

腰を突っついて訊いてきた。

それは和泉君次第である。

わたしの気持ちは定まっているけど、こちらの一存でどうにかなる問題ではない。

「未定」

わたしは簡潔に答えた。

「お姉ちゃんから告白した？」

「……………」

返答不可能。

できるわけない。

和泉君に告白する勇氣なんて、心のどこを探しても見つからない。弘美のように冗談めかして交際を迫る度胸もない。わたしはそんな軽いキャラじゃない。

「お姉ちゃんて昔から奥手だよね。好きなら好きって言っちゃえばいいじゃん」

あっけらかんと言いつつ妹。

わたしと正反対に、妹は男の子に対して積極的である。時たまクラスメイトの男子を家に連れ帰ってきたりする。けれども、誰か特定の相手と交際している事実はない。

「大きなお世話よ。それよりも、和泉君を名前で呼んでは駄目よ。わかった？」

さっきから気に障っていたのだ。

昔からの知人である渦海さんと神川君の二人以外、和泉君を名前で呼べる人間などいない。そう呼ぶ自分を想像できない。だから、他人が彼を名前で呼ぶことなど許容できないのだ。まして、何の関係もない妹が《真悟さん》などと……到底許せないし、我慢できるものではない。

「え、なんで？」

不思議そうなお馬鹿妹。

本当にお尻を蹴飛ばしてやりたい。

「なんでも！ 駄目なものは駄目なの！」

「お姉ちゃんも名前で呼べばいいじゃん」

気軽に提案された。

「……………」

そうしたいのは山々。

「そんな勇気ない？」

凶星が脳天に直撃して頂垂れるわたし。

妹と違い、わたしは異性との付き合いに特別臆病なのだ。馴れ馴れしく名前で呼んで嫌な顔をされたらどうしよう、と不必要に怯えてしまう。嫌われたくないから、相手側からのアプローチを延々待つしかない。情けない女だなあ、と自己批判……。

自宅前に到着した。

「あれ、お姉ちゃん、どこ行くの？」

家の前を素通りしたわたしを見て、妹が不審げな声を上げた。

「……………」

それを無視して歩き続ける。

「おねーちゃん！」

近所中に響き渡る妹の声。

「真悟さんの家に行くのー？ 連休中、ずーっとお泊まりするつもりー？ それとも、ラブラブな同棲生活で帰宅拒否なのかなあ？」

「そんなわけないでしょう！」

叫びざま、わたしは羞恥心の加圧により、全力疾走でその場から逃げ出した。

あの子、また真悟さんて呼んだ……。

聞く耳を持っていないのか、姉の注意など聞き入れられないのか、何にしてもお馬鹿な妹は後でとっちめてやらねばならないだろう。

お尻百叩きの刑だ。

そう心に誓い、全速力で坂を駆け上がった。

何も考えずに走っていたら、和泉君の自宅マンション前まで来てしまった。

心臓破りの坂道を我知らず登り切ってしまったらしい。だから、息も切れる。

いったい、何をやっているのやら……。

無意味な運動だ。

忙しない呼吸音を自分の耳で聞くのは、体育のマラソンの時だけで十分である。妹はきつと、姉が変になったと思い、帰宅しざま母親に報告するだろう。夕食時、家族みんなの笑い者になる可能性大だった。

家に帰ろう。

わたしは踵を返し、来た道に戻ろうとした。

すると、見覚えのある外国産高級車が駅側から走ってきた。

【3・藤森保奈美】

あれ？

あの車、渦海さんの……。

咄嗟に、わたしは発見されないように身を翻し、こそこそと建物の陰に身を隠した。

マンション前で車が停止し、助手席のドアが開いて和泉君が姿を現した。どうやら警察のお手伝いを終え、渦海さんに家まで送ってもらったようだ。そして、渦海さんも運転席から降りてきた。

そのまま二人は歩道で向かい合った。

以前、こんな光景を見た気が……。

「剣崎貴明と静川家の事件は、君に協力を要請しても応じてもらえないのかしら？」

渦海さんが未練を込めた声で訊いた。

和泉君は僅かに肩を竦めたようだ。

「これ以上の協力は無意味です」

短く答えておいて、和泉君は唐突に渦海さんの手を掴んだ。

「真悟君？」

「剣崎貴明を首吊り死させ、静川玲とその母と妹を惨殺した犯人は同一人物です。そして、その容疑者筆頭に挙げられるのが宮地優であることに間違いはありません。彼以外の人間で、明確な犯行動機を持ち、事件当日のアリバイがなく、あのトリックを考え出せる知能の持ち主は、ボクの知る限り、たった一人だけです」

「一人いるの？」

渦海さんは握られている手に、もう片方の手を重ねて問うた。

宮地優は確かに頭の良い生徒だったらしいから、あの密室トリックを考えつくかもしれない。でも、それ以外で犯行可能な人物となると……誰だろう。和泉君と面識のある人間を虱潰しにするが、て

んで思いつかなかった。

「誰なの？ 教えなさい、真悟君！」

若干の焦燥と憤懣を美貌に宿らせ、渦海さんが鋭く命じた。

和泉君はにこつと笑顔を作った。しかし、目が全く笑っていないかった。完全な無感情。わたしが初めて見る表情であり、なぜか恐怖を誘う笑みだった。

「諏訪原沙理、露房愛美、梶浦京香、遊佐麻穂、鷹峰由羽、鷹峰つばさ、浅宮雪乃、静川玲」

和泉君が女の子の名前を八つ並べた。

先の六人は聞いたことのない名前だけど、浅宮雪乃と静川玲は知っている。

渦海さんはひゅつと音を立てて息を飲んだ。

「彼女たちに共通する点は何でしょうか？」

「君と肉体関係を持った女の子の名前ね？」

「そうです」

肉体関係を持った女の子？

転校以前に六人も？

和泉君が過去に付き合っていた恋人たち？

「偽装自殺を強いられた浅宮雪乃、死地から奇跡的生還を果たした鷹峰つばさ、その二名を除く全員に共通する点があるでしょう？」

彼は怖いくらい優しい口調で言った。

渦海さんの体がびくつと震えた。

「バラバラ殺人事件の犠牲者ね？」

「そうです。死体発見時、六名全員が綺麗に解体されていたのです」

「……………」

口を半開きにしたまま声を発することができない渦海さん。

「その全ての事件に関わっている人間は誰でしょうか？」

「真悟君、君だわ……………」

「その通りです。結果はどうであれ、ボクだけが全ての事件で容疑者に挙げられた唯一の人間なのです。その点を考慮して事件を鑑み

ると、似ているように感じませんか？」

彼は出来の悪い生徒を指導する教師のように、一言一言を区切つて言った。

「似ていないわよ！」

渦海さんは閑静な住宅地の雰囲気を台無しにするように、大声で怒鳴った。声にヒスメリックな響きが混じっている。普段が冷静なだけに、怒ると物凄く怖かった。

「君が関わった解体殺人事件は全て解決しているでしょう！ 彼女たちをバラバラに解体した殺人鬼は、全員逮捕されているのよ！」

「そうですね。しかし、それは全員、ボクの推理によって特定された人物ですよ」

「！」

渦海さんは愕然として目を見開いた。

「真悟君、何を言っているの？ 質の悪い冗談は止めなさい！ 全ての事件において君の推理は理に適っていたわ。どんな難解な事件でも、一分の隙もない、反論の余地ない、完璧な結論を導き出してくれたわ。そうでしょう？ 誰もが君の並外れた推理力を称えたわ。それを……」

感情の乱れによって語尾を震わせ、弱々しく反論する渦海警部。

彼は皮肉を宿すように唇を歪曲させた。

「その全てが単なる辻褄合わせであつたかもしれません。自分にとって都合の良い結果へ導く為に、もっともらしい戯言を並べ、信頼してくれる全ての人間を欺き、警視庁捜査一課を手玉に取つたとも考えられます」

彼は、意地悪な笑顔を口許に刻む。

「何を言いたいの……君は？」

渦海さんの硬い声。

信頼感の中に芽生えた不信と不安。強い絆に生じた小さなヒビ。彼女の想いが空気を伝って響いてくるようだ。

しかし、本当に和泉君は何を言いたいのだろう。彼の台詞を聞い

ていると、まるで自分が静川玲を殺した犯人だと告白しているみたいだ。それはつまり、剣崎貴明の殺害も自供していることになる……。

「諏訪原沙理のバラバラ死体発見時から、遊佐麻穂の家族全員が犠牲となった猟奇殺人事件の解決を見るまで、否、解決後もボクのことを殺人鬼と疑っていたのは貴女と神川君だけだったのですよ。忘れたのですか？」

「それは……事件が解決した結果、恋人を惨殺された点を考慮しなければ、常に君に敵対する者や横恋慕する女性が排除されて、君だけが利益を得ていたから……」

「恋人を殺害されながらも事件の解決を図ろうとする健気で小生意気な少年探偵……を演じる殺人鬼。貴女と神川君はそんな風にボクを見ていた。父が死ぬまで、ですが」

「……………」

渦海さんは棒立ちになったままの状態で微動だにせず、無言で和泉君を睨み付ける。

「今回の事件も、全てにおいてボクが関与し、影響を及ぼしていたと仮定すれば、綺麗に辻褄が合います。その仮説を聞きますか？」

「ええ……」

彼は、女警部との間合いを狭め、体を密着させて、耳に唇を近づけた。

凝固する空間。

その仮説、わたしにも聞かせて！ そう叫んで二人の間に飛び出したい衝動に駆られるが、唇を噛んで堪えた。彼が殺人犯だなんて信じられない。信じたくない。だから、胸の内に沸き出した疑惑を払拭したい。でも、二人には近づけなかった。バリアのような障壁が目の前にそびえ立っている感じがするのだ。

強烈な疎外感。

信じたい。信じさせて欲しい。

「真悟君？ 黙ったままでは……」

渦海さんは自分より頭一つ高い和泉君を見上げ、掠れ声を出した。
その刹那。

ちゅっ。

渦海さんの頬が音を立てた。

「え？」

きよんとする女警部。

和泉君は可笑しそうに目尻を和ませ、流れるような動作で身を引き、渦海さんとの距離を保った。

「冗談ですよ、恭子さん。ボクが静川玲と出会ったのは、浅宮雪乃が殺害された後ですからね。彼女を誑かして危険因子を排除する計画など立てられるわけがありません。それに、剣崎貴明とは病院で会話しただけの関係です。彼が藤森さんに邪な感情をいだいていることを知ったのも、病院での一幕を経てです。何よりも、事件当日は、一日中、二日酔いでベッドから離れられなかった藤森さんの看病をしていました。それゆえ、過去の事件と同様、今回もボクは、純粹に事件に巻き込まれただけの存在なのです。ご安心下さい」
そう言って、和泉君はいつもと変わらぬ穏やかな微笑みを浮かべた。

「本当に君という子は……。冗談にも程があるわよ……」

女警部は震え声で怒りを表現したけど、完全な憤怒にはなり得ず、泣き笑いのような顔を作った。

でも、本気で怒っているのだろう。その気持ちは痛いほど理解できる。わたしも今、質の悪い冗談によってそこはかたない怒りを感じているのだから。

でも、冗談で良かった……。

和泉君が殺人鬼なんて、笑えない冗談である。即刻ゴミ箱にポイするしかない悪質の戯言だ。彼が犯人でないことは、事件発生時に一番身近にいたわたし自身が一番よく知っている。二日酔いでうんちん唸っている間、断続的に休眠している間、ずっと手を握ってしてくれたのだ。絶対に彼は犯人じゃない。一瞬でも疑念を覚えた自

分が情けない。

「また平手打ちをしますか？」

和泉君は、渦海さんの手を取り、自分の頬に当てがった。
また？

心の襞に《また》というフレーズが引っ掛かった。それはつまり、過去にも渦海さんにビンタされた経験があるという意味だ。それに、和泉君自身が、わたし以外の女の人にビンタされた、と言っていた。その人が渦海さんだったわけだ。

「反撃はしないと約束します」

「……………」

渦海さんは勢い良く手を振り上げた。

しかし、その手は、力なく降ろされた。

「一番辛い思いをしているのは、恋人を殺害されているのに、いつも馬鹿な刑事によって容疑者に仕立て上げられてしまう真悟君だもの。殴れないわよ……………」

弱々しい声。

「それでは、最低の冗談でからかったボクを許して下さいますか？」
珍しくも、和泉君は子供っぽい笑顔を浮かべて訊いた。

「仕方ないわ」

渦海さんは溜め息に近い声を発した。

邪気のない悪戯っぽい笑顔を見せられては、無条件で許さざるを得なかったようだ。

「それでは話を戻しましょう」

「戻す？」

首を傾げる渦海さん。

「恭子さん、もう一人いるでしょう？ 常にボクと共に事件に関わっているが、一度として容疑者リストに名を連ねず、警視庁捜査一課を無能者の集団と嘲り罵りながら捜査に口を出していた人物が」
和泉君が口調を改めて問うた。

わたしにはわからないが、渦海さんは察したらしい。

「……神川君のことを言っているの？」

「はい。彼は、全てのバラバラ事件に関わった人間、という括りで挙げられる人間の中で、現在最もアリバイが不確かな立場なのです」
和泉君の無感情な声。

神川君が静川玲の家のドアに指紋を残したから、一番疑わしい？
でも、全てのバラバラ事件って？ 全てって……どの事件のこと？
もしかして、数年前から断続的に発生している模倣殺人事件のことを言ってる？ その全てに和泉君と神川君が巻き込まれていた、って言うの？ そして、その真犯人が神川君？

「真悟君、君は、神川真治が過去数十件起こっているバラバラ殺人事件の犯人だと言っているの？」

渦海さんは困惑を表情にして確かめるように訊いた。

彼は簡単に頷いた。

「はい」

「でも、あれらの事件の犯人は、その都度に逮捕されているわ。そして、その全員とも、君が推理した犯人なのよ？」

「はい。それを承知して言っています」

「君が推理を誤ったと？」

「いいえ。逮捕された人たちは、確かに殺人を犯したのです。それは確実ですよ。彼らは凶悪な殺人犯です。しかし、ボクは、バラバラ殺人だけは全て神川真治の犯行だったのかもしれない、と言っているのです。自分の身近な所で殺人事件が発生する度に、事件に紛れるようにして解体殺人を起こし、その罪を肩代わりさせてきたのですよ」

「……コピーキャットではないと？」

「はい。全犠牲者の状態が酷似している点から、そう考えた方がしっくりきます」

「……神川君には、バラバラ殺人を犯すような犯行動機がないでしょうっ？」

渦海さんは疲れを感じているかのように、肩で大きく呼吸をしている。

和泉君の顔が完全な無表情になった。

「動機があります。恋人を奪われた復讐心から、ですよ。ボクが容疑者に挙げられて苦しみ藻掻く姿を間近で観賞する為だけに起こされたのかもしれませんが。そう考えれば、彼がボクと同じ学校に転校してきた理由も説明が付くでしょう？」

「元恋人である梶浦京香をも、彼がバラバラに解体したと言いたいのか？」

「日本には、可愛さ余って憎さ百倍、という言葉があります。最終的に自分ではなく、自分の親友を選んだ梶浦京香をどうしても許せなかったのではないでしょうか」

「……梶浦京香以後の事件に関しては、そう言えるかもしれないわ。でも、諏訪原沙理と露房愛美の二件に関しては、動機が一致しないじゃないの。あの二人は、君と梶浦さんが肉体的関係を持つずっと以前に殺害されているのよ？」

「可愛い女の子を綺麗に解体する為に、という理由ではいけませんか？」

「え？」

石と化したかのように硬直する渦海さん。

「見目麗しい人間をバラバラに刻みたいから殺人を犯したのではないか、と思うのです。非常に純粋な意志でしょう？　そして、梶浦京香は、恋人の選択を誤った愚者として、美少女を解体する行為に酔いしれる為の生け贄として、更にその結果としてボクに心的苦痛を与える犠牲者として、殺害される三つの要素を兼ね備えていました」

「そ、そんな理由で……許されないわよ」

「解体殺人事件の犯人は、他者の許しなど欲していませんよね。ただ単純に、切り刻んで快楽を得ている。それだけです」

「……今回の静川玲も、切り刻みたいから一家惨殺事件を起こした

と？」

「はい。しかし、今回の事件に関しては、これまでとは多少事情が異なります」

「どう異なっているの？」

「今回の事件では、ボクが容疑者の筆頭に挙げられていません」

「最も疑わしいのは宮地優だもの」

「そうですね」

和泉君は優しい笑みを浮かべた。

「恭子さん、なぜ静川玲は無惨に切り刻まれたと思いますか？」

唐突に問題が出された。

渦海さんは一瞬びくつと肩を揺すったが、すぐに答えた。

「可愛い女の子を綺麗に切り刻んで快感を得る為でしょう？　今さつき君がそう言ったじゃないの」

「違いますよ、恭子さん。ボクはこうも言ったでしょう？　今回は多少事情が異なる、と。静川玲が惨殺された理由は、藤森保奈美を宮地優に襲わせたからです。同じ理由で、剣崎貴明も殺害されました」

「え？　それはどういうこと？」

「浅宮雪乃と氷室康広が偽装自殺させられた事件から、静川玲とその家族が惨殺された事件まで、全てが神川真治のプロデュースによるものだと仮定すれば、一連の事件は綺麗に説明できるのです」

「……説明して頂戴」

「お望みのままに」

和泉君は馬鹿丁寧に一礼し、説明を始めた。

「神川真治は転校初日に、藤森保奈美を見て一目惚れました。そして、後日転校してくるボクより先に彼女の心を手に入れようと思いました。彼は転校初日にも関わらず、ノートを書かせて欲しいという拒否不可能な理由を提示し、彼女の自宅を訪問したのです。その日、二人の間に何があったのかはわかりません。何もなかったのか

もしれないし、キスくらいしたのかもしれない。しかし彼は、本当に好きな女の子に対しては思いきった行動に出られない性格なので、その日の内に肉体関係を結ぶチャンス逃してしまいました。その点はボクも同じですが……」

和泉君は自嘲気味に笑い、説明を続ける。

「翌日、ボクが転校して来ました。同じクラスになったのは、彼が何らかの手段を講じた結果でしょう。そして彼と同様、ボクも藤森保奈美に強い興味をいただきました。いえ、その数日前にボクと彼女は出会っていたので、順番から言えば、彼の方が後に彼女と出会ったのです。つまり、彼女の心には既にボクの名前が刻まれていたのです。その点に相当なショックを受けたのではないのでしょうか。彼は、ことある毎に彼女の前でボクを色魔、鬼畜と罵り、ボクたちの心を引き離そうとしました。その蔑称はあながち間違っていないのかもしれないが……」

「真悟君は色魔でも鬼畜でもないわよ。君は、女の子の側から望まれない限り肉体関係を結ぼうとしないもの」

すかさず弁護する渦海さん。

わたしも同意見である。

「ありがとうございます」

和泉君は深々と一礼し、説明を続ける。

「彼の悪罵は、結果としてボクと藤森保奈美の関係を深めるエールにしかありませんでした。しかし、同日の放課後、宮地優が浅宮雪乃を襲うという事件が起きたことで状況は一変します。ボクが浅宮雪乃の送迎を行うことになったのです。その過程でボクと浅宮さんが親密な関係になりつつあると知った彼は、このチャンスを逃すわけにはいかない、と思ったのでしょね」

「チャンス？」

「ボクを苦しませるチャンスです。彼は藤森保奈美に好意をいっていたので、彼女を切り刻むわけにはいかなかったのですよ。その代替者として浅宮雪乃が現れたのだから、彼が即座に食いついて当

然です。しかし、転校してきて間もない時期に浅宮雪乃をバラバラに切り刻んで殺害してしまうと、解体殺人事件が連続して発生した街から転校してきた自分たちが疑われてしまいます。ゆえに、彼は協力者を募って一計を案じました」

「音楽室で起こった偽装自殺事件ね？」

「はい。あれは、静川玲と剣崎貴明の主導で行われたのではなく、神川真治の書いたシナリオに乗せられた五名と彼自身が行った事件なのですよ」

「神川君は、あの事件に全く関わっていなかったのでしょうか？」

「いえ。関わっていたと思います。その点はボクの推理ミスですよ。事件当日、神川真治は、宮地優を取り押さえるべく事件現場の校舎六階から一階へ移動したように思われていますが、実際には六階に留まっていたのだと思います。その間、宮地優は一階のどこかに身を隠していたのでしょうか」

「宮地優も協力者だったと言うの？」

「はい。その時の彼は、まだ正気を保っていたでしょうから、浅宮雪乃の名前を出せば意のままに操ることが可能です。およそ、ボクにふられた直後の彼女なら簡単に口説き落とすことができると思われたのでしょうか」

「なるほど」

「神川真治は、速やかに氷室康広と浅宮雪乃を殺害しておいて一階へと駆け下り、宮地優と合流して、彼の耳に《浅宮雪乃が本当に首吊り自殺してしまった》と囁いたのだと思います。その結果、彼は錯乱して暴れ出し、神川真治は近くにいた中嶋剛志と協力して彼を取り押さえました」

「神川君が、自らの手で浅宮雪乃と氷室康広を殺害したと言うの？」

「はい。先日の推理では、剣崎貴明が殺人を犯し、静川玲がアリバイ作りに協力したと言いましたが、全て訂正させて下さい。実行犯は神川真治です。そして、音楽室から準備室へ通じるドアの鍵を解除したのが剣崎貴明だったのですよ。万が一、笹倉先生に見咎めら

れた時、言い訳が利くのは教師だけです」

「……確かに、理に適った仮説だけど……」

渦海さんは信じたくない様子だ。

わたしも信じたくない。神川君が、ただ単に和泉君を苦しめる為だけに浅宮部長を殺したなんて……。

和泉君は淡々と説明を続けていく。

「そこまでは神川真治の思惑通りに運んでいたのですが、彼が思いきって藤森保奈美にアプローチするより早く、静川玲と剣崎貴明が思わぬ行動に出た為に彼の計画は全て破綻してしまいました」

「宮地優に藤森さんを襲わせたことね？」

「はい。静川玲と剣崎貴明が自分たちの不埒な目的を達する為に、神川真治の意向を無視する形で暴拳に及んだのです。もし事件直後にボクが病院を訪れなければ、彼らの計画通り、藤森さんは強引に剣崎貴明の自宅へ連れ帰られていたでしょうね。そして、その結果を受けて、静川玲がボクに積極的なアプローチをかける手はずになっていたのでしょうか。しかし、そうはなりませんでした」

「藤森さんは君の家に泊まり込んでしまったもののね」

「はい。その結果、全ての計画を台無しにされた神川真治の怒りの矛先は、当然と言えば当然ですが、静川玲と剣崎貴明へと向きました。特に静川玲は、彼が切り刻んで楽しむ程度には見目麗しい美少女です。怒りを発散させると同時に、歪んだ欲求も発散させることができるので、全ての罪を宮地優に被せることができると踏んだ彼は二人の殺害を躊躇わなかったと思います。これがボクの立てた新たな仮説ですよ」

「それは、どれくらい信憑性のある仮説なのかしら？ 場合によっては、君の携わった全ての事件を再捜査する必要が出てくるわ」

「矛盾のない仮説が成り立つ程度には。しかし、過去のバラバラ事件を全て再検証するのは非常に困難でしょうね。何しろ、物的証拠が殆どなく、事件に関わっていて尚かつ生き残っている重要参考人が非常に少ない。神川真治の犯行を立証できるのは、今回の事件だ

けだと思います」

「立証できるの？」

「物的証拠さえ発見できれば」

「……………」

渦海さんは頭痛を覚えたのか、こめかみに指を当てて強く揉んだ。

「神川君に話を聞く必要があるわね」

「その際には、ボクも同席させて下さい」

和泉君は無感情な声で申し出た。

【4・神川真治】

帰宅してすぐに渦海恭子から連絡が入り、事件について話を聞きたいから署まで来て欲しいと言われた。

静川玲の自宅に残されていた指紋について詳しく説明させられるのだろう。素直に受け容れるよう真悟からアドバイスされているので、極めて不本意ではあるが、拒絶しないでおこうと思っている。

しかし、いちいち刑事が迎えに来るといのはどういうことだろう。まるで犯罪者扱いだ。容疑者には違いないだろうが、宮地優を凌ぐほどの容疑をかけられる覚えはない。僕は単に、静川玲の自宅のドアに指紋を残してしまったただけなのだ。その他に疑われる要素など皆無だろうに……。

だけど、どれだけ疑われようとも、真悟が僕の無実を綺麗に証明してくれるだろう。その点の心配は全くしていない。渦海恭子も僕の潔白を信じてくれるに違いない。ただ厄介なのは、頭の固い所轄の刑事と、過去の解体殺人事件を担当した捜査一課の刑事である。この両陣営の口出しを阻むには、僕が犯人ではない明確な物的証拠の発見もしくはアリバイを証明してくれる人物が登場する必要があるのだ……。

にわかに暗雲が立ちこめる未来。

今まで一度として容疑者に名を連ねたことがないだけに、この不安感は格別だ。もし何の弁解も許されぬままに手錠を掛けられたらどうしよう、とさえ思ってしまったている。そのような暴挙に及ぶほど日本の警察は腐っていないだろうか……。

トントン。

不意に玄関のドアがノックされた。

刑事が迎えに来たのだろう。

「はい」

精神的な圧迫感から居留守を使用したい衝動に襲われたが、逃げ隠れしても自分の利益になる要素はないので、大人しく返事をしてドアの鍵を解除した。

ドアを半分ほど開く。

無人の通路。

刑事どころか訪問者の姿がない。

誰もいない？ 悪戯か？ 俗に言うピンポンダッシュ？ いや、この場合はノックダッシュか？ お隣さんの少年がふざけたのか？ 通路に半身を出して左右を確認しようと思い、ドアを全開した。だが、そうしようとして、反対に押し返された。いや、押し返されたというレベルの強さではなく、ドア越しに突き飛ばされるくらいの衝撃を受けた。

何事か、と思う間もなく無様に横転し、同時に目の前で音高くドアが閉まった。

しかし、次の瞬間、ドアが独りでに開いた。

家主を手荒に驚かせる新手の悪戯か？ 強襲型ピンポンダッシュ？ まさか手の込んだ強盗？ 警視庁捜査一課の刑事が暴挙に出た？

下らない推考が頭に浮かぶ。

だが、そのどれでもなかった。

いや、ある意味、最後の考えが一番正解に近かった。

なぜなら、開いたドアの向こうには見覚えのある刑事が立っていたのだ。梶浦京香が惨殺された事件の捜査員でもあった警視庁捜査一課の刑事だ。だけど……。だけど、死んでいた。否、殺されていた。目を見開き、口から血を滴らせ、背広の下シャツが真っ赤になるくらい滅多刺しにされ、胸の中央から刃物の柄を生やした状態で、立って死んでいた。

僕を警察署に連行してきた刑事が、僕の家の前で死んでいる？

偶然、僕の家の前で刺し殺された？ 夢を見ているのか？ 最悪の状況が生みだした悪夢か？

いや、現実だ。

強烈な血の匂いが嗅覚を……血塗れのリビングデッドが視覚を刺激してくる。

しかし、今はそんな思考を働かせている場合ではなかった。

死体が飛びかかってきたのだ。

冗談ではなく、本当に、玄関の内側で尻餅をついていた僕に、私服刑事の死体が抱きつこうとするかのように飛びかかってきたのだ。咄嗟に押し退けた。

刑事の胸元を両手で強く押した為、派手に血が飛び散り、左右の手だけでなく顔や服にも血が付着した。まだ血は温かった。

つまりこれは……。

この刑事が突然自殺願望に襲われて自分の体を滅多刺しにしたのではない限り、僕に刑事殺しの罪を着せようとする何者かの仕業だ。今の僕の置かれている状況を見て、警察署へと連行しにきた刑事を思い余って刺し殺してしまった真犯人、と思わない人間は少ないだろう。もし、今、誰かがドアを開けたら、僕は確実に一連の事件の真犯人にされてしまう。刑事の胸に刺さっている包丁らしき凶器に触れていないのがせめてもの救いだ……。いや、僕が気付いていないだけで、押し退けた際に無意識に包丁の柄を掴んでしまったかもしれない。掴んでいないにしても、触れてしまった可能性は小さい。もしも指紋が付いていたら……。

だが、どうする？ 直ちに犯人を追うか？ いや、死体をここに残して家を出るわけにはいかない。新たな刑事が派遣されてきた時に、完全に言い訳できない状況に陥ってしまう。

渦海恭子に助けを求めるにしても、この状況に至った経緯をどう説明する？ 正直に話して信じてもらえるだろうか？

いや、無理だろう。

何者かが僕の家の玄関の外で警視庁捜査一課の刑事を刺殺し、ドアをノックしておいて、僕がドアを開く瞬間を狙って押し返し、突き飛ばしておいて、刑事の死体を僕目がけて投げ込んだ、と説明して誰が信じる？

僕の置かれていた状況と今現在置かれている状況を鑑みて導き出せる答えは一つだ。

ならば、この死体をどうにかして処分し、新たに派遣されてくる刑事に対して知らぬ存ぜぬを通すか？

どう考えても無理だろう。

とにかく今は、体に飛散した血を洗い落とし、新しい服に着替えることが先決だ。そして、どうにかして真悟と連絡を取り、この最悪な状況からの脱出方法を教授してもらうしか道はないだろう。彼の助けを借りることが、僕に残された唯一正解の選択肢なのだから。

僕は急いで服を脱ぎ、浴室で簡単に身を清め、新しい服に袖を通して、汚れた服を黒いビニール袋に放り込んだ。本心としては死体を家の外へ運び出したいが、それをするとは完全に犯罪者の仲間入りをしてしまうので、最悪の展開を考慮して、包丁で刺された刑事を自宅で紹介していた……という体を装うことにした。

まずは警察に連絡を……いや、その前に救急車を呼ぶべきだろう。僕は電話に飛びついて受話器を驚掴みにし、119番を押した。

「はい、こちら――」

オペレーターらしき女性の声が聞こえると同時に。

ピンポーン。

今度は、普通に玄関のチャイムが鳴った。

もう新たな刑事が派遣されてきた？

「くっ、早い……」

混乱する脳内を整理し、速やかな応対を試みるが、この最悪的狀況を打開する良案は浮かばない。

ピンポーン。

二度目のチャイム。

コンコン。

同時にノックもされた。

「……………」

万事休すか？ 僕はそのまま静川玲を惨殺した犯人にされてしま
うのか？

諦観が全身からあらゆる力を削ぎ落としてゆく。

もう成り行きに任せるしかないか……。そう思いかけた時、僕の
耳に神の声が聞こえた。

「真ちゃん、いないのかい？」

真悟の声だった。

まさに天の助け。

コンコン。

「真ちゃん？ …… おかしいな。自宅で大人しくしているようにア
ドバイスしておいたのに……」

独り言のような声。

彼に帰られては困る。

僕は慌ててドアを開けた。

「真悟！」

「やあ、真ちゃん」

「こんにちは、神川君」

和泉真悟の隣に、今ここにいてはならない人物が立っていた。

警視庁捜査一課の渦海恭子だった。

二人の視線は当然のように、玄関口に横たわっている血塗れの刑
事へと向けられた。

「！」

愕然とした表情を浮かべる渦海警部。

でも、真悟は……。

「残念だよ、真ちゃん」

和泉真悟は、僕の知る中で最も優しい、しかし何の感情も込めら
れていない瞳を宿した、冷酷な微笑み顔を浮かべた。まるで僕を突
き放すように。僕との縁を断絶するように。一切の問答を拒絶する
ように。真犯人の烙印を僕に捺すように。

「神川君、君を……逮捕します」

完全な事務的口調で告げられた。

この瞬間、光ある未来へと結びつく選択肢は全て失われた。
残された選択肢は……。

「神川君、両手を出しなさい」

「……………」

無実なのに手錠を掛けられる？

なぜだ？

「恭子さん、神川君は悪足掻きをするような愚か者ではありませんので、まずは応援の刑事さんと呼んで下さい。そして、物的証拠品の鑑定を優先させて下さい」

「わかったわ」

凶悪犯罪者に仕立て上げられた僕を前にして、ごく普通に会話を交わす二人。目線を合わせる男女。それはすなわち、悪足掻きをしたい犯罪者に行動の自由を与える愚行である。

僕の目は、刺殺され倒れている刑事へと向けられた。なぜなら、そこには逃走に利用できる凶器が放置されているからだ。

刑事の胸に突き刺さったままの包丁。

今現在、僕が選り得る最良の選択肢は、凶器を装備し、二人を威嚇して逃走する……。いや、二人とも刺殺して逃走する。それしか選べる道はない。

僕は、刑事の死体に覆い被さるようにして、包丁を抜き取ろうとした。

「あ、神川君、何をしているの！」

遅まきながら僕の自爆的暴挙を察して駄目警部が怒鳴った。そして、取り押さえようと掴みかかってきた。

伸びてくる渦海警部の手を振り払って、死体の胸から生えている包丁の柄に手を掛け、引っこ抜こうと力を加えるが、血で滑って上手く抜けない。

もう本当に駄目なのか？

そう思った時。

「恭子さん、あの刑事さんは拳銃を所持しているのではありませんか？」

そんな真悟の声が僕の鼓膜を震わせた。

同時に僕の心をも奮わせた。

真悟は暗に、刑事の死体から拳銃を奪い渦海警部を射殺して逃げる、と忠告しているのだ。きっと僕が逃走している間に、彼が《真犯人》を発見して、一連の事件と一緒に女警部殺しの罪も《暴いて》くれるに違いない。

真悟とは親友だから。

真悟、真ちゃん、と呼び合う仲だから。

助け合い補い合う仲だから。

窮地から僕をすくい上げてくれる。光ある未来への扉を開いてくれる。

僕は……捕まるはずがない。

全力で拳銃を奪取して自由を確保する！

「神川君、思い留まりなさい！」

女警部のヒステリックな叫び。

そんな言葉に従うわけがない。そんな声音に従わされるわけもない。僕が生きねば、今回の解体事件も真犯人が捕まらないまま、何もかもが有耶無耶にされてしまうだろう。下手をすると、諏訪原沙理から静川玲までの解体殺人事件の罪を、僕が被らされる可能性もある。いや、この状況では、確実に被らされるだろう。だから、僕は、渦海恭子を射殺して、真悟に後事を託して、身を隠す。

刑事の死体に覆い被さり、背広の内側に手をつ込む。

よし！

真悟のアドバイスは的確だ。

僕は、刑事の死体から拳銃を抜き取り、振り向きざまに銃口を渦海恭子へ向け、一瞬も躊躇せずに引き金を引いた。

パンパン。

乾いた銃声が二度、鼓膜を激しく震わせる。

一発目は空砲である可能性が高いので、念の為に二発発射させたのだ。

勝った！

僕は正しい選択肢を選んだ！

そう思った次の瞬間、渦海恭子が拳銃を抜き放って、銃口をこちらに向けた。

「銃を降ろしなさい、神川君！」

馬鹿な……。この女、なぜ死んでいない？ 真正面から銃撃したのに、銃弾が体のどこにも命中しなかった？
いや、そうではなかった。

僕の撃ち放った銃弾は、確実に渦海恭子の顔面目がけて飛んでいったのだ。

それに間違いはない。

ただ、彼女の顔に命中する寸前、その弾丸が弾かれただけだった。超高速の弾丸を弾いたのは……真悟だ。そんな超人的芸当ができるのは、ごく普通の人間でしかない渦海恭子ではなく、僕が鬼畜と蔑んできた五人のみである。そして、その五人の筆頭が和泉真悟だった。

真悟の左手には、見覚えのある十字架型のペーパーナイフ。

彼の母親の形見。

それが僕の未来を断った。

いや……それ以前に、なぜ真悟は僕の逃走を邪魔したのだろうか？
親友なのに。

名前で呼び合う仲なのに。

どうして僕は銃なんかを発砲している？

四角四面の優等生である僕が……なぜ？

疑問と疑惑が混乱と困惑を生じさせた。

「真悟……なぜだ？」

「ボクは常にキミの味方だ。しかし、キミと恭子さんを天秤にかけた場合、傾く側は後者だよ。恭子さんはボクにとって家族のような

存在だからね。二人が同時に拳銃を発砲したら、ボクは迷わず恭子さんを守る。それがわからなかったのかな？　きつと、わからなかったのだろうね。キミは一番身近にしながら、最後までボクを理解することができなかったようだ。残念だよ、真ちゃん」

「真悟……」

女警部より僕の方が存在の価値が劣る？

「キミの無実を証明してあげたかったんだけど、刑事さんから拳銃を奪った挙げ句に発砲してしまつては、もうボクの手には負えない。キミ自身が犯罪者の汚名を享受することにやぶさかでないのなら、自分の選んだ道を信じて突き進んでゆけばいい」

「真悟……」

全ての選択肢が失われた。完全な手詰まり。袋小路。しかし、ここでこうして立ち尽くしているわけにはいかなかった。もはや突き進むしか道はない。三発目を放つべく引き金を引く。

「止めなさい、神川君！」

「煩い！　そこをどけっ！」

パン。

パン。

二つの銃声が同時に鳴った。

僕の目の前で。

だから、避けることはできなかった。

着弾の衝撃により体が後方へと飛ばされ、頭から壁にぶつかった。赤く染まる視界。

「きゅ、救急車を呼ばなくては！」

渦海恭子の狼狽した声。

遠のく足音。

そして、静かな声が聞こえてきた。

「真ちゃん、まだ声は聞こえているだろう？　キミの意識が残されているうちに言っておこう。キミの思い込みはあながち間違つてはいなかったよ。諏訪原沙理から静川玲まで、奇跡的生還を果たした

鷹峰つばさと首吊り自殺を強いられた浅宮雪乃を除いて、彼女たちを切り刻んだのはボクだ。ボクはキミが思っていた通りの鬼畜男で、人間を綺麗に切り刻んで快楽を得る殺人鬼なんだよ。勿論、梶浦京香を解体したのもボクだ。当然、そこに転がっている刑事さんもね」

「！」
「そんな……」

僕は間違っていないかったのだ……。

それなのに、そんな男を信じて……。

親友だと思い込んで……。

涙が視界を曇らせる。

「不本意かもしれないが、ボクが犯した全ての罪をキミが背負って逝くんだ。そしてボクは、藤森保奈美のいるこの街で《人間》として生きていく。このような結末を迎えることができたのは、全てキミのお陰だ。感謝しているよ。ありがとう、真ちゃん。そして、さようなら」

「！」

ふざけるな！

撃ち殺してやる！

そう思ったが、身体が自由にならない。

「真悟君、もうすぐ救急車が――」

遠くから仄かに聞こえてくる渦海恭子の声。

目に見えるのは、殺人鬼の微笑み。

藤森保奈美の心を得て勝利を得た者。

敗者は、事件の犠牲者と僕。

結局、利を貪ったのは真悟だけで……。

僕は何もできずに……。

道化のように踊らされて……。

不意に、周囲の音がぶつと途絶えた。
すぐに視界も闇と化した。

でも、死は怖くない。
彼女にまた会えるのだから……

【5・藤森保奈美】

四月三十一日、木曜日。

事件の真相が明らかにされた。

とは言っても、わたしはその全てを前日に聞いていたので、今更驚きはしなかった。

神川君が死んでしまったのは悲しいけど、刑事さんを刺し殺した挙げ句に、拳銃を奪って渦海さんを撃ち殺そうとした結果の死なので、自業自得と言わねばならないのかもしれない。

和泉君の恋人だった女の子たちを含めて何十人も人間を解体して殺害したのだから、それ相応の報いを受けるべきだと思うが、死んでしまった犯罪者に罪を償わせることはできないし、死んだ人間に罪を問うのは良くないと思うので、わたしは彼と過ごした数日間を記憶の底へ沈めてしまうつもりだ。ゴールデンウィーク明けには、弘美や中嶋君たちがゴシップを両手に抱えて大騒ぎするだろうけど、わたしは彼の冥福を祈りつつ、その様子を静かに見守るだけである。

お昼過ぎに、和泉君から電話が掛かってきた。

「色々大変だっただろうけど、もう何も心配は要らないよ」

和泉君は優しい口調で言った。

凶悪犯罪者とはいえ未成年者を射殺してしまった渦海警部は、減俸も合わせて数ヶ月の謹慎処分を言い渡されたそうだ。

宮地優はいまだに警察で取り調べを受けているが、精神鑑定の結果を待つて精神病院への入院を余儀なくされるそうで、もし正気を回復したとしても、人材派遣企業の新鋭である《オズ》が企画する人格矯正プログラムに最低三年間は強制参加させられることになるらしい。つまり、少なくとも、わたしたちが高校生の間は彼と再会しなくて済むのだ。ほっと一安心である。

「神川君のこともあるから、ゴールデンウィークは二人で静かに過

「ごそう。いいかな、保奈美？」

「うん」

電話が切れる間際、和泉君がわたしのことを《保奈美》と名前で呼んだような気がしたが、たぶん気のせい……空耳だろう。

そう思うことにして、受話器を置いた。

終章 二人の世界を

五月六日、水曜日。

ゴールデンウィーク明けの初日。

連休ボケで集中力を欠いたクラスメイトたちが立て続けに授業の腰を折る中、わたしは真面目に授業を受けているはずだったのだけど、一時限目の終了後、和泉君に声を掛けられ、屋上へと連れていかれたので、そのまま二時限目の授業をサボってしまった。

こんな時間にわたしを屋上へ連れ出したりして、いったい何の用だろう。小さな疑問を持ったが、彼の誘いを拒絶する意思など毛頭ない。きっと大切な話があるのだろう。そう判断し、警戒心ゼロでついていく。

キンコンカンコンコン。

キンコンカンコンコン。

二時限目の授業開始を知らせるチャイムが高らかに鳴り響いた。

「藤森さん、こっちへ来て欲しい」

休み時間中、飛び降り防止柵に手を掛けて黙ったまま都内の景色を眺め、何を言うでもなく時間を消費していた和泉君が、チャイムが鳴り終わるのを待っていたかのように、突然口を開いた。

そして、わたしの顔を見て、にっこりと笑顔を作り、手を差し伸べた。

わたしは迷わず歩み寄り、その手を取った。

あれ……。

彼の手が小刻みに震えている。

「和泉君？」

風でもひいているのか、と心配して彼の顔を見つめた。

和泉君は、彼らしくもなく、微笑み顔を引きつらせていた。

「緊張しているんだ……」

若干青ざめた顔に苦みが走る。

その姿に普段の格好良さはなかったけど、わたしに不思議な感動を与えてくれた。和泉真悟が初めて見せた人間らしい表情の変化なのだ。胸の内に熱い何かがせり上がってくる。

「どうして緊張なんかしているの？」

「目の前に理想の女の子が立っているから」

和泉君が、握っていた手に力を込めた。ぎゅっと強く。

「あうう……え、えつと……」

わたしは見事に動揺した。理想の女の子、と和泉君に直接言われたのは二度目だったからである。以前、自分の部屋で聞かされていなければ、シヨックのあまり卒倒していただろう。それほど衝撃的なフリーズだった。

「な、何を言ってるのかな、和泉君！」

ちゃんと意味を理解しているのに、咄嗟にとぼけて聞き返してしまった。恥ずかしさを誤魔化す為に、冗談と認識したふりをしてしまった。嗚呼、わたしは馬鹿な女だ……。

和泉君は、しかし、わたしの反問など聞こえていない様子で、硬い表情のまま、左右に泳いでいた視線を固定し、真っ直ぐにわたしの目を見据えた。

「真悟だ。そう呼んで欲しい」

「あ、あうう、あうあう……」

歡喜が意識を吹き飛ばそうとするが、自意識と自尊心が芯となつて支えてくれた。

でも、体は震えていた。

「し、しし……しん、ご……君？」

こんな大切な瞬間にどもってしまふ自分が情けない。まともに彼の顔を見れずに俯いてしまう。

全身が熱い……。

「保奈美、こっちを向いて」

和泉君……真悟君は、わたしの頬に手を添えて言った。

言われるままに、わたしは顔を上げた。

保奈美？　今、保奈美って名前で呼んだ？

心臓が驚喜の雄叫びを上げた。

鼓動が限界スピードを記録。

全身の血液が顔面に集まってくるような気がした。

好きな男の子に名前を呼んでもらっただけでこんな気持ちになれるなんて……。

触れられている頬が燃えだしそうなほど火照っている。

「ボクの恋人になって欲しい」

真悟君が穏やかな微笑みを湛えて、ゆっくりとした口調で言った。
もう普段通りの彼だった。

「いいよ」

わたしは簡単に返事をした。戸惑いなく、迷いなく、躊躇せず、一秒の思考時間も設けずに答えた。それ以外の返事など形を成さなかった。

反応は苦笑。

「そんなに簡単に返事をしていいのかな？」

「いいんだよ。入学式の日に初めて会った瞬間から……あの時から用意されてた答えだから」

実際には用意されていなかったけど。

「抱き締めてもいいかな？」

「いいよ」

がばつと抱き寄せられ、ぎゅつと抱擁された。足が浮くほどの強さだ。ちよつと苦しいかも……。でも、これが彼の想いの度合いだと思つと、苦しさが嬉しさに変じていく。

抱擁が弱まり、少し体が離された。

間近で見つめ合う。

恥ずかしいけど、目を逸らさない。

真悟君が微笑んだ。

指先でさらりと髪の毛を弄られる。

彼が眼鏡を外した。

ああ、キスされるんだな、と思った。

拒否する意思などない。全てを受け容れる準備が整っていた。
わたしは瞼を閉ざした。

首の後ろに手を回された。

そつと引き寄せられる。

顔を傾けられた。

唇に柔らかい感触。ふんわりと優しい感じ。彼の唇がやわやわと動く。唇で唇をマッサージされているよう。なんだかうっとりしてしまった。

「キスしてもいいかな？」

唇が離れた後で訊かれた。

「いいけど……事後承諾？」

返事はなかった。

代わりに、再びキスされた。

「んう！」

今度は唇同士を合わせるだけではなく、激しく唇を擦り付け合い、舌を絡ませ合う、とんでもなく濃厚なキスだった。

わたしは経験値ゼロなので上手く応じられず、真悟君にされるが
まだまだ。

「……………」

凄く濃密なキス。

ちよつと変な気持ちになってくる。

いや、ちよつとどころではなく……。

口の中から体内を侵食されていく感じ。

キーンコーンカーンコーン。

キーンコーンカーンコーン。

二時限目終了のチャイムが鳴った。

そんなに長時間キスしていたの？

恥ずかしい……。でも、気持ち良い……。

真悟君はチャームを耳にしても唇を離さない。舌を引っ込めない。

ガチャリという屋上のドアが開く音を聞いてもキスを止めない。

「ほなみいー！ 来てるんでしょー？ ん？ ああっ！ こらあっ

！ そこーっ！ 何してんだあ！ 止めなさい！」

弘美の大きな喚き声。

真悟君は気にせずキスし続ける。

「おいおい、TPOを考えろよ、おめーら」

中嶋君の呆れ声。

菅野の悲鳴に似た嘆き声。

男子たちの冷やかし。

女子たちの嫉妬混じりのからかい。

クラスメイトが全員来てる？ もしかして、見せ物になってる？

「こらっ！ 和泉君も！」

一瞬感じた羞恥心も、真悟君の舌の感触に麻痺させられて消し飛んだ。

なんだが、どうでもよくなってきた。

自分から真悟君の腰に手を回し、体を密着させ、積極的に舌を絡めてみたりする。

キスって気持ちのいい行為なんだなあ、と実感した。

チャームが鳴った。

ようやく真悟君が唇を離れた。

そして何も言わず、二人の唾液で濡れた唇周辺を、取り出したハンカチで拭いてくれた。

「こらーっ！ 二人だけの世界に浸るなあーっ！」

かんかんに怒って叫ぶ大親友。

真悟君は眼鏡を掛け、弘美に微笑みかけた。

「温かい目で見守って欲しいな」

「……むうーっ。仕方ないなあっ！」

弘美に恨めしそうな目で睨まれた。

「ごめんね、弘美」

「抜け駆け禁止令、破っちゃ駄目じゃん！」

そんな命令されたっけ？

記憶にないけど謝っておこう。

「ごめん」

「もう！ どうせ、こうなることはわかってたけどさあ……」

弘美は頬を膨らせて、わたしと真悟君を交互に睨んだ。

色々な意味で目を合わせられず、視線を空へと逃がす。

「さあ、教室に戻ろう」

真悟君が促すと、みんな一斉に屋上から出ていった。

「ほら、弘美ちゃんも」

弘美は名前で呼ばれ、嬉しそうに頬を緩ませてから駆け出した。

「保奈美、行くよ」

名前を呼び捨て。

それが酷く心地いい。

「真悟君」

呼んでみた。

「何かな？」

「ずっと一緒だよね？」

「死が二人を分かつまで」

それは、一生一緒に過ごすという意味。

「真悟君……」

泣きそうになった。

「ボクは、キミとキミが大切にするものをずっと守っていくよ」

涙が溢れてきたけど気にならなかった。

差し伸べられた手に掴まる。

そして、この手を絶対に離さないでおこう、と心に誓った。

《END》

終章 二人の世界を（後書き）

以上をもって本作は完結です。

でも、これは全七話中の一話目なので、物語が完結してしまったわけではありません。第七話の最終章までお付き合いいただけると幸いです。

引き続き、第二話『来須兄妹の自虐推理』を読んで、尚且つ楽しんでいただけたら無上の喜びです。

それでは、また。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6090g/>

緋色のオルタナティブ

2010年10月8日11時46分発行